KAIZO

改造

v.7:6

六月號

1925


プラトン
インキ
一番よく書ける
プラトン万年筆
新しき文化を記録する
プラトン萬年筆
プラトンインキ
Platon



改造六月號目次

無產政黨の研究



創作



改造六月號目次

無產政黨の研究



創作

◇長崎高等商業學校教授伊東勇太郎氏著◇

【本邦最初の著述】

文檢受驗用 英語科研究者のために

忽ち五版

英語研究の暗路を照す燈明は輝き出た!!

本書は中學卒業後獨學で文檢に合格し得られる勉强の方法を說いたものである內容は讀むべき書物の內容・程度・語學的及文學的の價値等致の一班作者の人物を示し且つ勉强の科目・目標及び方法を敎ふること周匝懇切、加ふるに試驗の模樣受驗直前三ヶ月の勉强方法合格後の硏學方針を以てし行文流麗にして雅健所說斬新にして穩正詩を評しエッセイを說き書取會話の上達法新聞雜誌の活用辭書の特色使用法に及び溢るゝが如き熱誠と津々不盡の妙味とは文檢受驗者ならざる一般文學愛好者及高等諸學生の趣味の讀み物とするも無限の興味を措く能はざらしむるものがある。受驗志望者及一般英語英文學研究者の一讀をすゝむ。

四六判最上製美本
全壹冊四百頁
正價金貳圓
送料十二錢

守屋豐秀
奈良島知堂 著

●少年會我物語（最新刊）

正價壹圓八拾錢
送料金十八錢

活動寫眞と敎育 中澤美治著 正價金貳圓 送料十二錢

修身敎育 **主要學說辭典** 甲斐一二著 參圓六拾錢 送料十八錢

文檢 **國語漢文科問題詳解** 貳圓五拾錢 送料十八錢

漢文研究要訣 白文訓讀復文 作文支那時文 正價金參圓 送料十八錢

カント研究 大關增次郎 七圓八拾錢 送料卅六錢

敎育の基礎たる哲學 市川譯 貳圓五拾錢 送料十八錢

高尙なる理論を平易に解說せる **哲學概論** 市川譯 四圓八拾錢 送料廿七錢

◇石川誠著

最新刊

新撰 徒然草講義

四六判上製美本五百頁
金貳圓五拾錢
送料金拾八錢

本書は徒然草を三部に分ちて前篇には受驗に最も必要な又徒然草の本質を直ちに了解し得る段を收めて詳解したこれ受驗必讀の所であり眼目である中篇には餘韻ある者の僅に若干段を選び略解し後篇には殘りの全部を收めて詳解を試みた徒然草の詳解として は最も中庸を得たものである數多き類書中で受驗者に滋味を與へるものとして誇るに足る書である。

東京市神田區表神保町七番地

大同館發行

振替貯金口座東京八七貳番

和田三造編輯

圖案製作者（イロハ順）
西野弘　大西豐治郎　小川信榮　和田三造　村上天流　草光信成　山形駒太郎　山田正三　松村金三郎　寺尾作次郎　櫻井豐洞　木下邦

豫約募集

創作圖案集

全十二輯　圖題四百餘種、極めて精巧麗華なる原色刷

洋畫界の巨匠、圖案界の第一人者和田三造氏の自作及び其の嚴選に係る、創作圖案集新たに成る。内容の豐富なる、圖題の多方面なる、構想の傑出せる、全然天才の創意に成り而も其應用範圍極めて廣汎に、一たび之れを見れば何人も恍惚として驚歎の辭を發せざるなし。染色工藝、陶磁器、建築裝飾、印刷業等の專門家に絶好の參考たるは言を俟たず、また一般家庭に於て刺繡に編物に染色に、欝然として勃興したる圖案趣味を培養するに、また日常生活を美化する爲に無二の參考資料なり。

第一輯　**圖題**　十二支模樣外三十二種
用途　ショール、帶、壁紙、着尺、長襦袢、風呂敷、クッション、椅子張、額、敷物、テーブル掛、染色パネル、羽織、飾物等。

第二輯　**圖題**　更紗模樣外三十一種
用途　陶器、かすり、卓布、ふくさ、染用、織用、織物、裏地模樣、裾模樣、丸帶、長襦袢サラサ染、額面、夏着、羽織裏等。

第三輯　**圖題**　トランプ模樣外三十一種
用途　袋物、更紗、染色物、陶器、皿模樣、織物帶、カーテン、風呂敷、敷物、千代紙、長襦袢、更紗、衝立、幼兒の着物、机掛等。

第四輯　**圖題**　せんだんの木外三十一種
用途　窓掛、テーブル掛、長襦袢、陶器、クッション、皿模樣、椅子張、風呂敷、千代紙、着尺、敷物、襖張、下着、食器、机掛、織物、座布團、卓布、ランプ敷、カーテン等。

第五輯　**圖題**　支那建築外三十二種
用途　風呂敷、テーブル掛、帶、壁紙、下着、染織、裾模樣、敷物、皿、縁模樣、夏帶、浴衣、織物染物、陶器、卓布等。

第六輯　**圖題**　竹林に雲外三十一種
用途　袋物、更紗、かすり、手提袋、椅子の椅張、敷物、大理石テーブル、染物、卓布、帶、襖紙、皿、壁紙、風呂敷、千代紙、織物、陶器、テーブル掛、下着、クッション、椅子張等。

第七輯　**圖題**　風景色外三十種
用途　能衣裳、更紗、染物、額面、縁模樣、壁面裝飾、帶、織地、洋傘、羽織裏地、染色用長襦袢、陶器等。

第八輯　**圖題**　おもちゃ外三十種
用途　机掛、窓掛、織物、帶、卓布、クロースクッション、敷物、陶器、着尺、長襦袢、丸帶カーテン、モスリン染、夏帶、夏座蒲團

第九輯　**圖題**　龍宮外二十九種
用途　壁面裝飾、ショール、織物、テーブル掛、帶、陶器、織物、染物、パネル等。

第十輯　**圖題**　孔雀外二十九種
用途　陶器、織物、裾模樣、かすり、縁模樣、蒲團布、風呂敷、敷物、卓布座布團、下着、机かけ、さらさ、帶、襖模樣、テーブル掛、椅子張等。

第十一第十二輯の圖案は順次製作す。

内容見本　申込次第進呈

豫約申込　六月三十日限

規略

▲申込金四圓▲毎月拂込金四圓▲一時拂込金五拾圓▲外に送料を要す▲送本大正拾四年八月より毎月一輯、十二ケ月完了

裁體

▲四六四倍判（縱尺二寸橫八寸五分）原色刷精巧華麗
▲毎輯三十餘種收載

東京市麹町區内幸町一丁目
電話銀座七八三・二一八八
振替東京五二二九八番

國民圖書株式會社

那須皓著（最新刊）

公正なる小作料

菊判八六頁
羅紗紙表裝
定價參拾五錢
送料六錢

小作料を如何に決定すべきか、これ小作爭議の核心をなす重要問題である。本書は之に對する一解答として客秋「大阪毎日新聞」紙上に連載せられ關西地方の農村に一大衝動を與へたる論文「公正なる小作料」に增訂を施し、更に附錄として該論文に對する批評及び之に對する著者の駁論を追加せるものである。本問題の重要なる意義に顧み弊店は茲に實費を以て廣く發賣す。地主・小作人を始めとし小作問題・農村問題研究者の必讀を要するものである。

那須皓著

農村問題と社會理想

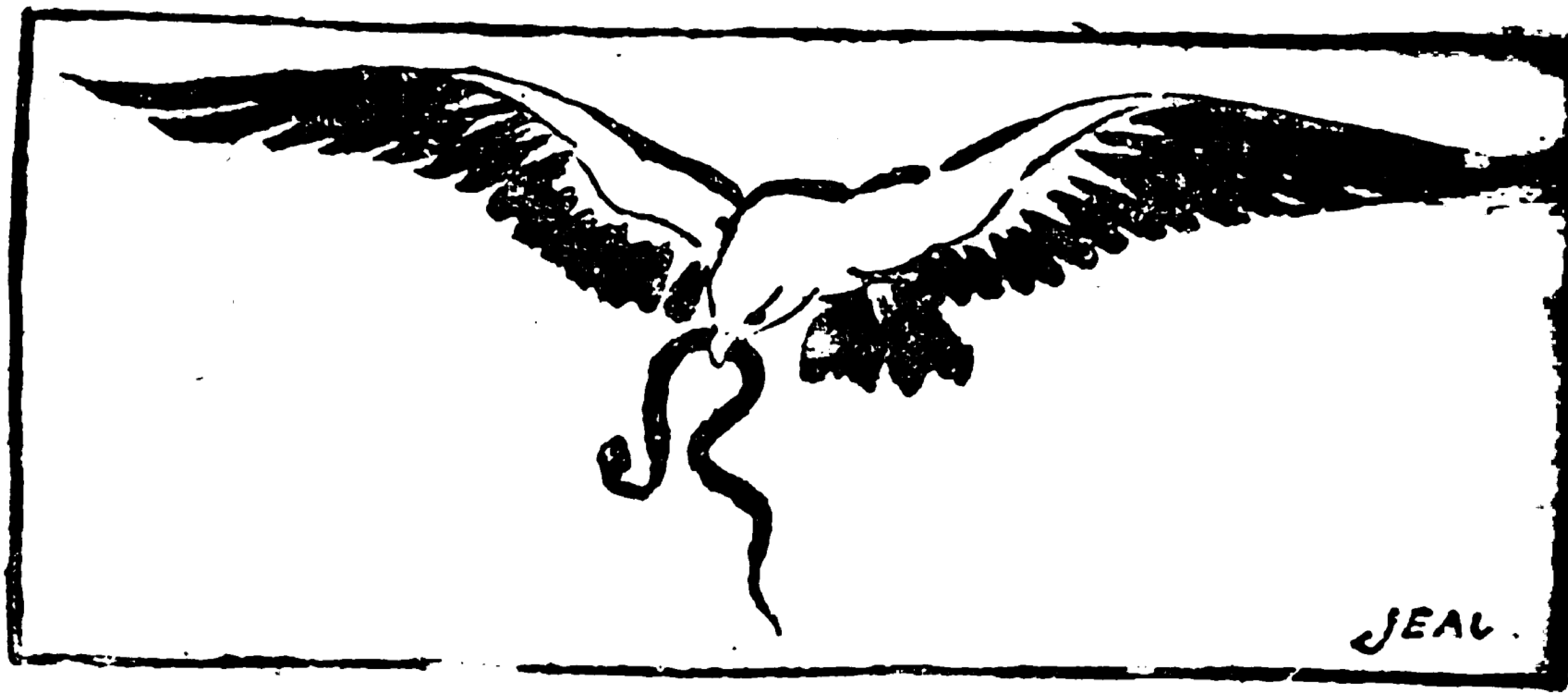
四六判四七〇頁總布表裝
定價貳圓貳拾錢送料拾八錢

河田嗣郎著

農業勞働と小作制

四六判四一〇頁總布表裝
定價貳圓　送料拾八錢

發兌　東京神田南神保町　岩波書店
振替東京二六二四〇
電話四谷五八七〇



(六 月 號)

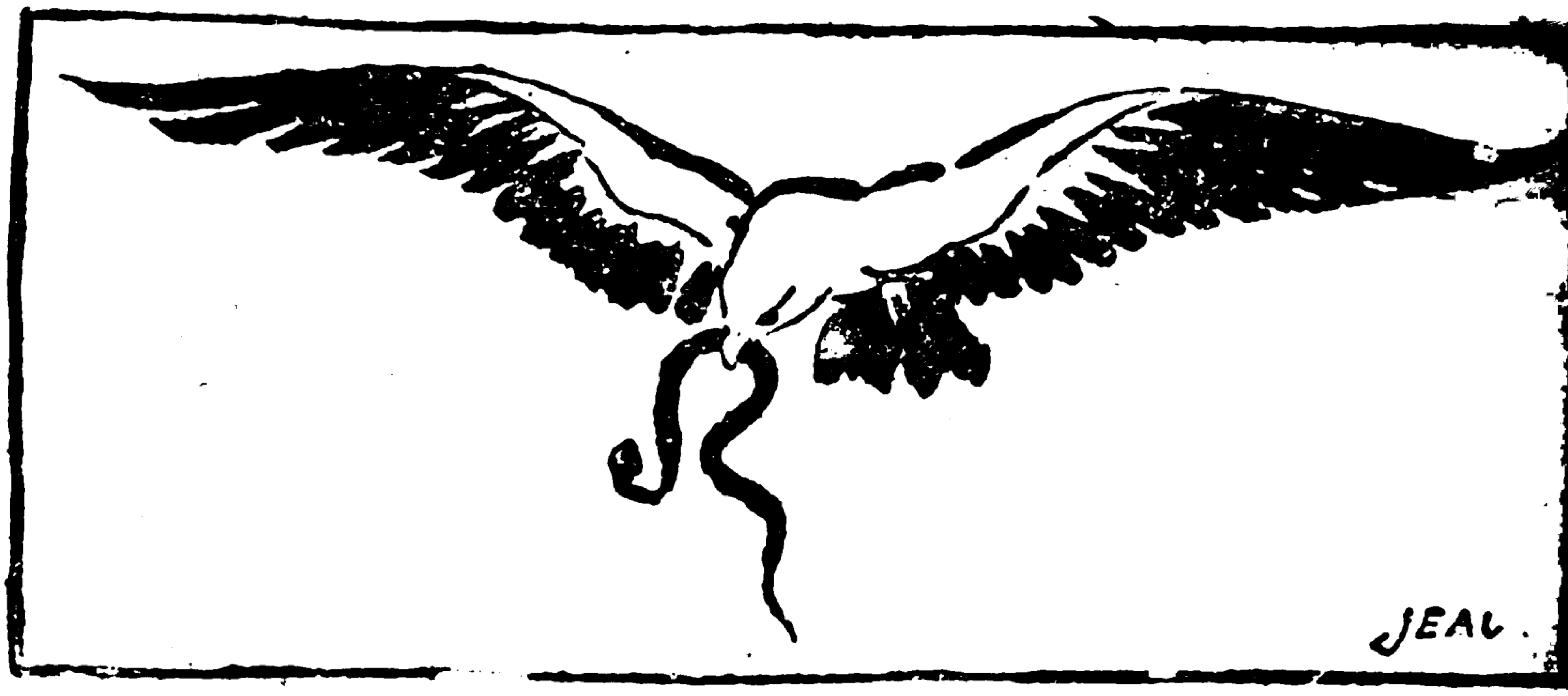
國民の時代錯誤と社會不安

我等は日本國民を輕蔑はしない。しかし尊敬する何者があるかと反問はする。我國民はよく政治家を侮辱する、自分で選んだ社會上の公人に向つて聽くに絕えざる惡罵をなし暴言を吐く。これ等は天に向つて唾するもので思慮ある人から見れば眞に片腹痛いことである そして國民の總てが普選が斷行された今日でも、政治は依然支配階級の特權の如く思惟するのは思はざるの甚しいものだ。こう云ふ思想は我日本人と云はず東洋人通有の｜佛教の他力主義を 奉する國民通有の──觀念で、それは支那に於て 印度に於て、波斯に於て具現せられ、經驗せられている思想で、特に暹羅に至りては議會なく、政治問なく國王專制で、國王は嬖臣の云ふがままに動いて國民は國民の政治と全く沒交涉である。西洋人が權利づくめに社會總ての方面に個人主義を發揮するのも現代の厭はしいものの一ではあるが、しかし飽迄自力を信じ、自個の力量を基本として萬事を裁斷する獨立不羈の精神力は吾々が壯として學ぶべき美所だ。

我國民が呪はしい他力本願に生きてゐることは、それは自覺せる自個に到達せざる曖昧の明證で、何ものの權威も其處には胚胎されないであらう。我國の社會不安が近時ますます深刻化しつつ日々生命 財產に多大の脅威を受け殆んど百鬼晝行の狀態にあることは新聞紙で我々が毎日毎日見せつけられてゐる所だ。而も市民はその結果を全部警 總監と、主務大臣と、お巡りさんとに歸せしめんとしてゐる。市民のみか政友本黨もそう自信して當局を戒告してゐる。それは勿論綱紀の弛廢もいくらか原因はしてゐるだらう、がそれにはモツト根本の問題がなくてはならぬ。それは現在の社會組織、經濟組織 多大の缺陷があることだ。一昨年來よりの行財整理の結果生じた失業群、世界的財界 況より發生した失業群は我國にも五十萬乃至百萬を數へることが出來る、この失業群の救濟に對し我當局及び政黨者、資本家は如何なる對策に出でたか、その對策を講ぜすしていくらお巡さんを增員し、お巡さんの俸給を增額した所でそれは燒石に水だ この制度より來たる缺陷を第一に直視してそしてその制度の革新を斷行すると共に現在の失業群の悉くを救濟する大策を樹立せねばならぬ。

この點を直急に猛省せねば我が資本主義は早晚大厄難に遭逢すべきは自明だ。

これまで多くの資本主義國家に於て──又我國に於ても救貧、防貧の微溫對策は講ぜられてゐたが、それは現代にそぐはぬものであるから此際斷乎として勞働の管理、失業保險の確 を急ぐべきである、今更にビスマークやロイドジョージの蹤跡を追ふのも面白くもないことであるが。そして現下の社會不安の責任はかうした經濟組織を默認しつゝある國民全體の負ふべきものだ、內務大臣 警視總監以上に我資本家が重責に任ずべき大問題だ



(六月號)

國民の時代錯誤と社會不安

我等は日本國民を輕蔑はしない。しかし尊敬する何者があるかと反問はする。我國民はよく政治家を侮辱する、自分で選んだ社會上の公人に向つて聽くに絶えざる讒謗をなし暴言を吐く。これ等は天に向つて唾するもので思慮ある人から見れば頗に片腹痛いことである　そして國民の總てが普選が斷行された今日でも、政治は依然支配階級の特權の如く思惟するのは思はざるの甚しいものだ。こう云ふ思想は我日本人と云はず東洋人通有の―佛教の他力主義を　奉する國民通有の――觀念で、それは支那に於て　印度に於て、波斯に於て具現せられ、經驗せられている思想で、特に暹羅かに至りては議會なく、政治問なく國王專制で、國王は寵臣の云ふがままに動いて國民は國民の政治と全く沒交渉である。西洋人が權利づくめに社會總ての方面に個人主義を發揮するのも現代の厭はしいものの・ではあるが、しかし飽迄自力を信じ、自個の力量を基本として萬事を裁斷する獨立不羈の精神力は吾々が壯として學ぶべき美所だ。

我國民が呪はしい他力本願に生きてゐることは、それは自覺せる自個に到達せざる隙昧の明證で、何ものの權威も其處には脈胎されないであらう。我國の社會不安が近時ますます深刻化しつつ日々生命　財産に多大の脅威を受け殆んど百鬼晝行の狀態にあることは新聞紙で我々が毎日毎日見せつけられてゐる所だ。而も市民はその責任を全部警　總監と、內務大臣と、お巡りさんとに歸せしめんとしてゐる。市民のみか政友本黨もそう自信して當局を戒告してゐる。それは勿論綱紀の弛緩もいくらか原因はしてゐるだらう、がそれにはモット根本の問題がなくてはならぬ、それは現在の社會組織、經濟組織　多大の缺陷があることだ。一昨年來よりの行財整理の結果生じた失業群、世界的財界　況より發生した失業群は我國にも五十萬乃至百萬を數へることが出來る、この失業群の救濟に對し我當局及び政黨者、資本家は如何なる對策に出でたか、その對策を講ぜずしていくらお巡さんを增員し、お巡さんの俸給を增額した所でそれは燒石に水た　この制度より來たる缺陷を第一に直視してそしてその制度の革新を斷行すると共に現在の失業群の悉くを救濟する大策を樹立せねばならぬ。

この點を直急に猛省せねば我が資本主義は早晚大厄難に遭逢すべきは自明だ。

これまでゞくの資本主義國家に於て――又我國に於ても救貧、防貧の微温對策は講ぜられてゐたが、それは現代にそぐはぬものであるから此際斷乎として勞働の管理、失業保險の確　を急ぐべきである、今更にビスマークやロイドジョージの蹤跡を追ふのも面白くもないことであるが。そして現下の社會不安の責任はかうした經濟組織を默認しつゝある國民全體の負ふべきものだ、內務大臣、警視總監以上に我資本家が其責に任ずべき大問題だ。

學說の矛盾と事實の矛盾

小泉信三氏のマルクス評

櫛田民藏

(一) 經濟的矛盾の一表象としてのマルクス評

社會の經濟的矛盾の發展が一定の發達の程度に到達すると、社會意識の上にも種々な矛盾衝突が出來て來る。經濟學說は經濟現象を研究の對象とする社會意識の一形態であるから、資本家の經濟が一定の發達を遂げつゝあるところではこの經濟學說の上にも亦た種々な衝突が表はれる。或種の學說は、資本家經濟の進行は、如何に矛盾なきものであるか、よし、あつてもこれは單に一時的のことに過ぎないと云ふやうなことを說明せんがために苦心し、或種の學說は、この矛盾を矛盾として意識し、これが調和の方策に就いて種々な理想的方策を立案し、更に或る種の學說に於ては、この矛盾をその儘に矛盾として承認し、その矛盾の事實そのものの中に之が解決の手段を見出さんとする。と云つた意味のことをマルクスは、その著『哲學の貧困』の一節に於て述べて居る。今、マルクスそれ自身の經濟論は、右のいづれに相當するかと云ふならば、それは資本家社會の現實をその儘曝露すると同時に、その曝露せられた事實の中に將來社會發展の萌芽を求むるものであるから、云ふまでもなく、以上の最後の部類に屬する。マルクスの經濟論に於ては資本家社會の現實を曝露すると云ふことが主要な問題であつたのである。それは到底救ふことの出來ない矛盾の事實として描き出されて居るのであるから、意識的にか無意識的にか、これを粉飾せんとし又は調和せんとする學說とは自づと衝突せざるを得ないのである。

かやうな衝突は我國の現狀に於ても、種々な方面に見ることが出來る。特に、その學理的方面に於ては、先年來問題となれるマルクス價値論の矛盾に關する論爭に求むることが出來やう、そして、マルクス說否認の側に於て、最も熱心なるものは恐らく慶應大學の教授小泉信三氏ではなからう乎。私の知れる限りに於ては、この問題につき、最も早やく

マルクス評を日本に紹介したものは氏である。カール・ディールのマルクス評を紹介したのも氏である。ボエーム・バヱルクのマルクス評を紹介したのも氏である。その一度山川氏と論戰するや、先づ一瀨大造氏に依つて、氏に對する批評が『我等』誌上に公にせられ、殆んど時を同じうして、河上博士のこの問題に對する連續の長篇が「社會問題研究」（第三十九冊—第四十一冊）に發表せられた。

それから前後一年を經、本年四月の本誌に於て、「『勞働費用と平均利潤率の問題』を論ず」と題するかなりの長篇が小泉氏に依つて公にせられたのである。そこには、一瀨大造氏の名は擧げられてはないが、論の內容に依つて判斷すれば、小泉氏今回の所論は、前論を固守しつゝ、一方には河上博士に他方には一瀨氏に答へたものと思はれる。理論經濟學が輕視されて居た我國の學界に於て、河上博士と同じく、氏が常にこの種の問題を提起して學界を刺激しつゝあるの功は、之を認めてよからうと思ふ。しかし、その功を認むることゝ、氏の所論に對する贊否如何は云ふまでもなく、自づと別論であり、私自身の如きは、氏のこの點に就いての所論には到底贊成し得ない一人である。私のこの一文は、氏がこの問題についての最近の論評に對する一感想に過ぎないが、尙ほ私が何故に氏に贊成し得ないかの理由を主とするものである。

（二） マルクス批評家の提起した問題の要點

マルクス說の矛盾と云ふことは、思ふに、小泉氏が提起した學理上の問題としては、既に問題それ自身の意味が一般には必ずしも容易でなく、マルクス經濟論の用語につき、又その理論的構造につき大體の豫備智識を必要とする。しかし、今私がそれを繰り返し述べることは、それだけにて手數を要し、既に之を知れる讀者には、無用のことにも近いの

であるから、こゝには要點だけに留めると問題はかうである。

マルクスがその著資本論第一卷に於て、商品の價値は之を生産するために社會的に必要な勞働時間に依つて定まると論じたマルクスのこの言ひ表はし方それ自身が問題となるが、要は、特殊な生産部門の生産物たる商品の價値は、その同じ生産部門に屬する商品の總額を生産するために平均的に必要とせらるゝ勞働時間に依つて定まると云ふのである。それ故にマルクスの所謂價値なるものは、その生産部門に於ける各個の生産者又は資本家が生産上現に必要とした個々の勞働時間に即ち個人價値とは必ずしも一致するものでない。然るに今この一般的（歴史的に一般的）な法則が、商品交換が一定の發達を遂げ、物財としての商品の外人間の勞働力が商品となれる場合に於て商品勞働力にも適用せらるゝがゆえに勞働者の勞賃は、勞働者がその勞働力を再生産するために社會的に必要な勞働時間に依つて定められると云ふことになる。そして、この必要を超過したる勞働時間は、所謂『剩餘價値』である。この剩餘價値と通常資本家の勞働者に對する前貸と稱する勞賃に相當するの資本部分所謂『可變資本』との比は『剩餘價値率』であり、その剩餘價値と資本の總體、換言すれば、資本の勞賃部分としての可變資本に加ふるに、生産に要した工場機械原料及び補助材料等、所謂『不變資本』を以てしたるものとの比は『利潤率』である。同じ種類の産業部門に屬する各事業に於ける資本の組合せは、その大事業のみに就き之を總體的に考ふるときは、大體に於て、平均的條件の下にあるものと見ることが出來るが、種類を異にする産業部門の間に於ては、一般に著しく異なり、かく見ることを許さない。價値としての資本の組合せは、必ずしも、常に當該産業の技術的關係に照應するものではないが、その之に應ずる限りに於て、マルクスは之を『資本の有機的構成』と云つて居る。今、一國內或は經濟上社會上の各條件が大體同じところに於て、互に併立する各種産業部門の商品が各々その價値で賣られ、そしてその剩餘價値率が一定だとするならば、資本の利潤率は、資本の有

機的構成の如何に依つて異ならざるを得ないわけである。然るに、資本家社會に於ける現在の事實として、資本家相互の競爭は各種産業の間に資本の流出入を惹き起し、その結果は、資本構成の相異に拘らず、各種産業部門の利潤率は平均するがゆえに、商品の價格は、比較的長期に渉り、上下の價格の動搖を相殺し平均的に考察すれば、資本家の事實上の出費としての『費用價格』――消耗不變資本と可變資本との和――に平均利潤を加へたもの、即ち所謂『生産價格』に依つて定められる。生産價格は、或は、價値以上であり、或は價値以下であり、例外の場合の外價値とは一致しない。そこで、マルクスが資本論第一卷の首章に所謂商品の價値は、それの生産のために必要な社會的勞働に依つて定まると云ふ價値法則が正しいとすれば、平均利潤の存在は之を否認しなければならないし、平均利潤の存在が正しいならば、價値法則は否認せられなければならない。然るにマルクスは、一方にかの價値及び剰餘價値の法則を設定しながら、他方資本論第三卷に於ては、明かに利潤率平均の事實を、從つて又生産價格に依る價格の決定を認めて居る。これに、マルクス價値論の大なる矛盾ではないかと云ふのである。

(三)　マルクス價値法則に於ける矛盾と統一

しかし、こゝに、注意しなければならぬことは、マルクス自身が常に以上の事實を一方にそのまゝ矛盾として認めたことこれである。例へば、第三卷に於ては、『價値學說は、こゝでは、一見現實の運動と一致せず、即ち生産の事實上の現象と一致しない云々』（第三卷一三二頁）とか、『競爭に於ては、凡てのことが轉倒して見える。經濟關係の表面に表はるゝが如き、――即ちその現實の存在に於ける如き（所謂經濟事實なるもの）、從つて亦たこの關係の擔當者達及び代理者達がこの同じ關係を識別しやうとするその思惑に於けるが如き（所謂經濟思想なるもの）かの有り合せの姿は、それ

の内的な、本質的な、しかし、既に現實を曝露せられたる眞實の姿及びそれに順應する概念とは、甚だしく異なれるものであり、又實際上それでは逆立ちするものである』、第三卷一八八頁）とか云ふが如きその一例である。このことは、第三卷に於てばかりでなく、既に第一卷に於ても、言明せられて居るのである。例へば、『價格は、平均價格に依つて、換言すれば終局に於て、商品の價値に依り定められるとすれば、資本は如何にして發生するか？私は敢て『終局に於て』と云ふ。何となれば、平均價格はかのアダム・スミスや、リカルドーや其他の信ずるやうに直接に商品の價値と一致するものでないのであるから』（第一卷カウツキ版一二二頁）と云ひ、他の箇所では、『この法則（價値法則）は、限前の事實に基く凡ての經驗とは明かに矛盾する。使用した總資本の割合に應じて計算する一紡績業者は、不變資本を比較的多く可變資本を比較的少なく使用したからとて、可變資本を比較的多く、不變資本を比較的少なく使用した麺麭燒業者よりも、その獲得する利益又は剩餘價値がより少ないものでないと云ふことは誰でも知つて居る。この外形的矛盾を解決するには、尙ほいろ／＼な媒介的條項を必要とする云々』（同上、頁二五五）と云つて居る。しかも、マルクスが『古典經濟學は、この法則を決して公式化しはしなかつたのだけれども、本能的にそれに依據して居た。』と云ふのは、それが價値法則の必然の歸結であつたからである。彼等は、それをば、無理な抽象に依つて、現象との矛盾から救はうとしたのである。リカルドー學派が、如何にこの障碍の石に躓づいたかはあとで述べることゝするが云々』（同上、二五五頁）と云つてるところを見れば、彼は啻に、自からかの矛盾を言明したに留まらず、この矛盾を公然又は一般的に矛盾として認めないで只だ辻褄をのみ合はせようとした當時の資本家學者が如何に學問的破産に陷つてしまつたかと云ふことをこゝで暗示して居るのである。

であるから、價値法則と平均利潤率との矛盾と云ふことは、マルクス自身が公然主張した點であつたのであり、この

矛盾を單に例外とし、無理にその間の調和を試みたものは、却つてマルクス以前又は當時の資本家學者であつたのである。從つて、マルクス批評家にしても單にこの點に就いてのみマルクスの矛盾と云ふやうたことを云ふならば、それはマルクスを誣ゆるの甚だしきものであるは勿論、未だ問題の意味をさへ充分に明かにしないのである。

然るに問題は、さやうに簡單ではない。マルクスに從へば、かの矛盾は、單に表面の事實に對する矛盾であつて、價値法則を侍したばかりか、この價値法則に基いて、かの之と矛盾する表面の事實の成立が說明せられると云ふのである。即ち、先づマルクスは、價値法則が現在の事實と到底相容れないものであると云ふことを明に認めるのである。しかし、彼は一旦この事實を事實として認むると同時に、この事實は、社會現象の表面によこたはる事實に過ぎないものであると云ふこと、商品生產社會の通則たる價値法則は、之がために、一定の變化を受けるけれども、そのことのために商品生產の存續する限りその妥當性が廢止せられるものでないと云ふのである。今、その理由として示さるる要點を云へば、なるほど個々に就いて見れば、生產價格は價値とは例外の場合の外一致しないけれども、資本家階級全體として見れば生產價格の總計は、價値の總計に等しく、兩者は必ずや一致するのであつて、この點に於て價値法則の通用を妨ぐるものでない。更に、價値と一致しないところの生產價格は何に依つて定まるかと云ふと、平均利潤額に依つて、平均利潤額は剩餘價値に依つて、剩餘價値は價値法則に依つて定められるのであるから、平均利潤は「結局に於ては」價値法則に依つて定められるのであつて、却つて、平均利潤そのものゝ存在が價値法則から說明せられる云々と云ふのである。

この二つの論據は、それぞれ特徴を有つては居るが、いづれも利潤の出所を明かにして資本家社會の現實を曝露すると同時に、資本家社會に於ても之を全體として見れば、價値法則が結局生產價格の背後に隱れたる決定要素たることを示すものである。假りに表面の事實に就いて見るも、國際間の關係に於ては、價値法則は大體に於て今日尙ほその儘行

はるゝものと云つて差支なく、その成熟せる資本家國家の內部關係に於ける如く、當該法則の轉化せらるゝには、全世界の生產業に對する國際的獨占が永續的に行はるゝことを必要とするであらう。しかし、その時はそれと同時にこの資本家的生產關係も自づと廢止せられる。勿論、マルクス批評家は、マルクスの右二つの論據に滿足するものでなく、個々の價格の分析に依つて、如何にマルクスの說明の誤れるものであるかを指摘しつゝあるが、（例へば、小泉氏がその論集『價値論と社會主義』二百二十頁に引用する、かの價値の分析を遡及し遡及して遂に利潤の存在を大古原始の時代にまで求めんとするボエーム・バウエルクの方法を見よ）、私見にては、その多くは、從來エンゲルス其他の社會主義者に依つて、論評せられ、又は有力な資本家經濟學者に依つて暗示せられたやうに、個人資本家の見地と全資本家階級の見地とを混同するに依るものである。

　これ等の點を積極的に詳論することに依つて問題は釋明せらるるのであるが、私は、この一文に於て、小泉氏最近の論文を主題とするが故に、それに關する積極的論證は他日に讓る外なく、いづれにしてもマルクスが、價値法則の表面上の矛盾を原則として認むるところに、この點に關するアダム・スミスの長所が採用せられ、リカルドーの短所が棄てられる。その表面上の矛盾に拘らず價値法則は廢止せられるものでないと云ふところに、この點に關するリカルドーの長所が採用せられ、スミスの短所が棄てられる。（この點につきマルクスのスミス及びリカルドーに對する立場を知らんとする讀者は、大原社會問題研究所パンフレット第十九冊マルクス剩餘價値學說史第一分冊、森戶辰男氏譯アダム・スミスの勞働價値說を見られよ。）その特に、スミスの長所としてマルクスの採用したところは、生產關係の變化に基く價値關係の變化に關するものであり、彼の歷史的立脚地これである。然るにその特にリカルドーの長所として採つたところは、物質的生產力の變動に基く生產關係乃至價値關係の說明であり、むしろその物質的立脚地これである。マルク

スは、經濟の中に歴史を入れ、歴史の中に經濟的物質主義を入れたと云はれて居るが（カウツキー）問題の場合に於ても、この見地を閑却することは出來ない。

（四）小泉氏の所論と私の疑問の一般

先づ小泉氏の問題は一般にいづれにあるかと云ふに、氏は價値法則を以て個々の價格の成立を説明するだけのものと見、マルクスの如く之を以て、同時に資本家社會の現實曝露に資するものと見ないのであるから、かの表面上の矛盾を以て直ちにマルクスの矛盾となすと同時に、かねて、この矛盾の整理に關するマルクスの説明は凡て否認するのである。そして今回の論文に於ては、氏は、凡そ次の三つの點に於て、マルクス説矛盾の原因なるものを指摘し且つその辯護論者に對し、氏自身の從來の批評が決して誤つて居るものでないと云ふことを論じて居る。その三つの點とは、掻い摘むで云へば、マルクスは、競爭は或は價格を價値に一致せしめると云ひ、或は反對に價格と價値とを背離せしめると云つて居るが、マルクス説矛盾の根本原因は此處にあるのであつて、しかも、この根本原因は既に資本論以前の著述に胚胎すると云ふこと、その二は、マルクス辯護論者に對する反駁であつて、マルクスの價値法則は、單なる商品生産社會の法則であつて、資本家的商品生産の社會にその儘行はるゝものでないと云ふ説は、文義の解釋上妥當でない。文義の解釋がどうあろうとも、利潤率の平均が無いと云ふことは、同時に價値で決まると云ふことを説明する所以ではないと云ふこと、その三は、同じくマルクス辯護論者に對する反駁であつて、マルクスの價値を以て人類の犧牲と解することに依つて、マルクス説の矛盾を救濟せんとするものは、マルクス價値論の歴史的特性を無視すると云ふことである。

この第三の論點は、主として『社會問題研究』に公にせられた河上博士の批評に答へたものである（本誌四月號小泉氏

氏論文、六八頁以下參照)。小泉氏は、マルクスの所謂『價値』なる概念は、歴史的概念であり、毫も非歴史的概念たる人類の犧牲たる勞働費用と云ふ意味を有つものでないと云ふことを指摘するために、マルクスの研究方法の上から、商品價値と云ふ文義の上から、又その價格論との關係の上からいろ〳〵と論證して居る。私は、これ等の論證の中、最後の關係の一節に於て、『この場合の費用價格は、單に人類全體の立場より見ての犧牲と云ふが如き漠然たるものでなくて、』とか、『若し之を（費用價格）を人類の犧牲と解して』とか、『これ等の價値（勞賃及び消耗不變資本の價値）が人類全體の立場より見ての費用額たるに留まり』とか、恰かも河上博士が資本家的費用價格のことを人類の犧牲とでも云つたかの如く見ゆる解釋を除いては、從つて、この解釋を前提とする諸說明を除いては、更に個々の資本家の立場と資本家全體との立場に關する區別の無視に基くマルクス說に對する批評を除いては、大體に於て、私はこの點に關する氏の解釋に贊成するものである。しかも、私自身は一般に價値法則を以て特定な社會の生產關係の作用に基く一個の歷史的範疇なりとするマルクスの說を是認しつゝあるものである。それと同時に、社會科學の對象として永久不變な人類經濟の原理と云ふやうなことは之を否認するものであり、この同じ理由に依つて、かやうな意味に於ける人類價値犧牲說に反對するのである。然るに小泉氏に從へば、そは只だマルクス說の解釋論として不可だと云ふだけのことであり、『この說（人類犧牲說）は其れ自體としては頗る傾聽すべきものを含めり』とか、『ヒユームが地上一切のものは勞働に依つて購はると云ひ、アダム・スミスが世上一切の富は、もと凡て勞働に依つて購はれたものなり、勞働は一切のものに對して支拂はれたる最初の代價本來の購買金なりと云ふは自明の理を述べたものである』とか、氏自身の積極的意見としては、やはり價値人類犧牲說に贊成なるかにも見られる。勿論問題は先づマルクス說の解釋に係つて居るのであるから、それの當否と云ふことは、第二段のことであるのであるが、一旦問題の對象たる學說の立脚地が明かである以上、

その學說の批評は、先づその同じ立場を考へて見たければなるまい。而して彼學說それ自身が矛盾するかどうかと云ふこと、矛盾しないとしても、その前提に誤あるかどうかが問題となるべきである。然るに、私自身の考ふるところでは、この論文に於ては氏はマルクスの立脚地を或る程度說明かにして居るに拘らず、その同じ立脚地で問題を考へた形跡は全く無い。然らば、始めよりその立脚地それ自身を否なりとするかと云ふに、必ずしもそうでなく、少なくとも、一般に價値概念は歷史的なものであり、經濟學は一個の歷史科學であると云ふことを積極的に否認した文句も無いのである。そこで小泉氏がマルクスの立場なり文意なりとして吾々に示してくれた、そして河上博士に對抗せられたその同じ立場から、小泉氏マルクス批評を判斷して見るならば、どう云ふことになるであらうか。これ私が、小泉氏のこの論文に接しての最初の疑問であつた。小泉氏は、一般にマルクスの價値法則を否認するが、マルクスの所謂『價値』なる概念は歷史的のものであることを知つて居る。それを知つて居れば、マルクスの所謂『價値を作る勞働』と『使用價値を作る勞働』との區別も知つて居る。それを知つて居れば、『商品價値』が一定の生產關係の原因でなくて結果であることをも知つて居る。それを知つて居れば、生產關係の變化したところでは、交換關係（從つて亦た分配關係も）も亦た變化し、價値法則は、一定の變化を受けるものであると云ふことを知らねばならぬ。同時にまた交換が無くては一般に商品價値は無いが、旣に商品價値にして存在する以上、價値の大さは、交換に依つて定まるものでなくて、結局は社會の物質的生產力の如何に依つて定まることを知らねばならぬ。それを知つて居れば、生產關係の變化に依つて單なる商品が資本家的商品に變化したからとて、苟くも商品生產にして存續する限り價値法則の廢止せられないことも知らねばならぬ。小泉氏は商品價値の歷史的特性は之を認めるが、之に伴ふ諸問題は凡て否認するかに見える。この同じ關係は氏が今回の論文に於て論點とした『競爭』の問題に於て、文義解釋の問題に於て及び資本家以前の商品生產と利潤率の問

題に於て表はれて居る。

(五) その疑問の例証

(イ) 問題とマルクスに於ける競爭の二義

先づ、小泉氏がマルクスの思想的混亂の根本原因と認むる競爭の二義に關する問題を考へて見るに、マルクスは、明かに、同じ種類の産業の間に於ける競爭と、異なれる種類の産業の間に於ける競爭とを區別し、前者は異なれる利潤を許すことに依つて、價格を價値に一致せしめ、後者は、同率の利潤を強制することに依つて、價値から價格を引離なすと云つて居る。この點は河上教授が社會問題研究本年四月號に詳説しつゝ事の序に教授の所説にも論及したところであり、私のこの一文の形に於ては、こゝに重ねてその點を論述する必要がない。いづれにしても、この點に就いてのマルクスの研究は、氏の論文には閑却せられたかに思はれる。同じ猫でも、用ゐどころの如何に依つては効能が違ふばかりか、反對に毒にもなるのであるから、事物は一概には論ぜられない。同じ競爭でも、小資本家の社會では、價値と價格との一致を誘致し、社會主義社會に於ける生産の社會的管理と同じ作用をなすに反し、階級の分裂せる大資本家の社會では、却つて價値と價格との繼續的背理を誘致することに依つて反社會的作用を及ぼすとも見られる。もちろん、私はそれで競爭の社會的効果如何を云ふのではなく、只だ社會の生産關係の異なるに依つて、同じ競爭でもその作用の異なると云ふ事實があり、從つて、マルクスが或る場合に競爭は價値と價格とを一致せしめると云ひ、又は引離なすと云つたとて直ちにこれを矛盾だとケナしつけるわけには行くまいと云ふのである。矛盾は事實の矛盾であつて、必ずしも説の矛盾とは云へぬ。事實の矛盾するところで、從つて又事實の變化するところで、いつも一本の定義を立て、それを

無理やりにおしつけやうとすることそ、却つて矛盾し、學門上の暴力團でもある。況んやマルクスは、問題の競爭に關しては、彼の著作の隨所に、種々なる研究があり、それを通して從來の經濟學者のそれに根本的批評を加へて居る事實あるに於ておや。この點に關する小泉氏の批評は、珍らしい批評ではないが、一方マルクス經濟論の歷史的特性を指摘する小泉氏の所論としては到底首肯することが出來ないのである。

（ロ）　問題と資本論冒頭の文義

進んで小泉氏が二葉大三氏の所論（『我等』第五卷第三號）に答へたと思はるゝ論點を考へて見るに、これ亦同じやうに首肯出來ないのである。二葉氏のかの論文には　マルクスの價値法則は、一個の歷史的法則として、しかも資本家以前の單純商品生產に於て完全なる適用を見るものであり、資本家社會に於ては當然變化せられると云ふことを論證せられてある。小泉氏は之を以てマルクスの矛盾を救ふ方法には相違ないが文義の解釋上許し難いと云ふのである。

そして、氏はその理由は資本論第一卷冒頭の『資本家的生產方法の支配するところの社會の富は、『一大げさな商品の集積』であり、各個の商品は、それの原始的形態（それがぬけ出るところの形態）である。だから　研究は先づ商品の分析から始める』と云ふ一句から、第六頁（カウツキー版）の『商品の交換關係又は交換價値に表はるゝ共通なものは、價値である』と云ふところまでの間に於てそれが資本家社會に適用せられないと云ふ文句は一つも無いと云ふのである。私見にては、こゝまでのところマルクスは、價値が何であるかと云ふことを問題としたのであり、價値量のことは、これに引續く文句に於て始めて表はれて居るのであるから、もし小泉教授が、問題の場合に、自說を主張する典據としては、これ以下の文句に探るべきでないかと思はれるが、それはしばらく別問題とし、假りに、同君の說に從ひこの

部分だけを問題として見る。

先づ、冒頭の『資本家的生産方法の支配して居る社會の富は』云々と云ふ文句から、そこに論ぜられてある商品は資本家的商品であると解釋するわけには行かない。私自身の考では、この冒頭の一句に於て、マルクスは、自分の研究する特殊な問題は資本家社會の富であると云ふことを言明して居るに過ぎない。詳しく云へば、自分の研究對象は、資本家以前の社會でもなく、資本家以後の社會でもなく、歴史的に特殊な資本家社會である。この資本家社會の特徴は、その他の社會と同じやうに、それの物質的生活の方面から最もよく理解せられるのであるが、その物質的生活は、商品としての富の生産交換の方法に表はれるのであるから、その資本家的富の研究と云ふことが自分の研究對象となる。然るに、この資本家的富なるものは、大量的に生産せられ、大量的に交換せられるものであつて、即ち『大量な商品の集積』として現はるゝものである。云々と云ふほどの意味であらうと思ふ。從つてそれはマルクス自身の特殊な研究の對象及びそれの一般的性質を明示しただけであつて、こゝに、又この章に論じられてあることが、直ちにその資本家的商品であると見ることは出來ないのである。曾つて一粟氏も論じたやうに、少くとも資本論序文に於けるマルクスの研究方法をひとわたり讀んだものには、ます〳〵そうあつてはならぬ理由があるのであるが、それ等の點に渉ることは、徒らに議論の紛糾を來たす恐れがあるから、こゝには、技術的に文義のことだけ問題として見る。文義の問題としても、泉小氏の引例だけに限つて見るが、先に掲げたやうに、以上の文句に引續き、『各個の商品は、それの原始的形態である。だから研究は、商品の分析から始める』とある。これは如何なる意味であるか。私は原文の Elementar-form と云ふ文字を假りに原始的形態と譯して見たが、小泉氏は之を元素形態と譯して居る。同氏がこの全文句の中に、マルクスの取扱ふ商品が資本家的商品であると云ふ理由を發見して居られるところを見ると、その『元素形態』と云ふ譯語は、こゝに

所謂「個々の商品」が『大量商品』の部分を構成するものとしての元素形態と云ふ意味と思はれる。それは、例へば、今日商品の需要と云ひ供給と云へば、大量な商品の『賣』又は『買』であり それは、無數な個々個人の『賣』又は、『買』の『集積』であると云ふと同じい意味である。しかし、この意味で、個人の賣買と云ふことは、一個の抽象概念であると同じやうに、小泉氏の意味に於て元素形態としての各個の商品なるものは、一個の抽象的概念である。商品は、大量的な商品として始めて資本家的商品である。然るに、今この『大量的』と云ふ特質が抽象せられて、それが單なる個々の商品として考へられる場合には、それは最早や商品の資本的特質からは離れたものとなるではあるまいか。資本家的特質から離なされた意味での『個々の商品』なるものは、單なる抽象としてでなく、之を歴史的に見るときは、資本家以前の、所謂單なる商品生産時代の商品として、事實上の意味を有するものではないか。それ故に この場合に於けるマルクスの所謂『個々の商品』なるものは 抽象概念として論理的解釋をすることも出來るが 歴史的事實資本家的商品にあらざる單なる商品として考ふることも出來やう。カウツキーがその校訂版に於て、かの Eelementar-form と云ふ文字に註して Ausgangsform （ぬけ口の形態）と云つて居るのは 恐らくは、この歴史的意味であつて、又かく解することに依つて、本文の意味が理論と歴史との併行と云ふマルクスの方法論とも添ふやうに思はれるのである。

かく解するとき、單にこの小泉氏の引用する冒頭の一句からでも、こゝに論ずるところかの資本家的商品であると云ふ理由は成立たぬ。況んや、この一篇は、題して『商品及び貨幣』とあり、（獨逸及び我國に現に行はるゝ經濟の教科書の如く、『欲望』とか『財』とかとはないのであつて、單にこれからでも、マルクス經濟論の歴史的特徴は判斷せられる）原著者が百余頁を費やして論ずるところは、商品價値は如何にして貨幣となるかと云ふことであり、即ち、『貨幣の必然

性』と云ふ語に縮約してもよいのである。その貨幣が如何にして資本となるかと云ふことは、第二篇以下の問題であり、未だ、貨幣が何であるか、如何にして發生するかさへ判からぬ先きに、資本の生産物としての商品を問題とするわけはない。資本の生産物とその商品は、單なる商品と比較研究せられて始めてその特質が明かにせられる。マルクスの目的とするところは、勿論資本家的商品の研究にある。しかし、この複雜な性質を有する商品の特質を明かにするためには、先づ以て、之と共通點を有し、しかも之と異なる單なる商品から研究せられなければならぬ。これ即ち、マルクスが冒頭に於て『個々の商品はそれの原始的形態である。だから研究は商品の（個々の商品の）分析から始まる』と云ふ所以であらうと思ふ。小泉氏にしても――マルクス經濟論の歴史的特性を認むる以上、この一句の解釋は、かくあるべきでないかと思はれるが、『文義上許し難し』となす氏の言明は、却つて之を否認すと思はれるのである。

（八）　問題と小生産者社會の價値法則

この文義解釋の點は必ずしも爭はぬと小泉氏も云つて居られるから、私も、これ以上立入ることは差控へる。氏が力を入れて居るところは、『資本主義以前に於ては、即ち利潤率の平均さへなければ、商品は、その價値通り相交換せられるといふマルクス說の果して是認し得べきや否やの問題である』（本誌四月號五十九頁）。それ故に、私も話をこの方面に移して行くが、私の問題は氏がマルクスの歴史的立脚地を閑却すると云ふ點にあり、その首肯し得ない理由に至つては前項と異なるところはないのである。

先づ小泉氏は『利潤率平均以前に於ては、價値通りの商品交換が行はれたと認むべき理由をマルクスは左の如く說いて居る』とて、資本論第三卷第十章の文句を引用し、之を批評して居る。

利潤率平均以前に於ては價値通りの商品交換が行はれたと云ふ理由を、引例の文句にだけ求むべきわけは毫もないの

であるが、こゝでも、前場合と同じやうに、評者自身の引例に依ることが、便利であるから、その僅かの文句の解釋を問題とする。かの文句とは、即ち次の如し。

『問題を次のやうに取扱つたなら、要點は、あらかた判かるであらう。勞働者自身がめい／＼生産手段を所有して居り、且つ互にその生産物を交換するものと假定して見よ。先づ、これ等の商品は、資本の生産物ではない。が、その勞働の技術的性質のそれ／＼異なるに從つて、それ／＼の勞働部門に用ゐられた勞働手段及び勞働材料の價値はそれ／＼異なる。又、その用ゐられた生産手段の價値の不平等と云ふことを除外して見ても、甲の商品は一時間で出來上がるのに、乙の商品は一日かゝると云つた事情があり、與へられた勞働者の如何に依つて、必要とせらるゝ生産手段の分量は異なる。次に、勞働者は、その勞働の强度の差異其他に由來する關係を平均的に計算し、平均的に働く勞働時間が等しいものと假定する。然る時、二人の勞働者は、先づ第一にいづれも、彼等の勞働日の生産物である商品の中から、その支出、即ち、消耗せられた生産手段の費用價格を補償する。この消耗生産手段は、それ／＼の勞働部門の技術的性質に依つて異なる。第二に、兩人は、等量の新價値——即ち生産手段に附加せられた勞働日——を作つたのである。それは勞賃と剩餘價値、即ち必要を超えたる剩餘勞働——尤もその結果は、彼等自身に屬する。——との和から成る。試みに之を資本家流に言ひ表はして見ると、この兩人は、同じ勞賃と同じ利潤との和の外、一定の價値、例へば、十時間の勞働日で表はされた價値をも受取るのである。けれども、第一に、彼等の商品の價値はそれ／＼異なり得る。例へば、商品甲は、商品乙よりも、その使用した生産手段の價値部分が餘計に含まれゐるかも知れぬ。同じやうに、其他可能な凡ての差別を持ち込んで見ると、商品甲は、商品乙より、より多くの生きた勞働を吸收し、從つて又それの生産には、より長い時間を要すると云ふやうなことがあり得る。それ故に、これ等の商品甲乙の價値は、甚だしく異なるものであ

る。問題の勞働者甲及び乙から與へられた時間内に行はれた勞働の生産物で表はさるゝ商品價値の總額も亦た同樣である。もし、こゝで放下せられた生産手段の總價値と剩餘價値との比を利潤率と稱するならば、この場合、甲及び乙の利潤率は、亦た甚しく異なり得る。生産の繼續する間、甲及び乙が日々に消費する、そして勞賃を代表する生活手段は、この場合、前貸生産手段の一部を構成する。そは、所謂可變資本である。しかしながら、甲及び乙は、等しい勞働時間に對して等しい剩餘價値を受取る。もつと正確に云へば、甲乙いづれも、一勞働日の生産物の價値を受取るのであるから、彼等は、前貸せる『不變的』要素の價値を控除したあとで、等しい價値を受取るのである。今、その一部は、生産に於て消費せられた生産手段の補償として、他の一部は、それを超過する剩餘價値として考ふることが出來る。甲の投下したより多くの支出は、その商品の中、豫めこの『不變』部分の塡補に向けられるより多くの價値部分で償却せられる。かやうにして、甲は、その生産物の總價値のより大なる部分をこの不變部分の物的要素に還元することになるが、他方、乙の側に於ては、その受取る部分がより少なくても、その代りより少なく還元するのである。それ故にこの前提の下では、利潤率の差異が、どうでもよい事情にあること、恰かも、今日の賃勞働者に取りて、自分達から誅求せられた剩餘價値がどういふ利潤率で表はされやうと、どうでもよい事情にあると異なるところなく、又國際間の貿易に於て國々の利潤率の平均がお互の商品交換にどうでもよい事情にあると全く異なるところがない』(資本論第三卷頁一五四—一五五)

こゝには生産者が自己の生産手段と自己の勞働とに依つて生産を營む場合に於ては利潤率の高低は問題でないと云ふことが論證せられてある。今、小泉氏は、之を評して『この說明は果して容認し得べきものであるか。……この場合に問題を決するものは、斯る社會に於て、自由競爭が行はれ、各生産者(勞働者)は充分打算的に合理的に行動したもの

と想像することを許すかそれを許さぬかである。若し之を許すとすれば、即ちその場合各生產者は最少費用の經濟本則に從つて行動したものとすれば、彼れに取つて利潤率の大小は、決して何うでも宜い事でない。彼は必ず比較的不利の產業に移つて、その產業の生產物價格を下落せしめなければ已まぬであらう。これはボエームバヴエルクがそのマルクス評に云々』（本誌四月號六四頁）と云つて居る。

しかし、マルクスがこゝに例證したところは、前文の示す如く、生產者が自己の生產手段と自己の勞働とに依つて營むところの、そしてその生產の結果たる商品が自己に歸屬する單なる商品生產者に就いてである。この單なる商品生產者は資本家社會にも存在すること云ふまでもないが、それがこゝに云ふ一般的な形に於ては、資本家以前の商品生產に屬するものである。それ故に、こゝに、資本と云ひ、剩餘價値と云ひ利潤と云ふことは、單なる理論上の假定であつて、歷史的事實としては、勿論存在しないのである。今、かの設例の生產者間の關係を歷史事實として見るときは、かくの如き社會に於ては、同種の產業の間には競爭が行はれても、異種の產業の間には、自然的乃至社會的障害に依つて、競爭の自由は行はれて居ないのである。それ故に、事實生產手段の價値構成の差異に伴ふ利潤率の差異と見るべきものがあつても、それがために異種產業の間に、生產手段及び勞働の移動を惹き起すことは一般的には無いのであり、從つて利潤の平均と云ふこともあり得ないのである。そは、例へば、資本家階級相互の間及び勞働者相互の間には自由競爭行はれるが、資本家と勞働者との間には勿論何等の自由競爭は無く、又、今日の國際貿易の關係に於ても、國民相互の間にはまだ全く自由競爭行はれずと云ふと同じだと云ふのである。自然的にもせよ社會的にもせよ、自由競爭の行はれない關係に於ては、利潤率の差異は蓋し『どうでもよい事』ではあるまいか。小泉氏は、この場合に於て經濟の本則に依つて云々と云ふが、經濟上の『合理主義』と『營利主義』とは混同すべきであるまいと思ふ。前者は資本家經濟

以前にもあり以後にもあり得るに反し、後者は、只だ資本家的生産關係の産物たるに過ぎない。しかも、問題の單なる商品生産社會に於ては、その形態はどうあつても、等價物の投下回收が目的であり（W—Wにせよ、W—G—Wにせよ乃至G—W—Gにせよ）資本家社會の如く、剩餘を目的とする（G—W—G'）生産ではないのである。經濟上の合理主義は利潤率の平均と必然的に因果關係のあるものではなく、マルクス設例の場合に於て、既に甲乙二種の產業の剩餘が同じい以上、これ等の生産者は何を苦んで、例へば、甲から乙にその生産手段及び勞働を移動せしむる必要ありや。もし彼等が自然上社會上の障害を突破して、この場合之を敢てせんとするならば、それこそ經濟上の不合理主義と云はねばなるまい。剩餘價値率と利潤率との差異は、單に一定の剩餘價値を可變資本との比に於て計算するか、又は總資本との比に於て計算するかの差であつて、分母の大小の問題である。分母は小さくても大きくても、設例の場合は分子が同じいことゆゑ、實際受取る利得の總額は同じである。もしそれが異なるとすれば、この場合に於ては、相互の競爭は自己の勞働を互に增加し、從つて生産力を互に增加することに依り、結局利得を等しうせしむるだけである。それがために、互に生産手段及び自己の勞働を移轉し合ふと云ふことはなく、從つて利潤率を平均せしむると云ふことはない。むしろ利潤率の相異が放任せられるが故に、價値に落ちつくと云ふべきである。資本一單位に對する計算上の關係から、換言すれば利廻りの差異に基き資本の移動が行はれるには、一般的には生産手段が資本として、勞働力に對し社會上獨立な力となつて後のことでなければならぬ。

尤も、今日の資本家社會の中に於ける單なる商品生産者間の交換、例へば田舍の農夫と手工業者との交換に於ては、一方資本家的經濟の浸入と共にます／＼資本家的の計算方法が行はれつゝある。例へば、我國現時の中小農の經濟は、一般に收支不足の事情にあると云つてよいが、それには、資本家的方法の浸入に伴ふ資本家的計算方法の支配が與つて居

ない。即ち、曾つては、生産費の一部として計算しなかつた自己又は家族の勞働が、今は雇傭賃勞働者の勞働力として世間並の勞賃率に依つて計算せられる。自己の生産手段も、かの資本家のそれと同じやうに、利子を計上する。(序ながら云ふが、これは如何に人間の意識が自己の精神から獨立する社會の物質的生産關係に依つて支配せられつゝあるかの一例である)然るとき、この獨立經營者は、自己分裂を敢てするものであつて、即ち、賃勞働者としての自己を、資本家としての自己が掠奪しつゝあると云はねばならぬ。かゝる事情の下に於ては、資本構成の差異に伴ふ利潤率の差異は、事實これ等小生産者の資本の移動を促すこと明かであるが、(この作用は、とりも直さず、一面に於て小生産者が小資本家化し、他面に於てその沒落する原因となりつゝあるものである)これは資本的生産方法の支配するところに於ける小生産者の場合であつて、事實小資本家と云ふべきであり、その支配せざる、從つて封建的生産方法が支配するところに於ける單なる商品生産者のそれと同一視することは出來ないのである。

小泉氏は云ふ。平均利潤率が成立しなければ、生産價値が成立せぬだけである。生産價格が成立せぬことは價値で決まると云ふ證據にはならぬ。ばかりか、價値で決まると云ふ保障も同時に失はれる。何となれば、平均利潤率が成立せぬことは、即ち價格を引下げ引上げて價値に一致せしむる競爭の無いことを意味するからである云々と。平均利潤率が成立せねば何故價値で決まるか。利潤率平均の無い社會は、資本家社會でない。資本家社會でない商品生産社會とは、單なる商品生産である。單なる商品生産社會では利潤率の平均がなく、利潤率の平均無ければ、生産價格はない。價値と生産價格とを背理せしむるものは、只だ平均利潤だけだから平均利潤率(從つて亦た生産價格)の無いと云ふことは、同時に價値で決まると云ふことではないか。

しかし、私は小泉氏と討論をしやうと云ふのではなく、事物を理解しやうと思ふのである。マルクスを理解したいと

思ふと同時に小泉氏をもどうか理解したいと思ふのである。マルクスの價値考察は、常に需要と供給との平均するところに始まる。需要と供給とが平均し、一定の平均價格が成立するものとすれば、それが、何故にかく成立するかと云ふことは、最早や働きを停止した需要供給の關係からは說明せられない。それは却つて、生產のために必要な社會的勞働の問題として、結局生產力の問題として說明せられなければならぬのである。需要供給は、價格を左右すると同時に、價格は亦需要供給を左右するが、價値は需要供給からも價格からも定められず、むしろ反對に、價格も需要供給も價値から說明せられる。需要が增加すれば、價格は騰貴し、價格が騰貴すれば、需要は減少するが、反對に、價格が下落すれば、需要は增加する。供給が增加すれば價格は下落し、價格が下落すれば、供給は減少するが、反對に、價格が騰貴すれば、供給は增加する。しかし、需要と供給とが一致し、從つて價格が價値に一致するときは、最早や需要供給からは說明出來ない。もしそれで說明しやうとすれば、例へば、鐵五噸の價格は米十石に等しく、米十石の價格は鐵五噸に等しく、從つて、鐵五噸は鐵五噸に等しく、米十石は米十石に等しい、AはBに等しく、BはAに等しきが故AはAに等しく、BはBに等しいと云つたことことになり、何ものも說明し得るものでない。價値が社會的必要勞働に依つて定まると云ふマルクスの價値法則は、この需要供給では、從つて競爭では、全く說明の出來ないところから出發し、逆に價値から價格を、價格から需要供給としての競爭を說明するのである。然るに、小泉氏に從へば、需要供給としての競爭（一定の價格に於ける物の分量的關係）が無ければ、價値で決まる保障も無くなると云ふのであるから、マルクスのそれと逆行することは云ふまでもない。しかし、小泉氏は、平均價格としての市場價値が、何故に一定の高さに於て定まり、何故にその他の高さに於て定まり得ないかの理由を如何にして說明するか。之を說明するには、氏の立場では、經濟上に於ける競爭の意義を轉じて全く個人の主觀的動機に歸着せしむるより外方法はない。經濟上の合理主義を云ふ小

泉氏はかく問題を移して居る。しかし經濟社會に於ては個人の主觀的動機は、そのまゝでは、何等價格に影響し得るものでなく、むしろ、その動機そのものが商品の需要や供給やと同じやうに、個人の意志から獨立した歷史的に特殊な生產の關係に依つて定められる。私は今こゝに唯物史觀の問題を評論する時を有たないが、いづれにしても、價値の說明が個人の利己心とか經濟上の合理主義とか、其他云々の衝動とか云ふやうに、個人意識の世界に問題を移すことは、マルクス經濟論の社會的歷史的特質を無視するものと云はなければならぬ。これは、小泉氏自身が今回の論文に於て、マルクスの立脚地として河上博士に對抗した論點とは根本的に相容るゝものではないのである。

六　小泉氏小泉氏を評す？

以上、私は、殆んど全く本誌四月號の小泉氏論文そのものに據りそのものを考へて見たのである。その結果は、同氏が今回の論文に於て、マルクス經濟論の立脚地から河上博士の所說を否認した論點は、氏自身の同じ場所に於ける他の論點をも同時に否認する。氏にしてもし、氏自身が說明するマルクスの立場そのものから考へたならば、競爭の二義には何の矛盾もない。資本論冒頭の文義解釋もマルクスの歷史的立場で解釋せられる。單なる商品生產社會に利潤率の平均なしと云ふことも自づから理解せられる。要するに氏がマルクス學說の矛盾として指摘するところは、凡て當らないことになる。勿論、氏が、かのマルクスの歷史的立脚地を是認するものであるかどうかは不明であるが、もし、氏にしてこれを否認するものとすれば、問題は凡て立場々々の問題に移される。と同時に、氏自身が、商品價値は商品生產以前にもあり以後にもあつて實に永久不變であると云ふことを主張しなければならぬ。もしそれを是認すれば、氏今回のマルクス評はそれ自身に矛盾であつて、小泉氏小泉氏を評すと云ふことになる。

價値法則なるものは元來それ〴〵の特定な生産關係の結果に過ぎないものであるから、既に生産關係の變化したところに於ては、價値法則も亦た一定の變化を受けると云ふことは自明のことである。この見地に於ては、マルクスの所謂『價値の生産價格への轉化』と云ふことは、多く怪むに足らないことなのである。從つて價値法則と平均利潤率との矛盾と云ふことは、偶さ〴〵事實の矛盾を如實に示すものに外ならぬ。資本家社會の現實暴露を目的とするマルクスは、この事實を如實に示したのである。そして、その何故にかく矛盾するかを理解するには、矛盾する二つの事實そのものの間に一定の連絡を求めなければならぬ。これ即ち價値法則それ自身に基く價値法則の矛盾の解釋である。價値と生産價格との矛盾は、生産關係を異にするところに於ける事實の矛盾である。價値法則に依るこの矛盾の解釋はマルクスの學説である。然るに現代社會の本質に於ける現實暴露を意識的に無意識的に恐るゝものは、何故に事實がかく矛盾するかを理解しやうとしないで、却つて事實の矛盾を學説の矛盾として見やうとする。そのかく見やうとするところに、意識的にもしくはその意思に反して資本家社會の辯護者となる。——事物の變化しつゝあるところに於て矛盾を矛盾として示した學説には矛盾は無いが、之をかく見やうとしない學説には無理が有り矛盾が出來る。

（五月十日）

有産階級の奢侈と我産業の行詰

高橋龜吉

一、賃銀の騰貴と我産業の行詰

我が産業が今日の如く行詰るに至つた根因は一二に止らない。例へば資源の老衰、内地向産業の飽和、財政就中軍費の過大、賃銀の騰貴等その主なる原因である。併し乍ら、その中でも、今日最も一般的に資本家や政府から認められてゐる我産業行詰の主因は、勞働賃銀の騰貴（筋肉及頭腦勞働者の）に基く生産費の上騰であらう。周知の如く、これ迄我が産業が對外競爭上、最も有力な武器としたものは、低廉なる我が勞働力であつた。この武器あつたればこそ、我が産業は、歐米品と競爭して、之を先づ國内より驅逐し、次で支那其他の中立市場に於て勝利者の位置を占むることが出來、以てこれまでの如き我産業の隆盛を贏ち得たのであつた。然るに、歐洲戰爭を轉期として、我が賃銀は著騰し、これ迄引合つてゐた我が産業の多くが、茲に、有ゆる方面に於て對外競爭のために行詰るに至つた。之れ、從來有利に海外に輸出することの出來た我が製品の多くが、今日に於ては愈々その輸出を著減し、反對に、從來内地にて自給し得たる諸種の品目に於て輸入激増し、兩々相俟つて内地産業を益々壓迫するに至つた所以の重なるものである。いま試に紡績職工の一日平均賃銀について見るに、左の如く大正二年以來大體に約三倍に著騰してゐる。

（一）本邦紡績工一日平均賃銀調

	農商務省調 男工	農商務省調 女工	紡績聯合會調 男工	紡績聯合會調 女工
大正二	〇、四五〇	〇、二九〇	〇、五三二	〇、三六八
六	〇、五七〇	〇、三八〇	〇、六一一	〇、四六五
七	〇、七四〇	〇、五一〇	〇、七七四	〇、五七〇
八	一、三〇〇	〇、九五〇	一、三四七	一、〇七二
九	一、三三〇	〇、九五〇	一、五一六	一、一一〇

一〇	一、三八〇	一、〇八〇	一、五二四	一、一八一
一一	―	―	一、九三七	一、一七九
一二	―	―	一、四八一	一、一八一

(備考) 紡績聯合會の賃銀は毎年下期の平均賃銀をとる。

斯の如き賃銀の著騰を見て、世人の多くは、渇然とそれだけ勞働階級(筋肉及頭腦)の生活程度が向上したものと考へる。成る程、賃銀の騰貴率だけで、直ちに勞働階級の生活程度が向上したと考へるが如き人は多くはないであらう。誰しも、此間物價及家賃等が騰貴して、生活費の騰貴したるがために、賃銀騰貴の大部分が相殺せられてゐる事實を知らぬ者はないからである。併し乍ら、然らば、何故に斯く生活費が騰貴したかと云へば、世人の多くは、就中資本家の多くは、「賃銀が騰貴したからだ」と云ふ考へに再び歸つて來るのである。

二、徳川末期の奢侈と當時の産業行詰

いかにも、勞働階級(筋肉及頭腦)の生活程度が、歐洲戰前に比し、一般的に或る程度の向上を示せることは事實である。しかし乍ら、又、それだけ、一般に勞働能率の向上したと云ふことも否み得ない事實である。尠くとも、今日の勞働階級の生活の向上は、その尠からぬ部分迄は、從來よりも、より大なる能率によつて一般的に贖はれたものであると云ふことに疑問の余地はない。自然、そのために我が生産費が高くなつたと云ふことは、假令あつたにしても極めて限られたものであると云はねばならぬ。事實、我が物價を今日の如く騰貴せしめた賃銀騰貴の主因は、勞働階級の生活程度の向上に基くものではなくて、寧ろ專ら有産階級の國力不相當の奢侈にあると私は信ずる。いま、そのわけを茲に證明するためには、私は、有産階級の奢侈が今日の制度に於て、如何にして勞働階級の賃銀に迄轉嫁せられ、遂に産業の行詰を招來するに至るかの經路を先づ說明せねばならないのであるが、說明の便宜上、その前に於て、支配階級(今日の支配階級は云ふ迄もなく有産階級である)の奢侈が、遂にその社會の産業を行詰らすに至るものであると云ふことを、徳川末期の事實によつて物語らしめよう。蓋し、さうする方が、最も直截に具體的に讀者の理解に訴へ得ると思ふからである。

徳川末期に於ける幕府、諸大名、武士階級等、當時の支配階級の遊食奢侈が如何に甚しかつたかは、次に引用する一二の記録で誰にも容易に想見し得る所であらう。例へば「幕末史」は曰ふ。今、所謂大御所樣(徳川第十一代將軍家齊)一身の奢費を說くの遑を有せざるも……彼の子女を有せしこと實に五十一人――その中三十餘は夭折せり――之を生みし所の婦妾の

數、一夏二三生あるを稀なりと云へば、やがて四十に上るべしと聞かば、彼が日常生活の如何に奢侈放逸に長じ、起居飲食の間に、其の性情を縦にせしかを想察するに餘りあるべし」これは無論將軍家齊に限つた奢侈ではなかつた。彼はたま／＼當時の一般の奢侈を代表したものに外ならなかつた。このことは、例へば、「國史眼」中に左の如き辭句あることによつて容易に伺ひ得る。曰く『吉宗以來旗本家人に儉約を勸れども奢靡は日進に隨つて長じ、武家法度に貨財を以て養子娶女するを禁ずるに至る。官衙の汚濁も推知すべし。松平定信閣に入り、黜務申し**合せ諧に、旗本の三絃、淨瑠璃を玩び、俳優を學ぶは、家に正妻なく、妾の寵に幹たるに出る。財用を節せず、故に財を以て**繼嗣結婚を議す。婚期を失ふ。故に花柳に沈湎す等の文あり。士風の澆漓も亦甚し。元祿に婦人の帶、絹幅を兩折（五六寸）し、袖の長さ八寸、猶以て奢すると稱す、文化（幕末）に至り帶の濶さ七八寸、袖の長さ尺一二寸、以て奢侈の增長の比例を見るべし。幕府、諸藩、君臣上下の分隔甚しく、事皆繁文縟禮に流れ、政務は簿書期會に過ぎず。定信の初政、過敬の文字多きを矯正せり……（例へば）字畫の繁簡も品等に關る。一つの御の字にも七八樣に書す。樣の字に七等あり……殿の字も七等あり……其の用法を誤らば譴詞せらる。……樹枝枯れ葉上墜るも、前記（先例）を案じ、一二三の例を擧て議定し、而て後ち稟告す。人員も……多くは手を拱て事なく。只其の記錄を暗熟すれば、庸人も練達者たり、否されば俊才も用をなさず。門閥資格を論じ、先輩後輩を爭ふ。是に於て、俊傑の士、材を抱きて爲す所なく、緣故あるを希ふに至れり』

斯くの如く、幕末の支配階級が、無爲にして奢侈の生活を續けるためには、その奢侈を賄ふ資金を他より搾取する外にない。云ふ迄もなく專らこの搾取の犧牲になつたものは、當時の產業勞働者なりし農民であつた。例へば、「幕末史」は之を次の如く記してゐる。

「武家の困窮（奢侈の結果）の度加はると共に、彼等の領地に住める農民の誅求を蒙りしと尋常に非ず、五公五民（筆者註德川初期に於ては四公六民が一般であつた）は租賦の中庸を得たるものなれども、七公三民の横斂をするものあるに至つては、農民たるもの何とて堪ふるを得ん。年貢の先納も常の事にして、不時の用金を命ぜらるゝも珍らしからず、彼等にして之を調達する能はずば、其所有の田畠を典當として他領より金穀を借入れて之を上納せしむる……。その暴を極むるものに至つては、百姓の之に應ぜざればとて、手鎖の刑に處するあり、………是に於て、百姓の耕作に望を絕ちて、他に生業を求めん

とし。故里を逃亡して三都等へ集り來る者頗る多し。彼等、あとには離散したる妻孥を見捨て、前には寄邊なき都門に向ふ。其情最も憐むべし。故に……、天明五年より六年に至る一ヶ年間に農民の數を減ぜし事、實に百四十萬石に及ぶと云ふ。此結果として、地方の耕田荒廢して、都會の遊民增加せり。乃ち、幕府は屢々命を下して、百姓の奉公の爲と稱して、濫りに都會に出るを禁じ、名主等に命じて、村内の田畠の耕作に欠くべからざる人數を取調べしめて、若し餘ある時のみ、百姓の他國に赴くを許せり……』

以上を他の言葉に飜譯せば、いまや農業（それが當時の殆んど唯一の産業であつた）は、それの支配者――即ち今日の所謂資本家――たる武士階級の奢侈費用の轉嫁を受けて、玆に全く引合はざる産業と化し去つたのである。之れ、今日謂ふ所の産業の行詰に外ならない。その結果は、幕末に於ける國民一般の生活難の加重、失業者の激增、生活程度の低下、社會的罪惡の橫行、人心の不安險惡であつた。而して遂にかの維新革命を生んだのである。

三、今日の有産階級の奢侈と産業の行詰

以上によつて、支配階級の奢侈が、その國の産業を行詰らすに至るものであることは、誰にも容易に理解せられるであらう。所が資本主義經濟制度の下に於ては、その支配階級の奢侈と産業の盛衰との關係が極めて復雜してゐるために、兩者の關係は、以上封建制度の場合の如く、はつきりと誰れにも容易に理解せられるが如く簡單に仕組まれてゐない。之れ、今日の我が産業行詰の一大主因が、有産階級の國力不相當の奢侈にあるにも拘らず、この問題が比較的に、最も輕視せられてゐる根因であらう。尤も、たま〳〵、勤儉の必要を認むる者の無いではない。しかし、その勤儉論は、今日の我産業行詰と有産階級の奢侈との、有機的關係を直視せる結果成つたものでなく、御座なりな「稼ぐに追付貧乏なし」位ひの考へから出發したものに過ぎない。從つてその勤儉論は著しく感情的で、しかも全く的外れであり、到底冷靜に根强く世論を動かすに足らない。

そも〳〵、今日の有産階級の生活は――而して彼等以外に奢侈の生活をなし得る者は殆んどないのであるが――利得又は配當並に利子（地代、家賃等も含む）等の形態に於ける收入によつて賄はれるものである。然るに資本主義經濟本來の仕組に由ると、斯樣な利得、配當、利子等の生ずるわけは、資本にそれだけの生産力があるからであつて、謂はゞ、資本の働きに相當する報酬を得てゐるに過ぎない、と云ふことになつてゐる。從つ

て、斯樣な收入(利益、配當、利子等)によつて、有產階級が如何に奢侈の生活を爲さうが、そのため、一國の產業生產費が高くなり、產業が行詰るに至るなどと云ふことは、全く、夢想だもされないことである。

いかにも、資本の利益、配當、利子等が、資本の眞の生產力(資本主義的考へ方に於ける)に相當する報酬である限り、さうした收入のため、一國の產業が資本主義的に行詰るに至るといふことは決してないことである。併し乍ら、今日の爛熟せる資本主義制度の下に於ては、配當、利子等の收入は、最早常に資本の眞の生產力に對する報酬たるを意味せず、資本生產力の老衰凋渇せる場合に於ても、制度の惰力によつて、傳統的に配當利子等は依然捻出せられるのである。

初め、產業の經營が、商工資本家自ら所有せる資本によつて營まれた時代に於ては、何かの理由で、その資本の生產力(收益力)若し減退乃至消滅せば、直ちに、その資本の齎らす利益、利子等は消滅して、その經營者はそれだけの投下資本を損失として切捨てねばならなかつた。であるから、斯る場合には利益、利子等の收入は、常に、資本の生產力に對する報酬と見て差支はなかつたのである。然るに、十九世紀以來(一)株式會社制度(二)社債制度(三)銀行制度、等の發達に由つて、有產階級が二つに分化し、一は投資階級として、專ら資本の供給をなし、一は企業家として專ら事業を經營するに至るや、事業經營上、資本に對する報酬は、從來の如き意味とは革命的に變化するに至つた。就中、その典型的のものは(二)及び(三)の確定利付資本に對する利子に於てさうである。例へば、この、(二)及(三)の形態の投資制度の下に於ては、その投下資本の生產力の如何に拘らず常に一定の利子をその資本に對して支拂はねばならない。即ち、利子は最早資本の生產力の結果に對する報酬としてゞはなく、產業の生產費として最先に之を負擔せねばならない。斯る制度に於ては、幸ひその投下資本がその確定利子以上の生產力を發揮する間は、產業はそれだけより大なる利益を舉げ、寧ろ生產費を低下し得る作用をなすのであるが、一度、その資本の生產力が退化し、老衰するに至ると、今度は逆に、資本の生產力以上の利子を產業が負擔せねばならなくなる。例へば、今迄、一千萬圓の資本の生產力年々百萬圓であつた當時に於ては、その資本に對し年々七十萬圓の利子を支拂つて其の資本を利用することは、却つて生產費を低下する作用をなす。しかし、その投下資本の生產力が段々老衰して、又はその他の經濟事情の變化のために(例へば鑛山であるなら鑛脈がつきるとか、事業會社であれば販路や競爭や生產費の變化等の關係から)いまやその生產力が年々

三十萬圓に低下したる場合に於ては、之に對し七十萬圓の利子を支拂はねばならないと云ふことは、年々四十萬圓だけ、遂にその生産費を高めることになる。自然それだけ物價は高くなり、從つて、生活費も上騰し、之に應じて、賃銀も騰貴せざるを得ない、しかも、先の一千萬圓の投資階級は依然年々七十萬圓の利子を受取つて、彼れの奢侈の生活を續け得るのだ。之を他の言葉に飜譯せば、元來、その資本本來の生産力(資本主義的に考て)から云へば、年々三十萬圓以下の生活の外、之を投資階級に許すことが出來ない社會經濟の狀態にあるにも拘らず、投資階級に七十萬圓の生活(即ち四十萬圓だけより奢侈な生活)を維持さすために、社會は物價を高め、賃銀を高めて之を賄ひ、遂にその産業を行詰らすに至つたのである。斯樣な現象は、その國の資本主義經濟が尚ほ發展の途上にある間は、比較的稀に、且つ部分的に、一時的に起るものに過ぎず、從つて、それが、社會の重大問題となることは、メツタにないのである。所が一度その國の資本主義經濟が行詰に至ると、斯樣な現象が一般的に永久的に襲ひ來たり、玆に社會の重大問題となるのである。斯樣な現象は又、單に確定利付の投資(例へば社會債、銀行貸付等)のみに限らず、多少の程度の差はあるが、株式制度にも起る出來事である。例へば、その會社の資力が實質上拂込資本の假令ば半額に下れる場合に於ても、今日の株式制度に於ては、尚ほ之れを拂込資本金だけの資力あるものとして利益計算をやるのである。然るに、周知の如く、その國の資本の收益率には大凡一定の水準があるものであるから、假令へば、會社の拂込資本は一千萬圓なるも、その實際資力は五百萬圓しかない場合に於て、資本のその國の標準收益率年八步なる場合に於ては、四十萬圓の利益配當があれば(即ち實際資力五百萬圓に對し年八步に當るから)元來ならば株主は滿足すべきである。にも拘らず株主が之を一千萬圓に對する配當と見る場合には年四分の利子にしか當らぬ。勢ひ株主はそれに滿足せずして、强いて年八步に迄利益を引上げやうとする。そのためには、それだけの賃銀を引下げない限り、それだけ物價を高くする外に策はないのである。何れに致せ、資本の實際の生産力以上に配當金を與へて有産階級に國力不相當の奢侈な生活費を賄ひ、斯くして物價を高め、之に對應する賃銀の騰貴を誘ひ、一國の産業を行詰らすと云ふ點に於て、確定利付の場合と異る所はない。

四、我資本の生産力の激減と株主階級

以上の如きわけであるから、今日の制度の下に於ては、その國の生産力が、從來よりも尠からず減少するに至るも、その資

本に衣食する有產階級の收入は殆んど減少せざる場合多く、假令減少するも、その減少率は資本の生產力の減少に比し遙かに少なるを常とする。而してその收入の減少せざる限り、有產階級の生活は、依然資本の生產力多大なりし時代の贅澤な生活をそのまゝ續けるが人間性であるから、その結果玆に、有產階級の奢侈を賄ふために、產業は行詰ること、恰も幕末に於て、武士階級の奢侈を賄ふために當時の農業が行詰つたと同じ事情に直面するものである。

然るに、我國に於ける一定金額の資本の生產力は、歐洲戰中戰後の大景氣時代を轉機として、驚くべき激減を來してゐる。その主因は思ふに二つある。（一）は歐洲戰中戰後の物價暴騰時代に、平時に於ては全く不引合な投資が到處に盛に行はれ、其ため、戰後一度び世界の經濟が常態に復し物價下落するや、今日の國際經濟狀態に於ては、我が資本の尠からぬ部分の生產力は全滅乃至激減するに至つたこと。（二）は我が資源の老衰（例へば石炭、銅、石油等の如きその代表的のもの）又經濟事情の變化（例へば內地向產業の過剩、支那產業等の勃興等）等のため、從來の我が資本の生產力が激減するに至つたこと、即ち之である。

この結果、云ふまでもなく我が資本の收益力は激減した。例へば我が重要會社約百五十社について東洋經濟新報社が調査せる所によると、第二表の如く、平均拂込資本金に對する利益の割合は大正六年下期の五割五分二厘、即ち百圓の資本が一ケ年に五十五圓二十錢の利益を擧げたのを頂上にして爾後激減し最近に於ては僅かに一割六八分內外である。

（二）會社事業成績及利益分配表

	平均拂込資本金	當期利益金	對平均拂込資本利益率	株主配當金	同上配當率	重役賞與金
大正三上期	五六四、三二一	三六、八六八	一、三七	三七、一三五	〇、六六	[illegible]
同　下期	五九〇、一九八	四四、一三五	一、五〇	二八、七七三	〇、九八	[illegible]
三下期	六六〇、六五一	五〇、六五八	一、五三	三三、八二三	〇、九九	三、四八
四下期	七〇〇、六二三	七八、二四四	二、七〇	四二、三八六	一、二一	四、〇八四
五下期	七六三、二四九	一七九、九四一	四、七二	七〇、八五三	一、八八	七、八〇
六下期	一、〇二七、二一二	二六六、二一二	五、二五	一一九、二一八	二、〇五	一二、一九
七下期	一、三三八、四九〇	三三九、〇五〇	五、五三	一〇四、八四九	二、三六	一三、二三
八下期	一、三七一、一六〇	三二四、六七〇	四、四四	一七一、六八六	二、五〇	二〇、七三
九上期	一、六六四、二〇一	四〇二、四七七	四、九四	二二六、〇二一	二、六六	二六、二三
同　下期	一、八四三、八五一	三九九、六六六	三、六〇	一六七、五九九	一、八二	一三、六九九
一〇下期	二、一九八、七五三	二〇三、五〇三	一、八五	一四六、一五四	一、三二	九、一八三
一一下期	二、五四六、三六七	二〇一、九五一	一、五八	一五五、六五九	一、二一	九、五〇七
一二上期	二、九一四、〇五六	二三八、九一九	一、八三	一五三、八〇九	一、三三	一〇、三〇九
同　下期	二、七三五、七七八	一〇八、〇一五	△〇、七九	一六〇、四四八	一、〇〇	七、五三一

（備考）本表は東洋經濟新報社が我國主要會社約百五十社の考査狀により調査したるものより採る。△印十二年下期の利益率

の減少は震災の損害に依る。

しかも以上は單に表面に現はれた資本の收益力の減少である。然るに、實際に於ては、最近の如く收益力の激減せる場合には、（一）一方に損失及減價銷却等が極力隱蔽され、他方に利益は有ゆる方面から捻出せられて、表面上利益金は極度に增高せられる。（二）その上、新たな輸入關稅その他の保護によつて國民の租稅の力で會社の利益金は表面上增大せられてゐる。であるから、實際上、最近の我が資本の生產力は、第二表の利益率の激減に表面現はれた以上に、更に甚しいものと云はねばならぬ。しかも、株主の配當金や重役の賞與金やは、その割合に減少してゐない。例へば同じく第二表によつて見るに、大正三年下期と十一年下期の利益率は、兩者とも一割五分余で略ぼ同率であるが、株主配當率は大正三年の九分九厘から十一年には一割二分一厘に著增してをり、重役賞與金はこの間二百二十余萬圓から九百五十萬圓に激增してゐる。云ふ迄もなく、斯く、比較的多大の配當をなし、この重役賞與金を出すためには、それだけ物價を高くし、生活費を高めて、一方に國民を生活難に苦しめ、他方にそれだけ賃銀、生活費を高くして我が產業の對外競爭力を弱め、產業を行詰らしめねばならない。

元來、歐洲戰中戰後の大景氣の際に於けるが如き投資は、その例外的な大景氣中に於ける巨大の利益金で資本の元本を全部銷却し、平態に復すると共に、その資本の元本を切捨てるが事業經營の本式である。換言せば、資本家はその投資資本に對し、戰事中に於て巨利を得たる代りに、戰後平態に復すると共にその資本からは利子や配當を取らぬが資本主義的經營の本式である。事實、個人經營の事業に於てはいまなほそうである。所が、會社組織の事業に於ては、斯る場合にも尙ほ、その資本から配當や利子を絞り出さうとし、それが出ないと事業が引合はないと號して、引合ふ所まで物價を上げるか、賃銀を下げるかする努力を試み、玆に產業は行詰つたと稱するのである。いま之を我が事業會社の實際について見るため、前揭第二表の內容をなす事業の中、戰事中特に巨利を占めたるものについて、その株主配當金の高と拂込資本金との關係を示すに第三表の如くである。

（三）我が事業會社の景氣時代の株主配當金調

	海運業		造船業△		紡績業		總計（其他共）	
	社數	配當金（千圓）	社數	配當（千圓）	社數	配當金（千圓）	社數	配當金
大正六上期	五	一六、九九五	六	六、〇二四	一一	二三、〇一四	一四七	八七、八九五
同 下期	五	一九、九八六	六	七、四九〇	一一	一八、七五六	一四七	一〇、〇五八
七上期	五	二一、七一七	六	八、二一七	一三	三〇、四九七	一四八	一三〇、八九九
同 下期	五	三〇、四四六	六	八、五五五	一三	三一、四一九	一四八	一四四、八四九

大正八上期	三	三五、五八七	六	九、四〇一	三	三三、四二一	一四九	一四三、九八七
同　下期	三	三九、五二六	六	一一、四一七	三	三三、四二五	一四九	一七一、六八六
九上期	三	二〇、二八〇	六	一〇、一六九	三	四四、九九九	一四九	二一六、〇三一
合計	—	一七六、五九三	—	六二、一八五	—	二〇一、五一九	—	一、〇〇〇、三三五
六年上現在拂込資本金	—	七八、三八〇	—	二八、八二三	—	六九、六九二	—	九四六、九〇九
九年上現在拂込資本金	—	一四〇、九七五	—	六六、〇二四	—	一三五、五〇六	—	一、六二四、三〇一

（備考）△造船業は翌期の數字を示す。即ち大正六上は下の數字、大正九下は同大正九下の數字を意味す

第三表によると、大正六年上期以降九年上期に至る三ヶ年半間に於て、海運業の資本家は、その資本金六年現在七千八百萬圓、九年現在一億四千萬圓に對し、實に一億七千六百萬圓の配當金を受取つてゐる。紡績業の資本家は同じ期間に、その資本金六年現在約七千萬圓、九年現在一億三千三百萬圓に對し、二億百萬圓の配當金を受取つてゐる。又、約百五十事業會社全體としての資本家と雖も、同じ期間に、その資本金六年現在九億四千七百萬圓、九年現在十六億二千四百萬圓に對し、實に約十億圓の配當金を受取つてゐる。即ち大觀して我が資本家は、その資本の元本だけは全部、大正六年上期——九年上期の三ヶ年半の大景氣時代に取戻して尚ほ相當の利益を得てゐるわけであるから、今日に於て、これ等の資本の生產力が激減乃至全滅せる際に於ては、之を切捨てゝも構はない事情に在る。然るに、我が資本家の大部分は、その巨大の配當金を今日に備ふることをなさず、之を或は大奢侈な生活に消費し、或は投機事業に濫費した。その上、已にその生產力は零になり、之を收益資產から切捨つべき筈の資本から、依然、配當金や利子をセシメ取らうとするのである。而して曰ふ、その配當が入らなくては生活（從來の好況時代に養はれた奢侈な）が維持出來ないと。しかも、政府はこの資本家の要求を如何にも正當なことだと考へてゐるものだと見えて、例へば朝鮮銀行の如く、その資本の殆んど全部は損失して了つて、利益なんか一厘も出て來ないことと公知のことであるに拘らず、帳簿上損を損とせずして利益を捻出し、年々いまだ尚ほ六分（一時は一割乃至八分）の配當を公許してゐる。然るに今日の我が重なる產業の殆んど全部は、斯の如き株式會社制度によつて行はれてゐるものである。之れでは、社會に生產なきにも拘らず、資本家の奢侈の生活のみ維持せられ、物價の騰貴、無產階級の生活難と賃銀騰貴の並行、生產費增大、產業行詰りの來るのは必然ではないか。

五、我が資本の生產力の激減と其他の有產階級

以上の如く、我が株主階級は其の資本の生產力（資本主義的意味の）から絞取られるだけの利益は絞取つて了つて、已に全

洞になつてゐる資本からも、依然、少くとも一定水準の配當金だけは之を無理にもセシメ取らんとし、そのため我產業を行詰らしつゝある。がしかし、それがどうしても出來なくなると、遂にはその資本からの配當を斷念し、乃至はその資本を切捨てる。即ち、會社の無配當乃至減資及解散等がそれである。であるから、株主階級の奢侈は、愈々會社が行詰る所迄行詰ると、或點迄は自然に之を荒療治——それで產業の行詰を救ふには實は時期が已に失してゐる場合が多いが——する方法があり、又、この脅威あるため經營者さへその人を得ば、事前に或は積立金を增し、配當金を減じ、減員を敢行する等の手段を講じて事業の行詰を轉開する途もないではない。——事實は多くはそれも駄目であるが。所が、社債、及び銀行よりの借入金等の利子に對しては、假令如何にその資本の收益力が減退しようが、倒れる迄は依然、一定の利子を生產費の一部として支拂はねばならない。この點に於て、確定利子付の資本家は、株式資本家よりも、一層甚しく、その資本の生產力とは無關係に奢侈の生活を續け得るわけで、それだけ資本の生產力の減退せる場合には、產業を死滅せしむる作用が多大である。例へば、いま之を我が國第一流の造船業者川崎造船會社の行詰りについて見るに、第四表の如く、その經營の膨脹、從つてその生產費の騰貴、利益の減少は、專らその社債其他の利子の支拂にあることが分る。

即ち、第四表によると、「社債其他の利子並に諸經費は、十年には三百四十萬圓、總經費に對する割合五割三分二厘なりしもの、十三年に於ては四百五十萬圓、七割二分六厘に增加してゐる。然るに、此間、賃銀支拂は二百二十八萬圓から百十九萬圓に激減してゐるから、賃銀支出に比例する筈の諸經費(利子以外のもの)は約半減してゐるわけである。にも拘らず、十三年の「社債利子並に諸經費が」斯く增加してゐるわけは專ら社債其他利子が增加した結果と見られる。果して然らば、十年と十三年とを比較するだけで、生產力なき資本の利子のために、生產費が約二割餘を增加してゐることを伺ひ得る。

(四) 川崎造船所經費內譯表

下期現在	總收入 (千圓)	利益 (千圓)	總經費 (千圓)	內社債其他利子並諸經費 (千圓)	同上對總經費 (%)	內賃銀 (千圓)
大正二	二、〇〇八	五二七	一、四〇五	一、〇二三	七三、〇	三三七
大正七	二五、九六四	一九、三三九	六、三六四	一、三五〇	二一、二	一、七〇〇
八	三三、五三五	一七、一八六	一一、三八〇	六、七六一	六〇、八一	二、三三四
一〇	一〇、四五五	三、九一九	六、四〇七	三、四二一	五三、二	二、二八二
一一	九、九二七	四、六三三	五、〇四一	二、八〇四	五五、六	一、七〇四
一二	一〇、三〇五	四、二九九	五、九一六	三、七五九	六三、五	一、六四九
一三	九、二六五	二、九五〇	六、二一四	四、五一二	七二、六	一、一九六

然るに、斯樣な確定利付の資本——その資本の生產力が假令如何に減退せるかに拘らずその資本より一定の利子を取らんとする——の收益によつて、遊食奢侈の生活をなし得る所謂る利子寄食階級（投資階級）は、歐洲戰爭以來、我國に於ては驚くべき增加を來たした。例へば第五表の如くである。

（五）本邦確定利子付資本現在高表

	大正二年	大正八年	大正十二年
	千圓	千圓	千圓
國債	二、五九一、七一〇	二、七九三、〇八九	三、八七六、五九五
地方債	三一四、四五八	四三六、七七七	五二一、九二六
小計	二、九〇六、一六八	三、二二九、八六六	四、三九八、五二一
銀行債券	三五五、一二七	七一五、四四八	一、二八八、三三五
會社債	二四一、五四〇	五一四、七三五	九八二、六一〇
合計	三、五〇二、八三五	四、四六〇、〇四九	六、六六九、四六六
銀行の貸付	二〇〇、一〇五	二、一〇一、三三八	三、四一〇、八一二
總計	三、七〇二、九四〇	六、五六一、三八七	一〇、〇八〇、二七八
年七分の利子	二五九、二〇六	四五九、二九七	七〇五、六一九
同上廿歲以上男子一人當り	二十圓	三十六圓	五十五圓

（備考：△印大正十年末現在、銀行貸付は東洋經濟新報社調査）

即ち、第五表によると、確定利子付資本は大正二年の約三十七億圓から、八年には六十五億五千萬圓に、十二年には百億八千萬圓に激增し、之に對し平均年七分の利子を支拂ふと假定し、而してその利子は二十才以上の男子が負擔するものを假定すると、（大正七年調二十才以上の我が男子人口は一千二百八十三萬六千人である）その一人當りの負擔額は大正二年二十圓、八年三十六圓、十二年五十五圓となる。然るに、實際に於ては、此の利子を實際に負擔する直接產業勞働者は、右の數の半分にも滿たないであらうから、いま之を半分と見れば、その一人當りの負擔額は大正二年四十圓、八年三十六圓、十二年百十圓となるわけで、それだけは、此等利子寄食階級の奢侈を賄ふために、無產階級の生活が壓迫せられ、乃至は我が產業の生產費の增加、物價の騰貴（從つて賃銀騰貴）となり競爭力の薄弱となつて、產業行詰の原因をなしてゐるのである。云ふ迄もなく、我が經濟力の頂上は大正八年であつて、それ以後は、世界經濟の反動、十二年の大震災等のため、いまや我が經濟力は半減乃至それ以上であると見て大過ない。然るに、その利子負擔は右の如く、却つて五割四分を增加してゐるのだ。我が國の有產階級の奢侈が依然維持せられつゝあるに反比例して、我が產業が近年愈々行詰りつゝある所以を茲に見出し得るであらう。

以上の他、我が國の資本の生產力は激減したるにも拘らず、依然猶ほ歐洲戰爭中の異常時に於ける資本收益率をそのまゝ奪取して、奢侈を續けつゝある有產階級に、地主、家主階級がある。例へば、筆者の住む東京郊外の一村においては、大正八九年

頃迄も、一坪の地代は一ヶ月五錢にて、それすらも高い方であつた。而して、土地の百姓は、年中農業に働いて始めてその生活を漸く維持し得たのであつた。然るに、今日に於ては、地代は一ヶ月二十錢から三十錢に騰貴し、百姓は、之の收入によつて遊食しつゝ尚ほ奢侈な生活を營みつゝあるのである。云ふ迄もなく、彼等の遊食奢侈の生活費を賄ふものは、地代及家賃であつて、それは全部借地又は借家人から支拂はれ、それだけ無產階級の生活費を高め、賃銀給料を高め、產業の生產費を高めて、我が產業を行詰らしつゝあるのだ。之れは單に、宅地に限つた出來事でなく、少からず程度を異にするが、しかし田畑其の他にも起つた現象である。例へば、戰前と戰後とでは、日本の商工業資本の生產力は、――從つてその農產物價の負擔力は、――寧ろ著しく減少せるにも拘らず、勸業銀行調査に出る我が田地（普通田一反當）の全國平均賣買價格平均は、大正四年の二百五十七圓から、十一年には六百二十圓に暴騰し、十三年には多少下落したりと雖も、尚ほ五百六十八圓である。即ち、四年に比し二倍二割餘の騰貴であつて、それだけ（他の物價騰貴で、或點迄は相殺せられるが）我が土地有產階級の奢侈を賄ふために、それだけ、無產階級の生活費を高め、產業の賃銀、生產費を高めて、我が產業を行詰らすに至つたものである。

× × × × ×

之を要するに、以上によつて、我が有產階級の資本の生產力不相當の奢侈が、一方にはその配當乃至利子其他を捻出するために、他方にはそれを源泉とする奢侈的需要のために、物價を高め、賃銀を高め（從つて又物價を高め）生產費を高めて、我が產業行詰の根因をなしつゝあることを容易に理解し得るであらう。云ふ迄もなく、我が產業行詰の根因をなすものは有產階級の資本の生產力不相當の奢侈一つに限るものではない。併し乍ら、此際、最も實行容易にして、しかもその效果の直ちに明かに約束し得る、我が產業行詰の打開策は、以上述べたるが如き有產階級の資本の生產力不相當の奢侈を根絕せしむる外にない。それには、資本主義的に考へるも　その有產階級の收入を、尠くとも、その資本の生產力（資本主義的な考へ方の）の範圍以上に出でしめない政策を必要とする。巨額の收入を與へながら、その收入に比例する生活（大奢侈な）を止めよと云ふが如きは、猫の前に鰹節を與へて、之を食べることを阻止せんとするの愚に等しい。現に濱口藏相は、昨年の夏の臨時議會に贅澤品輸入關稅案提出の際、「それに相當する收入があつて、その收入に相當する生活を營んでゐる間は、假令その生活が如何に奢侈であらうとも、それは單に社會道德上の問題になるばかりであつて、經濟上から云へば贅澤とは云へない。つまり、贅澤とは收入以上の生活をしてゐることを意味するものである」と云つてゐる。之によつても資本主義制度に於ては、如何なる源泉に出るを問はず、大收入の前には必然的に遊食奢侈の生活が伴ひ、從つて前述せる如く物價の暴騰、賃銀の騰貴等を誘ひ、產業を行詰らすものであることが分るであらう。

在歐通信（第二）

――倫敦生活――

河合榮治郎

（一）

R君

僕が倫敦に着いたのは一月の中旬であつた、倫敦名物の霧の濃い最中である。僕は之から約三ケ月、勉强らしい勉强からすつかり離れて、三つの事を熱心にやらうと考へた。一は英語の稽古、二は新聞雜誌を熟讀すること、三は諸所の講演を丹念に聽き廻ることであつた。之等の事は僕の經驗に依れば本當の勉强に着手したら最後、とても熱心にやられるものではない、而して之等の事は、外國生活の出發に於て、是非確りした基礎を置かねばならない事である。扨英國にはよい雜誌が多い、前回に述べた勞働運動に關するものを除いて、自由黨系の雜誌として "Nation" "Manchester guardian Weekly" がある。僕は社會問題とか、國際問題とか、特定の問題に對する自由主義の論鋒に付ては、いつも不徹底であるとの不滿を持ち勞働黨殊に社會主義の立場に共鳴を見出す、然し一般に社會人生に對する態度と云ふものに於て、自由派は社會主義者の批評の持たない、積極的であり綜合的であり、多面的である特色を持つと思ふ。此の點に於て外國滯在者が就て日常接する新聞雜誌としては、必ずリベラルの系統を逸してはなるまい。保守黨派の系統のものとして、"Spectator" "Saturday Review" 等がある。此の外に「パブリック、オピニオン」は夫れ自身に何等の意見のある雜誌ではなくて、各新聞雜誌のよい記事を拔萃してゐるので、氣の付かないよい記事に觸れることがある。之等は何れも週間であるが、稍大きい隔週刊又は月刊、四季刊としては、"Fortnightly Review" "Contemporary Review," "Nineteenth Century and the after

"Review" "Quarterly Review" "Edinburgh Review" 等がある。此の種の雜誌になると黨派的の色彩は比較的薄い（クオーターリー・レヴユーの如き例外を除いて）、然し一流の人々の識見ある意見に接することが尠い。黨派から離れた公平の意見としては、寧ろ哲學倫理等の學術雜誌に、却てよい時事評論的のものが出ることがある。即ち International journal of Ethics." "Hibbert journal" 等である。

よい新聞を持つことは確に英國の誇であらう。記事の豐富な事に於て。通信の世界的な點に於て。英國の新聞は都會の新聞であつて。外の國の新聞を見ると地方新聞を見る感がある。若し英國の新聞によいものを選べと云はれるならば。僕は保守系としてタイムスかモーニング・ポスト。自由系としてマンチユスター・ガーヂヤン、勞働系として唯一のデーリー・ヘラルドを擧げる。タイムスは一般には漫性的の政府黨で。其の時其の時の政府の立場を代表すると云はれてゐたが。勞働黨内閣が出來てから、勿論反政府的であり。殊に國際干係になると。帝國主義的色彩が強いと思ふ。唯記事の豐富なることに於て。此の新聞を逸することは眼界を狹くする。マンチエスター・ガーヂアンの記事は公平であり態度は氣持がよい。紙面の持つ一種の氣品ある態度は。保守派も勞働派も持ち得ない自由派の特色であらう。デーリー・ヘラルドを自分は好む。印度に關する英政府の税政などを掲ぐるのは、英國中に於て、唯此の新聞丈である。此の點に於て他の新聞の持たない國内國際記事が此の新聞で見らるゝことから、此の新聞は逸することが出來ない。僕が着いた時分には、財政上破綻に瀕してゐた。然し内閣成立後事情は變つたであらう。唯此種の新聞雜誌の逢着する難問は、智識階級を主にすべきか、勞働者階級を主にすべきかの、取捨に關することである。ブレールスフオルドがニユー・リーダーに付て此の事を切に云つてゐた。そして結局智識階級を主とすることによつて成功したと云ふ。日本に於て將來勞働黨でも出來て、其の機關新聞や雜誌でも持つ場合に、同一の問題に逢着することであらう。

新聞と政權又は金權との關係は。英國に於て特に密接である。ノースクリツフ卿があれ丈の新聞を一手に掌握してゐた後を受けて。英國半數の新聞はローザーミア卿とビーヴアブルツク卿の二人に隸屬してゐると云ふ。かうした個人的の色彩は除外しても、英國新聞は明白に黨派に分派してゐる。之は必ずしも新聞のみでなく、凡べての人が何等かの政黨に屬してゐるのであるから事理明白で氣持がよい。然し新聞の論説のみならず其の記事がそれによつて左右せらるゝのは、外國のものには迷惑千萬である。ブレールスフオルドの言ふ所によると。タイム

ス・モーニング・ポスト、マンチェスター。ガーヂアン等は記事は公平であると云ふ事であるが、僕は必ずしもそれに信頼が出來ない。

內黨主張を論說で述べると共に、內派に不利な出來事は一切を抹殺する。此に於てか、異つた系統の新聞を二つなり三つなり讀む必要が起つて來る是に於ては、論說に付ては旣に黨派は之に定まつてゐるが、社會面等の記事に於ては、必ずしも黨派の色彩が影響してゐないのではないかと思ふ、此の事は一つは日本のプレッスの內部がまだ充分にオルガナイズされてゐないと云ふ事から來るのであらうが、偶然の幸と云ふべきである。それと今一つは日本の新聞記者が多數は私立大學出であつて昔から反政府的現狀打破的の傾向を持てゐたことにあるであらう。然し全體の趨勢は日本のプレッスも、英國あたりのプレッスの樣に、やがては記事までも、偏頗な事をするやうにならう。ともかくもプレッスと社會改革と云ふとは大きな問題である。

(二)

倫敦で講義又は講演を聽くとすれば、先づ其の中心は何としても倫敦大學である。倫敦大學の名聲は日每に揚りつゝある。勿論英國に於ける大學の社會的意義は、獨逸に於けると其の趣を異にする。從つて又ベルリンの大學が獨逸の學界に於て有する地位とは、倫敦大學の地位とは其の性質が全然別物である。

倫敦大學の特質は其が首都に位すると云ふやうな事とは、全然關係なしに、オックスフォルド、ケンブリッヂに比して現代的であるといふ事に存するのである。遂二三十年前迄は、英國の大學と云へば、オックスフォルドかケンブリヂかに限られてゐた、實際に於ては其の當時に於ても又現在に於ても、スコットランドに在るグラスゴー、エヂンバラ、セントアンドリュース、アバヂーンの四個の大學は、確に立派な特色を持つてゐたに拘はらず、矢張學問の仕上をする大學院と云つた地位は、上の二つの古い大學に持たれてゐた。然し現今に於ては所謂プロヴインシアルの大學は夫々特色を發揮して、必ずもオックスフォルド、ケンブリッヂの下風に立つものではないが、其の中でも倫敦大學は遙に他を凌いで、古い二大學と競んで鼎立の勢を爲してゐる。

抑々倫敦大學の成立が面白い、僕の記憶にして誤ないならば、古い二つの大學に對抗して、新しい學風の大學を建設せんとしたのは、ベンサム一派の功利學派の人々であつた。千八百二十年代に、此の派の人の努力によつて、ユニバーシチー・コレッヂが出來上つたのである。現に今でも此のコレッヂにはベンサムの石膏像があり、ジョン。スチユアートミルの石膏像がある。此の大

學に立つて經驗主義の哲學倫理學と個人主義の經濟學政治學とを、宣傳したので、彼のマツカロツクが此の大學の經濟學教授となつたのは、人の普く知る所である。然るに之に對して傳統派の人々殊に神學方面の人々が、別に彼等に拮抗する意味で建てたのが、今のキングス・コレッヂである。其の後兩者の間に色々の事があつて、結局二つ相合してロンドン大學なるものを爲すに至つた。此の因緣は多少今に殘つて、キングス・コレッヂは神學哲學に於て、他の持たざる優位を占めてゐる。今同じくロンドン大學に屬して、一種特有の地位を占めるものは、ロンドン、スクール・オブ・エコノミツクスである。其の成立は多分千八百八十年代であらう（但し正確な事は保證しない、僕は今之を調べる何等の材料を持合せてないから）。シドネー・ウエッブ等のフエビアンの人々が、オックスフォルド、ケンブリヂには勿論なく、又當時のロンドン大學にもない、新しい政治學經濟學の學校として、之を建てたとの事であるが、其の開校の當初に於ては、學生の集りやうが尠くて、政府の視學官の巡視する時に、一二人の學生しか居ず、餘りに尠いと云ふので、往來の立坊を狩り集めて臨時机に坐らせたといふ悲慘な話もあつたと云ふ。然し今や其の學生の數何千を數ふるに至り、政治學、社會學、商業學の方面に於て、英國第一たることは何人も疑ふものはないであらう。其の後ロンドン大學の一部となり、同大學は此の外にバークベック・コレッヂ、ベッドフオード・コレッヂ等二三の小さなコレッヂを集めて、一の集合大學を爲して居る。

R君

今のロンドン、スクール・オブ・エコノミツクスには、相當の名聲を持つた教授がゐる。經濟學史の方面にエドウイン、キャナンがあり、統計學にバウレーがあり、社會學にホブハウスとウエスターマルクあり、經濟史、社會問題にタウネー、政治學にハロルド・ラスキーが居る。此の內後の二者が目下の花形役者とせられて居る。僕は學校の講義なるものは、千九百二十三年の冬と、千九百二十四年の春丈で、而も僅かに一二度しか講席に列した事はない。僕の重きを置いたのは、學數多の科外講演であつた。

（三）

講演を見出すには、頗る苦心を要する。新聞の「其の日の集會」と云つた記事は勿論のこと、週刊雜誌の其の週の集會記事を探る丈ではまだ足りない。どうしても學校の揭示場を探さなくてはならない。僕は每週一回宛ロンドン・スクール キングス・コレッヂ・ユニバーシチー・コレッヂ等の學生控所の揭示場を廻つて、恰好な講演を探し出しては、丹念に聽いて步い

た。之を探すに骨折るのみではない、之を聴くに又一段の苦心がある。例へば午後五時から某所に於て一つの講演がある、一時間で終つてから、七時に又別の所で講演を聴く、早く往かないと前方の席が取れないので時間より三十分程早く駈け付ける、食事をする暇がないので、乗合自働車の二階でパンを噛つて夕食を済ます。八時に終つてから更に、別の所に八時半から勞働者の集會がある、早速之に駈けつける、すべて此種の急がしい思をして、隨分講演なるものを聴き廻つた。講演を聴くことは、讀書と違つて選擇に自分の好悪が割合に加はらないので、自己を多方面に廣くする、殊に講演そのものと共に、講演に列**する議長の挨拶や聽衆の態度など、我々外國人には、一々何物かを教へる。**

一つ一つの個々的の講演は、數へれば限りもないが、幾つかの講演をオルガナイズして毎週連續させるのも決して尠くない。其の主なるものにキングス・コレッヂの文學、哲學、神學、言語學等の連續講演がある。又フエビアン協會の企てる講演は、秋のものが最も大規模であるが、冬及び春にも、エツセツクス・ホールに於て、殆毎週行はれる。ウエツブ、ショウ等が司會者として温補を現はすことが多い。キングス・コレッヂの講演に付て、いつも思出の種となるのは死んだベルリン大學のトレルチ教授である。僕は或る日同コレッヂの科外講演の發表を見て、エルンスト・トレルチの名を見出した時には、少からず胸を躍らしたのであつた。"Soziallehren der christlichen Kirche und Gruppen" の一篇は曾て自分を惹付けた雄作であつた。此の人の講演を圖らずしも、ロンドンに於て聴き得とのること幸福を喜んだのであつたが、其の學期に於てなく、次の學期に延ばされて後、遂にトレルチの逝去に接したのであつた。其の時の講演の筆記はトレルチが最後の執筆であつたとか聞く。今は "Christian Thought" の一卷となつて英國に出版されてゐる。若し夫れ多數の講演を一々、記憶の中から呼び返したら、限がない**が、キングス・コレッヂで有名なゴルズウオーシーの "Modern** Novelists" と云ふ題目でヂッケンス、ツルゲネーフ、モウパツソン、トルストイ、コンラードの四人に付て語つたのは今に忘れられない、其のよく透き通る様な朗かな聲には、すべてのものがチャームされるであらう。又アフリカから歸つたトム・マンの歡迎會は別種の趣があつた。一種の勞働運動者として、彼は他人の持たざる天分を持つ。千九百十一年彼がフランスのサンヂカリズムを英國に輸入して、ドック勞働者のストライキを敢行したことは今に我々の記憶に新なる所で、確に英國勞働運動史上に新紀元を劃したものであつた。現今彼の有する地位

は、一の遊星たるに止まつて、共産の運動に大きな影を占めてはゐない。彼の演説を聴いて、其の言葉の豊富なこと、戦闘的な精桿の氣の溢れてゐることに於て、確に一つの闘士たることを思はせるが、英國労働黨の中にあつて重を占める才幹と態度とを欠いてゐると感じたのであつた。ロンドン・スクールで聴いたエッチ・ヂー・ウエールスとモーニング・ポスト主筆某氏との立合演説も、又或る意味で忘れられないものであつた。題目は「歴史の見方」と云ふのであつたと覚える、國民的の歴史を教へるがよいか、世界的の立場に立つて人類の歴史に重を置くがよいかといふ事であつた。問題も内容も耳新しいものではなかつたが公明冷静な態度で、演者と聴衆と共に、眞面目に而も談笑の裡に、共に演説をする、和氣靄々たる空氣に感心したものであつた。

（四）

然し最も強い印象を與へたのは、ミルナー卿の講演であつた。官公吏の組合のやうなものが出來て、其の團體の主催した會合に於て、爲された講演で、かうした組合を作ることによつて、人は異る思想の交易をすることにより、人格の成長を助けることが出來ることを切言した。ミルナー卿の名を僕に紹介したのは、アーノルド・トインビーの傳記であつた。卿は千八百八十年代にオックスフォルドのベリオル・コレッヂが出した秀才の一人である、學窓時代の親友にして、夭折したトインビーの爲にトインビー・ホールを建てるには、最も骨折つた人であり、其の開館式の時にトインビーの追憶の爲めに爲した演説がそれであつた。此の小冊子を繙くものは、著者が如何に識見あり氣品あり温情ある人格たるかを直に察することが出來るであらう。ミルナー卿の名は爾來僕の忘れ得ざるものであつた。此の人の講演を聴いて、流石に昔偲んだ其の人の想像の違はざることを窃に喜んだ。卿は南阿戦争當時の總督であり、戦爭末期に於けるロイド・ジョージ内閣に入つて、副總理の重を占めて居た人である。強烈な英帝國主義は氏から離すことの出來ない持論である、此の點に於て僕は氏に慊たらない。然し氏は保守黨に屬しつゝ其の識見に於て時流を抜いてゐる。氏がエヂプトを視察して、其の獨立せしむべきを結論した報告書を見るもの、及び氏の社會問題に對する意見に接するものは、此の人が保守黨に在るかを驚くであらう。後者は今纏められて"Questions of the hour" となつて出版されてゐる、英國社會問題を論ずるものが、一讀を惜んでならない書物である。よい保守黨を持つことは英國の誇である、あれ丈の頑冥な保守派も尠いが、又あ

れ丈の眼先の利く賢明な保守派も尠い。保守派が強くして確信のあること、然し尙時代の推移を解して、變通の術を有することは、英國の社會的改革をして堅實ならしむるに預つて力がある。其の保守派の中にあつて、僕の爲に敬して措かざるものは、ミルナー卿とヒュー・セシル卿である。ヒュー・セシル卿は國際聯盟で有名なロバート・セシル卿の兄弟で、共に保守黨首相サウリスベリー卿の令息である、其の著"Liberty and Authority"は、小册子ながら英國最近の社會思想を解せんとするものの、見逃し難き逸品である。

英國の講演は決して講演者のみで成立しない、之に必要なものが、三つある。一つは講演者で第二が司會者であり、第三が聽衆である。誰がチェアーを取るかは、講演者と演題とに劣らざる重要さを持つ。多くの場合に於てチェアーマンとして選ばれるものは、經驗と知識とを兼ね具へた所謂名士であつて、特に其の時の演題に付て何等かの意見を持ち、得るものである。講演はチェアーマンの講演者の紹介に始り、講演其のものが之に次ぎ、終つてから聽衆から盛に質問批評が出る、之を一々整理するのがチェアーマンの主要なる職分である。次で講演者が之に答へる、それからチェアーマンが講演者に感謝の辭を述べ且つ講演に付て感想を述べる、之亦講演そのものに劣らず興味がある。學識と經驗とを兼備した老熟の士は、多くは若い其の日の講演者をどう見るか、此に面白い對照がある。最後に聽衆からチェアーマンに感謝の動議を出し、誰かが之に賛成する。かうして講演の質問批評とチェアーマンへの感謝によつて、聽衆と講壇とは一路氣脈が通ずる、講演者とチェアーマンと聽衆と此の三つは、英國の講らなに演なくてない要素である而も此の間に於て紹介も批評も質問も、淡泊にして眞摯、而も粗野に流れず禮節を失せず、活氣が溢れてゐて、而も會場の秩序を紊さないことに於て、かうした所にも公共生活の訓練を忘れないのは、吾々の羨望して止まない所である。

（五）

R君

僕のロンドン生活中に於て、面會した二三の人の印象を述べる前に、之等の人を載せた思想界の雰氣が如何にあるかに、先づ一瞥を投じたい。目下の英國に顯著な哲學界の傾向は、アイデアリズムの凋落である。勿論此の傾向は必ずしも此の五六年に始つた事ではない、然し後に述ぶるが如く戰爭は確に其の凋落を促進したと見られる。若し十九世紀の前半を以て經驗主義の時代とすれば、千八百七十年代に始まつた新時代はアイデア

リズムの時代と云はれやう。十八世紀末のヒユームの哲學を受けたベンサム・ミルの思想は、思想界にも實際界にも、十九世紀を支配した。十九世紀の中葉以後に入つても、スペンサーの進化論の上に立つた別個の經驗主義が更に之に加はつて、陣容を新にした。此の傾向に對して前にワーヅワース、チルリツヂ、カーライル等の反抗の聲を舉ぐるあり、後にデクインシー・マシユー・アーノルド等の之に次ぐものがあつたが、明白に經驗主義に對して、新時代の出現を創したものは、千八百七十四年の、テイー・エッチ・グリーンのヒユームに關する論評であらう。爾來オックスフオルドを中心として、グリーン・ケヤード・ブラッドレー・ボオンケ等一群の人々相集まつて、英國アイデアリズムの時代を齎らしたのである。十九世紀の末期と廿世紀の初期を支配した思想は、即ち之であつた、之等の人々に就ては、僕は後章オックスフオルド生活を述べるに際し、委曲を盡したいので、今は之を割愛する。僕が英國に着いて間もなく、ボサンケが物故した、假令まだエフ・エッチ、ブラッドレーと云ふ大立物は存生してゐるとは云ふものの、活動力の横溢したことに於て、ボサンケは盛に此の派の最後の代表者であつた。氏の遠逝を中間として同志相次いで他界する。前年に於て既にグラスノー大學のサー・ヘンリー・ジョーンスが逝いた。假令生存するものも、既に各大學の地位を辭して、靜に隱退の生を送る、さしもに英語國民の大學の講座にして、此の派の人によつて占められざるなしと云はしめた全盛は、今は既に昔の話柄である。エヂンバラにセッス・プリングル・パチソンがあり、バーミングハムにミアヘッドがあり、リバープールにマッカーンがあり、マンチエスターにエー・シー・ブラッドレーがあつたが、何れも今は辭して陣頭に立たない、若し長老エフ・エッチ・ブラッドレーが物故したならば、之を最後として、此の派の人々は完全に舞臺の後景に退くのではないか、目下の英國に著しく眼に付くものは、此の派の凋落である。

新しき傾向として表はれたものに、三つを區別することが出來ると思ふ。其の一つはリアリズムの勃興であり、其の二は新アイデアリズムの擡頭であり、其の三はパーソナル・アイデアリズムの出現である。アイデアリズムは科學との調和に關して一番多くの弱點を持つてゐた、獨逸に於てヘーゲル哲學が自然科學の勃興によつて、其の不信を買つたと同じ樣に、英國アイデアリズムも亦此の方面から手强い攻擊を受くるの運命にあつた。僕は嘗てキングス・コレッヂの教授室に於てウイルドン・カー氏に會つた時、氏はグリーンケヤード等の欠點は自然科學と全然興味がなかつたと云ふ事にあると云つた。此の弱點を突い

て新しい時代を作りかけたのが、リアリズムである。現代リアリズムはアレキサンダーの Moral Order And Progress" に始り、更にムーアの「プリンチピア・エチカ」によつて促され、次でバートランド・ラッセル、ホイットヘッド、ブロード等のケンブリッヂの人々、殊に自然科學の人々によつて聲を揚げられた。元來オックスフォルドがアイデアリズムに對して、ケンブリッヂは昔から之に超然として居た。グリーンのオックスフォルドに對して、ケンブリッヂはシジウイックを持つて居た、シジウエック其の人がミル直系の人であり、假令カントの思想を入れ、バットラーの思想を酌んで、ミル等の思想に新回轉を與へたにしても、元ケンブリッヂはシジウイックに代表されたリアリズムの牙城であつた。此の所よりして新時代のリアリズムの起る、當然の運命と云ふべしである。

新アイデアリズムに至つてはリアリズムに於けるが如き、一集團の力を有しない、主としてキングス・コレッヂのウイルドン・カー教授によつて代表せられた、伊太利の哲人クローチエ及びジエンチールの紹介祖述である。古きアイデアリズムが絶對の觀念に重を置いて、進歩流轉の經驗的事實に調和を欠くの短所を、補正しやうと云ふのが此の派の立場である。僕が同教授に會つて、英國に於けるアイデアリズムの運命を問ふた時、氏は古きアイデアリズムは凋落する、然し眞のアイデアリズムは寧之からであると切言されたのであつた。若し夫れパーソナルアイデアリズムに至つては、アイデアリズム出生の地たるオックスフォルドの產物である、此の派が果して一學派を爲すか否かは、目下の所疑を挿めないではない、併し僕一個の考を以てすれば、確に一傾向を爲すに足るものであると思ふ、現今の獨逸に於てパーソナリスムスが一つの勢力を爲しつゝあるに考へて、此の點の英獨對照は興味がある。此の派の思想はスタアト氏の編した "Personal Idealism" に表はれてゐる、然し僕一個の判斷としては、此の方面に多望の未來を有するものはクレメント・ウエッブ氏であらう。氏の立場は目下の所明白でない、氏自身も亦之を明白にするを欲しないと云はれた、然し氏のギッフォルド・シクチユアである "Godand Personality, "Divine Personality and Human Life" は最近英國思想界の產物として、見逃し難き傑作であらう。

R君

之等の新舊傾向に鳥瞰圖を與へるものとして、僕はミアヘッド教授の編纂した "British Contemporary Philosophy" を推薦する。元來二卷より成るもので今は唯第一卷丈しか出て居ない。此の書は現代英國哲學界の代表者十數名の自叙傳的作物を

集めたもので、長老ブラッドレーのものを欠くは遺憾であるが、ボサンケが最後の絶筆と云はれる一文を始めとして、新人ブロードに至るまで、一幅現代哲學の活畫を見るの思ひがある。丁度獨逸のシュシットの"Philosophie der Gegenwart,ni Sellstdarstellungen"に相當するものである。僕は此の企に興味を感ずるものであるが、元來英國に於ては、類似の題目に付て、多くの人が共同して一書を爲すことは流行しないし、多くの場合に成功しないと云ふ。獨逸に於けるが如き Handbuch der Politik Handbuch der Politischen Ökonomie と云つたものは英人に向かない。僕は嘗て之をさる學者に尋ねたら、英人は同一の頁數で同一の趣向で、似たやうな文章を書かされるのに堪へない、それは英國の學者は餘りに個性が強すぎる、獨逸の學者のみが之に適するのだと云つた。一面の眞理を道破してゐる、一般に從來此の種のものとして成功したのはアクトン卿の"oambridge Modern History"のみであつたと云ふ。此の事を考へつゝ、ミアヘッド氏の這般の企を見て僕は面白いと思ふ、大體に於て此の書は成功して居る、ミアヘッド氏の人となりが唯此の仕事を成功せしめたのであらう。

更に一歩を進めて社會思想界を見ると、其の變遷に於て略前に述べたのと似たものが見出される。元來十九世紀の前半を支配した社會思想は、アダムスミス、ベンサム、ミル等の、自由放任主義であつた。認識論に於て其の基礎を經驗主義に置き、倫理的批判に於て功利主義を採つた。所が千八百七十年代が社會思想史上に於て轉回機と目すべきであらう、此の時に於て英國貿易は從來のやうな躍進的傾向を止め、國內は非常な不景氣に入つた。千八百四十六年の穀物條例廢止以後の英國は、所謂「世界の工場」で、世界の工業を一手に掌握するの概があつた。三十年間の全盛の後、遂に停頓の機に際會したのである。此の時自由放任主義に二つの敵が出現した、其の一つが前に述べたアイデアリズムの勃興で、先づ自由放任主義の基調たる認識論と倫理説とを突き、それから其の適用として、社會思想に及び、自由に對して新なる解釋を施し、保護干渉を決して排斥すべからざるを說いた。之より先き既に勞働立法そのものは相當に進捗してゐた、唯英人が自ら深く意識することなしに、自由放任主義に一大例外を作りつゝあつた、其の社會的常識は、從來のベンザム、ミル等の思想の說明し得ないものであつた、此の暗々裡に社會に待たれて居た要求に適したものが、グリーン等のアイデアリズムの社會思想で、グリーンが書いた「勞

働立法論」は其の後に於て常識となる迄時代に受入れられ、其の「政治的義務の原理」にベンサムの「道德立法原理の序論」ミルの「自由論「代議政體論」と並んで、十九世紀英國社會思想界に一新時期を劃したものと云ふべきである。次で之と同功異曲の立場にあるものにボサンケの「國家の哲學的學說」があり、ブラツドレーの「倫理學研究」は社會思想と云ふよりは寧倫理說に偏するが、尙英語國民に之丈の思想上の革命を來したものはないと云はれる意義ある作物である。此の派の人々は假令個人の自由を高調することに於て決して斉ではなかつたと云ふものの、各人に内在する「眞實の意志」を表現するもの、即ち國家なりとし、國家の意志に服するには、即ち自己の「眞實の意志」に服するものに外ならない、即ち、國家の干涉は決して强制に非ずして寧ろ却て眞の自由である、カントの所謂自由を妨害するものを除くものであると解することによつて國家の保護干涉を容認したのであつた。千八百八十年代から今世紀の十數年、英國を支配したものは之であつた。此の思想は二つの點に於て實際に影響したと思ふ、一つは國民、人種に重を置くとによつて、帝國主義の勃興を助け、保守黨の中に働いたのである。第二は國權を擴張することを助けるとによつて、勞働立法の制定に預つた、之は主として自由黨の中に働いた方で、從來ミル等の放任主義を採つて居たリベラルスが、十九世紀末に於ける變化は主としてアイデアリズムの影響で、千九百六年後のアスクイス內閣の盛なる立法的活動は其の表現と見るべきである。

R君。

アイデアリズムは元來プラトーとヘーゲルとの研究から來た然し其に英國アイデアリズムの作物を檢するに當つて、其のプラトー及びヘーゲルが、驚くべき程英國化されてゐるを見る。グリーン・ボサンケを讀んで、其の堂々と個人の自由を高調することに於て、却てミル等に優るものあるを思はしめる。然し稍もすれば國家を以て一の超個人的人格とし、個人に對する無限の權力を有するものの樣に解され易い語句が多い、アイデアリズムの缺點は其の表現の曖昧な所にある。最近社會思想の駁擊を受けたのは即ち此の點に於てであつた。

R君、

アイデアリズムの話が思はず長過ぎた、自由放任主義が、千八百七十年代に受けた、今一つの强敵は、即ち社會主義であつた。僕は今ヘンリー、ジョージの「進步と貧困」が如何に、英國青年の胸を躍らせたかを書くまい。僕は英國に於て、勞働運動に從事する人に會つて、如何に彼等のすべてがヘンリー・ジョージによつて動かされたことの多いかに驚く。土地私有の不

法を難詰したジョージの思想はミルの地代論となり、遂にフエビアン協會の經濟論となつた消息は今此に說かない。此の派の人々が攻擊したのは、自由放任主義の經濟說の誤りであつた。彼等の社會觀の基調は極めて不明である、僕は曾てある人にシドネー・ウエッブの哲學は何であらうと問うたら、其の人は功利主義だらうと云つてゐた。ウエッブは哲學などに興味を持たない調査者である、然し若しあるとすればそれはベンザムから來たものと僕は思ふ。フエビアンの人々は其の社會哲學を語るに急でない爲に、問題とはならないが、根本に突きつめて往けば、フエビアンと自由放任主義の人々とは同巧異曲の立場にあつて、共にアイデアリズムに反對の譯である。更に又アイデアリズムの作物を見るに、私有財產に制限を付することを認めたにしても、私有廢止は絕對に反對であつた、私有財產は人格の完成に缺くべからざるものと云ふ論旨であつた。此の點に於てもフエビアンの人々とは反對の譯である。然し共同の敵が强大である時に、味方は纖細な差異を忘れる。フエビアンとアイデアリズムとは策應して、自由放任主義に當つた。ボサンケーがフエビアン協會で講演したことがあり、ウエッブは千八百九十年の始めかに書いた「英國社會主義史」に於て、グリーン、ソーチー等の人々を「社會主義的」な人々と書いてゐる。そして兩者は相合して國家の權力を增大し、個人の自由の制限を甘んずべきを說いたのであつた。此の一點に於て兩者は氣脈相通ずる。十九世紀末から最近迄英國を支配した社會思想が、アイデアリズムであるとすれば、之に經驗科學を提供し、經驗的事實を蒐集することによつて、自由黨を除々として「社會主義的」に導いたものは、フエビアンの努力であつた。此の點に於て、フエビアンも亦アイデアリズムと共に最近社會思想の攻擊を受くるの運命にあつた。

(七)

最近社會思想卽ち、アイデアリズムとフエビアニスムとに對する反動は、ロンドン大學のホブハウス敎授の千九百四年に公にした「民主々義と其の反動」とに始まると云ふ。同敎授が此の書に於て攻擊したのは、保守黨の帝國主義であつた。恰も南阿戰爭の終つて間もない時であつたので、氏は言を盡して、アイデアリズムの帝國主義の擡頭を促し、國家の虛榮の前に、個人の自由の無視せらるゝを責めた。氏に依ればアイデイアリズムはラインの向より流れ來つたもので、本來英國人の思想ではない、目下の英國を惱ます獨逸舶來の思想であると言ふ。氏の對象は帝國主義にあつて、社會問題に對する國權の增大

にはなかつた。然し氏によつて先づ叫ばれた反動の聲はやがて、大きな波動を起し、最近思想を作るに至つたのである。此の思想に共通の傾向は「自由の高調」である。此の點に於てミル、スペンサー傳來の思想の復活とも見られる。然し此に注意すべきことは、此の派の思想は未だ一團の黨派を爲すに至らない。唯一二の集團を見るに止まる。其の强固なる統一を欠くことに於て、十九世紀前半に於けるベンサム、ミル等の「哲學的急進派」と異るし、又後半に於けるグリーン、ケヤード等のアイデアリストとも異る。のみならず又其の所說は破壞的であり、反動的であつて、建設的であり積極的であるとは云ひ難い。必ずしもアイデアリズムの一切の思想を排斥するのでなしに、寧ろ全體の基調に於ては之を採用し、唯局部に於て之が訂正を試みたと見られぬでもない。又フエビアニズムに對しても、其の社會主義に反對するのではなしに、其に加へて「產業の民主的管理」を要求するものと見るべきである。

然らば何が故に、反動思想は起つたか、其の理由は集めれば限もないが、其の主要なるものとして、第一に、實際の社會事情は國家の外に、幾多の人の集團を作らしめ、各々我々個人の生活に欠くべからざるの條件となつて居る。外に國際關係あり、內に敎會、學校、家庭、組合等、何れも個人の生活に必要な組成たるに於て國家と異る所がない。國家のみに超個人的人格を認めるの論據が何所にあるか。殊に資本主義社會に於ける經濟の發達は、國境を超越した經濟的關係を作らしめ、國內に於ても個人に利害の密接なるに於て、國家以上に存在を感ぜしめる經濟的組合の發生を齎らした。更に戰後に於ける國際聯盟の成立は國家觀念の訂正を求めしめること多い。之等國際社會事情の變化は、有力なる社會思想變化の動因であつた。第二に千九百五年以來のリベラル內閣の治政に於て、かなり多くの社會政策的施設を試みたるに拘はらず、勞働者の生活は殆改善の跡が認められなかつた。此の事が結局現今の民主政治の根本に疑を挿ましめた。更に各都市に於ては、かなり多分に電車、水道等の共有が實行された。然し之等の仕事に從ふ勞働者の地位は、私有の場合と毫も異る所がなかつた。此の事は、將來の社會問題の解決が必ずしも、私有か共有かにあるに非ずして、別に方法を案ずるの必要あるを思はしめた。「產業の民主的經營」の要求は此に提出されたもので、フエビアニズムに對し一矢を放つたものである。第三に戰爭は非常の場合とは云へ、英國には空前の國權萬能を齎らした。此の前に個人の自由は認められなかつた。此の非常の措置はアイデアリズムの關すると否とに拘はらず、行はれたに相違ない。然し少くともアイデアリズムは之

等の措置を平常に於ても容認するものであると考へられた爲に、其は攻撃の焦點とならざるを得なかつた。第四に戰爭は獨逸に於ける軍國主義から始まつたと考へられた、之は更にヘーゲルの國家觀に源すとはクラムを始めとして、多くの人の說いた所であつた。假令英國に於けるヘーゲリアンは殆悉く獨逸を攻め、軍國主義を非難したとは云ふものの、獨乙を敵とする時にヘーゲルを敵とし、やがてアイデアリズムは其の運命の一部を荷負ふべく餘儀なくされたのではあるまいか。

最近思想には四つの流を區別することが出來ると思ふ。其の一つは社會心理を研究する一派の學者によつて爲されたアイデアリズムの攻擊である。グラハム・ワラスとマクドーガルを其の代表者とする。アイデアリズムが意識に重を置くに反して、實際に群集を動かすものが寧ろ、無意識界にある本能、衝動と云ふべきものであると云ふ。其の反知の傾向の說に似る、唯之が個人心理を見たに反して、彼が社會心理に注目したるの差がある。此の傾向は元來英國に於ては、ウオルター・ベジオットに始まつて、暫らく其の跡が途絶えて居た。それが今世紀に入つてから、恰もフランスにヂュルケム・タードの研究が公にされたと相竝んで、其れと全く何等の連絡なしに、ワラスとマクドーガルが現はれたのであつた。尤もワラス自身の思想も "Human Nature in Coltics." "Great Sciety." "Our Social Heritage." と段々後へ來るに從つて、理性に與ふる役割は大きくなると云ふ變化はある、ワラスの努力は單に方法論的方面のみでなく、現今の議院政治が必ずしも、少數の者の自由を保護するに充分でないとし、一院を目下の樣な地域代表の府とし、第二院を職業團體を代表する府たらしめんとする。此の點に於て自由を求める最近傾向の佛を認められる。

第二の流は國家の主權否定、集團人格の要望である　此の派の主張はメートランドがギールケの「組合法」を紹介した時を以て始まり、數年前に死んだフイギスによつて、好個の代辯人を持つてゐたが、目下の代表者はゲー・デイー・エッチ・コールとハロルド・ラスキーであらう、國家のみに唯一絕對の人格を認めることに反對し、敎會、組合等が夫れ自身獨立の生命と目的と職能とを有する、國家の之を認むると否とを俟たずして我々の生活に必須の條件を爲して居る、之が人格を有することに於て、國家と全く其地位を、等しくし、二者の間に優劣の差異なしといふのである、此の主張に於て、アイデアリズムは最强の敵を持つた譯である、國家を神秘の世界から引き下して、俗界の生活に投じ、其の絕對權を否定することに於て、最も强く自由の要求が現はれてゐる、唯此に注意すべきは、其の集團

人格なるものは、如何なる認識論的基礎に於て認むるかである例へばラスキーはバートランド、ラッセルより受入れたリアリズムの上に立つ人である、然しリアリズムの上に立つて如何にして個人の集團に個人と似たる人格を認めんとするのか、自分は寧ろ、此にアイデアリズムは其の地盤を殺されたのでなくして、論理を更に開展したと見るべきではないかと思ふ、

前項の集團人格の説を特に勞働者組合に適用して、之を中心に一の社會思想を作たものが第三のギルド・ソシアリズムである。チー・デイー・エッチ・コールを其の代表者とし、別個の出發から入つて、同一の結論に立つものに、バートランド・ラッセルがある、其の主張は夙に我國に紹介されてゐるので、僕は今此に之を說かない、唯僕が英國に着いた時、異樣に感じた事は、ギルド・ソシアリズムなるものが、火の消えた樣に勢力がない事であつた、之れ一つはコールとホブソンとの分離などがあつて、內陣亂れたのと、不景氣が組合の產業經營を不可能にした事に因るのであらう、コールの機關誌であつたニュー・スタンダーズでさへ、遂に廢刊の悲運に會つた位である、實を云へば別項バーカーの話にある樣に、ギルド・ソシアリズムはある意味に於て仕事を仕了つたのである、職業議會の構成に於て、產業の民主的管理に於て、既にウエッブ等をして、其の主張を採用せしめ、後者に付ては既に、勞働黨の政綱にも詳加へられてゐるのみならずフエビアンが社會問題解決の目的に付て曖昧不明に付してある跡を受けて、夙に明白に「自由」「創造的衝動の滿足」の太旆を掲げて、改革の目的を明にした功績は沒する能はざるものがある此の點の影響は殊にアイ・エル・ピーの人々の中に顯著に働いて居る、然し此にも注意すべきことは、其の所謂「創造的衝動」の滿足とは、ラスキン、モリスより受け次いだ思想であつて、既にアイデアリズムの系統に屬する。更に自由の高調は何の倫理的基礎に立つて、之を求めるか、アイデアリズムは此にも否定されたるに非ずして、一步の開展を促されたと見るを得ないか、

最近思想の第四として、僕はホブハウスの自由主義の復活を舉げたいと思ふ。此に自由主義と云ふのは、ミル、スペンサーの昔に返つて、個人の自由を高調するの思想を云ふ。固より前三者を通じて、共通の傾向は自由の要求である。然し其の自由は流石に社會の變化した今日に於て、ベンサム、ミルの昔に戻つての個人の自由ではなくて、集團の自由であつた、ホッブハウスに於ても亦集團の自由を認める、又社會主義的傾向もかなり強い然しすべての基調をなし、すべての論議の出發を爲すものは、其の強い個人主義的傾向である、自由を高調することに於て、フムボルド、ミルの自由論以來氏程に强いものはあるまいと思ふ。氏は此

の意味に於て現代英國の有するリベラリズムの代表者である。ホーム・ユニバーシチー、ライブラリーが社會主義にマクドナルドを選び、保守主義にヒュー、セシル卿を採り、而してリベラリズムにホブハウスを拉したるは、共に其の人を得たりと云ふべきである。同氏に付ては別に述べる。

(八)

R君

話は又理に落ちた、話頭を一轉して、ロンドンに於ける會見の人々の印象記でも書く、先づブアーネスト、バーカーから始めやう、氏の「スペンサーより現今に至る政治思想史」の一卷は久しい前に讀んで、有益な本だと思つた。あの氏の著が出て以後に於ては、あれ以上の本を書くことは、決して至難の事ではない、然もあゝした本の一冊もなかつた時に於て、然も材料があり過ぎて困る時に、あの小冊子にあれ丈けの内容を纏めた手際は、決して凡庸のものではない。又氏の「プラトー及び其の前行者」の一卷はギリシアの政治哲學を述べたものとして、書物の多い獨逸に於ても、白眉のものと推稱せられる。氏はオックスフォルドのペリオン、コレッヂのフエローをして、グリーン・ケヤードの流を酌むヘーゲリアンの一人である。僕がロンドンに着いた當時、雜誌ネーションの誌上に於て、氏は大學制度を論じて、オックス・フオルド・ケンブリッヂの個人教授の決して徒爾ならざるを述べて居た。當時氏の論を中心として、一時教育方法が喧しく論ぜられたものであつた。新聞雜誌は現代英國の有る偉大な先生として、氏とグラハム、ワノスとを擧げて居た、僕はオックス、フオルドのアダムス教授の紹介狀を持つて、氏をロンドンキングス、コレッヂの學長室に訪うた。其の机の上には堆く文書が積まれて居る、電鈴が鳴る、受付が入る、忙しいこと夥しい、さる人がバーカー氏があの學長の地位に居る間は、到底「アリストートルと其の後來者」を書く暇はあるまいと、同情したのを思ひ出した。かうした忙しい所で誠に失禮ですと語りつゝ、用件を切り出すを待たれた、僕は豫て用意して往つた數個の質問を出した、氏は之に對して一々簡單であるが、要領のよい答をして呉れた、其の話の筋は今語る必要はないが、其の話の中に僕は「今英國を支配してゐる思想は何でせうか」と問ふた。氏は之に答へて、「現時の英國には過去に於てベンサム・ミルや、グリーン・ケヤードが持つたやうな支配的勢力の思想はありません、人はギルド・ソシアリズムが最近の思想であるといひます。然し私はさうは思はない、あれは戰時中に於て國家の權力の絕對的な時に於てこそ、人々の共鳴した所でした然し戰後英國は急速に、國家權

鬪の縮少を圖り、現時に於ては國家と個人、國家と組合との對立は、決して顯著な形を取つて居ない、私はギルド・ソシアリズムは其の使命の一半を既に爲し盡したものと思ひます」と、更に私は問ふた「然らば將來に於て支配的思想が出るとすれば、それはどんな形を取るでせうか」と、氏は答へた「それは分りません、まるで見當に付きません、私の考では目下の英國は、新しい系統的の思想が出るに適しないのだと思ひます、住宅問題失業問題と云つたやうな、眼前の大問題の解決に追はれて、行政的方面に必要があつて、社會の根本の問題を論ずるに暇のない時だと思はれますが」、自分は更に「それでは過去の英國に於て、所謂根本問題に突き當つた時とはいつでせうか」氏は云ふ「最近の英國にも必ずしもパッショネートの時がないではありませんでした、先づ千八百八十六年のアイルランド問題、千九百五年と六年とに於ける帝國主義論、千九百十年に於ける上院改革問題の如きは、最もパッショネートの時で、人々の議論は社會の根本觀念に迄遡りました」。

僕は必ずしも氏の云はれるやうに、今が行政問題に追はれる時で、根本問題の時ではないと云ふに贊成し兼ねる、唯然し目下の英國に眞に人を惹付ける、建設的な綱羅的な系統ある思想がない事丈は明な事實である。此の間の消息は氏の談話を通してよく伺ひ知られると思ふ。ヂー・デイー・エッチ・コールが曾て、フエビアンの調査に墮せず、アイ・エル・ピーの空論に走らずして、高遠と實際とを兼ねた思想を、目下の英國は求めつゝありと云つたのは、確に眞相を穿つて居る。僕がバーカー氏に問うて答を得たのは此外の方面にあつたが、氏は流行に問の要點を捉ふると、簡明な答を與ふるとの速さに於て、現代有數の教師たるに恥ぢないものがあると思はれた、此の人を學者でもなく、先生でもない、單に學長の事務室に置くのは、如何にも惜いと思はれた。氏も研究より遠ざかつて新しい文獻に接しないで殘念であると云はれた。話中に絶えず名刺が運ばれるので、余りに時間を妨ぐるも如何と思ひ惜しい會見を一時間程で辭したのであつた

（九）

R君

僕がホッブハウス教授に接したのは確か二回であつた、一度はロンドン大學の研究室で、次には氏の家に御茶に招ばれたのであつた。氏はウエスターマルクと共にロンドン・スクールの社會學の教授である、一體に英國の大學には、社會學と云ふ講坐は此の外に一もない、此の二人丈がマルチン・ホワイトの寄付した講坐にある丈である。然し此の唯二つしかない社會學の

椅子は、此の二人を持つことに於て、或る意味に於て世界的である。始めロンドン・スクールに氏を訪ねた時、ストーブの前に安樂椅子に倚りかゝつて、大きなパイプを銜えて居た、折見た所如何にも頑丈な意志の强さうな容貌である。始め會つた時は將に英人特有の無愛想で、木で鼻を括つたやうで、とり付きがないのみならずパイプを銜へて居るので話の聞えないこと夥しい。然し經ること十分程して、氏の樣子は打つて變つて來た、ニコニコとしていかにも錯しさうに、身を寄せて語り出す、之又英人特有の態度である。僕は自分の目的を語つて、氏の意見を問うた、氏は一々之に答へて呉れたが、余談に入つた時氏の語つた昔話は、今に忘れられない。氏は云つた、自分が育つ十六七の時、一番自分を惹付けたものは、ミルの思想であつた。今から思ふと少し過ぎたかと思ふ位に、ミルの影響を受けた。次で自分がオックスフオルドに入つた時グリーン一派のアイデアリズムの影響に接した、自分は今でもグリーンが既に死んで居なかつたことを殘念に思ふのであるが、當時のオックスフオルドはグリーンの思想で壓倒されて居た。然し外界にはミルに代つて勢力を振つたのは、スペンサーの思想であつたので、之からも一つの影響を受けた。其處で自分の其の後の仕事は、ミル、スペンサー、グリーンの三つから受けたものを、如何に調和し高い統一に齎らすかにあつた、其が成功したか否かは知らないとして、其の後の仕事はそれであつたと。僕は此の話に非常に興味を覺えた、之は氏のみならず千八百八十年頃に學窓を出たすべての人の經驗する所であらう。氏の業積を檢して、氏の此の話を顧みると、確に氏の意圖の存する所が伺はれる。氏は實に多作であるが、最近の代表的作物として、"Metaphysical Theory of the state," "Rational Good," ,Elements of Social justice," Social Development" の四部がある。第一のものに於て方法論を述べ、第二に於て倫理說を說き、第三に於て社會思想を說き、第四に於て社會進化論を說いたのである。其のリアリズムたることに於てミル、スペンサーに似、調和統一を善とすることに於てプラトー、グリーンの跡を窺ふべく、自由を高調することに於てミルの思想が偲ばれ、社會の進化を云ふ所にスペンサーの跡がある。其全體が果して調和統一されてゐるか否かは別として、此の四卷は確に最近英國が出した建設的の作物である。ベンサム・ミル・グリーンと並んで、劃時代的の意義を有するものと信ぜられる。最近社會思想は多くは批評的、破壞的で、未だ一家を爲すに至らない、グラハム、ワラスにしても、ハロルド、ラスキーにしても、コールにしても、何れも皆足らぬを感ぜしめる。外國に於てもフランスのデュギユーあり、オランドのクラツペがあつて、何れも側

人主義と絶對主義との調和を企てつゝあるが、僕は此の間に於て、ホッブハウスのものを以て、最も纒つた系統的のものとするに躊躇しなのである。

僕が二度目に御目にかゝつた時は、御宅で病氣の爲め横臥して居られた、夫人が矢張り足腰が自由でなかつた爲め、御茶に招ばれた僕が、反對に御茶をついで廻る有樣であつた。話は長時間に亘つたが、其の中で目下の英國の事情を知るに面白いと思つた一節を述べると、僕が自由黨の將來に付て御尋ねした時であつた。氏は云つた、自分は自由黨と勞働黨との立場を打つて一丸としたやうなものが欲しい、自分の原理としてもリベラリズムとソシアリズムを調和したものを作りたいと思ふ。自分が勞働組合の態度に慊らないのは、其の要求の公正を欠くにある、例へば鐵道、石炭、運送等の勞働者は强大な組合を持つてゐる爲に、其の仕事が元來不熟練たるに拘はらず、機械化學等の勞働者以上の賃銀を得る、此の爲めに機械上の勞働者は續々としてアメリカに移りつゝある。此の不公正なる事實を顧みる時に、リベラリズムは尙存在の意義がある。然しリベラリズムの爲した欠點は、其が國際主義を抛つた事にある。コブデン、ブライト以來自由黨は、國際平和と密接な因緣があつた、然るに南阿戰爭に於てアスタイス・グレイ・ホルデーン等は所謂リベラル・インペリアリストと稱せられて、國際平和の原理に反し、今度の戰爭は止むを得なかつたにしても、尙自由黨の態度には、リベラリズムの原理に矛盾するものが多い。英國に於て眞にリベラリズムを生きて來た人は、最近に於て、僅に唯キャンベル・バンナーマン一人あるのみである。之に對して勞働黨は國際主義を固く執つて來た。多數のリベラル中の俊秀の士が勞働黨に移つたのは、國内社會問題に對する立場からではなくて、國際主義平和主義から來たのである。リベラリズムは未だ眞のテストに掛つてゐない、今のリベラルスを以てリベラリズムを代表するものとするは誤であると云ふのであつた。興味ある見解で、リベラルスとレーボアとの關係を示す一材料であらう。

ホッブハウスを語れば、氏の親友ジエー・エー・ホブソンを述べねばならない。古くは「近代資本主義の進化」を著はし、近くは經濟原理の研究者として、氏は現代英國に於て、一種特異の地位を持つ。君も知らるゝ通り、英國經濟學は即ちマーシヤルの經濟學である。ケンブリッヂを牙城として、各大學の講座は殆マーシヤルの系統によつて占められる、英國に於てマーシヤル教授の見解に依れば云々とさへ云へば、經濟の問題はそれで始末がつくとまで思はれて居る。之に對して異つた立場に立つて、別個の陣營を張つてゐるのは、僅にホブソン丈であら

う、今の英國の社會主義者に經濟原理を提供しつゝあるのは、氏であると云つても過言ではあるまい。僕が氏を御訪ねした時は、目下の英國の資本主義の組成を研究するに付て、御相談に往つたのであつた。「近代資本主義の進化」を學生時代に拜見しましたと云つたら、氏はあの本もなくなつて、訂正しなくてはならないのですが、もう私も年をとりましたと云はれた。夫人が傍から「年とつたなどと考へてはいけません」と言を入れられた。夫人はアメリカの人で震災以後日本とアメリカとが親しくなつたのを、少からず喜んで居られた。用件に入つたら「それでは書齋へ」と云はるゝまゝに、氏のライブラリーへ往つて、自分の質問を出した、氏は之に答へて與れてから、棚の書物を一冊引き出して、一々感想を述べて往かれた、之は僕にとつて頗る興味があつた。やがてボサンケの「國家の哲學的學說」の所へ往つたら「之は御存じでせうが、私はこの本が嫌なのです、ボサンケは慈善主義者です、其れ以上一歩も社會の變革に贊成しないのです、ヘーゲリアンはともすれば、スタツス・クオーに陷り易い」と。ボサンケはロツクと共にチヤリチー・オルガニゼーションの主要なる人物である。此の一語以て社會思想の方面より來るアイデアリズムへの抗議が窺ひ知られるであらう。

（十）

ラスキー氏に會つたのは二三回氏の家に招かれた時であつた。尤も僕はロンドン、スクールで一學期間、氏の政治思想史の講義を聽いた。俊敏といふのが氏を表はす一番よい言であらう、其の博學多識に潑刺とした講義振り、確にロンドン、スクールが有する若手の花形である。曾てシドネー・ウエツブはロンドン、スクールに誇るべきものが一つある、それはハロルド・ラスキーを有することだと云つたさうだ。年少にして主權否定の研究に興味を持つて、此の方面に學說を大成するであらう。氏の特長は驚くべき程、過去の英米の判例法を研究してゐるにある。氏の說はまだ批評的斷片的で、建設的な成熟を經ては居ない。然し年齒僅に三十四五である、今後三四十年を經て倦きなかつたら、大立物となるに疑あるまい、唯僕をして打明けて云はしめれば僕はあまり氏に親しまなかつた、若くして敏い人の持つあるものが、僕に快い感じを與へないのである。外國へ來て數多く人に會つて、僕の嬉しく思ふのは、老人の學者であつた。

若い人には、相手が何を考へて居り、何の意味を問ひつゝあるかを考へる餘裕がない。殊にラスキーに於てそれが著しい。何

かの話の中にミルの事が出た。僕はミルがどうゆう意味で現代的に重要さがあるかと尋ねたら、氏はこれは三つある、第一はかく、第二はかくと縦板に水を流すように喋つた。それは氏自身何かの講義か原稿にでも一度出したものを、其の儘再生産すると云ふ様子であつた。誰が聞いても同じ様に答へるに相違ない、僕にはそれが不満なのである。對者の心に入ることないなれば、談話の意味は一半を失ふ、手紙でも書物でもよい譯である。年少にして俊敏なるものの、往き易い傾向をラスキーは持つ。

ラスキーと親友であつて、ラスキーと正反對の性向の人はアール・エツチ・タウネーである。人はラスキーやタウネーの話が出る時にきつと云ふラスキーは怜悧な鋭い人だ。然し其の人となりに於て、タウネーがある様な人はないと、タウネーの著「獲得の社會」はラスキーは推讃して、グリーンの「政治的義務の原理」以後の名著であると云つた。少し誇張に失するの感はあるが、あの本は最近社會思想家に欠けて居るあるものを持つ、それは社會に對する根本原理の上に立つてゐると云ふ事である。氏はアングリカン教會に属する敬虔な信徒である。人格の高邁の點に於て、すべての人に敬される氏の講義はダルである。然し氏はすべての勞働者から愛せられる。僕は二三回會つた、英國に於て持つた親しい人の一人であるが、沈默無愛相、正銘の英國人である、然しいかにも温いしんみりした感を抱かせる。容貌風采了度我が矢作榮藏博士に髣髴としてゐる、ボカ〳〵の大きな靴を穿いて、靴下が一面に穴が明いてゐるなど、無頓着な氏の性向をよく表はして居る。今は主として經濟史の研究に沒頭し、實際問題に付ては勞働黨の中で、教育方面の調査を擔任して居られる。何れ再び「獲得の社會」のやうな方面の述作に戻りたいと云つて居られた。氏に付ては友人鶴見祐輔氏の「歐米名士の印象」中に一文がある、付て參照ありたい。

バートランド・ラツセルに會つたのはほんの一寸の間であつた、何れゆつくりと思つて其の次手紙を出した時には、アメリカへ往かれたと云ふ夫人の返事であつた。ノルマン・エンジエルに會つたのも僅かの間であつた。グラハム・クラスとコールには、人に會ふことを勧められ、自分も會ひたいと思ひつゝ、まだ御目にかゝれない。今度英國に戻つた時是非御目にかゝる積である。

最後に僕の略くことの出來ない人は、ジエームス・ボーナー氏である。「哲學と經濟學」の一卷は假令あの企をあの容積の中に成功せしむることは不可能であるにしても、確に誰かゞしなければならない企を試みたものであつた。あの本の企を成功せしむるには、あの四五倍の本が要ると思ふ。然し經濟學の根

抵を流る丶、哲學に眼を付けた點に於て、氏は慧眼な人である。「マルサス及其の著作」「リカルド書簡集」に於て、氏は個人主義經濟學研究の學究に貴重な資料を與へて呉れた。氏は今隱退して、令孃と唯二人靜な晩年をハムステッドに送つて居られる。僕が氏を御訪ねした時、丁度「哲學と經濟學」の日本譯を出して來られて、どう讀むのか、此の字は何かなどしきりに聞かれた。內田銀藏氏が京都の經濟論叢のマルサス紀念號に於て書かれた一文を、氏に送られたのを示された、僕が內田博士の物故を述べたら、非常に殘念がつて居られた。食卓に就いた時、大きな額が二枚向ふに懸つてゐるのを認めた、僕がその一つがグリーンであると云ひあてた時氏は驚かれた、次で他の一枚がケヤードであると云ひあてた時、更に驚かれた「よく御存じですね、グリーンはともかく、ケヤードを御存じとは。」氏はグラスゴーでケヤードに哲學を敎はつた人である。それから經濟學に入つたのである。「哲學と經濟學」の著は氏に最もふさはしい仕事である。更に隣りに小さい額があつた、これはリカルドとマルサスとであつた。話は三四十年前の昔物語に入つた、其の中でマルクスが死んだ時、其の葬式が此の近くのハイゲートで行はれた、其の記事を氏は新聞で讀んださうで、エンゲルスの演說を朧ながら覺えてゐると云はれた。老人の昔話はいつも樂しい、敎養ある學識ある人の品のよい昔話は更によい。かうした老人に僕は度々出會つた。經驗と讀書を充分に味はつて、すべてが落着いて其の所を得て居る、急がず、慌てず、驕らず、高ぶらず、藏して空しきが如く、而も其の一語一語は若き人の持たざる重々しさを持つ。僕はオッタスフオルドに於てヴイノグラドッフに之を感じ、セント・アンドリユースに於てバーネットに之を感じ、ウッドブルックに於てレンデル・ハリスに之を感じ、更にロンドンに於てボーナー氏に之を感じたのであつた。よい老人を持つことは、確に英國の誇である。

無産政黨の研究

無産政黨の可能及び價値

杉森孝次郎

一　環境に於ける新變化

參政權が、それの分配範圍に於て、比較的に、しかもかなりに躍進的に國民化した今日、新政黨の發生は、それだけの事情によつて、ほゞ必然的に期待される。

その同じ事情は、勿論、既成諸政黨の上に、多少顯著な分解、建てなほし、聯合等の諸作用をも必然的に形成する。

今回の選擧權の擴張は、すくなくとも實際政治を現業とする、及び志業とするすべての人々にとつて、一とつの著大なる環境的變化だから、對當に著大なる新變化を、かれら自身の組織もしくは機構、態度及び方法の上に出現せずにはすまない。

二　環境に於ける新變化の質から推断される直接將來的變化

環境に於ける新變化の質はなにか。それは、有權者が一度に三、四倍化した、或ひは、することになつたことゝ、その新有權者のすくなくとも名義上及び概要上全部が、比較的に貧者または無産者であることだ。

この無産的多數者の投票を得ないならば、次回の選擧戰に、一個人としては當選することが出來ず、黨としては自己保存または自己擴大することが出來ない、したがつて展開または細開することも出來ない。現にその意志を持つ各の個人及び黨が、自己の組織と方法に新環境適應の變化及び工夫を本能的及び意識

的に凝らし、はげみ、加へることは、かくして、極めて自然だ。その現象は、勿論、すでに始まつた。それは、日々の新聞紙面にだけでも顯著だが、新聞にあらはれない內面的行動及び思索に於て恐らくは更に遙かに鋭劇だ。

三　純新政黨發生の可能及び價値

既成諸政黨が、それぞれに、新有權者適應のための自己改造に形成を與ふる限り、それは、その限りに於て、新政黨の發生と見られないことはない。しかし、それは別の問題として、一層純粹に新なる政黨の發生の可能及び價値を當面の問題として考へて見る。

わが國に勞働黨が發生する可能が、この際、選擧權の擴張によつて、著大化されたことは疑はれない。法的公認をば確實に享有しないながらに、勞働組合の自然的發生及び發達は、すでにわが國に於ても、社會的一大現實たる狀態に達してゐる。けれども、組合が、全然參政權のそとにあることは、すくなくともわが國の場合に於ては、組合の自己保存のため、及び組合の目的から考へて致命的に不利だ。どうしてかといふに、組合が全然參政權のそとにあることは、象徵的にいへば治警第十七條が依然として無制限に改廢されない可能を意味する。組合が法的に公護されないための幾多の不便を忍ばねばならないことをそれは意味する。治警第十七條を改廢すること、またもつと綜合的に勞働立法を實現することは、勞働者自身が立法權に參與することを、最も確實な方法的一要件とする。自己の合法的權利を行使することによつて、改廢すべき既成法律を改廢し、實現すべき新法律を實現することは、その途を選び進むことは、それに優る一層積極的な、一層有効な方法を明確に意識して選ぶことが出來ない限り、勞働者から見て、唯一の賢明なる方法だ。既成秩序を根本的に改作する明確なる知識及び意志、を持つことは出來ず、さうかといつて、既成秩序を出來るだけ聰明に利用する、即ち善用する意志もないことが、勞働者から見て、一等損な方法であることは多くいふまでもない。

勞働者は、事實としてすでに參政權を持つ。かれらは、すでに立法上の有權者となつた。さうすれば、かれらのうちの、すくなくとも既成秩序に對する一層直接に根本的な改作方法を明確な意志として現に所有する、或ひは、所有するとみづから信じて疑はないもの以外のすべて、隨つてかれらのうちの殆ど全部的大部分は、この際、かれら自身の政治行動を充分にすることに意を用ひ、そして、その方法を、議會に直接發言の機會を出來るだけ充分に持つことに確認することは、隨つてまた

そのための方法として、かれら自身の出來るだけ有力な政黨を組織することに鋭意することとは、かれらとして極めて自己及び環境を知る、そしてそれに忠實な方法だといはねばならぬ。

勞働者が、議會善用を條件とするかたちに於て、かれら自身の政黨を組織することとは、それの目的に於て、勿論、勞働立法のみには限らない。廣く國政一般に關するかれらの意志實現か同時にそれの目的であらねばならん。

例を英國に取る。英國に於ては、大戰末期から殊に直後にかけて、時の政府即ちロイド・ジョージ氏内閣としては、對露行動に於て着々失敗した。その不聰明なる干渉主義及び帝國主義はつひに一とつも成功しなかつた。そして、その原因は、第一には英國自身の勞働黨の一貫して強い政治的批判及び主張にあつた。一九一八年の十一月に、英國の勞働黨は、露國からの即時撤兵を、その政綱の一内容として發表し、爾來、それの實現を見るまで、院内及び院外、黨内及び黨外、即ち黨と組合との間なる充分に聯絡ある行動のかたちに於て、それを極力主張し續けた。

これは當時の英國の場合としても單なる一例にすぎない。内外諸政に關して、勞働黨の議會に於ける、隨つて政府及び國民を動かす、勢力は、一九二四年一月に於ける、英國最初の勞働黨内閣出現以前の當時に於ても、實に偉大なるものであつた。

ともかく、英國に於ては、前世紀末に於ける勞働黨出現以來、また、それの今世紀に入つてからの議席獲得以來、黨員の數や、議席の數に比して、勞働黨の政治的勢力は、常に、一見して不思議なほどに、勿論考へて見れば決して不思議でなく、強大であつた。この確實に強大でありうる政治的勢力を、勞働者が、すでに參政權をさへ現實に所有したのちに、有意義に生産しない、隨つて使用しないことは、すくなくとも勞働者自身の經驗と知識の發達によつて不可能にされる。

わが國に於て、從來、國内的政治組織及び政治實行と、廣義外政とに關して、封建主義的及び帝國主義的惡要素、或ひは惡意義に於けるそからの主義が、國民からの力ある批判と制限とを比較的にすくなく受けた事情の一は、勞働黨が發達してゐなかつたことにあると考へる。英國に於て、概略的に豫期するならば大戰以前に於ける勞働黨發達の全期を通じて、すくなくとも甚だしばしば、勞働黨が自由黨の有力なる戰友であつたこと、また愛蘭國民黨にとつてのそれでもあつたこと、そしてその傾向的提携の力によつて幾多の政治的進歩に動機と形成を與へたこととは、一般的に妥當な一原則の一特殊事情的發現にほかならない。大戰勃發後及び終結後にも、例へば熱帶アフリカの解放

運動の如きにも、勞働黨の、直接に勞働者關係または經濟生活關係でない政治問題に關する熱意と努力は、一般國民及び國際からの注意をあざやかにひいたほどに發揮された。

政治運動を全然無視または他の事視するならば、組合自身の直接目的すらもが達せられない經驗の一は、英國の前世紀の前半期の後半期に於けるチャーティスト運動のすぐ前にあつた。一層發達したかたちに於ては、それは、一八六七年に都市勞働階級が參政權を持つに至つたまでの期間にもあつた。

いはゆる階級意識が、工業勞働者を中心的事實として發達したものであること、また社會主義も、同じ事情下に發達したものであることはいふまでもない。階級意識が相當に熾烈であり、それの持ちぬしが相當に多數であるならば、そこに、かれら自身の政黨が發生する理由がある。また社會主義が同樣である場合にも、同樣の理由がある。しかし、階級意識と勞働者、または、社會主義と勞働者は、完全に同一である必然はない。歷史及び現在は、事實としてこれを證明する。そして、それが偶然でない理由も容易に考へ知られる。

無産政黨といふ言葉は、勞働者、階級意識、社會主義といふ多少各別的な事實または概念との關係に於ては、階級意識となかんづく最も親密な位置及び性質のものであることを想はせる。それが單なる言葉の問題、即ち字面または語彙によつて要點が意味される問題ではなく、もつと實質的な內容を意味する言葉の問題であるとするならば、勞働黨の可能及び價値の問題は、無産黨の可能及び價値の問題から、多少獨立的に取り扱はれべき理由がある。

工業勞働者は、わが國の社會に於ても、すでに社會的一大實在だ。それは勿論、同時に社會的一大價値であるかたちに於てそれだ。そして、かれらには、かれらのすべてに共通であり、かれら以外の各者と不共通な、即ちかれらに特有の事情がある。階級といふ言葉の或廣義適用に隨つて、かれらは明確に一階級だ。かれらが純粹政治目的以外の諸目的、勿論第一に經濟目的のために、かれら自身の組合を發達させることの必然及び必要は、もはや特に問題とする理由がないほどに事實化した。かれらが、更に進んで、かれら自身の政治的表現機關を持つことの必要が、今日に於ては、それの必然が意識されるよりも一層有意義に意識される。

工業勞働黨の可能は、或意味に於て、無産黨の可能よりも確實だ。工業勞働者だけに通有の事情は、無産者全體に通有の事情よりも一層具體的だからだ。一層限定的に明確だからだ。いはゆる最長時間、最低賃銀は、最も有力にこれを例證する。例

へば勞働時間は、農業勞働者、殊にわが現在のそれにとつてはなんの意味をもなさない。それはまた、文筆、研究、創作、敎育、敎授、編輯、出版等に從事する人々にとつても、たとひかれらが階級意識者であり、社會主義者であり、且つ無産者であるとしても、通則的になんの意味をもなさない。けれども、それは、工業勞働者にとつては、通則的に極めて現實の問題だ。

階級意識、社會主義は、工業勞働との比較に於ては、より多く哲學的、主觀的事實だ。工業勞働は、それらとの比較に於ては、より多く科學的、客觀的事實だ。日本は、經濟的生産が關する限り、次第に工業本位に移るほかない事情を持つ。工業勞働者は、單なる人口に於ても、增大する一方だ。それは、現在に於ても、すでに巨大なる人口に達してゐる。いまでさへこれだけの大人口に達してゐるわが工業勞働者が、かれら自身にとつて比較的に最も直接關心的な多くの問題を、例へば廣義勞働立法の問題を、それを比較的に間接關心事として持つほかない位置にある人々との協力によつて解決することを　もしも、それを解決するための最低限的必要件視するならば、かれらは、その場合、かれら自身の力量を精確に測定したものだとはいへないと、妥當に結論されうるやうに考へる。

わが國に於ては、農業勞働者の問題は、目下、工業勞働者の問題以上に急迫した性質を、幾多の關係に於て示す。かれらが、かれら自身の政黨を早く、そして有力に組織しうることは極めて望ましい。けれども、この可能は、單なる可能の問題として、工業勞働黨の可能ほどに、或ひは、それほどにすらも、確實でないと考察させる材料が、現在、否定されがたくはないか。農業勞働者の場合に於ては、かれら自身の政黨が、有意義な程度の有力さに於て可能にされるためには、その人口の餘りに大なる割合が、いまなほ餘りに經濟的及び政治的デモクラシが要する智能的訓練を準備されてゐなくはないか。一とつには、生産の方法が集團的でなく、原子的であるためも恐らくはあつて、かれらの間には、工業勞働者の間に於けるほどに、組織的階級、或ひは階級的コヒージョン即ち凝集性が發達してゐない。けれども、これが發達してゐないならば、農業勞働條件に關するかれらの不滿足と意志はどんなに熾烈であつても、中央議會を舞臺とするかれら自身の一大政治結社の組織は困難だ。かれらは、選擧の際には、全國的見地からいふ限り、團體取引的でなく、個人取引的に分割し去られる可能が、その事情下には强い。

しかし、農業勞働者と工業勞働者とは、封建的地主主義と、近代的資本主義とをそれぞれに原因とする、二たつの最も代表的な卑屈兼貧乏階級だといふ一點をほかにしては、餘りに各別

的な直接事情と直接目的とを、目下に我國の場合に於ては殊に有する。これゆゑに、農業勞働者の政治的自己表現は、またそれを待つて始めて可能にされる、すくなくともそれを缺いては可能にされないかれら自身の經濟的、道德的、文化的、生活、般的必要の滿足は、かれら自身の組合の發達を背景として、かれら自身の政治結社を組織する決意と努力がかれらによつて先づなされ、それを社會に、そして實行的に發展する方法として、比較的に最も類似の事情を最も具體的に有する他の階級、隨つて第一に工業勞働者又は工業勞働黨と有意義に提携しうる限り提携する自由がかれらによつて保護される場合に最も有望だと考へられる。

制度に原因する貧乏及び卑屈になやむ經濟的生產者といふ性質に於て、工業勞働者と農業勞働者とは完全に相理解しうる同病者だ。團結は、それが內部的に鞏固であるだけでは、即ちそれは、同時に外延的、數量的に大でないならば、充分に有効でない。しかし、それが外延的、數量的に大であるためには、それが直接に、そして實質的、自身必要的に、即ち間接に、そして派生的、手段必要的にでなしに、裏打するものがあるに越したことはない。しかるに、共に經濟的必需品の生產者であり、そして共に制度的貧乏及び卑屈の受苦者または所有者であることは、工業勞働者及び農業勞働者の各別的組織に兩者大の團結形成を良心的に可能にするための內因的事情としての資格に於て決して薄弱すぎるものではない。これが薄弱視される第一理由は、兩種勞働者の間に接觸、隨つて體驗に近い觀察の機會が缺乏してゐることにある。この機會を充分に造るための努力が、目下の一必要であることはいふまでもない。

工、農兩種勞働者の政治的組織團體がそれの外延を更に大きくする餘地は、いふまでもなく、良心的な階級意識者及び社會主義者の全範圍から經濟的生產者を除き去つた殘餘全額だ。しかしながら、良心的な階級意識者及び社會主義者の特質は、工、農兩種勞働者の特質に比して極めて複雜だ。工、農兩種勞働者が、自己の社會的殊に團體的目的のためにかれらと協力すること、有意義に於てかれらを利用することは賢だ。かれらのために、自己の社會的殊に團體的目的を、多少とも無責任化されるならば愚だ。

無產政黨の先驅

堺 利 彦

一 借金黨 小作黨 貧民黨

明治十年代に活躍した自由民權の運動が、その實、藩閥政府に對抗するブルジョア政黨の先驅に過ぎなかつたことは、今日ではモウ常識の見解になつてゐる。然しその當時に於いて、自由民權運動が一般人民を代表し、一般下層階級を代表してゐたことも、亦明らかな事實である。そこで當時の政黨、殊に自由黨の一部、もしくはその系統の中に於いて特に無產階級の立場に立つものを生じたのは、自然の情勢であり、當時の發達であつた。

借金黨、小作黨、貧民黨、社會黨當時これらの名稱が屢々志士論客の口や筆に上されてゐた。自由民權の情熱に燃えた運動者がその運動中に於いて貧富懸隔の事實にブッつかり、地主小作對立の事實に當面した時、そこに何等かの疑問を起さずには居られなかつた筈である。そして彼等がヨーロッパに於ける社會黨の運動を漠然ながら傳へ聞いた時、それを日本に移植しようとする、氣持と希望と需要とを生じないでは居られなかつた筈である。

二 東洋社會黨

今日我々の間に傳へられてゐる所は、さういふ需要の初めて具體的に出現したのは、明治十五年の「東洋社會黨」である。同年五月、樽井藤吉、赤松泰助等諸氏の發起で、肥前島原の江東寺に東洋社會黨の創立會が開かれた。來會者數百人、綱領、盟約、黨則などの決議があつた。之に對し、政府は大いに驚いたものと見え一個月の後、之に禁止を命じた。

右の創立會で先づ問題となつたのは黨名で、或は立憲急進黨とすべしと云ひ、或は爽稼黨とすべしと云ひ、議論沸騰の末、結局、原案の東洋社會黨に決した。それで一般黨員の思想と氣分とがどんなものであつたかゞ、ほゞ想像される。然し或る黨員が長崎警察署に提出したと云ふ上申書の中には、一齊て太政官も

告論文中にも、上下を平均し、人權を齊一する云々の語あるも道義に基づかれたるにて、即ち社會主義なり」とあつて、明に「社會主義」といふ言葉が使はれてゐる。尤も、「その社會黨とは大なる調和黨と曰ふ義なり」と解釋してある程度の社會主義である。黨の「綱領」は三個條で、「我黨は道德を以て言行の規準と爲す」「我黨は平等を主義と爲す」「我黨は社會公衆の最大福利を目的と爲す」とある。即ち社會主義とはいふものゝ、社會の經濟組織に關する解釋も主張もなく、只だ「平等」と云ひ、「公衆の福利」と云ふ、純粹に抽象的な要求を掲げ、殊に「道德」の觀念を第一とした點に於いて、近世社會主義と大いに異つてゐる。猶ほ「盟約」「黨則」などの文中には、社會主義と云ふよりも寧ろ無政府主義的の思想傾向が多量に現はれてゐる。そこが即ち自由民權主義を觀念的に推し進めたに過ぎない所以である。

樽井藤吉氏は大和の人で、後ち衆議院議員となつた事もあり、普通選擧運動に從事した事もあり、銀行國有論を公けにした事もある。數年前までも、氏は猶ほその老軀を提さげて、銀行國有論の爲に奔走して居られた。

三　車界黨

次に出現したのは明治十六年の「車界黨」（或は車會黨）である。これは東京市に馬車鐵道會社が出來たのに對する反抗運動で、初めは馬車鐵道反對同盟會と稱し、市内の車夫を糾合した團體であつた。運動の中心人物は奥宮健之、三浦龜吉の二氏であつた。

當時、自由黨は三菱財力の横暴に憤り、「海坊主退治」と稱して盛んに之れを攻撃し、又改進黨と三菱との關係を摘發して之を痛罵してゐた折柄であるので、黨内の少壯連が偶々馬車鐵道を好機として、人力車夫の結合に依り、一般貧民の爲に氣焔を擧げたわけである。馬車鐵道廢止の運動と云へば、昔しイギリスで舊式の織工が新らしい紡績機械を壞しにかゝつたのと善く似た、初期の幼稚な運動ではあるが、兎にかく資本の勢力に對する勞働者の團結運動といふ點に於いて、東洋社會黨に比べて一層多く社會黨の意義實質を持つてゐたものである。車界黨といふ名稱が、社會黨の音を取り、車夫の車の字を取つたのである事は云ふまでもない。

それで車界黨は先づ神田明神に車夫大懇親會を開き、次いで兩國井生村樓に車夫大演說會を開いた。この演說會には植木枝盛、栗原亮一などいふ自由黨の名士、その外、若手のあばれ者として知られた伊藤仁太郎などが出席し、いづれも車夫のハッピ

を着て演壇に立ち、中止の命令で大混雜を起し、煙草盆が盛んに飛んで警官にブツつかるといふ騒動もあつた。それから政府は直ちに車界黨を禁止し、併せて車夫の組合に嚴重の取締を加へた。程なく奥宮氏が名古屋事件で石川島監獄に入れられたので、この運動は自然に消滅した。

奥宮健之氏は土佐の人、當時僅かに廿二歳、自由黨の少壯者中に在つて大いに頭角を現はし、演説文章を以つて『南船北馬、席暖まるに遑あらず、極力自由の大義を皷吹し』たが、後ち『言論是れ虚器のみ』と稱して秘密の實行運動に入り、遂に前記の名古屋事件を起し、强盜殺人等の罪名を以て無期徒刑に處せられた。三浦龜吉氏は元と根津遊廓の車夫であつたが、後ち自由黨の名士、吉田正春氏および大井憲太郎氏の抱え車夫となり、遂に自由主義の運動者となつた。但し晩年は餘り善くない意味の『壯士』として知られてゐた。

四　東洋自由黨

明治廿五年十一月、大井憲太郎氏が自由黨を脫して別に『東洋自由黨』を組織した。東洋自由黨はその政綱として何よりも先づ『貧民勞働者保護』を標榜し、黨內に『日本勞働協會』と『普通選擧期成同盟會』とを設置し、その機關紙たる週間『新東洋』には、ベラミーの『ルッキング・バックワード』（有名なる社會主義のユトピヤ記）を譯載した。それだけでもこの新團體が、名は『自由黨』であるけれども、可なりに『社會黨』の實質を持つてゐた事がわかる。

これより先き、明治廿三年に帝國議會が開設されると同時に、自由民權運動の夢は覺めた。自由黨も改進黨も、實は地主黨、資本家黨に過ぎない事が、漸く分りかけて來た。フランス自由主義の代表的學者として、また清廉奇俠の傑士として名聲を博してゐた中江篤助（兆民）氏の如きは、議會の形勢に憤慨して間もなく議員を辭した程である。

明治廿四年、中江兆民主筆、新井章吾主幹といふ組織で『自由平等經綸』といふ雜誌が出た。中江氏、新井氏、共に自由黨に飽き足りない急進論者であつた。然し中江氏等は單に急進的自由主義者であつたが、この雜誌に現はれた、生原盛之氏の『平民主義』と題する論文の中には、『有產者は無資者を使役し』『細民は富者の奴隷たるを免るる能はざるの慘狀』云々の文字があり、又江口三省氏は『貧富の懸隔は去る可らざる乎』と題する論文をこの雜誌に載せ、兩者共に著ろしき社會主義的傾向を示してゐた。

その頃、自由黨の機關新聞に『自由』と云ふのがあつた。その

主筆は江口三省氏で、その記者にに大道和一、佐藤勇作、石谷富藏、上野岩太郎等の諸氏があり、いづれも社會主義的傾向を有してゐた。從つてその紙上には、社會主義に關する論文が續出し、普通選擧論や地主全廢論が盛んに賑はつてゐた。又『自由』の經營者は粕谷義三氏等であつたが、當時、同氏の許に寄食してゐた少年石川三四郎君の後に語る所に依れば、そのころ粕谷氏を訪問する常連の自由黨員の間には、いつでも『財産平均論』で議論が沸騰してゐたと云ふ。

又明治廿五年冬、大道和一、佐藤勇作、上野岩太郎、酒井雄三郎、小島龍太郎等の諸氏が集まつて『社會問題講究會』といふを作つた。小島氏は當時衆議院書記官で、中江兆民の系統に屬するフランス學者であつた。酒井氏もその系統の學者であつた。これら諸氏のモットオは『自由主義の新領地は社會問題に在り』と云ふのであつた。(上野氏は德富蘇峰氏の民友社から出た人であつた。酒井氏は屢々『國民之友』に寄書してゐた。民友社はその當時の態度に於いて、又種々の因緣に於いて、有力なる社會主義的思想の宣傳者であつたが、その事はこゝに略する。)

斯して自由黨の左翼から社會黨の生れるべき情勢が稍や備はりかけてゐた。然るに自由黨全體としては、いよ〳〵ます〳〵軟化の度を進め、星亨等の領袖は陸奥宗光を通じて長閥の伊藤博文等と握手する傾向を示して來た。そして明治廿四年の大會に於ける宣言には、明らかに社會主義排斥を聲明してゐる。曰く『我黨の自由主義は富者貧者をして各々其分に從ひ相共に社會の利を享けしむるに在り强て之を平均せしめ之を共有せしむるが如き社會主義は我黨の自由主義と相反る所なり。』

この宣言案の討議中、小林樟雄氏は『勞働者保護法を設くる事』といふ一項を挿入したいと發議して否決された。小林氏は曩に大井憲太郎氏等と共に朝鮮事件を起した人である。この一事を見ても、大井氏等の一派の主張と、それの行はれなかつた樣子とが察せられる。そして大井氏が遂に自由黨を脫して、別に東洋自由黨を組織するに至つた事情がわかる。その前後、上野氏が頻りに社會主義的論文を書くので、それが爲に板垣伯の御機嫌を損じ、遂に『自由』を退社するの止むなきに至つたといふのも、面白い話である

然し大井氏が東洋自由黨に於いて貧民勞働者保護を唱へ、又その機關紙にベラミーのユトピヤを載せさせたとは云へ、果してどの程度まで社會主義を理解してゐたかは問題である。そして又、東洋自由黨が稍や社會黨の實質を持つてゐたとは云へ、何故に左翼の諸分子を糾合して、モット大きな勢力に成り得な

かつたか、我々の疑問として殘つてゐる。

要するに東洋自由黨は、馬城將軍の雄名を馳せた大井氏の事業としては、甚だ振はないもので、何程の反響をも社會に與へないで消滅した。つまりこれは、資本制度の發達がまだ未熟で、從つて社會主義の起るべき地盤が充分に肥えてゐなかつたと見るべきであらう。

五　日本社會民主黨

以上、自由黨左翼としての社會主義運動は、ほんの先驅中の先驅であつた。本當の意味に於ける日本の社會主義運動は、日清戰爭以後初めて起つて來た。それは日清戰爭の勝利が、日本の資本制度の發達に一大時期を劃した結果である。然しその時、自由黨は既に公然、長閥伊藤系と提携し、その左翼の大部分も軟化し、僅少の疲弊した一部分だけが排斥されたが、それらは遂に何事をも爲し得なかつた。そして新らしい社會主義運動は全く別の方面から起つて來た。

明治三十四年五月二十日、『日本社會民主黨』が東京に生れた。その創立者は片山潛、安部磯雄、西川光二郎、木下尚江、河上清、幸德傳次郎の六人であつた。彼等はそれより三年前（明治三十一年十月）から社會主義研究會といふを作り、十數人の會員を有して、毎月一回、芝のユニテリアン協會に會合してゐたが、遂にその中から右の六人だけが社會主義者として名乘をあげたわけである。

社會主義研究會の會員は主として米國もどりのクリスチヤンで、中にも片山、安部の兩氏が中心であつた。殊に片山氏は明治三十年頃から『勞働組合期成會』を作つたり、『鐵工組合』『活版工組合』の組織を助けたり、雜誌『勞働世界』を發行したりして、着々實際運動に成功しかけてゐた。安部氏は初め京都同志社の教員となり、後ち轉じて早稻田專門學校の教員となつてゐた。二氏ともアメリカ滯在中にクリスチヤンとして社會主義を學んだのであつて、自由黨左翼の人々などとは、全く種類の違ふ人柄であつた。

社會民主黨創立者六人の中、西川氏は早稻田の卒業生で、内村鑑三氏の下にクリスチヤンとして働いてゐたのが、一轉して社會主義者となり、片山氏の下に働らく事になつてゐた。河上氏は青山學院の卒業生で、萬朝報の記者となつてゐた。木下氏もクリスチヤンで、元は辯護士であつたが、當時は『每日新聞』の記者であつた。クリスチヤンでないのは幸德氏一人であつた。幸德氏は萬朝報記者であつたが、中江兆民の門弟子として、自由黨等の人物であつた。斯樣に、社會民主黨の創立者

は、六人の中五人までクリスチャンであつたが、然し只一人の幸德氏に依つて、舊自由黨左翼との脈絡が保たれてゐた。幸德氏は前記の大道、佐藤、酒井、小島等の諸氏とも交りがあり、殊に小島氏は種々の點に於いて幸德氏の運動を後援してゐた。

扨、社會民主黨は長文の『宣言書』を作つて、勞働世界、萬朝報、毎日新聞、報知新聞等の紙上で發表したが、それらの新聞雜誌は總て直ちに發賣禁止となり、黨その者も即日解散を命ぜられた。かくて社會民主黨は僅かに一日間の存在であつたが、『社會は靑天に霹靂を聞けるが如く驚きの眼を開いて之を迎へた』と云はれてゐる。兎にかく日本に於ける社會主義者の存在、社會主義運動の開始は、この時から初つて社會一般に認識されたのである。

右の宣言書は安部氏の執筆で、『理想』としては、(一)人種の差別、政治の異同に拘はらず、人類は皆同胞なりとの主義を擴張する事。(二)萬國の平和を來す爲には先づ軍備を全廢する事。(三)階級制度を全廢する事。(四)××××××××××××××××悉く公有とする事。(五)鐵道、船舶、運河、橋梁の如き交通機關は悉く之を公有とする事。(六)財富の分配を公平にする事。(七)人民をして平等に政權を得せしむる事。(八)人民をして平等に教育を受けしむる爲に、國家は全く教育の費用を負擔すべき事、の八個條が擧げられ、『實際運動の綱領』としては、獨占事業の市有。高等小學卒業までの義務教育を公費とする事。日曜の休暇。八時間勞働。普通公平選擧。死刑廢止。貴族院廢止。治安警察法廢止。新聞條例廢止などが擧げられてゐる。

猶ほ『宣言』は、衆議院が『富者の議會』であり、『地主資本家の衆議院』である事を指摘してゐるが、實際、その時には既に、自由黨が政友會と變じ、板垣伯の首が伊藤侯にすげかへられ、政黨と藩閥とが結合して、衆議院が全く人民の代表たる性質を失つてゐた。そして伊藤内閣(即ち政友會内閣)の内務大臣末松謙澄氏が社會民主黨に解散を命じたのであつた。

六　日本社會黨

社會民主黨の創立者等は、その後間もなく、更に『日本平民黨』の結社届を出して見たが、それも直ちに解散を命ぜられた。そこで社會主義の政治運動は當分のあいだ駄目だと云ふので、『再び教育的、宣傳的の方針を取る』事となり、彼等は單に『社會主義協會』として活動を繼續した。

社會主義協會時代が約二年、それから日露戰爭中、非戰論を標榜して立つた『週刊平民新聞』時代(平民社中心時代)が約

二年、社會主義運動は可なり眞劍に、可なり猛烈に、可なり有効に繼續されたが、然してそれが公然の政治運動となる機會は得られなかつた。それでも平民社時代に、木下尚江氏を候補者として衆議院議員の選擧運動をやつた事がある。勿論、宣傳の一方策に過ぎなかつたが、東京市に於いて三十二個の投票を得た。

然るに明治三十九年一月、西園寺内閣が成立した時、前の桂内閣が言論壓迫を極めた反動として、新内閣は幾分寛容政策を取るだらうといふ評判があつた。そこで西川光二郎、樋口傳の二氏が試みに『日本平民黨』といふ結社の屆出をした。綱領は只『普通選擧の期成』といふ一個條であつた。次いで堺利彦深尾韶の二人が『日本社會黨』の屆出をして見た。それは單に『社會主義の實行を期す』と云ふのであつた。所が政府はそれらに對して何ら干渉の態度を示さないので、更に右二黨が合同して『日本社會黨』を作り、二月十四日、京橋木挽町加藤病院内に於いて第一回大會を開いた。

大會の出席者は三十五名、竹内余所次郎氏が座長となり、評議員十三名（片山潛、堺利彦、西川光二郎、加藤時次郎、竹内余所次郎、齋藤兼次郎、樋口傳、岡千代彦、森近運平、深尾韶、山口義三、田添鐵二、幸内久太郎）を選擧し、更に評議員中から幹事三名（森近、西川、堺）を選擧した。幹事が大會から委托されて作成した『黨則』には、第一條、本黨は國法の範圍内に於て社會主義を主張す』とあつた。この時、安部氏はアメリカに遊んでゐた。安部氏は學校の關係上、實際運動にたづさはる事が出來なかつた。木下氏は宗教的傾向が濃厚になつて、政治運動を好まない態度であつた。

兎にかくこれで型はかりにもせよ、日本に初めて公然たる社會黨の結社が出來た。機關雜誌『黨』は毎號『日本社會黨報』を載せ、黨員名簿を公表した。當時『一同志』が日本社會黨に諭す』と題して『黨』に載せた一文の中に、次の如き文字がある。

『試みに汝の評議員を檢せよ、竹内は一個の藥劑師に非ずや。岡は一個の活版工に非ずや。齋藤は一個の錺職人に非ずや。幸内も亦た一個の金物職人に非ずや。深尾は小學教員たりし者なり。森近は縣廳の屬官たりし者なり。樋口は僅かに書籍類の販賣を以つて其日を糊せし者なり。堺、山口、西川の如きは、未だ前日の一書生に過ぎず。田添、加藤、片山の如き、歐米に留學して高等の教育を受け、現に相當の地位を有なきに非ずと雖も、通じて之を見れば實に貧弱の感なきを得ず。更に進んで汝の黨員なるものを檢せよ。人力車夫あり、ヨカ〳〵飴屋あ

り、職工あり、書生あり、失業者あり、居候あり、兵卒あり、小作人あり、郵便局員あり、而うして其數未だ千にだも達せざるに非ずや。』

黨員は實際、千人どころでなく、二百名に充たなかつた。然し彼等は『首領何する者ぞ、名士何する者ぞ、社會黨の氣力精神は只だ平民勞働者の自覺の中に在り』といふ意氣込であつた。

日本社會黨の主なる仕事としては、他の進步的諸團體と共にやつた普通選擧運動、『國家社會黨』と提携してやつた電車値上反對運動などであつた。この反對運動は、日比谷公園に於ける二回の市民大會となつて現はれ、その結果、兇徒聚衆罪として、齋藤、樋口、深尾、山口、西川、大杉、半田、吉川、岡、竹内等の被告を出だした。

日本社會黨の第二回大會は明治四十年二月十七日、神田の錦輝館で開かれた。この大會は、丁度日本來遊中のイギリス獨立勞働黨の首領ケヤ゛ハーデー氏が臨席したりして、非常に緊張した光景であつた。出席黨員は六十餘名であつた。問題の焦點は、議會政策論と直接行動論との衝突であつた。前者は主として片山潜、田添鐵二氏等の主張であり、後者は主として幸德傳次郎氏の主張であつた。幸德氏は前年からアメリカに遊んでゐたが、その前後に於いて『思想の變化』を起し、無政府主義的態度（若しくはサンヂカリズムの態度）を取る事になつて來た。そこで直接の問題は、日本社會黨が普通選擧運動をやるかやらぬかと云ふに在つた。そして評議員會はその兩說を折衷した決議案を大會に提出した。即ち評議員案は普通選擧運動を黨員の隨意運動とすると云ふのであつた。然るに之に對し、田添氏は、普通選擧を有力なる運動方法の一なりと認むといふ修正案を提出し、幸德氏は、議會政策の無能を認めるといふ修正案を提出した。採決の結果は、田添案二票、幸德案は二十二票、原案廿八票であつた。

然るにこの大會の記事が『日刊平民新聞』に現はれると、同紙は忽ち發賣禁止となり、日本社會黨も續いて解散を命ぜられた。

日本社會黨時代に、一つ面白い現象があつた。それは、昔しの奧宮健之氏が新たにこの運動に加はつて來た事であつた。氏は、日本社會黨に加入はしなかつたが、常にその黨員と共に運動してゐた。舊自由黨左黨と社會主義運動との因緣がこゝにも現はれて來たわけである。

七　社會主義同盟

その後、間もなく赤旗事件が起り大逆事件があつて、社會主義運動は一時全く亡びてしまつた。政治運動どころの段ではなく、社會主義者そのものの存在が社會から忘れられた形であつた。

然るに世界大戰前後に於いて漸く復活しかけてゐた社會主義者等は、大正八年の夏に至り『社會主義同盟』の運動を起した。この新運動は、古い社會主義者や無政府主義者が發起したものには相違ないが然し決してそれらの復活ではなかつた。復活でないばかりでなく、彼等としては、寧ろ自らその古い型や狹い枠を破つて、新たに、廣い自由な組織を發達させようとしたのであつた。そこで社會主義同盟の發起人として發表された人々は、有らゆる社會主義的の勞働團體、思想團體、社會運動團體の代表者であつた。つまり、小いさく塊まつた古い宗派の社會主義者の任務は既に終つたのであるから、新人物の手に依つて新時代に相應する新形體の運動が起りかけたわけであつた。

然しこの運動は只、大戰爭の後に於ける世界的機運に適合すべく、有らゆる社會主義的要素の勢揃ひをして見たと云ふだけの事で、示威的、宣傳的の効果は可なりに大きかつたと考へられるけれども、實際運動の具體的進展としては、殆んど何らの得る所もなく、約一年間の活動の後、解散の命に依つて消滅した。

八　無產政黨

その後、曉民共產黨、日本共產黨などいふ秘密結社の裁判事件があつて、狹義の社會主義運動は再び亡びてしまつた。思想團體と稱された諸方面の小組織も殆んど總て消滅した。そして勞働組合、農民組合、水平社などが大いに勃興した。

然し組合運動と民族的運動とだけでは、何かの不足を感ずる。そこに政治運動の要求が生じた。恰も好し、普通選擧は『曲りなり』にも行はれる事になつた。無產政黨組織の運動は各方面から一齊に起つて來た。古い型と狹い枠とは、更に一段の破壞を加へられる事になつて來た。社會主義同盟に依つて初めて一般化された社會主義運動は、今回の無產政黨運動に依つて本當に大衆化されるであらう。

無產政黨の擡頭と其發達の經過

安部磯雄

無產政黨といふことが割合に多く新聞や雜誌で論議されて居るに拘はらず、其體的に政黨の出現したのは極めて少ない。四月の十九日東京で開かれた政治研究會の大會に於ては政黨組織に就て何等か具體的決議を見るだらうと豫期して居た者もあつたようであるが、今日直に旗上げをするといふ段取りにはならなかつたらしい。無產政黨は當然起るものには相違ないけれども、政黨組織の時機に關しては當事者の間に大分問題となつて居るのではないかと思ふ。

私の知つてゐる範圍内に就て既に無產政黨の名乘りを擧げた者が二つある。一は日本の中部に位する足尾銅山の鑛夫によつて設立された公民黨で、他は日本の南部に在る八幡製鐵所の職工によりて組織された九州民憲黨である。

足尾銅山の公民黨が結黨式を擧げたのは本年の二月ではなかつたかと思ふ。足尾銅山には鞏固なる鑛夫組合があるから、これが中堅となつて無產政黨が組織された譯である。然し無產政黨は決して勞働者階級に限らるべきものではない。足尾町の小賣商人とか其他の無產者にして入黨した者が可なり多いといふことである。此の如く各種の無產者を打つて一團となすことは無產政黨が當然取らねばならぬ途ではないかと思ふ。

足尾の公民黨は先づ町會議員の選擧に手を染めた。三月初旬頃の話に據れば、三十名の町會議員に對して公民黨は八名の候補者を立てたといふことであるが、私は其後の結果に就て何等の通知を受けて居ない。然し選擧の結果が如何であつたにせよ、兎に角無產政黨が地方政治に參與せんとする努力は普選案通過後の顯著なる事實としてこれを認めねばならぬ。これは單に足尾のみの現象ではなく、日本至る所に於て無產階級が地方自治に目覺めだしたことは實に喜ぶべき事實である。普選の實行は單に國民の大部分に參政權を與へるといふのみではなく、國民を政治的に教育する方法として、これ程有力なものはないのである。

八幡の九州民憲黨は去る四月六日に其結黨式を擧げた。八幡製鐵所には約二萬の勞働者があり、これに加ふるに約七千の自由勞働者があると言はれて居る。製鐵所が官業であるだけに勞働運動に對する官憲の壓迫は可なり烈しいのであるから、民憲黨の加入者は五百名位に過ぎない。然し無產政黨が勢力を增すに從ひ、勞働者の全部が其旗下に集まることは何人も豫期して居るところの事である。殊に總選擧が行はれる場合には階級意識が明白になるから、其黨員たると否とを問はず、勞働階級の大部分は必ず無產政黨の候補者に投票するに相違ない。

無產政黨が如何なる政綱を揭げて立つかは多くの人々の知らんと欲する所であらう。又無產政黨に興味を有する人々は各自に相當の意見を有して居ることであらう。若し數十人の代表者とか有志者とかが日本全部を包容する無產政黨の政綱を決定すると假定したならば、可なり完全なものが出來上ると同時に多少色彩の薄いボンヤリしたものになりはせぬかといふ懸念もあらう。然し足尾とか八幡とかの無產政黨は言はゞ一地方の政治團體であつて、恰も純眞なる青年が遠慮會釋なく其信ずる所を吐き出すが如く、自由自在に其思ふ所を發表することが出來るといふ特徴がある。私の手許には足尾公民黨の宣言書及び政綱はないが、幸にして九州民憲黨が公表したものを有つて居る。黨則を揭げると餘りに長くなるから、宣言書と政綱だけを示すことにする。

宣　言

世界の歴史は虐げられ、壓迫され、搾取せられていた民衆が、自覺し、鬪爭し解放せられていつた記錄である。

過去の被支配階級は大衆團結の力を政治に活用することに依つて自らを開放した。

今、我等は新日本建設のために政戰に就く、我等が祖國を見よ　國民の八割は、富も、學問も、權利も持たない、裸一貫の無產者である。

而も支配階級は政治を利用して資本家本位の經濟政策を樹て產業保護を口實として有產者を富まし、無產者の利害はいさゝかも顧みやうとはしなかつた。

過去の政治的支配階級即ち既成政黨は彼等の巧妙なる術策を弄して政治の核心を吸ひ取り、其外殼だけを無產者に投與へやうとのみ努力して居る。

過去四十年の我が憲政史を見よ。封建の殘黨はあらゆる詐術を以て政治の中實を新興民衆から奪ひ取つてゐたではないか、今既成の有產者政黨は我々の選擧權を骨拔にせんと焦せつてゐる、だが我々は何時までも彼等に籠絡されてはゐない、我々は今更めて舊支配階級との絶緣を宣言する

我々は現實を見つめ堂々と政治の大道を突進するのみである　我々は自ら恃み、自ら起つ、我々は我々の政治に歸り、我等の政黨を作り、以て新日本の核心たらしめんために、紛々たる群議を斥けて敢然、無產者政治の陣頭に馬首を進めんとす。

我等は滿心の熱血をもつて無產政治の烽火を揚げる。

全九州の無產者諸君！　我等は今選擧權を獲得した。民衆政治の黎明は來た。政治即生活！　大衆よ政治戰線に集れ。

政綱

一　我等は無產階級の立場より政治、經濟、社會に於ける一切の弊制害無を改善せんことを期す

一　我等は民衆の基本權たる勞働權、團結權、生存權の完全たる獲得を期す

一　我等は議會行動に依つて土地並に生產、分配、諸機關の改善を期す

一　我等は國際聯盟を改造し、世界平和を維持し以て全人類の共存共榮を期す

一　我等は全日本の無產政黨と提携し、既成政黨の擊破を期す

足尾でも八幡でも單獨に政黨を作つたものゝ、決して孤立する意味ではない。若し全國を統一する無產政黨が出來れば、何時でも共に參加して、自らは其支部となるといふ考へらしい。現に足尾公民黨の黨則には何時でも全國的無產政黨の成立と共に黨名及び黨則を變更するといふことが明記されて居るといふことである。九州民憲黨も前記政綱の末項に全日本の無產政黨と提携することを明記してあるばかりでなく、黨則の如きも九州民憲黨假黨則として居る位であるから、決して地方分立の意味ではないことは充分に推測されるのである。

今後無產政黨がどんな徑路を辿つて發達するかといふことは明でないけれども、足尾や八幡に於ける如く、各地に小無產政黨の起ることが自然の勢ではないかと思はれる。換言すれば全國的政黨の出來る前に各選擧區內に小政黨の出來ることが無產政黨發達のために便宜である。私が斯く考へるのは次の如き理由による。

政黨の目指す所がなるべく多く代議士を議會に送るといふことにあるから、選擧區は當然政治運動の單位でなくてはならぬ。もし全國的の無產政黨が數十萬の黨員を募集し得たとしても、これだけでは大した勢力でない。何となればこれを各選擧區に割當てるとなると其數一萬にも足らないからである。普選實施後に於ける有權者の數は一選擧區につき十萬乃至十三萬位のものではないかと思はれる。而して一選擧區より選出される代議士は三人乃至五人であるから、二萬乃至三萬の投票を得れば其後補者は先づ當選するものと見ることが出來る。更に後補者の數が法定代議士數よりも多く、且つ棄權者が少なくないことを考ふれば、一萬五千票乃至二萬票を得たる者は確實に當選することが出來ると見て差支はあるまい。無產政黨が普選後第一期の總選擧に於いて成功するか否かは一に一萬五千乃至二萬の無產者を團結せしめ得るか否かにある。故に無產階級は全國的政黨組織に重きを置くよりも、先づ各選擧區に於て少くも一萬五

千の黨員を得ることに努力せねばならぬ。若し各選擧區に於て小政黨が組織され、相當の黨員を集めることが出來ることゝなつたならば、此等の小政黨から代員を招集して全國的政黨の組織に着手し、其黨則、宣言書、政綱を決定すればよいのであるこれは極めてデモクラティックな方法ではないかと思ふ。

各選擧區を單位として小政黨を組織することは無產政黨運動の當初に於ては殊に便宜である。初めから多數の選擧區を包容する政黨を組織せんとすれば其間に種々なる面倒が生ずるけれども、各選擧區を單位とすれば政黨の事務も極めて簡單になる。例へば九州全部を包容する政黨を樹立することになれば、第一本部を何處に置くかといふが如き比較的つまらぬ問題が生じて來る。八幡に生れた九州民憲黨が八幡を以て本部とすることを主張すれば、福岡や熊本の黨員はこれに反對するに相違ない。然し各選擧區を單位とすれば斯の如き問題は當然消滅することになる。勿論八幡の黨員が實際八幡を以て本部とするが如き主張を有してゐないことは言ふまでもなきことであるけれども、數選擧區を包容する政黨を組織することは後の問題であつて、現在に是非考へねばならぬと云ふ程のことではない。

第三の理由として私が述べたいと思ふことは勞働團體の分裂に對する態度である。勞働總同盟と反總同盟の反抗は數年以來のことであるが最近亦勞働總同盟から分離した團體があつた私は分裂其ものに就いての批判を爲すだけの知識を有してゐないから、これに論及することは一切避けたいと思ふが、現に何無產政黨の樹立を見んとする矢先きに斯くも勞働團體の足並が亂れたといふことは無產階級運動のために大なる損失であると云はねばならぬ。勿論主義主張のために分裂するとは已むを得ない。然し、これは勞働團體としての分裂であつて、無產階級としての分裂でないことを希望する。即ち勞働團體としては別箇の存在を維持して行くが、政治運動に於ては共同戰線に立て欲しいのである。さりながら全國を包容する無產政黨の中に總同盟系及び反總同盟系の人々を集むると云ふことは實際に於て大なる困難事ではあるまいか。更に農民組合とか水平社とかを全國的政黨に包容することに就ても幾多の困難問題が生じて來るかも知れぬ。然し團結の範圍を各選擧區に縮少することになれば、困難の大部分は除去されることゝ信ずる。一選擧區内に住んでゐる勞働階級は其反總同盟系に屬すると否とを問はず、比較的容易に團結することが出來るかも知れぬ。もし兩者の融和を謀ることが出來ないにしても、勞働總同盟と反總同盟との對抗を緩和される選擧區は選擧區全數の一小分に過ぎないではないかと思ふ。言ふまでもなく勞働團體の分裂は悲むべきことで

あるから何等かの手段でこれを調停する運動が起るであらうとは信ずるけれども、選擧區を單位とすることにより分立の弊を多少緩和することが出來るのは明である。

以上述べた所は無産政黨組織の順序に關する私の意見であるが、私は決して永久に小政黨の分立を主張するものではない。若し選擧區を單位として四十乃至五十の小政黨が樹立したならば、これを打つて一團となし、各政黨代表者の協議によりて黨名を決定し、全國に在る小政黨は當然其支部となるべきものであることを信ずる。

無産政黨をして健全なる發達をなさしめるためには黨員の寛容なる態度と努力とを必要とする。

普選の實施と共に有權者の數は約一千四百萬人となり、其内約一千萬人は新に參政權を得る人々である。而して此等の新有權者が全部無産階級に屬する人々であることは疑がない。若し無産政黨の意義が充分此等の人々に了解され、彼等が忠實に自己の利益擁護のために投票するならば、無産政黨は一擧にして議會に於ける過半數の議席を占めることが出來る。故に無産政黨當面の問題は如何にして無産者を團結せしむるかといふことであらねばならぬ。英國の無産政黨(勞働黨)には四百五十萬の組合員を有する勞働組合が其中堅となつて居る。我國に於ける勞働團體への加入者は二十萬人乃至三十萬人であつて、農民組合員の數は六萬に過ぎない。水平社員の内に幾何の有權者があるかは不明であるが、若し社員の數が百萬であると假定すれば、有權者數は二十三萬人位と計算することが出來る。よし此等の三團體が全部無産政黨に加入するとしても、其勢力や甚だ微々たるものである。然らば如何にして其黨勢の擴張を謀るべきか。言ふまでもなく寛容の態度を以て無産階級の大同團結を謀るより外はない。勞働階級は知識階級に對して徹底主義を取つたこともあつた。俸給生活者の中には純勞働者と共同戰線に立つことを好まない者があるかも知れぬ。然し斯樣な排他的精神が無産階級の間に存在して居る限り、無産政黨の運動は決して成功するものではない。

無産者の間に政治的自覺の起らないといふことは勿論悲むべきことであるが、無産者たる者が自ら無産者たることに氣附いて居ないことも無産政黨の發達にとりて大なる損失である。若し無産者といふことが貧困者と同意義であるならば、有權者の中に無産政黨員たることを欲しない者が少なくないだらうと信ずる。私は此際無産者といふことに對し明瞭なる説明を加へる必要があるのではないかと思ふ。私の考へる所によれば、無産者とは主として自分の筋肉勞働若くは頭腦勞働によりて收入を

得て居る者をいひ、有財者とは主として自ら所有せる財產によりて收入を得て居る者をいふのである。故に數百圓の貯金と住宅及び宅地を所有して居る人でも、其人の收入の大部分が其人の勞働から來るのであれば、彼は當然無產階級に屬する。有產者の中には頭腦勞働によりて多少の收入を得て居るものがあるかも知れぬ。然し彼の收入の大部分が貸地、貸家或は株券などから來て居るのであれば、彼は言ふまでもなく有產階級に屬するのである。更に換言すれば無產階級に屬する者は勞働の機會を有する限り可なりの生活を爲し得れども、一たび失業すれば忽ち生活難に陷り、萬一死亡すれば其遺族は忽ち路頭に迷ふことゝなる。無產者には斯の如くにして生存權の保障といふものがない。之に反して有產者は財產によりて生活費を得て居るのであるから、政治的革命の起らざる限り、何等生活上の不安を感ずる必要はないのである。若し此說明が正當であるとすれば、有權者の九割までは私の所謂無產者であると斷言しても差支ない。無產政黨運動の終極の目的は凡ゆる人々に生活の安定を保障するにあるのだから、苟くも現社會に於て生活の不安を感ずる人は當然此運動に參加すべき筈である。此大目的のためには各々の意見の相違や感情の背[illegible]は當然として沒却せねばならぬ。

九州民憲黨員の言ふ所によれば八幡、戶畑及び其他の一市と大なる二郡とより成つて居る選擧區に於ては、此次の總選擧に無產政黨から必ず一名の代議士を選出することが出來るらしい。三重縣は二選擧區に分れ、一方からは四名、他方からは五名の代議士を出すことになつて居る。然るに同縣下には二百十六の水平社の部落があるから、水平社だけの力を以てしても各選擧區から各一名の代議士を選出することが出來るといふことである。第一回の選擧に於て無產政黨が幾人の代議士を議會に送り得るかは容易に豫測を許さぬことであるが、黨員の努力如何によりては各選擧區から各一名を選出することは決して不可能なことではない。有權者の九割が無產者であるとすれば、無產政黨が極めて有利の位地に立つて居ることは明である。無產政黨の意義が彼等に徹底さへすれば、彼等は自己の利益のために進んで參加して來るに相違はない。然し各選擧區に於て無產政黨の中堅となるべき人は黨員募集のために大い努力する所がなくてはならぬ。

總選擧のために選擧費を要するといふことは殆んど自明真理であるが如くに信ぜられて居るけれども、無產政黨の候補者には使用すべき選擧費がない。よし有つても之れを使用してはならぬのである。多額の選擧費を使用することが政治の腐敗を來

志賀直哉著

雨蛙

四六判 上製

定價貳圓五拾錢 送料二十錢

最新刊

清澄にして端嚴なる筆致、精緻にして純眞、奇警なる觀察、漱石歿後の文壇に北斗の如く燦として輝ける著者が、最近會心の作長短十餘篇を收む。文壇一方の雄たる著者の藝術の心境に接せむとする人は本書に就け。殊に『或る男其の姉の死』は暗夜行路と共に氏の最長篇にて百四十頁に達する。本書は最近に於ける小説集中の第一人者である。

雨蛙。冬の往來。濠端の住ひ。偶感。轉生。梟。斷片。
子供三題。震災見舞。廿代一面。或る男其姉の死。

志賀直哉著 小説集 壽々 五版 定價貳圓八十錢 送料廿二錢

發行所 東京芝區愛宕下町 改造社 振替東京八四〇二

す大なる原因であるから、選擧改善の意味からしても無産政黨は選擧費なくして候補者を當選せしむる途を講じなければならぬ。選擧間際になつて有權者を勸誘し若くは爭奪することは、選擧費の必要を生ずる大なる原因であるから、常時に於て絶へず黨員募集に努力することが最も有效なる方法であると信ずる。若し一選擧區内に於ける四百名の中心人物が各五十名の黨員を募集することになれば、其數は二萬人に達し、確實に一名の代表者を當選せしむることが出來る。一人にして五十名の黨員を募集することは容易でないと思はれるかも知れないが、無産黨の宣言と政綱を印刷したビラを用意し、これを示して入黨を勸告し、即時に入黨名簿に署名せしむるといふ手段を取れば、一二ケ月の間に五十名の入黨者を得ることは決して困難でない。旣に二萬の入黨者を得れば彼等は安心して總選擧を迎へることが出來る。新選擧法によれば候補者は演說場として小學校を利用することを許されて居る。印刷物によりて候補者が有權者に政見を郵送することも一回に限り無料で行はれることになるかも知れぬ。斯の如くなれば、無産政黨の候補者は僅かばかりの印刷費及び演說會の廣告ビラ代位で當選することが出來るだらうと思ふ。理想的に言へば彼等には政見發表の演說會を開く必要さへないかも知れぬ。無産政黨の政綱は判然として少しも曖昧な點がないから、候補者が殊更にこれを說明するのは單に蛇足に過ぎない。有權者が政黨に對して忠實でありさへすれば、候補者は單に其名乘りを擧げるだけで充分である。

無産政黨に參加する人々は平常に於ても總選擧の時に於ても多少の黨費を負擔すべしと論ずる人もあるが、私はこれに贊成することが出來ない。若し黨費を徴收することになれば新有權者の中には必ず入黨を躊躇する者が出來る。且つ黨費徴收の手數が煩はしい。若し黨費徴收を規則に掲げることになれば、不納者に對して相當の制裁を加へねばならぬことになる。これは決して無産政黨を大ならしむる途ではない。然し無産政黨の中には必ず幾多の熱心なる黨員が出來るに相違ないから、此等の人々より多少の任意的寄付金を募集することは差支ない。更に仍無産政黨は金力を當にしてはならぬ。然しこれに代へるに勞力と時間の寄付をなすことは必要である。一人にして十人乃至二十人の黨員を募集することは十圓乃至二十圓の寄付をなすよりも一層有効であるかも知れぬ。無産階級には金力がない。然し金力に依賴するよりも各員の努力と熱心を恃むといふことが無産政黨の特徴でなくてはならぬ。『金力を要しない選擧』といふ標語を掲げて突進する所に無産政黨の光榮と成功があることを銘ずる。」

附記　私が此原稿を書き終つた後に得た報告に據れば、八幡市の勞働階級は市會議員選擧のため自ら四名の候補者を立てたが悉く當選しなかつたことである。

過去に於ける日本無産政黨の綱領

赤松克麿

はしがき

曲りなりにも普通選擧案が議會を通過し、我國の無産階級運動者の間に、無産政黨組織の機運が一層強く動きつゝある今日、過去に於ける我國無産政黨の面影を回顧することも、多少の歴史的興味と參考資料となるものがある。概して過去の無産政黨は、極めて不利な環境に處けられた結果、系統的な發達史を編まれる程に行かないで、各政黨が斷續的に出現して、そして悉く短命に終つた。其等のものが大衆化して、顯潮な發達を遂げることは、當時の社會條件が之を許さなかつたのである。故に我國に於ける眞の大衆的無産政治運動は、今後に於て始まると言つて差支ない。私は茲に、過去に於ける我國無産政黨の重なるものとして、東洋社會黨、社會民主黨、國家社會黨、日本社會黨の四黨を擧げる、そして各政黨の表徴たる宣言、綱領、黨則等を主題として、其等の面影を案摘することとする。

一　東洋社會黨

東洋社會黨は　樽井藤吉、赤松泰助氏等が發起し　明治十五年五月廿五日　長崎縣島原江東寺に創立の會議が開かれて作られたものである。此の政黨は、創立後間もなく禁止の厄に遭ふて消滅した。併し無産政黨としては、我國最初のものである。其の綱領手段、盟約、組織は左の如くであつた。

第一章　綱　領

第一條　我黨は道德を以て言行の規準となす

第二條　我黨は平等を主義となす

第三條　我黨は社會公衆の最大福利を以て目的となす

第二章　手　段

第四條　我黨は綱領の主旨を演繹して遊説演説等をする事あるべし

第五條　我黨は平易なる和文の雜誌、漢文の雜誌を發兌し、支那・朝鮮へ我趣旨を擴言するを務むべし

第三章　盟　約

第六條　我黨は黨員相共に此の誓をなすべし

予は諸君と此の社會黨を團結し、諸君と共に我黨旨を擴張するには、諸

君予をして此の社會黨に加盟せしめしに非す、又予が諸君を誘導せしに非ず。諸君が道義心予が道義心と相感合協和して成る所なり、諸君が我黨則を編成せしは、予が曾て心に記銘したる所の者にして、即ち此の黨則は予が精神の共に其の編成に與かりしものなり。諸君よ、此の黨則は予が精神を發表公示するものなれば、予は誓つて此の黨則を作り、他人の毀譽に拘束せられざるべし。且つ予は務めて予が精神の如く、道義に富有なる人と親和交結して我此黨を大にせんとす。予は我黨旨を擴張するに混和を以て行とすべし、敢て敵を求むる如き言行を爲すべからず。然れども我が億兆兄弟中、若し過つて我黨を沮害する時は、予は身を以て我黨に許さん。予身を我東洋社會黨に許すは、諸君に之を許すに非ず。即ち是れ道德に之を許すなり。予が腦裏に予を制する××あらず。予が奏ずる所の××は、一の道義のみ。道義も亦予が腦裏を制する能はず。予が精神は則ち道義なればなり。予は之を心に誓つて以て諸君に示す。

第四章 組織

第七條 我黨は名けて東洋社會黨と稱す

第八條 我黨は同心相聚るものなれば、會長又は創立委員等の名を用ひず

第九條 我黨は全會社に及ぼすものなれば、別に本部末部を設けず、唯だ便利に依り東洋社會黨何國部何郡部等の名稱を稱する事あるべし

第十條 我黨は時々各地に於て集合する事あるべし
但し開會の事は前會に於て豫約すべし

第十一條 會議入費は其席出頭者の自辨するものとす

東洋社會黨は、社會黨とは言ふものゝ科學的な社會主義理論を理解して結黨した譯ではない。併し當時歐洲の社會主義運動が我國の思想界に傳はり、社會黨の名が急進思想家の口に上るやうになつたのは事實であつた。樽井氏一派の革新的意氣に燃えた青年等は、自由民權を叫んだ自由黨や改進黨にも慊らないで、自ら一黨を組織し、社會黨を名乘つて社會運動に出たのであつた。彼等の態度には、東洋的な道德主義又は無政府主義の色彩があるが、また一面に於て、西洋流の功利主義、平等主義を受け入れた處もある。樽井氏は、我國に於て、西洋の社會主義學說を知らないで獨創的に社會主義構造を抱いた一人だと云ふことである。

二 社會民主黨

社會民主黨は、明治三十四年五月廿日、安部磯雄、片山潛、幸德傳次郎、木下尙江、河上淸、西川光次郎の六氏によつて組織されたものである。社會民主黨の組織が成るや、片山潛氏主宰の雜誌「勞働世界」は臨時號を出し、之れに其の宣言書を發表した。此の宣言書は、萬朝報、毎日新聞、報知新聞、新總房新聞、東海新聞の五新聞に掲載された。然るに時の伊藤內閣の內務大臣末松謙澄氏は、結黨の日直ちに之に解散を命じ、其の宣言書を載掲した新聞雜誌に悉く發賣禁止を命じ、且つ罰金刑を

課した。同黨の創立者等は、越えて六月、伊藤内閣が倒れて桂内閣となるや、更に日本平民黨の結社屆を出したが、之れまた解散を命ぜられた。

社會民主黨宣言

如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは、實に二十世紀に於けるの大問題なりとす。彼の十八世紀の末に當り、佛國を中心として歐米諸國に傳播したる自由民權の思想は、政治上の平等主義を實現するに於て大なる效力ありしと雖も、爾來物質的の進步著しく、昔時の貴族平民てふ階級制度に代ゆるに富者貧者てふ、更に忌むべき恐るべきものを以てするに至れり。抑も經濟上の平等は本にして政治上の平等は末なり。故に立憲の政治を行ひて政權を公平に分配したりとするも、經濟上の不公平にして除去せられざる限りは、人民多數の不幸は依然として存すべし。是れ我黨が政治問題を解するに當り、全力を經濟問題に傾注せんとする所以なりとす。

今や我國に於ける政治界の有樣を見るに、政治機關は全く富者の手中に在るものの如し、貴族院が少數の貴族富豪を代表するは言ふまでもなく、衆議院と雖も其の内容を分析すれば悉く地主資本家を代表せるものにあらざるはなし。されば今日の國會を稱して富者の議會といふも、決して誣言にあらざるなり。然れども記憶せよ、國民の大多數を占むるものは、田畠に鍬鋤を採る小作人、若くは工場に汗血を絞る勞働者なることを。彼等は何か故に參政の權を有せざるか、何が故に自己の代表者を議會に送ること能はざるか。是れ果して彼等が無智無識なるためか。將た富者に比して彼等の道德劣等なるがためか。否々決して然らざるなり。彼等は資產なきが爲に、其得べき所の權利を得る能はず、其受くべき教育をも受くる能はざるなり。彼等に生計の餘裕を與へて、教育を受くるの道を得せしむるは、當に富者の務むべき所にあらずや。彼等の爲に政治上の權利を伸張するは、當に政黨の爲すべきことにあらずや。

然るに今日の政權なるものは、全く富者に使役せらるゝ所のものにして、決して多數人民の意志を代表するものにあらず。今や國民の多數を占むる勞働者小作人は無學無識にして、殆んど富者の一顧にも價せざるべしと雖も、彼等は實に財富の生產者なるが故に、將來の社會組織に於て重要の地位を占むるに至るべきは論を俟たず。而して彼等をして其得べき地位を得せしむるは即ち社會全體の利福を增進する所以なりとす。我黨は茲に多數人民の休戚を負ふて生れたり。然れども貧民を庇して富者を敵とするが如き狹量のものにあらず。而して其の志す所は我國の富強を謀るにあれども、然も外國の利益を犧牲に供して顧みざるが如き唯我的のものにもあらず。若し直截に其の抱負を言へば、我黨は世界の大勢に鑑み、經濟の趨勢を察し、××××××××民主主義に依り、貧富の懸隔を打破して全世界に平和主義の勝利を得せしめんことを欲するなり。故に我黨は左に揭ぐる理想に向つて着々進まんことを期す。

一　人種の差別政治の異同に拘らず、人類は皆同胞なりとの主義を擴張すること
二　萬國の平和を來す爲には先づ軍備を全廢すること
三　階級制度を全廢すること
四　×××××××××××、×××く公有とすること
五　鐵道、船舶、運河、橋梁の如き交通機關は悉くこれを公有とすること
六　財富の分配を公平にすること

七　人民をして平等に政權を得せしむること

八　人民をして平等に教育を受けしむる爲に、國家は全く教育の費用を負擔すべきこと

是れ我黨の理想とする處なれども、今日これを實行するの難きは素より論を待たず。故に我黨は左の如き綱領を定めて實際的運動を試みんことを期す。

一　全國の鐵道を公有とすること

二　市街鐵道、電氣事業、瓦斯事業等凡て獨占的性質を有するものを市有とすること

三　中央政府、各府縣、各市町村の所有せる公有地を拂下げることを禁ずること

四　都市に於ける土地は凡て其都市の所有とする方針を採ること、若し之を速かに實行する能はざる場合には法律を設けて土地兼併を禁ずること

五　專賣權は政府にてこれを買上げること即ち發明者に相當の報酬を與へ、而して人民には廉價に其發明物を使用せしむること

六　家賃は其價格の幾分以上を徴收する能はざるの制限を設くること

七　政府の事業は凡て政府自ら之に當り、決して一個人若くは私立會社に受負はしめざること

八　酒税、醤油税、砂糖税の如き消費税はこれを全廢し之に代ふるに相續税、所得税及び其他の直接税を以てす

九　高等小學を終るまでを義務教育年限とし、月謝を全廢し、公費を以て教科書を供給すること

十　勞働局を設置して勞働に關する一切の事を調査せしむること

十一　學齡兒童を勞働に從事せしむることを禁ずること

十二　道德健康に害ある事業に婦人を使役することを禁ずること

十三　少年及び婦人の夜業を廢すること

十四　日曜日の勞働を廢し、日々の勞働時間を八時間に制限すること

十五　雇主責任法を設け勞働者が服役中負傷したる場合には雇主をして相當の手當を爲さしむること

十六　勞働組合法を設け勞働者が自由に團結することを公認し、且つ適當の保護を與ふること

十七　小作人保護の法を設くること

十八　保險事業は一切政府事業となすこと

十九　裁判入費は全く政府の負擔となすこと

二〇　普通選擧法を實施すること

二一　公平選擧法を採用すること

二二　選擧は一切直接とし且つ無記名とすること

二三　重大なる問題に關しては一般人民をして直接に投票せしむるの方法を設くること

二四　死刑を全廢すること

二五　貴族院を廢止すること

二六　軍備を縮少すること

二七　治安警察法を廢止すること

二八　新聞條令を廢止すること

我黨は此の如く社會主義を經とし、民主主義を緯として其旗幟を明白にせり（以下略）

社會民主黨々則

第一條　我黨××××××××するを以て目的とす
第二條　我黨は社會民主黨と稱す
第三條　我黨の事務所を神田仲猿樂町九番地に設く
第四條　一定の職業を有する者會員二名の紹介を以て入黨を申込み、評議員會の決議を經たる時は會員たることを得。黨則に反き其他黨の名譽を毀損したる者は評議員會の決議を以て之を除名す
第五條　幹事二名評議員若干名を置き大會に於て之を選擧す
第六條　會員は黨費として毎月貳錢を納むべし

三　國家社會黨

國家社會黨は、明治三十八年八月、山路愛山、中村太八郎、斯波貞吉氏等によつて組織された。同黨は多分に傳統主義を取り入れ、他の諸政黨に對し異彩を放つて居る。其の主張は最も穩健であり、最も社會政策的である。創立者等が心底に期するところは、我國情に即した社會民主主義を樹立するにあつたといふことである。國家社會黨は、明治三十九年の四月、日本社會黨（後に說く）と提携して、東京市街電車の賃銀値上に反對し、市民大會を開き遂に騷動を惹き起すに至つた。同黨は比較的壓迫を受けないで發達したが、明治四十三年の大逆事件の起るに及んで、當局は次第にこれを干渉の態度を示すやうになり、其の結果遂に解散するに至つた。左に其の宣言、政綱、黨則を掲げる。

國家社會黨宣言

謹んで案するに、日本の國體は始めより家人父子の情を以て君民を結び、共同生活を以て其根本義としたる者なりき。試に神武天皇東征の詔を見るに、其大御心は實に所在に割據したる酋長の抑壓より人民を救ふにあらせられしが如し。故に舍人親王の書紀に當時の事を記して曰く、邑に君あり、村に長あり、各自ら疆を分ちて用て相凌躒ると。人民が無慈悲なる豪族の暴横と其無益なる生存競爭に疲れたるの狀察するに餘りあらずや。人若し人類學者の教に從ひ日本群島の所在に殘存せる古代酋長の遺跡を見ば、必ず豪族の人民を苦役したる當年を想起せざること能はざらん。當時各所に割據したる豪族は埃及のパロ王がイスラエル人を苦しめんとて辛き力役を以て之に強ひ、炎天爍日の下に於て、日の出より日の入るまで和泥作瓦等の勞役に使事せしめたるが如く、吾人の祖先を苦しめつゝありしなり。此の時に當つて我皇室は、此の如き苦艱より日本人民を解放し、吾人草は天皇の御寶なり、敢て豪族酋長の虐使すべきものに非ずとの一大政綱に依りて國家統一の大事業をなし玉ひき。是れ豈に人權宣言に均しき福音に非ずや。是豈日本の國家は君民相見ること家人父子の如くなるを以て其根底とすることを證すべきものに非ずや。爾りしより後、世々の聖主賢相、常に君民和し豪族の專横を抑ふるを以て念とせざることなし。故に聖德太子の憲法には、國司國造の私に百姓に收斂することを禁じ、仁　天皇の御製には、山縣に蒔ける青菜も吉備人と共にしつめば樂しくもあるかと詠ませ玉へり。大化の新政に至つては、即ち更に此政策を擴充したるものにして、宮家部曲を廢棄し、土地國有の大義を明にし、總日本の人民に與ふるに一定の產業を以

てしたり。開國の宏圖此に至りて略ぼ成れりと謂ふべし。

之を要するに、二千五百年間に於ける帝國の歷史は幾たびか其外觀を改めたりと雖も、仔細に其發達の路を見ればテニソンが歌ひし如く進歩の一線は絕えず其間を貫けり。藤原氏、平氏、源氏が或は外戚の威により、或は兵馬の力を頼み、政權を私門に集めしが如きも、歷史の乾光を假て之を照せは、是れ實に自然が生じたる妙機にして、英人の其代議政體の特色として誇りつゝある大臣責任の主義が形を代へて我國に行はれたるものなり。此妙機ありしが爲に皇室の威稜は人民の幸福と牴牾することなくして以て今日に至ることを得たり。此妙機ありしが爲に吾人の祖先は當時の政治に滿足せざる時は、藤原氏を倒して平氏を以て之に代へ、平氏を倒して源氏を以て之に易へ、自ら政府を造り、政府を選ぶの能力あることを示し、而かも之と共に益々皇室の神聖を渇仰し、政府の一起一倒を以て國民固有の勤王心と相觸れざらしむることを得たり。たとへば徳川氏の末路の如き志士仁人其內政外交の失敗を見るに堪えず、起つて之を倒し、而かも中心自ら疚しとせず。敢て亂臣賊子たるの自覺なかりし者は、誠に徳川氏は則ち皇室が人民の爲めに其の存在を許し給ひたる政府にして、國利民福と相關せざる間のみ其存在を容忍すべきことを認識したればなり。則ち徳川氏は二百六十年長期內閣にして、維新の改革は單に內閣更迭たるに過ぎざるなり。此の如くにして日本人民が常に其主權者たる皇室の威稜に依り、其惡む所の政府を倒し、其好む所の政府を建て、二千五百年間君民の情、家人父子の如く、其間未だ嘗て一毫の芥帶なく、君主の心は則ち人民の心にして人民の心は則ち君主の心たり。二の者にして一、一にして二、膠漆の如く水魚の如く之を千秋萬歲に傳へんと期する者は、豈是日本國體の精華にして吾人の世界に向つて誇揚せんと欲する所にあらずや。

我國家社會黨は此の如き國體の長所を發揮し、歷史の指示に基き、共同生活を以て治國の精神とし、此の政綱によつて現代の時務に貢獻せんと欲するものなり。（以下略）

國家社會黨政綱

一　吾人は大日本の國體は家人父子の情を以て、億民を團結し、國家の權力に依りて共同生活の大義を遂行すべきものなることを主張す

一　吾人は大日本の臣民は總て選擧權を享有すべきものなることを主張す

一　吾人は國家は總ての國民に教育を施すべき義務あることを主張す

一　吾人は國家は常に勞働者の當然享受すべき幸福を保護するの義務あることを主張す

一　吾人は國家は人民の共生活の道を失ひたるもの及び鰥寡孤獨廢疾にして依る所なきものを保護するの義務あることを主張す

一　吾人は國家は學術技術の進歩發明を奬勵し、文學美術の普及發達を保護すべき義務あることを主張す

一　吾人は國家は國民の產業を保護發達せしめ、平和的に國民の活動すべき地域を擴張すべきものなることを主張す

一　吾人は國家は個人の富の程度に從ひ、其の納稅の義務を累加するを以て稅則の根本法とすべきものなることを主張す

一　吾人は國家は各國民共通に利益を享受すべき聯盟を爲すべきものなることを主張す

一　吾人は自治制の發達を期するが爲めに都市社會政策を採るべきこと

ことを主張す。

國家社會黨々則

第一條　本黨を國家社會黨と稱す
第二條　本黨は本部を東京に置き支部を各地に置く
第三條　本黨に左の役員を置く
一　幹事二名、黨員に於て選擧し其の任期を一個年とし黨務を處理す
一　委員若干名、必要の場合に便宜之を設く
第四條　本黨は毎年一回大會を開き、毎月一回例會を開く。但し必要の場合は臨時會を開く
第五條　本黨員は入黨の際入黨金五拾錢を納め、尚ほ毎年黨費金參拾錢を出すものとす
第六條　本黨に入らんとするものは黨員の紹介を以て幹事に申込み、其の承認を得べし
第七條　本黨の經費は黨費並に寄附金を以て之に充つ
第八條　入黨金は本黨の基本金とし永遠に之を貯殖すべし
第九條　本黨に對し不都合の擧動ありたるものは幹事に於て之を除名す
第十條　本黨員にして支部を設けんと欲するものは、規約を添へて本部の承認を受くべし
第十一條　本黨支部に於て役員の選擧又は異動ありたる時は本部に報告すべし
第十二條　本黨則は大會の議決にあらざれば變更することを得ず

四　日本社會黨

日本社會黨は明治三十九年二月、堺利彥、深尾韶氏等によつて組織された。同黨は二月廿四日に第一回大會を開いて評議員を選擧した。評議員等は同月廿七日會合して、堺、西川、森近の三氏を幹事に選擧し、大會から委托された左の如き黨則を作つた。

日本社會黨々則

第一條　本黨は國法の範圍に於て社會主義を主張す
第二條　本黨の目的に賛成し評議員の承認を經たる者は黨員たることを得
第三條　本黨本部は東京市神田區三崎町三丁目一番地に置く
第四條　本黨に左の役員を置く
一　評議員十三名　幹事三名
評議員は大會に於て選擧す　幹事は評議員中より互選す　役員の任期は一個年とす。
第五條　評議員は黨務一切の責に任じ、幹事は庶務に從事す
第六條　本黨は毎年一回定期大會を開き、必要なる場合には臨時大會を開く
第七條　黨員は毎月金五錢以上の黨費を負擔す
第八條　黨員にして黨の體面を汚す者は、評議員會の決議を以て除名することを得
第九條　本則は大會の決議にあらざれば變更することを得ず

日本社會黨第一回大會は、明治四十年二月十七日、神田錦輝

館に開かれ、評議員會提出の黨則改正案を可決した。

黨則改正の主なる點は、第一條の「一國法の範圍に於て」を削つて、遠慮氣味な調子を除いたことゝ、黨費を黨員の負擔にしないで寄附金に仰ぐやうにしたこと等である。

次に大會の主要問題たる宣言及び決議の議事に入り、堺氏先づ立つて左の評議員會提出案を説明した。

決議案

我黨は現時の×××××××××××××××××××××××となし、人民全體の利益幸福の爲に之を經營せんと欲する者なり。我黨は此の目的を持し現時の情勢の下に於て左の件々を決議す。

一　我黨は勞働者の階級的自覺を喚起し其團結訓練に勉む

一　我黨は足尾勞働者の騷擾に對し遂に軍隊を動して之を鎭壓するに至りしを遺憾とし、之を以て甚しき政府の失態なりと認む

一　我黨は世界に於ける諸種の××××××××××××を表す

一　左の諸問題は黨員の隨意運動とす

い　治安警察法改正運動

ろ　普通選擧運動

は　非軍備主義運動

に　非宗教運動

超えて二月十九日、平民新聞第二十八號は、大會記事及び田添幸徳二氏の演説筆記を掲載したところ、政府は幸徳氏の演説筆記並びに大會記事中の決議案を以て朝憲を紊すものと認め、平民新聞を發賣禁止すると共に、編輯發行人石川三四郎氏を起訴した。更に廿二日に至り、政府は日本社會黨の結社を禁止し、解散を命じた。

無産政黨と綱領の問題

山川均

一

資本主義は今、その發達の如何なる段階を歩んでゐるだらうか。吾々は今、資本主義の發展行程の、如何なる曲がり角に立つてゐるだらうか。一般的には、資本主義の發展といふ背景のうちに、無産階級の占めてゐる地位と、その歴史的の任務と、

その階級的の目的は何であらうか。そして特別には、資本主義の現在の發達段階に於いて、生産階級がその鬪爭の當面の目標としなければならぬものは何であり、且つこの鬪爭のために取るべく戰術は何であらうか。

この問題はまた、世界的資本主義に對する世界的無產階級といふ一般的の立場から考へなければならぬと同時に、日本に於ける資本主義の特殊な發展と、この發展によつて生み出された特殊な社會的諸勢力の權衡とこれに對する日本の無產階級の特殊な歷史的地位といふ、特殊な立場から考へねばならぬ。すべて是等の問題に對する明確な答は、無產階級の政治上の、鬪爭を統一し、整理し、指導するために必要欠くべからざるものであつて、やがて之が無產政黨の綱領の根底となるべきものである。階級的に成熟した無產階級の政黨の綱領のうちには、これ等の問題に對する答が最も明確な公式の形で含まれて居なければならぬ。

尤も日本の現在では、諸種の事情を考慮に入れて見ると、近い將來に生まれる無產階級の政黨がその綱領のうちに、これ等の理論上原則上の問題をどれほど明確にすることが出來るかは疑問であつて、少なくとも或る時期の間は、綱領中のこの部分——最も重要にして根本的な部分——を全く省略するか、又は極めて抽象的な形で簡潔に取扱ふの外ないかも知らぬ。

若し綱領のうちからこれ等の理論上原則上の方面が省略せられるとすれば、無產政黨はその綱領として、これ等の理論と原則から導き出された個々の要求や具體的の約束（普通に政綱政策などゝも呼ばれてゐる）を掲げることになる。

そこで日本の無產政黨が、無產階級の歷史的の任務を、階級的の目的と鬪爭の根本戰略とに關する多かれ少かれ理論的原則的な、一般的の綱領を掲げると掲げぬとに拘はらず、苟も何等かの綱領と名づけるもの（或は政綱と名づけるもの）を掲げる以上は、この綱領を決定するものは、無產階級の歷史的任務と、階級的目的と、鬪爭の根本戰略とに關する一般的の綱領でなければならぬ。今日まで、無產階級の綱領について論議せられてゐるのは、主としてブルジョアジーの政黨に對する無產階級の個々の要求條項、乃至は大衆に對する無產政黨の具體的な約束條項についてゞあつて、これ等の要求條項や約束條項を決定する理論的、原則的、一般的の綱領については、多く問題とせられて居らぬようである。けれども——問題とせられて居らぬ——のは、たゞ公然の討論の問題とせられて居らぬだけであつて、苟めにも無產政黨要求條項や約束條項について一定の考へを持つてゐる人々は、暗默の間に、少くとも自分自身に取つて

は、行の根本問題を決定し、自分自身の理論的、原則的、一般的の綱領を――意識的に無意識的に――頭の中に起草してゐるのである。

そこで無産政黨の綱領について今日まで現はれないかの「私案」（私の見たのは僅かに三種である）は、いづれも無産階級の個々の要求條項乃至は約束條項に限られたものではあるがこれ等の要求乃至は約束は、實際に於ては――意識的にか無意識的にか――一層根本的な理論的、原則的、一般的な綱領の上に築づかれてゐるものであることを見落してはならぬ。

二

無産政黨の行動の綱領は、一般的には世界的資本主義に對する世界的無産階級の使命についての理解に基づかねばならぬと同時に、日本の資本主義の特殊な性質と、これから生じた特殊な形勢とに基かねばならぬ。最近多くの人々の注意が一般的な『資本主義から特に』日本の資本主義に向けられて來たのは喜ぶべきことであつて、無産階級運動の進歩と成熟との一つの段階を表はしたものである。

然しながら日本の資本主義の『特殊性』の研究は二つの方面に於いて、無産階級の運動を小ブルジョア的運動に『方向轉換』をなさしめる二つの口實となり、二つの方面から、無産階級運動の間に小ブルジョアのアイデオロギーの潜入する二つの孔となつてゐる。

日本の資本主義の特殊な性質に注意した多くの人々は、少くとも二つの大きな點について、大體に一致してゐるようである。即ち第一には、日本の資本主義は世界の資本主義並みに反動主義の時代に入つてゐるにも拘らず、中世紀的勢力が依然として優勢であつて、資本主義は政治上のデモクラシーを完成して居らぬ、といふことである。

それ故に――或る聰明な人々は主張する――それ故に日本の無産階級の政治運動は、先づ日本に政治上のデモクラシーを完成する運動――ブルヂョアジーと反動主義化した資本主義の下に於て、政治上のデモクラシーが完成し得られることを前提とする運動――でなければならぬ。即ち吾々の政治運動は、決して無産階級の運動ではなくして、ブルジョア乃至は小ブルジョア・リベラリストの運動でなければならぬ。吾々はリベラリストに生まれ變はらねばならぬ。

若し吾々が、日本のブルジョアジーは政治上のデモクラシーを發達しなかつたといふ『現實』に立脚するならば、吾々は次の如く結論しなければならぬ。――それ故に日本に於いて、反

動主義化したブルジョアジーから、中世紀的反動勢力と抱合し同化したブルヂョアジーから政治上の自由を獲得することは×××無產階級の任務でなければならぬ。それ故に日本に於ては、最早や（無產階級の鬪する限り）純然たるリベラリストの運動はあり得ない。それ故に日本に於ては、政治上の自由に對する無產階級の鬪爭は、最後の勝利と解放とを目標とする鬪爭と、切り離すことの出來ない關係を持つてゐる。そして吾々は「現實に立脚した」この結論を以つて、無產政黨の行動綱領を定める根本基調としなければならぬ。

無產政黨は日本の現在の社會的諸勢力のうちで、中世紀的勢力と反動的ブルジョアジーに對する反對勢力は何々であるかを計算し、これ等の勢力を利用することを怠つてはならぬ。また無產政黨が差當り、その行動綱領のうちに揭げ得る政治上の要求條項は、小ブルジョア急進主義乃至はリベラリズムの範圍を出でないものとなるかも知れぬ。けれどもこれは決して生產階級の政治運動が、小ブルジョア急進主義、乃至はブルジョア・リベラリストの運動となつたことを意味しない。

之に反して日本に於ける資本主義の特殊な性質から、吾々の政治運動はリベラリズムの運動でなければならぬと結論するのは、「現實に立脚した」小ブルジョア的幻影に外ならぬ。それは『現實』を反映した思想には違ひないが、小ブルジョア的解釋の鏡に映つた歪んだ『現實』である。今後無產政黨の準備運動が進行するにつれ、この種の幻影に捉はれた「現實主義者」は、勢ひ既成政黨中の急進分子と抱合しようとするに相違ない。そして彼等が眞底からのリベラリストと成り切る爲めには、彼等は無產階級運動中の謂ゆる急進分子、乃至は左傾分子との斷絕を必要とするに相違ない。そこで組合運動の方面でも政黨運動の方面でも、謂ゆる急進分子左傾分子を排斥する運動が行はれ、無產階級の陣營は彼等のために撹亂せられるかも知れぬ。すべて此種の階級的裏切の行爲を理論づけるのが、日本の資本主義の「現實に立脚した」小ブルジョア的幻影の任務である。

三

日本の資本主義について多くの人々の一致する第二の特徵は、日本の資本主義は、企業の集中の程度に於いても、機械化の程度に於いても、遙かに先進國の水準に達せぬうちに、早くも行詰つたといふことである。そこで資本主義が行詰つてゐるといふ點では、先進國の資本主義も日本の資本主義も同じであるが、その內容には多少の相違がある。假りに先進國の資本主義は、行く處まで行つて行詰つたものであるとするならば、即ち

踏むべき段階を殘らず踏み盡して、今が最後の段階に達したものであるとしたならば、日本の資本主義には尙ほ踏むべき發達段階が殘つてゐる。然るに現在の發達段階から次の發達階段に圓滑に推移することが六ケ敷いといふ意味に於て、日本の資本主義は行詰つてゐるといふことになる。例へば日本の工業は、まだ先進國の水準にまで集中せられて居らぬ。そこで或る條件の下には、日本の資本主義には尙ほ發達の餘地が殘されてゐる。また日本の工業は、まだ概して粗工業の段階にある。そこで或る條件の下には、日本の資本主義は粗工業から精工業に推移することによつて、新しい運命を開拓することが出來る。現在の降り坂、乃至は行詰りの狀態から、再び登り坂に轉ずることが出來る、といふことになる。

日本の資本主義は必然に、現在の段階から次の段階に推移するであらうか。又しなければならぬのであらうか。そして日本の資本主義はこの推移によつて、必然に新しい發達の運命を打開し、そして先進國の資本主義が通過したやうな、今後何十年間かの登り坂を辿るであらうか。そして無產階級は必然に、資本主義が斯ような發展段階を正規に踏み終るのを待つて、初めてその階級的の目的を達するものであらうか。私は今これ等の問題に答へようとしてゐるのではないが、之に對する答が、無產階級運動の上に至大な關係のあることは云ふまでもない。

日本の資本主義は必然に新しい段階に推移し、そして必然に、今後何十年かの間の登り坂を辿るものであり、そして之が日本に於ける資本主義的發展の必然の道であり、特殊な性質であるとしたならば、無產階級運動はこの『現實』を無視することとは出來ぬ。少くとも來るべき何十年かの間の無產階級運動の目的は、この好況時代の利潤に對する、より多くの配當の要求に外ならぬ。現在の段階に於てたま〳〵行詰つた日本の資本主義を助けて、新しい段階への圓滑な推移をなさしめることは、無產階級の生活を改善する唯一の方法——合理にして可能な唯一の方法——である。これに反して、無產階級の過大な要求は、この圓滑な推移を妨げるものであつて、それは『現實』を離れた不可能にして不合理な要求であるばかりでなく、却つて無產階級の利益に反するものである。そこで少くとも日本の資本主義をして現在の難關を打破せしめる範圍に於ては、無產階級は資本主義と協力しなければならぬ。

日本の資本主義的發達の特殊な性質についての斯ような見解を、これ程まで明白に主張してゐる人はないかも知らぬ。けれども『現實に立脚する』といふことは、資本主義が何等の苦痛なしに現在與へ得るところのものを要求することであり、勞働

階級の生活を改善するために、ブルジョア政府と協力することであると理解してゐる人々は、意識的にか無意識的にか、日本の資本主義的發展に對する斯ような見解をもつて、その「右傾」を理論づけてゐるのである。

そこで日本の資本主義の特殊な性質——その二つの方面——に對する以上二つの見解を結びつけると、こゝに立派な、小ブルジョア急進黨の綱領の基礎が出來上がる。

吾々は斯ような小ブルジョア急進主義が一箇の政治勢力となつて、既成政黨から分裂することを希望するのであつて、選擧權の擴張は、多かれ少かれそれを可能とするものであり、その機會を醸成するものである。けれどもそれと同時に——と云ふよりも寧ろそれ故に——無產階級が純然たる階級的立場の上に、ブルジョアジーの一切の政治勢力——未來の小ブルジョア急進黨をも含めて——かく獨立した無產政黨に結束することを、焦眉の必要とするのである。

四

無產政黨の政治上の綱領——乃至は政治上の要求條項——は、現に既成政黨のうちに見られる最も急進的な小ブルジョア・リベラリストの要求よりも、一層急進的なものになるには相違ない。またさうならねばならぬ。けれども如何に急進的であつても、それは現行の憲法の範圍内に於て許される最大限度の自由とデモクラシーとの要求であつて、固よりこの範圍を越えるものではない。從つて無產政黨の政治上の要求と均しい要求は、小ブルジョア急進黨の綱領中にも掲げることが出來る。日本の現在には、勿論これに相當した小ブルジョア黨はない。また近い將來にこの種の政黨が出現するかどうかも疑問である。けれども少くとも無產政黨の政治上の要求條項の或るものは、ブルジョア政黨の最左翼によつても主張せられるものがあるには相違ない。從つてこの範圍に於ては、無產政黨は小ブルジョア急進分子と共同の戰線に立つことゝなる。

中世紀的勢力の遺物を抱合したブルジョアの反動主義に對しては、無產階級は小ブルジョア急進分子と共同戰線に立つことを躊躇せぬ。但しこの場合に「共同戰線」といふ言葉は、單なる大同團結と云ふが如き廣義のものではなくて、最も嚴密な、狹義に解しての共同戰線である。大同團結は共通の目的のために無產階級と小ブルジョア急進分子とが、本來の階級的立場を棄てゝ融合することを意味してゐる。之に反して無產階級がブルジョア反動主義に對して小ブルジョア急進分子と共同戰線に立つ場合には、無產階級は決して本來の階級的立場から下つて、

小ブルジョア急進主義のうちに溶解し、小ブルジョア急進運動の一部分となつたものではない。無産階級は小ブルジョア反動主義に對して共同戰線に立つてゐる瞬間にも、彼等の小ブルジョア的行動を批評し、大衆の前に、彼等の小ブルジョア的性質を爆露することが出來、また爆露しなければならぬ。

假りに無産政黨の政治上の要求條項が、最も急進的な小ブルジョア急進分子の要求條項から一歩も踏み出すことを許さぬと假定しても、無産政黨はこれ等の政治上の要求條項を、無産階級に特殊な要求、無産階級的の要求條項と結合することが出來る。本來の性質に於いては小ブルジョア、リベラリズムの要求に、無産階級的要求の性質を賦與するところに無産政黨の性質があるとも云ふことが出來る。

無産政黨に、明白な階級的性質を與へるものが政治上の要求條項でないとしたならばそれは勢ひ經濟上の要求條項でなければならぬ。

五

無産政黨はその經濟上の要求に於いて、無産階級黨なる階級的性質を、大膽に表示しなければならぬ。一切のブルジョア既成政黨は、『國民全體の利益』『國家全體の利益』の法衣に依つて階級的性質の鎧を押し隱くしてゐる。若し無産政黨が經濟上の要求によつて無産階級的性質を明かにすることに失敗したならば、それは無産階級黨たることに失敗して、小ブルジョア急進黨に墮落したものである。政治上の自由とデモクラシーの要求は、無産階級の特殊な要求――經濟上の階級的要求――と結びつけられた時初めて無産政黨の綱領の一部となることが出來る。

無産政黨の經濟上の要求は、大膽明確に無産階級的の性質を表はさねばならぬといふことは、必ずしも無産階級の終局の目標と終局の要求とを掲げねばならぬといふ意味ではない。無産政黨がその綱領のうちに、無産階級の經濟上の最終目標を明示することは、形勢がこれを許す限り、固より望ましいことであり、また必ず爲すべきことである。けれども如何なる形勢と事情との下にも、たゞそれのみが無産階級的の要求となり、たゞそれのみが×××の要求となる譯ではない。

之に反して無産階級の當面の部分的の要求といへども、同じく無産階級的の要求となり、×××の要求となる。否た或る形勢と事情の下に於ては、部分的の要求が却つて終局的の要求よりも、一層×××た要求となる場合がある。

この意味に於いて、無産政黨の經濟上の要求は、『現實』に立脚したものでなければならぬ。現實に立脚するとは、無産階級

の要求を、資本家が何等の苦痛と犧牲なしに與へ得る範圍のものに限るといふ云ふ意味ではなくて、無産階級の現實の要求に立脚することである。それはブルジュアジーの厚意と憶斷定の現實に立脚することではなくて、無産階級の現實に立脚することである。

從つてまた、無産政黨の經濟上の要求は、今日要求して明日直ちに容れられる範圍のものに限るべき必要はない。その要求が、現在の行詰つた日本の資本主義の範圍内に於て、實現することが出來るか出來ぬかは、固より問ふところでない。無産階級は、當然受くべきところのものを要求すれば足る。資本主義が借金によつてこの要求に應ずるか、それとも破産によつてその債務を免かれるかは、無産階級の與り知るところではないのである。日本の資本主義は行詰つてゐる。これは何人にも異論はない。けれどもそれ故に、無産階級はその經濟上の要求を、資本主義の能力の範圍内に限定しなければならぬと主張するものがあるならば、その人は無産階級を代表する人ではなくて、資本主義を代表する人である。吾々は現實に立脚しなければならぬ。これは何人にも異論はない。けれどもそれ故に、行詰つた資本主義の範圍内で實現することの出來ない過大な要求をすることは、却つて誤れるものであると主張する人があるならば、その人は無産階級の現實を踏み外づして、資本家階級の現實の必要に立脚する人である。

そこで無産階級の現實の必要と要求とに立脚してゐる以上は、その要求が如何に根本的であり、如何に反資本主義的であらうとも、それ故に現實を離れた要求であるとは云はれない。それと同時に、その要求が如何に部分的なものであらうとも、たゞそれ故に、無産階級の××要求となることが出來ぬとは云はれない。何故ならばこれ等の部分的の要求は、無産階級的鬪爭の出發點となるものであつて、そのうちには階級鬪爭の發展性を含んでゐるからである。

無産政黨の經濟上の要求條項は、是等の要求のいづれをも含まねばならぬ。

六

日本の人口のうちには、多數の小ブルジョアの下層と中間的の階級(小自作農、小商人、俸給生活者の或るものなど)を含んでゐる。無産政黨は、分散的に優勢なこれ等の要素を無視することは出來ぬ。これ等の社會層を出來得る限りブルジョア反動主義の勢力から引離すことは、無産政黨の任務の一つでなければならぬ。

それが爲には無産政黨は、或る點まで、これ等の要素の利害に妥協しなければならぬ場合がある。

けれども無産政黨が無産階級の政黨である限りは、如何に妥協的の態度を取つても、これ等の要素の利害を代表する可能性にはおのづから限界がある。勿論これ等の社會層のうちには、小ブルジョア的アイデオロギーに支配はせられてゐても、事實上は無産者たる要素がある。從つてこれ等の分子の利害は、無産階級の經濟上の要求によつて代表することが出來る。

之に反して小商人を利潤收得者の資格に於いて、無産政黨がその利害を代表し、これによつて彼等をその指導の下に置くとは不可能である何故ならば利潤收得者としての彼等の利害は、無産政黨よりもブルジョア政黨によつて、一層よく一層有効に代表せられるからである。例へば小商人の階級を味方とするために、無産政黨は營業税の撤廢をその綱領に加へねばならぬといふが如き法外な主張(この主張は、近頃どこかへ姿を消した)が、全然無意味な妥協であるのはその爲めである。

之に反して、これ等の要素は利潤の收得者としてよりも、一般消費者としてより多くの利害を持つてゐる。そしてこの範圍に於ては、無産政黨はその無産階級的の性質を毀づけることなしに、或る程度までは彼等の利害と妥協することが出來る。

無産政黨の構成要素に就て

島中雄三

一

理論は我々に方向を與へる。しかし結局それは方向である。實際の問題は曾て理論によつて解決された例しはない。我々が今、當面の問題としてゐる無産政黨の組織に就ても、豫め愼重なる調査と研究とを要する事柄はあまりに多い。而もその調査と研究とは、主として日本の現在の、政治的、經濟的、社會的の狀況と、その發展過程との上に係るものであつて、それらの

條件の如何により、組織さるべき政黨の形態及び内容は定まるのである。言葉を換へていへば、我々が當面の題目は、如何なる種の政黨を、如何なる風に組織すべきかの問題ではなくして、如何なる種の政黨を、如何なる風に組織することが、現在に於て可能なるかの問題である。而も此の二つは、決して異なつた途を取るものではない。何となれば、我々無產階級の運動が既に現實の運動であるかぎり、現實に可能なる範圍において、おのづからその方策は決定せらるべきであり、また決定せられねばならぬ筈だからである。

もとより無產階級の運動は、無產階級の解放を最後の目標とする。それが政治運動であると經濟運動であるとに拘らず、此の目標を見失ふことは運動自身の墮落である。しかしながら、如何に目標がそこにあるからといつて、現實立脚の地點を正視することを忘れたならば、目標は單なる目標たるに止まり、我々は一歩も之に近くことが出來ない。人生は複雜である。世路また難險である。殊に我が無產階級の運動に於ては、その理想の高遠であればあるほど、現實立脚の地點との間に餘程の距離があることを覺悟しなければならぬ。無論そこには、山もあれば川もあり、越ゆるに難き絶壁もあれば、渉るに術なき溪流もある。それを目して進むためには、時には迂回の途を取らなければならない。時には目標を背後にして、一見反對の方向にその歩を進めなければならない。此の場合皮相の純理論を以てすれば、或は運動の墮落とも考へよう。或は無產階級精神を措き忘れたものとも見えよう。しかしそれが必然通らねばならない徑路であるかぎり、眞の無產階級運動者にとつて、それは殆ど決定的なる唯一つの歩みでなければならぬ。彼の抽象的なる、概念的なる、形式一遍の純理論が、しばしば實際運動家にとつて、輕蔑の外の何物をも値しないのはこゝである。

二

斯樣に、無產階級運動の方策は、現實の社會的條件と、その必要とに應じて、幾多の迂餘曲折をたどらなくてはならぬ。殊に、資本主義の變則的發展を遂げつゝある日本としては、最も此の間の必要を重視しなければならぬ。そこで、今、當面の問題とされてゐる無產政黨の構成要素に關しても、單に漠然たる階級概念を以て、その範圍を局限する如きは、策として最も宜しきを得ざるのみならず、既に出發點に於てその第一歩を誤つたものと謂はざるを得ない。

思ふに、構成要素の問題は、當然また綱領の問題と密接に關聯するものであつて、二者を切り離して考へることは、到底一

の空想である。即ち綱領の問題は、無産政黨が如何なる要素によつて構成せらるゝかの決定を待つて、初めて定まる問題であると同時に、構成要素の問題も亦、無産政黨が如何なる綱領の下に進むかによつて、初めて決せらるべき問題である。斯く相互に關聯しあふ問題である以上、今日直ちに此の問題に對して、確定的なる答案を示すことは、何人も難んずる所に相違ない。たゞ、今日に於て、大體決定し得ることは、我々無産階級の政黨として取り得る思想的立場である。そして此の立場の決定の上に、大まかながらも構成要素の問題は定まり、綱領の問題は定まるのである。

然らばその思想的立場とは何であるか。

無産政黨の政黨として取り得る思想的立場、――やがてまた無産政黨の政黨として取るべき思想的立場を講究することは、無産政黨の組織に當りて第一番に必要なる事柄である。けれども此の問題は、今私としては多く觸れることを許されぬ。たゞ簡單に結論をいへば、日本の現在に於て、少くとも近き將來に於て、當然組織さるべき無産政黨の思想的立場は、如何なる點より考へても、決して純然たる無産階級的思想の立場ではあり得ないといふことである。むしろ多分に、所謂小ブルジョア的自由主義に立脚するものでなければならぬといふことである。

蓋し資本主義の變則的なる發展を遂げた日本においては、封建制度の殘存勢力が、今日尚ほ拔き難き根柢をもつてゐることは何人も觀る所の事實である。そしてこの事實は、日本に於ける資本主義が、その發達の中途において、歐米の帝國主義的資本主義の壓迫を受け、舊勢力と妥協するにあらざれば、その資本的勢力を築くことが出來なかつた情勢においての、實に已むを得ざる結果であることはいふまでもない。即ち日本の資本主義は、曾て歐米に於けるが如き自由主義としての歷史的使命を果して居らぬ。その所謂帝國主義は、資本主義が當然に發達して、最後の發達階段たる帝國主義の形をとつたものではなく、むしろ封建的帝國主義が、近代資本主義の影響を受けて、必要的に資本主義化したものであると觀ることが出來る。そこで今日となつては、資本主義は最早封建勢力の敵ではなくして、その味方である。封建勢力を從へるだけの實力もなければ、またその必要もない。尤も、ある場合に於て、封建勢力の跋扈が資本主義の發達を阻害してゐる事實も無いではない。そしてその都度、資本主義が、之に對して若干の反抗を試みたことも無いではない。けれどもそれは、親爺の脛を嚙つてゐる息子が、たまたま都合の悪い時に、親爺の頑冥を罵る程度のものであつて、強いて親爺に反逆して獨自の勢力を打ち樹つるだけの、意

氣も抱負もあるものであつた。それとゝもに、彼等の擁る、ものは無産勢力の援助である。即ち資本勢力は、封建勢力と共に、今や無産勢力に對して共同の戰線を張らなければならない必要に迫られてゐる。歐米に於ける資本主義が、曾て自由主義の使命を果したやうに、將來日本の資本主義も亦、自由主義の大旆を眞向にかざして、封建勢力の殘存分子を微塵に打ち砕き得ると考へるならば、明かにそれは間違ひである。

然らば、日本の封建勢力を根柢より一掃するものは何であるか。いまふまでもなくそれは無産階級の勢力である。而も無産階級の自由主義的勢力である。言葉を換へていへば、無産階級の經濟的實力にバツクされたる自由主義思想の勝利である。私は此處に、日本の特殊事情があると思ふ。

概念的なる直譯社會主義者の解するところによれば、自由主義とは常にブルジョア的、乃至、小ブルジョア的でなくてはならぬことにきめられてゐる。しかしながら、自由主義そのものは、もと／＼特殊の階級に固有のものではなくして、むしろ人間性の本質より湧き出でたる被壓迫者の叫びである。さればこそ、封建勢力の强壓に對して反抗の烽火を擧げたる時代に、その叫びは當時の被壓迫階級たるブルジョアジーから放たれた。今や彼等は支配階級として、封建勢力以上の壓迫を無産階級に加へてゐる。自由主義の時代は、當然此の壓迫された無産階級のうちから起らざるを得ない。そして無産階級のうちから起るときに、初めて自由主義が自由主義としての使命を完了することが出來るのである。

序に、誤解を避けるために、一言説明を加へて置く。私は敢て自由主義といつたが、しかしこゝでの自由主義とは、固より的確なる學術的用語ではない。むしろ漠然たる意味において、自由平等を基調とする社會的正義の主張を包括したものであると見ていゝ。さればそこには、被壓迫階級としての、政治的經濟的壓迫に對する解放の要求が含まれてゐる。政治的經濟的不平等に對する正義の要求が含まれてゐる。そして此等の要求は、あくまで無産階級の要求であると同時に、また無産階級と將來その立場を等しうする、乃至は、無産階級的生活利害に同感し得る所の准無産階級、小ブルジョア知識階級、或は中産階級の道德的要求でもあることを忘れてはならぬ。

三

さて以上は、一個の私見である。が、假に、此の種の思想的立場を取ることが、日本に於ける現在の無産階級政黨として、果して決定的の方途であるとするならば、その政黨の掲ぐべき綱領

も亦、おのづから此の立場の範圍でなくてはならぬ。その政黨を構成すべき人的要素も亦、此の立場に包括し得べき最大限でなくてはならぬ。

無產政黨の思想的立場に關し、これまで各方面の有志によつて攻究されたところを綜合すると、大體に於て社會民主主義といふことに歸着する。即ち政治的には自由主義乃至民主主義を取り、經濟的には社會主義を取るといふのが、比較的多數の意見である。私も之に對して多くの異存がない。從つて、無產政黨の綱領乃至政策が、この思想的立場を根據として編み出さるべきは、もとより當然のことであるが、しかし斯の如き綱領乃至政策を、豫め臺所で料理して置いて、さて此の御馳走に客を取れと要求するのは、要求する方に無理がある。少くとも今日に於ては、その時期でない。ふりの客は或はそれで滿足するかも知れない。しかし客によつては、いやでも應でも一度は註文を通さなくては、承知の出來ない連中がある。そこで、無產政黨の綱領乃至政策は、勢ひ客種の如何によつて、その配膳の模樣をかへなくてはならぬ。その料理を手加減しなくてはならぬ。その材料を取捨選擇しなくてはならぬ。そこに先決問題としての、構成要素の問題がある。

然らば無產政黨は、社會民主主義的立場を支持するかぎりの無產階級、及び半無產階級をその構成要素とすべきであるか。理論は正しくさうである。しかし實際の情勢よりすれば、概して日本の無產大衆は、未だ〱此の種の思想的立場を了解するまでの教育程度に達して居らぬ。例へば今、普通選擧が實施された結果として、一千萬人の新有權者が出來るとする。その大部分が無產階級であることはいふまでもない。しかしながら此の一千萬人の新有權者のうち、果してその幾パーセントまでが、斯の如き思想的立場を支持するだけの、十分なる階級意識をもつてゐるであらうか。私は此の點に於て、決して樂觀的なる觀測を加へることが出來ない。而も來るべき最初の總選擧は、主として此の新有權者の爭奪戰である。一票何圓かの見積りを以て投票の狩り集めに狂奔することを選擧の意義と心得てゐる既成ブルジョア政黨は、定めて必死の努力をもつて、新有權者の爭奪に腐心するであらう。そしてその結果、無產大衆の恐らく大部分は、既成政黨のために籠絡され、瞞着され、甘んじてその靴の紐を結ぶの醜態を演ずるであらう。果してさうであるとすれば、新たに組織さるべき無產政黨は、此等の事實に當面して、如何なる準備をなすべきであるか。我々の深く考慮しなければならないのはこゝである。

有體に言へば、私は、日本の現狀に於て、少くとも今の[illegible]

の總選擧に於て、普通選擧が無產階級のために、どこまで有効なる實際の働きをなすかを危んでゐるものである。むしろこの效果は、實際に無產階級の代表者を議會に出すといふことよりも、之によつて無產大衆に政治的敎育を與へる有力なる機會を提供する處にあると考へてゐる。たゞ、當面の問題としては、從來久しくブルジョア政黨の欺瞞の下に、殆と正しき政治的敎育を受くることの出來なかつた多數の無產大衆を、如何に我々は訓練し、敎育し、組織してゆくかといふことである。之を訓練し敎育し組織して、初めて無產大衆の政治的勢力は結成され、ブルジョア勢力に對抗すべき無產階級勢力が確立されるのである。然らば、今日日本の現狀に於て必要とするのは、差し當つての無產大衆の組織である。敎育と訓練とを目的とするところの組織である。政治の實權を把握するための組織でもなければ、明日直ちに無產階級の政治を實現するための組織でもない。斯の如きは勿論、我々無產階級運動者の一日も忘るゝことの出來ない理想であるけれども、それを達成するまでの順序としては、先づ差し當り敎育と訓練とに大部分の努力を注がねばならぬ。謂はゞ現在に於て組織さるべき政黨は、過渡期の無產政黨である。之に包容さるべき構成分子は、必ずしも明確なる階級意識をもつものでもなければ、階級的利害の表現に關して確乎たる主張を持つものでもない。また必ずしも持つものであることを要さない。むしろたゞ、その直接の生活要求にアッピールすることによつて、それらの政治的興味を集中せしめ、ブルジョア既成政黨に對する不滿と公憤とを導いて、兎も角も一つの勢力に集結することの可能性さへあれば、思想的には左翼であらうと右翼であらうと、我々は進んで之を包容するだけの度量がなくてはならぬ。かくして大衆を組織することが、無產階級政治運動の第一歩である。第二段、第三段の仕事は、第一段の仕事に目鼻がついてからである。

此等の點から考へて、私は、差し當り組織さるべき無產政黨の構成分子を可なり廣い範圍にまで思ひ及ぼしてゐる。そしてまた可なり廣い範圍をまで網羅するのでなければ、現在の我々の運動としては、殆ど無意義の努力に終るものであると考へてゐる。具體的にいへば、全國の農村勞働者、工場勞働者は勿論のこと、準無產階級乃至は中產階級に屬する知識階級、勤人、官吏、自由職業者、小賣商人、自作農、手工業者、其他さまざまの職業にたづさはるところのあらゆる分子を網羅して、既成政黨に對立する一つの組織に集中せしめ、『無產階級の利益のために、『社會的正義の實現』のために、『國民全體の幸福』のために、現在の政治を根本的に改革することを先づ當面の目標

とする一つの新らしい勢力が、謂ふ所の無産政黨でなくてはならぬと信じてゐる。勿論、此の目標に於て一致するかぎり、ブルジョア急進分子の來り投ずることを拒む理由はない。

四

斯の如く廣汎なる範圍に構成要素を求むることについては、現在の無産階級運動者の間に多少の異論のあることを思はぬではない。けれどもそれは、現在に於て組織さるべき無産政黨が、畢竟過渡期の無産政黨であるといふことを承認することによつて、容易く了解さるべき異論である。勿論我々とても、理想的なる無産政黨の一日も早く出現せんことを希望する。しかしながら現在の無産階級の成熟程度に於て、初めより完全を望むことは、あまりに性急の沙汰である。現前の必要は、先づその必要なるものを生まねばならぬ。物には順序があり、生長には過程がある。綱領乃至政策にしても、組織の形態及びその内容にしても、初めから完全に膳立てして、その通りに出來上るとは思はれない。先づ一つの必要が滿たされて、初めて次の必要が具體的の形をとるのである。

既に無産政黨の構成要素が、斯の如く廣汎なものであるとすると、それらの要求に訴へるためには、その綱領乃至は政策も亦、可なりに不統一なものとなるを免れない。それは一面に於て、極めて實際的なる改良政策であると同時に、他面に於ては、極めて非實際的なる抽象理想論をも含むこととなる。而も現在過渡期の無産政黨として、近き數年間に政權を掌握するやうな見込みもなく、否、議會に相當の代表者數を得るだけが頗るむつかしい現狀に當り、餘りに拔き差しならぬ政綱を掲げて、自らその活動の範圍を狹める如きは、決して策の得たるものではない。むしろ當面の任務として、無産大衆の教育並に訓練が、その主要の目的であるとする以上、その目的に有効なる範圍に於て、幾分自由に裁量する所あつて然るべきである。組織の形態、及びその順序方法についても亦、そこに理想的なる考案を凝らすはさることながら、我々はむしろ成るべく自然に任せて、無理のない發達に待つこと多きものである。

最後に一言を附加する。私は、無産政黨の構成要素として、組織されたる農民勞働者を餘りに多く重視せざるものである。それは組織されたる農民勞働者が、政治的に無力であるといふ意味では毫末もない。むしろ反對に、既に組織されたる勞働階級は、散在せる一般無産民衆に比して、ブルジョア政黨の欺瞞と術策とに乘ぜらるゝ危險の、遙に少きものであることを確信するからである。そして此の點は、當面の無産政黨が、主として

教育と訓練とを主要の任務とするものであるかぎり、當然導かるゝところの結論である。

無産政黨の組織過程について

青野季吉

一

無産階級の政治行動、政黨組織に關聯して、この一二年來、日本の社會運動内部に、二つの試みが爲れたことは、誰もが氣附いてゐることである。私は先づこの二つの試みが、どれだけのことを私共に教へたかを、考へて見やう。

二つの試みとは何であるか？　一つは日本共産黨の努力であり、他は政治研究會の活動である。

日本共産黨については、局外の私などに理解されぬ部分が多く殘されてあり、公にされた『事實』についても、どこまでが實際であり、どこまでが幽靈であるか、判斷のつきかねる點が多いが、次のことだけは大した間違ひの罪を犯すことなく、言ひ得られると思ふ。日本共産黨の努力乃至は日本の共産主義者の一致した目標は、無産者の政黨を組織する準備階段として、先づ最も『階級意識に目醒めた』勞働者及び知識分子の結合をつくつて、それの或る程度の完成を待つて、その上に、大衆的の無産政黨を組織しやうとするにあつたこと、是である。日本の共産主義者の一致した努力を、單なる地下的陰謀と云つた風に、官憲的な眼で見ない限り、又は、單なる同黨異伐といつた風に、勞働貴族的な眼で見ない限り、右の解釋はいかなる人にも、容易に首肯されることであらう。すなはち、日本共産黨乃至は日本の共産主義者の一致した努力は、無産政黨組織の準備であつた。そしてそれはかなり意義のある經驗を示してくれたものである。

政治研究會については改めて言ふまでもない。勿論それは、無産者政黨組織の『氣運促進』といふ、教育的意味を多分に持

つたものであつて、それ自身無産者政黨にまで發展することを、必らずしも志向するものではない。しかし政治研究會の實際の活動、それに參加する人々の闇默の意氣込みにおいては、政治研究會をも一つの積極的な組織分子として、無産政黨の組織を完成させやうとの志向が働いてゐたことは事實であり、現在も働いてゐることは事實である。すなはち、政治研究會の活動をもつて、無産政黨組織に關聯したところの、一つの試みと觀察してよい所以である。

日本共産主義者の一致した努力は、ものの見事に徒勞に終つた。それが全然、官憲の壓迫によつたものであるか、それとも内部的理由に基くものか、それは容喙する限りではない。とにかく、先づ最も目覺めた無産階級運動の分子を、地下的に結合して、その上に、大衆的政黨を組織しやうとする、云はゞ二段の陣立は、『實際』に當面して、大きな障碍にぶつかり、何の殘すところも無く消えてしまつたといふのが、事實の示すところである。そのやうな組織經路、運動形態は、抽象的には十分に肯定されるが、現在の日本の社會に持ち込んで來る時、そこに、越ゆ可からざる障碍の存することが、それによつて遺憾なく證明されたと言つて差支へない。

即ち日本の共産主義者の一致した努力の失敗が、私共に殘した教訓は、無産者政黨組織の實際經路としては、最初から公然の行き方を選ぶ可きこと、是である。公然の行き方とは何であるか？　無産者政黨組織の第一階段からして、公然の討議と公然の一致とによつて進むことである。無産者政黨は、これを地下から浮上らせることは、尠くとも日本の現在では出來ぬ相談で、最初から地上で結集させなければならぬといふことである。

この教訓は、一見はなはだ平明なことのやうであるが、そしてまたそれ位のことはあの大きな犧牲を拂つてまで經驗するほどのことでないやうに見えるが、實際は必らずしもそうでない。『他の條件さへ許すならば、『階級意識に最も目覺めたものが、先づ握手結集して、次いで大衆無産者を糾合しやうとするのは、無産者運動にとつて寧ろ當然のことであつて　純理としてそれを排す可き何等の根據もないのである。そこで無産者の政治行動の最も積極的な支持者たるところの、共産主義者の一群が、やがて大衆的な公然な無産者政黨を樹立することを目標として、先づ準備的に結合することは、あつて然る可きことである。』

そしてこの行き方が　重大な障碍にも逢着せず　無事に無産者政黨の組織にまで生長すれば　それはまた望ましいことゝさへ私には思はれるのである。その意味で、私は日本の共産主義者の一致した努力の失敗の經驗は、よほど意味深いことだと云

つたのである。

無産者政黨組織に關聯しての、日本の解放運動の第一の經驗は、これが『公然』でないと云ふ形態のゆゑに、失敗に歸せざるを得なかつた。

二

そこで次に來たものは、『公然』の形態をとつたものである。それは言ふまでもなく、政治研究會の發生と活動である。政治研究會は勿論、日本共産黨の組織者ではない。しかしその與へた經驗から學ぶところ大であつたことは、爭へない。『公然の討議』といふ形態をとつて、政治研究會が先づ誕生したことは、この間の消息を語る最有力なものでなければならぬ。

約一ヶ年半にわたる政治研究會の活動は、私共に、何を示したか？

政治研究會が、『無産者政黨組織の氣運促進』といふ活動の範圍より一歩を出でて、實際に政黨組織の準備的行動を、積極的に働き出さうとすれば、そこにまた一つの大きな難關に逢着せざるを得なかつたこと、是である。その難關とは何であるか？當然無産者政黨の中心體たる可き無産者の集團即ち組合が、容易に、その準備的行動に參加せぬ乃至は參加するところまで進んで居らぬといふ事實から來る困難である。現在の政治研究會が、この大きな難關に逢着して、行動上の『一つの悩みの時期』にあることとは、爭ふことの出來ぬ事實である。

この難關に逢着したことをもつて、政治研究會の活動上の缺陷から來たものとする人も見受けられるが、私は必らずしも、そうは思はない。その無經驗、その準備不足の故に、政治研究會の活動に多くの缺陷のあつたことは、これを認めねばならぬ。しかし右に指摘した難關は、その根據を全然そこに持つものと見ることは出來ぬ。たとへば、現在の政治研究會でなく、別異の政治研究會が設立されてあるとして、そして現在の政治研究會の持つてゐるより、ヨリ尠き缺陷しか持つてゐないとして、それで果して右の難關に逢着せずにすんで居たかと云ふに、必らずしもそうでない。現在の政治研究會と同程度乃至は、ヨリ尠い程度にしろ、同じ難關に逢着したであらうことは、容易に推測し得るところである。

つまりその難關の根據は、全然乃至ヨリ多く、組合運動の內部に潜むといふことになるのである。

そこで無産者政黨の組織に關聯して、政治研究會が與へた多くの經驗——それをこゝに指摘しないが——を要約して見ると、政治研究會の如き形態にて[illegible]組織と活動を[illegible]準備

をもつてしては、幾分でも望しい要素を具へた無產者政黨を組織することは、當面において可成り困難である。そこで云ふ準備のまゝの、モウ一つ手前の相當に手數のかゝる準備が果されずに殘つてゐる間は、所詮政治研究會の如き形態と活動とを持つた準備が、實を結ぶことは出來ない、といふことである。そして、當分の間はその如き集團は、『氣運促進的』意義を、能ふ限り發揮してゐるより外はない、といふことである。

政治研究會が私共に示してくれたこの事實は、もとより意外なものではない。意外なものではないが、尠くとも豫想してゐたよりも根の張つたものである。それは、直接の無產者政黨の組織準備よりは、モウ一つ手前に仕殘された大きなものがあるそれを果さない中に、無產者政黨の組織に着手すれば、そこに產れ出るものは、月足らずか不具でしかあり得ない、先づこの準備を完成す可きだと痛感せしめたほど、強く根の張つたものであつた。

しかもそれは私共にとつては、一つの『發見』に相違ないが實際の組合運動においては、一つの『必然』である。現在、日本の組合運動において、いかなることが行はれてゐるか、それを一瞥しただけでも明白である。組合運動が、政黨組織のために積極的に働き出すためには、その內部的の整理と統一が、ある程度まで完成されなければならぬのは云ふまでもない。內部の未整理と、未統一の意識が引かゝつてゐる間は、その積極的働きかけの出來ぬことは當然で、現在、組合運動內に現はれてゐる大小諸の現象は、この『必然』を反映したものに外ならない（「改造」三月號拙文「最近の傾向と近き將來」參照）

現在の組合運動の內部には、『全國的聯合』といふ要求と、例へば『總同盟の分裂的傾向』といふ事實と、二つの一見矛盾した現象がある。しかもその二つの現象が、決して矛盾したものでないことは、右の私の觀察點からすれば容易に觀取し得られると思ふ。これを平らたく云へば、無產階級運動はいまや全國的に聯合乃至合同す可き、社會的經濟的の必要に迫られてゐる。どうしてもそれへ進まねばならぬ。しかしそれをするに現在の拘束力や障害を取除いて先づ地ならし的整理を果さねばならぬと云ふのがこの矛盾せる如き二つの現象を產む所以である。しかもこの全國的の聯合乃至合同を完成せねばならぬとの要求を裏付ける有力な要素は、實に政治爭鬪、政黨組織の要求に外ならぬのである。

政治研究會の逢着した難關は、その難關の因を爲す要素それ自身が、現にそれが取除きに努力してゐるものである。されば無產者政黨組織の實際の進行が、この努力の進展にかゝること

大なるは言ふまでもないことである。

三

ここで私の見解からすると、日本に於ける無產者政黨は、その中心體たる可き組合運動に於て、或程度の整理と統一とが完成されない以上、とうていその樹立を見ることは六つかしいと云ふことになる。然らばその整理と統一とを見るの時は何時であり、いかなる手續によつてゞあるか？

これを予見することは困難である。不可能でさへある。こんにちまでその材料がとゝのはぬからである。すなはち全國的聯合乃至合同の要求は、漠然たる要求としてかなりに強いやうであるが、他方その有力なる中心として目安をおいて考ふ可き日本勞働總同盟の分裂的傾向は、果してどこまで進展して、他の諸の組合といかなる關係が、新らたに樹立されるか、いまのところ予見を許さぬからである。更に言ひ換へれば、(一)總同盟の幹部派と刷進派とが何らかの形で妥協がついて、一致して總聯合へ進むことゝなるか、(二)幹部派と刷進派とが、各々其の勢力を率ゐて完全に分裂し各々總聯合の標語の下に、比較的思想傾向を同うする組合を聯合して、事實上、二個の總聯合――一見フランスのそれに似たか――が出來上るか、(三)これとも總同盟が分裂し、他の有力なる組合の提唱の下に、全國的の何等かの形の總聯合が完成されるか、それを予見し得るまでに事情が展開しておらぬからである。

さればかゝる形勢の上に立つて、日本の無產者政黨が、いかなる手續を執つて組織されるか、組織されねばならぬかを說くことは、ほとんど無駄と云つてよいであらう。實際、こゝしばらくのところは、組合運動の整理と統一の成り行きに注意を拂つてゐるより外はないのである。政治研究會の如き團體にしても、かゝる際に、およそのところに見當をつけて、政黨組織の方へ無理な事情を引寄せて行かうとすれば、せつかく或程度徹底した整理と統一の行はれるものを、中途半端に終らせるの罪を犯さないとも限らない。

かう見て來ると、無產者政黨の組織は、前途遼遠のやうな感を與へぬでもない。しかしそれは必ずしもそうではない。組合方面のそうした整理と統一も、余り遠からぬ時期において、何らかの結實の第一階段になる可きは、予想するに難くない。そうしてその結實程度に應じて、政黨組織の前途が次第に明瞭となつて行くことは、これまた容易に推測されることである。

と言ふのは現在の組合運動において、先づ內部の整理を、次いで全國的の統一を、更に次いで政黨組織の準備を、と云つた

具合で、階段的に事が行はれてゐるのでなく、今日までに、或部分に於ては一二年來、政治行動、政黨組織の準備研究が、寄り寄りなされてゐるのだからである。すなはち右の整理と、統一と、政黨組織とは、同時性を帶びた進行を示しておるからである。

× × ×

私はいまゝで多少樂觀的な見方をして來たかも知れぬ。私自身の要求を透して、その要求を光明づける事實の方を、誇張して考へて來たかも知れぬ。そこで顧つて、多少はその兆候も認められぬでもない前途を考へておく必要がある。

それは組合の整理も統一も、何ほどの程度にも完成されないで、一足飛びに無産政黨が樹立される場合である。それは（一）何度かの比較的大勢力を有する組合が單獨に、無産政黨を樹立するか、（二）政治研究會には第二、第三の政治研究會がこれも單獨に政黨組織に着手するか、（三）一二三の近接せる組合がそれだけでか、又は政治研究會ごときを混へて、政黨を組織するか、その何れかの場合である。この手續をとつての政黨組織は、組織過程としては、『理想的』な場合から見ると、お話にならぬほど容易であるだけに、ある單純な動機でこの手續が採用される可能性は、十分にあると見たければならぬ。それは私の前に說いた組合運動の中に闇默の中に動いてゐる志向とは、よほど懸け離れたものであるが、しかしその手續が一度び採られれば、無産政黨の組織、その政黨の質に大きな影響を及ぼすことは爭はれない。そしてその影響も、決してよい結果を産む性質のものでないことは十分な理由をもつて言へると思ふ。

この行き方は、無産政黨の組織における機會主義であるが、事實、諸外國のそれはこの道順をとつたものであつて、それ以外の『理想的』な行き方に、始終するのは、現實的でないとする人も見受けられる。それほど、この過程をとつて、無産者政黨が組織され始める可能が多いと云つてよい。

四

ある單純な機會で、事實がどのやうな形で産み出されやうと、それは必らずしも問題ではない。十分に可能性のある一定の目標の下に、それが現實の條件の充實をはかることが、最も肝要なことでなければならぬ。特に機會迎合的な、日和見的な行き方にそれは易く、最近諸種の刺戟によつて一層、その傾向を強くしてゐるところの、日本の解放運動に於いては、なほ更である。

そこで望ましい要素を具へた無産政黨を産み出す爲には、

先づ第一に、そう云ふ機會主義的な行き方を、極力排さねばならぬ。云ひ換へると、政黨組織そのことをのみ急ぐところの、一種の心理の芟除につとめなければならぬ。しかしこの事は、何も、その單獨乃至小聯合に於ける、それぞれの準備的研究や活動を、緩慢にしておいてよいと云ふことを意味するものではない。寧ろその寄り寄りの研究なり、活動なりは、その程度範圍を越えることなくして、最强度に爲されねばならぬ。これが爲されぬ限りは、『理想的』な行き方の進展の見ないことは、旣に說明したところから明らかである。

第二には政黨組織に關する働きかけが、同時に、組合運動の全國的聯合乃至合同を促進するごとく行はれねばならぬこと、これである。即ち、無產者政黨は決して、普通選擧の前で、いきなり踊り出す道化ではなく、その組織と體制とを具へて、根本的な目標をもつて、動き出すところの無產者の政治的組織であるが故に、無產者政黨の組織即無產者の政治鬪爭的編成であるといふ點を、政黨組織に關する働きかけ、又は『氣運促進』の重心とすることである。

第三に、かくして政黨組織そのことをあせらぬことである。この場合のあせらぬといふのは、第一の場合とはその方面が異ふ。即ちあせつて、無理に何等かの無產者の基礎的組織らしいものを造つて、その上に政黨を組織することをもつて滿足してはならぬといふのである。

およそこれらの準備があれば、多分に機會主義にさらはれる危險を避けることが出來、多分に望ましい要素を具へた無產者政黨が產み出され得ると、私は信ずる。

× × ×

普通選擧の實施にともなつて、ほとんど同時的に聯想されることは、無產者の政治的勢力の擡頭である。旣成政黨の領袖らの言葉や、新聞の論調などにも、その擡頭の必然を說き、寧ろそれを歡迎するやうな口吻さへ見える。そしてその場合、無產者政黨の出現によつて齎らされる政治上の効果を、『政治の一新』といふ言葉で表はすのが、習慣のやうになつてゐる。

なるほど作用の方面から見れば、それは『政治に一脈の新生氣』を吹き入れることにも、『結局更始一新』することにもなるであらう。そして、またその限りにおいて、それらの人々が現在の政治の倦怠した空氣のなかへ、無產者政黨を迎へとることに、或る種の歡迎の氣持をもつことも考へられぬことはない。

しかし無產者の政黨は、ブルジョアジーの政治を一新させ、それに新生氣を吹入れるために、迎へられて登場する一途では

『普選の實施』に因れ、『既成政黨の活動に因れることは、大きな錯誤を犯す導因となり易いと思ふ。(九、八)

ない。無產者階級を止揚することによつて、階級社會そのものの止揚せんとする歷史的任務を果すために、政治的鬪爭の最後までの陣容をとゝのえるのが、無產者政黨の組織であるっその意味において『政治一新』的の方面は、必らずしも考慮するを要しないし、差詰めその即効を誇り得ないとも微塵も差支へはない。それよりも初發から無產政黨が、その歷史的任務を果すに値するところの、基礎的組織に着手しなかつたら、それこそ常に河童の河流れの危險に、曝らされなければならぬ。

ブルジョアジーの口吻につられて、『政治一新』的方面に力點をおくことと同時に、同じく排す可きは、政黨組織の時期は社會的の空氣に乘つて、最も期待された時でなければならぬとする考へ方である。無產者政黨が出現してもいい頃だと期待された時に、その看板を擧げることは、或は世の喝采を博す所以であるかも知れぬ。しかし無產者政黨が河童の河流に終つた時も、同じく世は喝采するかも知れぬ。さう云ふ外的な條件でなくて、無產階級の内的な條件の充實を常に目的にして進まねばならぬ。私はこの考へ方からすれば、無產政黨の組織は、或は『時期を失した』頃に行はれることになるかも知れぬ。しかしそれが内的な條件の充實を待つてのことであれば、一向差支へのないことである。

英國に於ける勞働黨の勢力

堀江歸一

英國勞働黨の地位

英國の勞働黨は今や國內政治に於ても、有力なる團體であるのみならず、國際政治の關係に於ても、大なる支配を及ぼさゞれば、已まざるに至つた。現に勞働黨が政權を獲得すれば、新嘉坡軍港問題が忽にして棄却され勞働黨に代つて、保守黨が政局に立てば、直に此問題の復活を促すが如き、我國に關係する所の深き國際政治の局面に於て、勞働黨の黨勢に於ける消長が如何なる影響を波及するに至るやの一例である。今日勞働黨は野に在つて、聊か失意の地位に居り、其在朝時代に於ける施設は外交問題と云はず、財政問題と云はず、內政問題と云はず、多く保守黨政府の覆す所と爲り、如何に切齒扼腕した所で、大勢の赴く所は之を動かすを得ざるもの丶如くであるが、一度は天下を掌握した勞働黨の事である。隱忍自重、今日の逆境に堪へたならば、再び時運の轉回を見るの時あることも、之を想像するに難しとしないのである。

世人は多く英國勞働黨が千九百二十三年十二月の總選擧に優勝し、翌年一月マクドナルド首相の下に、內閣を組織するに至つた時に於て、其實勢力の大なるに驚愕し、勞働黨を以つて、保守自由の兩黨に對立する政治的勢力であるとし、殊に自由黨の衰運の歷然たる今日に於ては、勞働黨こそ保守黨と相對して、天下を二分する地位を占めるものであり、自由、博愛、人道と云ふが如き政治的信條は爾後勞働黨に依つて、宣傳され、弘布され、實行されるに至ると考へたようであるが、斯の如きは私を以つて見れば、寧ろ皮相の見解であつて、勞働黨若しくは之を廣く云つて、勞働者の利害を代表する團體の潛勢力なり、實勢力なりの英國政界を左右し、支配した事實に至つては、決して最近に始まつた次第ではなく、其起源の久しきに亘るもの丶あると共に、勞働黨の勢力亦政權の得喪と云ふが如き一時的出來事に依つて、消長す可き道理はないと考へるのである。

勞働者の議會代表運動

英國の如き立憲政治の下に、議會に於ける政黨の勢力の如何に依つて、政權の所在の決定される國に於ては、政權を掌握しようとする者や、政界に志を伸さうとする者が議會に議席を獲得しようとするのは、當然である。唯此希望を妨げるものは、選擧法に於ける窮屈なる制限であるが、民衆の政治的自覺は必ず此制限を緩和し、撤廢せしめざれば、已まない。總ての事柄に對する取扱に穩健を可なりとする英國に於ては、選擧權の擴張も亦頗る漸進的に行はれたが、其れにしても千八百三十二年に端を發し、千八百六十七年から、同六十八年、千八百八十四年から同八十五年に至る間に行はれた幾回かの選擧法改正は英國の議會に勞働代表者の選出されるに至ることに對する妨碍を除却したと云へる。

固より勞働者は第一回の選擧法改正以來、政治的代表權を貫現する目的を以つて、組織を設けることに努力したのであつて、彼のチヤーチスト派の如き、同派に依つて組織された倫敦勞働者協會の如き、多くの選擧期に臨んで、常に候補者を擁立することを怠らなかつたのであるが、其度毎に失敗の悲運に接したのである。此失敗を演じたのには、種々の原因がある。第一、當時勞働者の政治運動に對して、背景を爲したチヤーチスト派や、倫敦勞働者協會などが世人から重きを置かれず、寧ろ嘲笑の眼を以つて、迎へられて居つたこと、第二、勞働者の側に於て、世間の投票を蒐集するだけの準備なく、又其れだけの信用を持つて居らなかつたこと、第三勞働者の政治的代表に對し、社會の一部殊に有力にして、有識なる階級の内に強烈なる反對の行はれたことの如き、即ち其原因として、特に指摘され可きものである。

特權階級の頑冥

今日の英國に於ては、勞働者の議會代表は當然過ぎる程、當然の事實に屬するが、其端を開かんとする當初に於て、社會の諸方面から、強烈なる反對を浴びたのである。就中熱心に反對を致した者は貴族並に彼等と政見や趣味を同じうする守舊派の輩であつて、其反對の要領は第一勞働者と云ふ特殊の階級に屬する者を其階級に屬する故を以つて、議員に選出するのは、議會をして一般民衆の利害を代表せしめる趣意に反すること、第二斯の如くして議會に諸多方面の階級的利害を代表する者を送つたならば、結局階級的鬪爭を刺戟し、議會をして其鬪爭の行はれる場所たらしめる恐れあることの二點であつて、何となく

勞働者の政治的代表を忌嫌ひする者に向つて、之に反對する口實を與へることゝ爲つたのである。後日保守黨の財政家として實際政治に高名を馳せたゴッシェン卿の如き、當時是等の論點から、勞働者の議會代表に最も熱心なる反對を試みた人であつて、「議會に勞働者を送ることは、特殊階級の代表者の議會に現出することを促す嚆矢であつて、自由主義に反する。人が特殊階級に屬するの故を以つて、其政治上の信條に據らずして、議員に選擧されたならば、政黨の闘爭に代つて、階級の闘爭を招くものであつて、英國に取つて、悪時代の來るものである」ことを斷定した。

然しながら斯る反對の盛なる間に立つて、勞働者の政治的代表を欲する希望は次第に熾盛と爲り、千八百五十七年ジョージ、ジエーコブ、ホリヨークは勞働代表者として、タワー、ハムレット區に於て、選擧を爭ふに至つた。其結果は空しく失敗に歸したのであつて、畢竟世論の反對の強き場合に、斯る結果を生ずるのも、已むを得ざるものと思はれる。唯ジョン、スチユーアート、ミルの如き先覺者は聊か時流と選を異にし、勞働者階級の爲めに、正義を保たしめるには、勞働者を議會に送らなければならないと云ふ意見を抱き、現に前記ホリヨークの選擧に對して、ミル自ら選擧費用として、十磅を寄附したと云ふ事實が傳へられて居る。即ち識者の間には多少の同情者の出る一方に、實際家若しくは時の權力者が勞働者の政治的代表を喜ばなかつたことは、明瞭に看取される所であつて、斯る傾向は我國に於ける普選問題に就ても、略ぼ同様であつたと認められる。

其れは兎に角として、右の如き困難を排しつゝ、英國に於て始めて勞働者の政治的代表の成效したのは、實に千八百七十四年であつて、同年の總選擧に於て、勞働組合聯合會から、十三名の候補者を擁立し、其内の二名であるアレキサンダー・マクドナルドとトーマス・バートとが最初の勞働代表者として、議席を得ち、爾後勞働者の政治的代表は綿々として盡くることなく、時に議員の數に消長はあるとしても、大體に於て議員數を増加し、遂に勞働黨として、假令ひ短かつたとしても、政權を掌握し、他日の再擧の望まれるに至つては、流石の頑冥者流をして啞然たらしめる事實であるとしなければならない。

勞働者の政治的代表と勞働組合

即ち英國に於ける勞働者の政治的代表は一度び其道が開かれてからは、多少の障害はあつたとしても、大體に於て徐々に進行したものと云へるが、其斯の如く爲るを得たのは、何故である

るか。私は此點に就ては第一に勞働組合の勢力を擧げたいと思ふ。勞働組合は始め勞働者の團體的行動に依つて、勞働條件を改善すると云ふ純乎たる經濟上の職分を果す目的を以つて、組織されたものであつて、政治上の運動に干與するが如きは本來の考へではなかつた。而してチャーチスト運動の起るや、勞働組合亦之に誘はれて、或る程度まで、政治上の行動を試みたが、同運動が悲慘なる最期を告げた爲め、勞働組合は再び從前の覺悟に立戻り、勞働組合から政治を排除しなければならないと云ふ旗幟の揚げられるを見たのである。

勞働組合が斯く政治の圏外に獨立し、純經濟上の立場に於て、勞働條件の改善に資する方針に出づると云ふことも、見方に依つては、一の見識とするを得るかも知れないが、本來政治と經濟の間には、不可分の關係の存するものがある。勞働條件の一たる勞働時間の長短の如き、工場に於ける衞生施設の如き、專ら工場法として、或は他の單行法として、議會に於て議決され可きものである。幸にリチャード、オーストラーの如き、ミカエル・サッドラーの如き、シャフツバリー卿の如き勞働者保護に熱心なる議員あつて、工場法の修正や、十時間勞働法の制定に就て、犧牲的努力を致し、以つて勞働者に有利なる效果を擧げるを得た事實はあるが、如何なる時代に於ても、常に同種同型の政治家が實在し、恰も勞働者の團體と符節を合するが如き意志の下に、行動するかどうか、測り知るを得ざるのみならず、差當り勞働組合自身に重大の利害ある政治問題に就ては、宜しく組合の事業に直接の關係を有する者を擧げて、議員たらしめ、以つて組合の實情を議會の高い所から、世間に明にすると共に、組合に取つて、有利であり、又公正である立法の行はれることを期しなければならいと云ふ意見が組合の内部に湧起し來つたのである。何を以つて當時勞働組合に關係ある政治問題としたかと云へば、勞働組合の合法性を確認し、法律上に於ける勞働組合の地位を明にし、更に進んで勞働組合の財産に對して、法律の保護を加へるが如きは、其重なるものであつて、是等諸問題の決定に就て、議會に於て、勞働組合を代表する議員の參加せざることは、勞働者として甚だ不安と感ずる所あつて、此見地から勞働組合の政治熱は昂進したものと思はれる。

勞働組合の財力

勞働組合は勞働者の團體として、永久的のものであり、又其永久的のものである所から、鞏固なる基礎を築き、相當の財力を有することゝ爲り、其財力が勞働組合の政治上に於ける行動

に資するもの少なからざるに至るのである。蓋し英國に於て下院議員に年額四百磅の歳費を給與するに至つたのは、千九百九年以後の事であつて、其時まで議員は一切無給であつた。此時代に無產者階級から政治的代表を議會に送らうとするには、代表者と爲つた人に對して、生活の安定を得る道を工風して遣らなければならない。其道を付けたのが即ち勞働組合であつて、組合は其決議に依つて擁立された候補者の爲めに、運動費を負擔し、更に當選後組合は議員と爲つた組合員を組合の役員に任命して、俸給を與へたり、役員と爲らない者には年額二百磅の手當を給したりして、以つて彼等の生活を保障し、又其政治的行動を自由ならしめようとした。千九百九年のオスボーン判決以來勞働組合が政治上の目的に支辨する爲めに、組合員に就て合費を徵收することは、違法と爲り、隨つて勞働組合の政治に干與する從來の方式に一頓挫を來すの已むなきに至り、オスボーンの如き、之を以つて健全なる勞働組合主義を復活したものであるとし、此意を寓する小冊子を公にしたこともあるが、斯くの如きは時勢の潮流に反するの甚だしきものであつて、結局千九百十三年の勞働組合法を以つて、或る條件は付せられたが、其條件の下に於て、勞働組合は政治上の目的に出資することを許さるゝに至つたのである。

選擧運動と運動費

英國の勞働組合は近年其規模を擴張して、漸次多方面の勞働者を收容するの趣きを示すに至つたが、勞働組合員の中堅と爲り、基礎と爲るものは、熟練職工でなければならない。是等熟練職工の常として、其得る賃金の率は高く、不熟練其他の事情に依つて、失業に罹る危險も少ない。斯る勞働者を組合員とする勞働組合に於ては、平生彼等の賃金に比例する比較的高き醵金を徵收するを得るは勿論、彼等の失業に陷る危險の少ないことは、一方に斯る醵金の徵收を定期的に行つて、誤まる所なからしめると共に、他の一方には失業惠與金の支辨を免かれしめるを得る結果を生ずるのである。英國の勞働組合が熟練職工の間に起り、相當の勞働能率を備へる勞働者に限つて、其加入を許可すると云ふ制限的方針を取つたことは、一時勞働組合をして勞働者階級中に一の貴族的階級を作らしめるものであるとする非難を生じたが、一面から見れば、此事の結果として、勞働組合が其會計に於て、豐富なる狀態を保つを得たことゝ考へられる。固より大規模の同盟罷業が起り、偶々或る組合が爭議の中心地に立つたとすれば、其組合は爭議惠與金の爲めに、組合の有する資金の多くを支出し盡くし、其後に會計上の困難に陷

るが如き事實もなしとはしないが、會費から云つて、勞働組合の資力は豐富であつて、會計の維持に大なる支障を告げたかつた。斯くて勞働組合は前記の如く、勞働代表議員に援助を與へて、其當選を容易ならしめると共に、當選後の生活に保障を設けるを得たのである。獨立を本色とする議員が或る一團體から扶助を受け、爲めに其獨立の本旨を傷けるのは、立憲政治の趣意に反すると云ふ非難もあつたが、此種の非難は議員が利益交換を條件として、一般の團體又は人から扶助を受ける時に生ず可きものであつて、勞働代表議員の如く、本來勞働者の利益を發揚する約束の下に、議員たらんとするものが其發揚を目的とする特殊の團體から、扶助を受けたからと云つて、之を以つて議員としての行動の自由を害したものと云ふのは當らないと考へられる。

要するに勞働組合の財力の豐富なることが英國に於て勞働者の政治的代表を發展せしめる所以と爲つたのは、爭ふ可からざる事實であつて、千九百年勞働代表委員會なるものが勞働組合、獨立勞働黨、社會民主聯盟、フエビアン結社の代表者から組織されて、勞働者の政治的代表を進捗せしめることゝ爲つた場合に於ても、委員會の收入は各團體の所屬者每一千名に付き年額十志の割合を以つて、醵出することゝ爲り、續いて千九百六年右の勞働代表委員會が勞働黨の名を稱する後に至つても、會計上の關係には何等の變更なく、勞働組合に重きを置く團體が勞働組合其ものゝ富めることに依つて、相當の財力を擁し、其財力を利用して、政治團體と所屬員との關係を密接ならしめたことは、論を俟たない。政治運動が徒手空拳を以つて、行ひ得られるものでないことは、世人の知る所である。然も勞働者の一個は不幸にして、徒手であり、空拳であつて、此點から云へば、政治運動を行ふに堪へない者である。唯彼等をして近年の如き政治的勢力を擁するに至らしめたものは、即ち英國勞働組合の效果であつて、勞働組合が多年に亘る歷史的事實を經て、次第に鞏固なる地步を占めると共に、純乎たる經濟的職分から逸脫したことは、此點に大なる關係ありと考へられる。

然しながら勞働組合の資力殊に政治上の運動に供用せらる可き資力には自ら限度があるし、英國現行の法律は事實上の制限の外に、法律上の規定を以つて、或る制限を加へて居る。而して勞働組合が斯の如く限られた資力を以つて、彼の如き大なる效果を政治上に發揮するを得たのは、何故であるか。私は其有力なる原因として英國に於ける選擧運動が淡泊であり、其運動に要する費用の寡小であることが確に勞働者の政治的代表を實現する道と爲つたと云ふ事實を擧げたいのである。選擧運動

の淡泊と云ふのは、言論を主とし、候補者なり、推薦者なりは公共的半公共的建物の内に於ては勿論、公園なり、大道なりに於ても、政見發表の演説を試み、輿論の贊成を求めようとはするが、之を重なる運動法とし、其以外の運動法としては、自己の名刺を有權者に配布する位のものであつて、而して有權者は自己の投票しようと思ふ候補者の名刺を特に街路に面した窓硝子に貼付して、以て候補者に對する嚮背を明にする。私の如き總選擧の當時、度々倫敦に滯在して、市中を漫歩しながら、此事實を目擊したことがある。英國の選擧に於て聊か御祭騷ぎに類するのは、候補者が屋蓋車に乘つて、演説を試みたり、反對候補者と立會演説を試みて、聽衆の質問に答へたり、野次を遣り返したりする時位のものであつて、此以外に取立てゝ、云ふ事はなく、殊に我國に行はれる如く、多數の運動員を常置したり多數の行列を組んで、戸別訪問をしたり、多額の費用を要する企ては全然之を見ないのである。勞働代表者と雖も、熱心事に當り、且つ有權者の贊成を得れば、當選の榮を荷うに難しとしないのであつて、勝敗の決は政見の如何、之を發表する方法の巧拙、本人の有する熱誠の程度に依つて、定められる。隨つて此點に於て、候補者自身の所有し、又は支配する黄白の多寡の如きは、何等の關係を持たないと云へる。此一事が英國に於て、勞働者の政治的代表を容易ならしめる所以と爲つたことは、吾人の認めざる可からざる所である。

私は前後二回英國に滯留したことはあるが、固より一外國人の事であるから、英國政界に於ける裏面の事情などに通曉する道を持たなかつた。然し之を外面から觀察したり、又知人に質したりした所に據ると、英國に於ては、啻に選擧運動費の莫大なるものを要しないのみならず、其日常生活に於ても、本人の心掛けに依つて、儉素の風を守り得るのであつて、我國の如く政治家である故を以つて、自己の財力の如何に拘はらず、特に華美の風を裝ひ、濫費を事とする惡風の存するを見ない。現に過般勞働黨の首領として、内閣を組織したマクドナルド氏の私宅の如き、ハムステッドに在る間數十個ばかりの家であつて、他の家と軒續きの貸家、露骨に云へば、一所の棟割長屋に類するのである。而してハムステッドと云ふのは、倫敦西北に位する市の中心を餘程離れた一區であつて、先づ中流階級の住宅地であり、日本の學生會社員なども多く此邊に素人下宿を求めるのであつて、決して日本流に考へて、堂々たる大政治家の住宅を構へるに相應はしい所ではないのである。然し斯の如きは勞働黨としては、寧ろ上等の部であつて、更に以前勞働派議員を代表して入閣したジョン、バアーンス氏の住宅はチエルシーに在

り、一度私は散歩の際氏の住宅を通掛りで見たが、中流階級以下の人士の住む位の陋居であつたのを目撃して、一驚を喫した次第であつて、同氏の入閣に際し、燕尾服の用意のなかつた事が世上の一話柄と爲つたことを思ひ合せて、英國政界の一部に儉素たる風が行はれ、然も此風を守つて、平然たる人のあることを確めたのである。而して英吉利の政治家は勞働黨であらうが、何であらうが、議員たるの故を以つて、斯く／＼しなければならないと云ふ生活の方式に縛られて居らない。唯士人としての體面を崩さないだけの容儀を整へるのが、其人に取つての最高の道德であつて、此以外に何等強要される所はない。此一事が勞働者の政治的代表運動の始まつて以來、勞働者をして政治上に其駿足を伸ばさしめるに就て、幾何の資するものがあつたであらうか。私は此點に於ける英國殊に英國政界の情景に就て、我國民の三思を望まざるを得ないのである。

勞働者と既成政黨

勞働者の政治的代表の起らんとする當時に於ては、英國の政黨は保守自由の二大政黨に分たれて居り、互に勢力の擴張に勉めて、怠らなかつた。保守黨必ずしも社會政策や、勞働立法の進捗を閑却するものではない。シールズベリー侯歴代の内閣に依つて、傭者賠償責任法の改正擴張を始めとして、幾多社會的立法の行はれるを見たのであるけれども、本來保守黨は其政治的根據を地方の土地豪族に置くこととの關係から、都會に生活する工業勞働者や、地主に驅使される地方勞働者と立場の異なるものがある。加ふるに保守黨の外交方針は對外硬であり、領土擴張主義である。自由平和を愛好し、國内に於ける福利の增進に重きを置く勞働代表者が保守黨に遠ざかつて、自由黨に近づくのは、當然であつて、始め勞働代表者として、下院に議席を得た議員は何れも自由黨と嚮背を共にし、殆ど自由黨の別働隊たるの觀を呈し、世間から、自由勞働派議員と呼ばれた。隨つて自由黨亦自家の黨勢を擴張することの必要から、勞働派議員を惹き付ける爲めに、種々の勢力を試みたのであつて、勞働出身議員のブローダーストや、バートが政務官に任命されたのは、何れもグラッドストーン内閣の時であり、又千九百六年同・出身のジョン、バアーンスが閣員として地方事務局總裁と爲つたのも、實に自由黨總理カンブル、バンナーマンの内閣を組織した時であつたのである。更に歐洲大戰中のアスキス内閣や、ロイド、ヂョージ内閣に於ても、自由黨と勞働黨との提携は依然として行はれたと云へるし、又之を實際の事實に徴すると、斯る兩者の提携の緊密であつたことは、一方に自由黨に政權獲得

の利益を與へると共に、勞働黨には自由黨の勢力を藉りて、自家に利益あるように立法の方鍼を展開することゝ爲つたのである。千九百一年のタッフ、ヴェール事件の判決が千九百六年の產業爭議法に依つて、千九百九年に於けるオスボーン事件の判決が千九百十三年の勞働組合法に依つて、覆された如き、何れも自由黨と勞働黨との意見の一致した結果であり、或は之を皮肉に云へば、前者が後者を懷柔し、利用する爲めに行はれたものと見られるし、彼のロイド・ヂョージ氏の手に依つて、實現された千九百九年以後の財政法にせよ、社會的施設にせよ、自由黨と勞働黨との提携に依つて、其步の進むことの頗る速であつたことは、論を俟たない。

然らば勞働黨は自由黨の如き勞働者に對して同情することの多く、又勞働黨に深き理解を有する政黨のある爲めに、前途に進む可き途を開拓されて、有利なる地位に就いたと斷言するに憚らないのである。

勞働黨獨立の行動

然らば斯くまでに自由黨に近接して居つた勞働黨若しくは勞働派議員が自由黨から離れて、獨立の境地を開拓することに決心するに至つたのは、何故であるか。私は此點に就て、昨年秋著はした「英國現代の經濟」に於て、左の如き說明したのである。

勞働黨議員の間に次第に其知見を上進し、政治上の驅引に慣熟する者を生じ、又社會主義者の刺戟を受けるに隨ひ、自由黨と事を共にするよりも、獨立の行動を爲す可きものであると云ふ考を起した。思ふに勞働者が此考を懷くに至つたのは、道理あることゝしなければならない。本來自由黨と云ひ、保守黨と云ひ、黨派に差別あり、又互に異なつた歷史を持つとした所で、勞働者の見地から云へば、政治的に、社會的に多年に亘つて、勞働者階級に搾取を事とする政治を行ひ來つたものに外ならない。勞働者は自己の運命を改善することに就て、既成政黨に期待す可き何ものをも持たないのであつて、宜しく自己の手を以て、自己の利益を謀るのが當然であり、此見地から、宜しく勞働者自身の代表者を中央議會幷に地方議會に送り、資本家階級に對して、無產者の鬪爭を試みしめなければならない。或は勞働者代表の議員の選出された初期に於ては、勞働議員自ら一旦議員として選出されたからには、階級別の立脚地に於て、其職に就く可きものでなく、全國民の利害を念としなければならないと云ふ考へが行はれ、現にトーマス・バート氏の如き、此事を公言して、憚らなかつた。立憲政治の本質から云へば、之を以つて立論の正しきを得たも

のとす可きであらう。然も勞働議員の間に行はれた此種の見解に異疑を來さしめるに至つたものは、實に社會主義者の勢力であつて、彼等は勞働議員にして議會に入るからには、單に社會進步的立法の成立のみを以つて滿足す可きものではない、此以上に立憲的手段に依つて、絕對完全なる集產主義の下に、社會革命を遂行することを以つて、任務としなければならない次第を鼓吹した。彼のフエビアン結社の如き、富裕にして、教育ある人士から成り、學說的宣傳を重なる事業とする所謂有產的社會主義者にして尙ほ從來の姑息的政策を更新しようとするに至つた一事を考へたならば、純勞働出身の議員や、運動者の間に、新しき感情の湧出し來つたことは、理の當然であるとしなければならない。(「英國現代の經濟」二四四—四五頁)

英國に於て共產主義者の勢力は大なるものではないが、社會主義者の勢力に至つては、到底之を侮るを得ない。殊に社會主義者が深く勞働黨に浸潤し、勞働黨の主義綱領を左右するに至つた事實は動かす可からざるものであつて、現に勞働黨が歐洲戰爭の直後公表した「勞働と新社會秩序」と題する綱領と云ひ、其後年々の大會に於て決議する所と云ひ、社會主義の實現に如何に熱烈なる希望を繫ぎつゝあるやを知るに足るものである。唯マクドナルド內閣の施政に於て、聊か勞働黨らしきやに思はれる片鱗を示したやうなものゝ、社會主義に立脚した政綱を實行するに至らなかつたのは、何故であるか。之に對して或は在野時代に唱へた所は必ずしも在朝の曉に實行されるものでないとして、勞働黨の不信呼りをする人もあるが、私は此說には與するを得ない。勞働黨が政權を握つて居つたのは、如何にも短期間であつて、充分の經綸を行ふ暇を持たなかつた一方に議會に絕對多數を擁して居つた次第でなく、第二黨の地位を占めて、政權を得たと云ふ事實が常に勞働黨內閣をして其爲さんと欲する所を妨げしめたと解す可きであつて、綱領の實現に就ては、私は勞働黨の捲土重來する時期を待たなければならないと考へるのである。

勞働黨と人物

勞働黨が獨力を以つて、政權を獲得し、之を喪失した今日に於ても、尙ほ在野黨として、在朝の保守黨に對抗するに至つたに就ては、固より勞働黨の綱領に對する民衆の贊成があり、而して民衆が參政權を持つことを以つて、一の原因とす可きであるが、私は此以外に近年勞働黨が其門戶を開放して、啻に勞働者のみならず、勞働運動に同情あり、理解ある人士を加入せしめた一方に靑年勞働者の敎育に力を致し、斯くて黨の內外に人

材の雲集することを期した事實を舉げるに躊躇しない。勞働黨內閣の組織に際して、其れ〲特殊の才能を有する人物が適當の地位に就いたことの如き、勞働黨の生へ拔きの政治家であるマクドナルド、クラインス、トーマス、スノーデンの諸氏が現時の政治界に於て、水準點以上の學殖と識見とを備へて、世間の信用を博するが如き、何れも世人をして勞働黨の擡頭の偶然に非ざることを感ぜしめる所以である。

元來英國の勞働組合を以つて、單純なる勞働者の集團であると解したならば、種々の間違を生ずる。之を表面から云へば、勞働條件改善の目的を懐く集團であるが、一面に於ては、今日の經濟組織其ものを革新する目的を有して居るとも見られるのであつて、此點に就ては、彼のウェッブ氏夫妻が千九百二十年版の「勞働組合主義の歷史」に於て、明言して居る通り、勞働組合は近年に至つて、企業に參加する權利を要求することゝ爲つたのである。隨つて勞働組合員の社會に對する責任の重大と爲り、其自重を促さゞる可からざるに至つたことは勿論であるが、之と同時に勞働組合が組合員の教育修養に力を致すことに就ても、亦見る可きものがある。組合の本支部に文庫を設け、談話室を開き、組合員の自修に資するは勿論、諸種の問題に就て、一時的又は連續的講演を開催し、組合員中の青年中、學問上の成績の優秀なるものは特にオックスフォード大學のラスキン校に送つて、研學に親ましめるが如き、用意の周到なるものがある。勞働黨に於て、頻りに人物輩出し、國家の大事を擔任して、過またざるに至れるもの亦偶然なりとしない。

英國の勞働運動は徹頭徹尾議會政策に終始して、其埒外に出でようとしない。時に共產主義や、シンディカリズムを信奉する硬派があり、總同盟罷業を計畫したり、直接行動を試みようとしたりすることはある。又「ハイド、パーク」や「トラファルカー、スクェーヤ」に於ける公開演說に於ては、赤旗を揭揚した下に於て、勞働者風の壯漢が過激なる演說を喋々し、今にも同志を率いて、政府の本據を衝きはしないかと思はれる場合もあるが、民衆は決して斯る獨り善がりの危說に同ぜず、自ら守る所を守つて居るのは、要するに勞働黨の議會に於ける獅子吼が民衆に對する安全瓣と爲つたり、又勞働黨の主張が時の政府に依つて、或る程度まで、實行されたりする結果であつて、英國の政治の穩健であることに就ては、基く所、偶然であるとしないのである。

結論

英國の勞働黨に對しては、其實際の勢力が表面に現はれて以來、世人の注意を惹うもの、大なるに至つたのであるが、著

に云ふが如く、羅馬の城は一日にして成つたものでないと同じく、勞働黨亦幾十年の來歴を經て、今日に至つたのである。即ち其勞働組合を基礎としたこと、勞働組合は多年に亙る政府の壓迫、不公正なる法律上の取扱に堪へて、能く其勢力を張るに至つたこと、既成政黨と結託して、其援助を得、法制上に幾多の改革を實現したこと、勞働黨自ら規模を擴張し、社會に於ける種々の勢力と結合して、其大を成す工風に出でたこと、勞働黨は斯く其大を謀ると共に、其質を改善する計を怠らず、黨員の教育修養に力を致したことの諸點は英國の勞働黨に就て觀察を下すに當つて、著しく吾人の眼底に映ずる所である。

日本に將來勞働黨が起るかと云ふ質問に對しては、私は當然其起ることを考へるし、起す可きものであるかと問はれゝば起すのが至當であると答へるの外に道あるを知らない。而して日本に於て、勞働黨の起る可く、又起さゞる可からざるものである以上は、矢張り英國に於けると同じく、勞働組合を基礎とし、又議會政策を目標とす可きものであることを必要とする。私が將來の問題に對して、望みを屬する所は右の如くであるが果して、其實現が期せられるであらうかどうか。第一政府は何時までも勞働組合法を制定せず、勞働組合を公認せず、一方に勞働運動を拘束すること、例の如くであり、第二勞働組合亦小異を棄てゝ、大同に就く態度に出でず、内部の紛爭の絶ゆる時なきこと、第三隨つて組合として財力を蓄へ、知識を豐にし、以つて他日の活躍に備へるだけの用意あるや否や、甚だ疑はしきことの諸點は我國に勞働黨の起らんとする事實を目前に控へて、私の甚だしく物足らぬ感を懷く所である。若し其れ既成政黨が普通選擧の實行、近きに在りと見越して、遽に社會的立法の進捗とか、社會政策の實行とか、從來彼等の殆ど眼中に置かなかつた事を喋々し、之を新政綱の一とするに至つては、何と云ふ輕薄の態度であらうか。既成政黨は之に依つて、普選の下に於て、新に選擧權を獲得する新有權者の間に勢力を張らうと云ふ趣意であらうが、果して幾何の効果ありとするを得るであらうか。假に既成政黨にして新有權者を瞞着したとすれば、即ち其必然の結果は勞働黨の發達を妨害するに至る。英國の自由黨が能く勞働黨に公正の待遇を與へて、其意見を尊重すると共に、其發展の勢を誘導したことは、旣に述べた通りであるが、斯の如き既成政黨の我國にあることが果して實際に望まれるかどうか。我國既成政黨が其如何なる名稱を以つてすると、又如何なる來歴を以つてするとを問はず、何れも有産者階級の機關として無産者階級の利害を閑却し來つたことは、著名の事實である。今日遽に無産階級の歡心を繋ぎ止めるが如き政綱を發表した所で、何者か之を信ずるであらうか。其れよりは無産者政黨の發達に對して障害と爲る可き法制を改廢して、勞働黨の發育成長を助ける計を爲すのが既成政黨若しくは之を根據とする政府として、當然爲す可き所に屬する。私が特に英國に於ける勞働黨の問題を論述したのも、亦間接に此爲す可き所を政府並に政黨者流に示すの意に出でたものである。

無產政黨の機能と其限界

長谷川如是閑

所謂政治運動は、凡て政治的權力の所在を轉換せしめやうとする運動であるが、それには二つの種類がある。一つは社會そのものゝ組織の進化に伴ふ權力の轉換に應ずる運動であり、他の一つは、社會の組織の進化に依るものでなく、同じ組織の內部關係に依る權力移動の運動である。後者は、例へば封建政治における軍閥的支配の轉換（北條氏の天下が織田氏の天下となる類）又は立憲政治に於ける政權（自由黨の政府が保守黨の政府となる類）などのやうにその變化が、社會又はその政治組織の進化に伴ふものではなく、その組織の中で、組織を破壞しない程度の有機的變化に應ずるものであるが、前者は例へば封建制度を支持した社會組織が進化して、封建組織そのものが、或る有機的變化を起さなければならない場合に、それに應じて封建制度そのものを破壞すべく起る樣な政治運動がそれである。政治運動は、この故にこれを社會の組織的變化に應ずるものには關係ないにしても、その變化の性質が異るに隨つて、その運動の性質を異にするものである。無論その性質の差異は社會の有機的進化の方面より見れば、程度の差であつて、變化がその組織を破壞せざる程度の內部關係に止まる場合も又、それがその組織を破壞する性質の運動となる場合も、根本的に異つた動因を持つものではない。それは恰度筋肉の生態としての變化も亦その死滅も之を生理化學的見地から言へば、同じ性質の有機的變化であるのと同じである。組織を變化せしむる政治運動も亦恰度死が、生と根本的に異る現象でないやうに、今一つの政治運動と同じ性質のものではあるが、たゞ、それが或る組織の崩壞に伴ふに過ぎないのである。而して社會の組織の變化は、その第一次的の原因としては、必ず經濟組織の進化である。政治組織は此の經濟的進化に應じて變化する機構である。故に右に掲げた第一の種類の政治運動は、經濟組織が一定の政治組織を支持し得ない程の進化を持ち來たした時に起るものである。或る經濟組織が、封建制度を支持したとすれば、この

經濟組織が崩壞すれば必然に、封建的政治組織は變化せざるを得ない。そして其の變化に應ずる政治運動は、在來の政治組織に對する革命的運動となる。

今の政治運動にも恰度此の二つの種類の運動が存在する。封建制度の末期に於いて、一方に封建諸侯が、封建組織の內部關係に於ける權力を爭ふ政治運動があつたと同時に他方に於いて、封建政治そのものゝ崩壞に伴ふ破壞的政治運動があつたやうに、今の政治的現狀の內部關係で權力の所在を換へやうとする政黨運動があると同時に、權力の所在を現在の權力階級の組織の外に轉換せしめやうとする運動とがあり得る筈である。何となれば、現在の經濟組織の進化は、それに伴つて生じた新たな機構に依つて在來の政治組織を支持した經濟組織の進化を働いてゐるからである。言ひ換へれば、政治の現狀を支持する經濟的基礎は、既にそれ自體の有機的進化に依つて、組織的變化を起してゐるのである。隨つて、政治運動は、政治的權力をその新たな組織の基礎に置かうとする運動として現はれない譯に行かぬ。無產政黨運動は即ちその結果として起つたのである。

此の意味に於いて、產業組織の進化は必然に在來の產業組織が支持した政治的機構に對する根本的變化を持ち來たす運動として現はれねばならぬ。それが今日に於いては所謂無產政黨運動となつたのであるが、これを促したものは、產業組織に於ける中心勢力の進化である。軍國國家に於いては武力が產業の强制管理に於ける中心勢力であつたのだが、その後の進化は資本を自由競爭の產業組織に於ける中心勢力としたのである。而して次の進化は、勞働をその中心勢力とする性質のものである。之は武力、資本、勞働、と云ふやうなものが、先づ組織を支配したが故にそれが中心となつたのではなく、その當時の經濟組織が武力なり、資本なり、勞働なりをそれ〲その中心勢力とするやうな社會關係を作り上げてゐたのである。始めに武力があつて、產業の强制管理が起つたのではなく、產業が迷信の關係や鬪爭の關係に於いて强制的管理となつが爲めた、軍國的管理が起つたのである。一定の生活(經濟)組織が、その集團を武力中心の組織たらしめると――例へば狩獵民族の生活が自づから武力中心の社會組織を產み出す如く――その武力は征服關係の國家組織に於ける產業の中心勢力となるのである。一定の組織が資本(私有財產の蓄積)所有者を勢力の中心とする關係を生ずると資本が中心勢力となつたのである。而して最後に大產業の社會に於ける勞働組織の必然性から遂に勞働が中心勢力となるべき機運を呼び起したのである。而して勞働階級は、武力と資本とを全く持たない階級であるが故に、所謂「無產」の

名で呼ばれてゐるのである。それはその階級が、權力を欲求することに依つて中心勢力となり得たのではなく、今の進化程度の產業組織が、勞働力の組織的構成に依つてのみ支持さるべきものであるが故に、自から勞働階級が組織の中心に近く持ち來たされたのである。

故に現在の經濟組織が、所謂無產階級の集團を中心勢力とする物理的構造を持たない以上は、無產階級が政治的權力の中心となると云ふことはあり得ない。故に無產階級の政治が、どれだけの程度で持ち來たされるかと云ふことは、各國それ／＼事情を異にするのであつて、先づその具體的條件を明にしなければならない。即ち無產階級の數量とその政治的機構に於いて働き出す質量とを具體的に研究しなければならない。(我國の現狀については、櫛田民藏氏が大原研究所雜誌の四月號に發表した「日本現時の勞働人口と問題の無產政黨」と題する論文がこれに關する唯一の文獻であつて、現在の日本の無產人口の政治的地位を、確實に指摘してゐる)然し乍ら、現に、日本に起つてゐる無產政黨運動が、それ自身右のやうな必然性をどれだけの度合で具有してゐるかどうかも又考へなければならない問題である。凡ての運動は、謂ゆる大勢即、社會の何等かの組織的進化に制約されて起るものには相違無いが、然し實際の運動は極めて複雜の動因を持ち又、運動の動機がさうであるが如く、方法態度等に於いても必しもその本來の性質と一致するとは限らない。例へば、勞働運動が封建式の英雄意識又は資本主義社會の文化意識等に依つて或る程度まで實際的に指導され進行することもある。大勢としては、組織の進化に依存するが、一つ／＼の實際の運動について見れば、その大勢としての組織的變化によく順應するものもあり又逆行してゐるものも澤山ある。傳統的な人間の意識は、社會の組織的變化に依つて、新な運動が起る場合にも往々その運動に於て前代的傾向の間歇遺傳として再現される。英雄主義や個人主義が、新時代の運動にもつき纏ふのはその故である。現在の日本の無產階級運動は、之を具體的に究めたならば、そこにも亦、前代的傾向の遺物がいろんな形で潜在してゐることを發見せぬとも限らぬ。然し凡て人間の行動は忽然として黑が白となるといふやうなことは有り得ないのであつて、凡ての變化に必ず間色時代がある。それがあることは決して進化が妨げらるゝことではなく、寧ろ變化に必然の過渡的現象であると思はねばならぬ。勞働運動にしても、始めはより多く前代的傾向に一致した組合運動として起り、それが次第にその前代的傾向と全然對立する地位に移るのである。日本の友愛會が總同盟にまで進んだ歷史を見てもさうであ

つた。

無産政黨運動は要するに勞働階級が經濟組織の中心に移動する社會的傾向に伴ふ運動であつて、その成立の根本に勞働階級が存在せねばならぬ性質のものである。然るに日本の現狀に依れば、無産政黨運動は、勞働階級以外から起つてゐる。それは理論上勞働運動が政治化したことに伴つてゐるのであるが、實際に於いては、凡ての勞働組合が、無産政黨の團體と對立するやうな關係にあると云ふのは、無産政黨運動が、勞働組合以外から起つてゐるので勞働組合の側では、無産政黨の團體が有力になると、自ら勞働組合の勢力が、無産政黨團體の方へ分割されると云ふことを恐れてゐるのである。元來無産階級運動としては、勞働組合も亦無産政黨團體も協同の態度を取る筈のものであるが——事實上協同の行動を取らねばならぬこととなるであらうが——今のところでは、勞働團體は、無産政黨團體を忌避せねばならぬ物理上の關係にある。それは畢竟元來勞働人口を基礎とすべき無産政黨運動が、恰かも、勞働階級以外の中産若くは無産の智識階級の集團であるが如き實質を持つからである。此の事情は私共のやうに理論上から無産政黨を考へてゐるものには、極めて明瞭に分つてゐたことであるが、然し實際の運動としては前に言つたやうに必ず過渡的性質を持つものが起らねばならぬ。ロシヤの革命にもケレンスキー政府がその役目を務めたのであつた。日本の維新當時にも尊王攘夷とか、公武合體とか種々なる過渡的運動が、矢張り大勢を妨げるよりは寧ろそれを妨げる形で促進してゐたとも言はれるのである。今の無産政黨運動は、なるほど理論的純粹性を以つて勞働階級運動を代表してゐるものではなからうが、然し古い機構から新な機構に移る中間帶に於ける自然の作用を務めてゐることは充分認められる。随つてそれは決して、歴史上の意味を持たないものとは言はれない。

随つて危險はそこにある。元來それは無産階級の中心勢力、即ち、勞働人口の鬪爭的分子に基礎すべき性質のものであり乍ら、その戰鬪分子から忌避されてゐるといふことは、その運動を無産階級的のそれから遠ざけて所謂政治運動のそれに近づかしめる恐がある。言換へればその種の無産政黨は政治的權力を勞働階級に移さうといふその根本目的を捨てる譯ではないがそれを達する手段方法が、自分からその目的と違ふ方向に運動を導く處がある。

無産政黨が事實に於いて第一次的に期待してゐるのは、先つ無産階級が議會政治に於いて有力な政黨とならうといふことであるが、それには是非とも普通選擧を手段とする新な政黨的分

野を作り出さねばならぬ。それが爲めには、所謂選擧戰に於いて有力とならねばならぬ。而も今日の選擧運動は、主義主張の宣傳戰であると同時に、それを充分に働かせる財政上の基礎を持たねばならぬ。ところが、智識階級は、本來財政上の根據に乏しい。第一には中産者の多數は決して此の運動には加はらない性質を持つ。從つて大多數は無産智識階級である。而も無産者の財政的根據は、組合組織に依る外は不可能である。然るに智識階級は、その生活利害の關係上、今日の組織に於いては、大部分の間に利害の分裂があつて、組合關係を作る基礎に乏しい。言ひ換へれば、無産智識階級が、その全人口を以つて、無産政黨に加入するといふことは全然不可能である。加入し得らるゝものは、その財政上の基礎に於いては勞働組合を作る勞働者よりも貧弱である。そこで今の狀態の無産政黨は全然財政的根柢を缺くと云つていゝ。隨つて多少の望みをその點に懷かうと思へば中産階級の援助を俟たねばならぬ。そこが危險性の存する所である。中産階級はその利害の性質上、決して無産階級と一致するものでない。從つてそれが無産階級の政治運動に參加する場合は、生活利害に直接な要求よりは寧ろ他の要求を持つものであると見ねばならぬ。それは一つの權力慾であつて、恐らく舊政治の權力關係を作り出だす人間的衝動と同じ性質のものである。言ひ換へれば、舊組織の政黨關係に於ける權力爭奪の術動である。それは恰度舊政黨が普通選擧の實行に依つて得た無産者の投票數を奪取しやうとする動機と同じものである。隨つて無産政黨に於ける中産階級の後援者が黨内に於て有力となつた場合は、その無産政黨は、既成政黨の舊組織の内部關係に於ける權力爭奪運動と全く同じ性質の運動を取ることゝなる。その狀態に於ては、その無産政黨幹部は矢張り既成政黨の幹部と同じく有産階級を役者とする政治舞臺の舞臺監督となる譯である。之は過渡的の無産階級政治運動が最も警戒せねばならぬ點である。

無産政黨は、此の過渡的狀態に於いて有力になる爲めには、寧ろ既成政黨の破壞運動を試みることが實際的であると考へらるゝに至るのである。その爲めには、その政黨の機構を出來るだけ既成政黨の機構に一致せしめる必要がある。此の破壞は無論現狀の内部關係に於ける破壞運動であるから、一つの政黨が、他の政黨を破壞する運動であつて、平和運動が、軍國主義を破壞するとか、勞働運動が、政黨運動を破壞する意味の運動ではなく、軍隊が軍隊を破壞し、政黨が政黨を破壞する運動である。隨つて中産階級の援助に依る無産政黨が、或る程度まで目的を達し得る可能性がある。所謂キヤスチングボートを得る

のが、その最初の成功である。斯ふいふ運動は無產階級運動者の理想家には嫌はれるに相違ないが、然し元來が過渡的な產物であるから、その手段はやつぱり過渡的性質を持つても差支ない譯である。これは丁度英國のリベラリストの中の所謂左傾分子が、取つた態度であつて、それは確に或る點まで勞働政黨の勢力を促進するに力あつたものである。日本の無產政黨は無論英國のリベラリストの様に資本家階級を根據とするものではないが、然し英國のリベラリストが、その發達後半期に於いて、働いた作用を同じやうに働く傾向にあるものである。リベラリストは今日ではその大半は保守黨化し、その左傾分子は勞働黨化し、リベラリズムは極端の衰弱狀態にあるが、日本の無產政黨の位地は、中產階級の援助を要する點に於いて、リベラリストの左傾分子に似通つた地位にある。だから、その或る時期に於いては、既成政黨としての左傾分子を糾合する地位にある。而して他の時期に於いては勞働政黨に吸收さるべき地位にあると云はねばならぬ。而も是の事は現在のやうな無產政黨の存在を無意義とするものではなく、それが歷史上の意義を持つことを示すものである。

それだけ、現在のやうな無產政黨は、政治的權力を、勞働階級に移動せしむる橋渡しとして認められねばならぬものであるが、それは自から勞働組合から起り、勞働組合の財政的基礎の上に立つ無產政黨とは性質が違ふものである。勞働組合の根柢に依る無產政黨が、始に云つた經濟組織の組織的變化に伴ふ運動としてそれ自體どう云ふ地位を持つかは別の問題であるが、兎に角組合運動は、或國に於いてはいろ／＼の條件の下に、政治運動化することは事實である。從つて、その性質の無產政黨が政治的權力の中心點に立つ可能性は認められねばならぬ。それが、經濟組織の進化に全然順應した組織的構成であるかどうかは、これ亦各國の實情に依つて異るのである。イギリスの勞働黨が、どれだけの程度で產業の組織的變化に應じ得るか、言ひ換へれば場合に依つては舊組織を支持する政黨的機構を働かぬとも限らぬやうになる恐があるとも、無いとも斷言出來ないが、然し、その間色的現象は結局變化の進行を示してゐるものと見れば、決して退步的現象ではない。日本の無產政黨運動はそれよりも一層間色的であるが、そして稍もすれば、舊色彩に還元しさうな色合を呈しさうに見えるが然し、ただ全くの初期でそれ等のことを何れかに斷言するのは、早計であることは免かれない。さればその進行の過程が、產業組織の有機的進化と遵行しないやうに意識的努力が拂はれねばならない。それには、勞働階級の組織的集團が直ちに、その無產政黨の根柢をな

すやうな進化を取らねばならぬ。勞働組合の政治運動が、政黨化した場合に、それと對立的地位を取るやうな無產政黨は、想像し得られない。「萬一」の無產政黨がそんな風になつた時には、それは恐らく中產階級の左傾政黨即ち、政黨としては最も無力なものとならねばならぬ。そして勞働政黨に吸收されるのである。

然しそのことは、決して勞働運動が議會利用政策を最上の行動とするといふ意味でないことは斷るまでもあるまい。英國のやうに議會が殆んど萬能的に働き得るといふ政治的信仰と、多少それに近い實際とをもつ國に於ては、議會政策は、勞働運動としても極めて有力な手段たることを失はないが、議會の機能がそれほど有力でない國——さういふ國が多い——で議會によつて勞働運動の目的を達しやうとすると、その目的と逆な目的で議會そのものを壓迫しやうとする力が、種々なる形で働き出すことを免れない。イタリーの社會黨は議會政策に可なりの信用を拂ひ、又可なり成功したが、突如として、議會政治そのものを壓迫する力が働き出して、今日の暴力政治を出現せしめたのである。尤も此の暴力の政治は一時的の現象ではあらうが、然し、一時的の現象が常住的に働く期間が可なり長ければ、それは必ずしも「一時的」ではない。多くの國家に於ては、さういふ危險が有ると思はねばならぬ。しかもその壓迫的の力は必ずしも暴力の形でのみ現はれるものではなく、もつと合法的の形で現はれることも出來る。日本のやうに、一方で普通選擧が唱へられると、他方では、それが働き出す力を出來るだけ局限する力が働き、又治安維持法のやうな、勞働運動の根本的の目的が合法的に達成されることを、ファシスチ的暴力によらずに、もつと合法的の力で防遏しやうとする企が全政黨の贊同の下に行はれる。かういふことは實に、議會政治の効果を一時的に削減する運動であるのみならず、議會の職能が英國流に十分完全に發達することを妨げる機構が存在することを示すものである。かういふ國に於ては、議會政策は極めて貧弱の効果しか持ち得ないものであることを覺悟せねばならぬ。

のみならず議會がたとへイギリスのそれのやうに萬能的であつたにせよ、産業組織の進化に伴ふ社會組織の再建造を働き出す力としては、議會は、決して能働的であり得るものではなく全く受働的に止まるものである。議會は政治的變化の機關としても、その背後に政黨があつて始めて、その職能を働くことを得るのであつて、政黨なければ議會は政治的變化に對しても無力である。といふのは、議會は、政黨の作用を中樞神經として持つ末梢神經のやうなものだからである。勞働階級の政治運動に

對してはさういふ議會の地位は一層甚しく末梢的となるものである。勞働黨がその場合に中樞神經として存在せねばならぬのであるが、しかも勞働政黨は、更にその中樞神經として勞働階級の組織的集團を有たねばならぬのである。此場合、勞働政黨は所謂政黨的機構によつて成立つてゐるものであるが、更らにその中樞神經たる勞働階級の集團（勞働組合）は、決して政黨的機構によつて發生し成長したものではなく、全くそれとは別な社會運動として起つたものである。而して、その運動を力づけたものは、政治的闘爭ではなく、それとは性質の異る階級闘爭である。故に勞働組合は、それを力づける階級戰によつてその作用を働くものであつて、勞働黨は、それを力づける政治的闘爭によつてその作用を働き出すものである。しかも勞働黨は、その根柢に勞働階級的集團即ち勞働組合を有たねばならぬのであるから、勞働黨に眞にその力を働かす爲めには、その中樞神經たる勞働集團の階級戰に待たねばならぬのである。そこで階級闘爭がなければ、勞働黨は有つても無きに等しいこととなる。しかも、階級戰は勞働政黨の作用ではなく、勞働組合の作用である。そこで勞働政黨が如何に議會戰を行つても、勞働組合はそれと沒交渉に階級戰を行はねばならぬ場合に遭遇する。イギリスの勞働組合は、勞働黨の政府が成立したに拘らず、同盟罷工をもつてその政府を脅かさねばならぬ破目に陥つたのである。

そこで無產政黨の運動は、決して勞働運動に代るべきもので無いことは無論であつて、それは最もいゝ場合に於て、勞働運動が末梢的に議會政治に作用する働きである。イギリスのやうな國では、此の末梢運動は、可なり有力な効果を持ち來すのであるが、然しそれを力づける勞働組合の階級戰がなかつたならば、決してその有力さが發生し支持されることはなかつたのである。

されば日本の無產政黨運動も、それがぴつたりと勞働階級の運動と結びつき、それを基底として發達するまでは、決して甚だ有力には作用し得ないであらうし、またさうなつた曉にも勞働組合の非議會的運動がより有力に作用することを條件として始めて十分の意義と効果とをもち得るものであるといはねばならぬ。

次期總選擧に於ける無産政黨の實勢力と其候補者

一次期總選擧に於て無産政黨は議會に如何の實勢力を克ち得るか

一無産政黨の議員候補者として貴台の適任として推薦する四五人

普選實施第一回の總選擧に於いて當然擡頭すべき無産政黨に關しての具體的豫想は單に興味のみの問題でないと信じ、右二問を諸家にお伺ひして得た回答を採錄する。

○　堀江歸一

一、次の總選擧には無産政黨は大した實勢力を占めるを得ないと考へます。

一、候補者としては例へば鈴木文　、賀川豐彦、杉山元治郎諸氏の如く、勞働者の爲めに、貧民の爲めに、農民の爲めに多年力を盡されて居る人々に御奮勢を願ひたいと思ひます、無産者を踏臺にするが如き人達には御免を蒙ります。

○　高橋龜吉

一、次の總選擧が何時行はれるかによつても多少事情は異ると思ひますが、何れに致せ、無産政黨の議員が一個の交渉團體としての定數を贏ち得れば大成功であると思ひます。すべては、その次の總選擧迄待たなくては無産政黨の本統の準備は整ひませんと思ふからです。

一、いま具體的に誰と名指すことは出來ませんが、一般論としては、世間的に名の知れた人、例へば、鈴木氏とか賀川氏とか)よりも、此際、參謀格の人で、政策を持ち、政の急所をエグり出し得る人を撰んで推薦したいと思ひます。

○　内田貢

一、期待するほどの勢力は得られないと思ふが切めて二三十名の無産者代表を得たい。

一、堺利彦、長谷川萬次郎、大山郁夫、樣らいふ言論の雄を無産政黨の議員候補として推薦したし。鈴木文治氏は關係から云つても、申分なく、當選の可能性もあらうが、氏は餘りに政治家肌である。政治家としてシロウトを相成るべくは議院に送りたいと思ふ。

○　石川三四郎

今度實施される普通選擧制の下に於ては、無産者の生活と政黨——所謂無産政黨でも——とは餘りに沒交渉なので、到底大勢力は得られないと思ひます。

眞實の無産政黨が出來るとして、其議員數

補を物色すれば勢ひ古い同志の中にしか發見されません。併し自分が餘り有意義な事とも思つて居ない立候補に齊友を擇することは何だか忍び難い樣に感じられます。と言つて知らない人を推薦する譯にも行きませんから。先づ御斷りだけ申上げて置きます。

○ 堺　利　彦

一、次期總選擧に於いて無産政黨はまだ幾許の議員をも出し得ないでせう。殊にその議員の質が餘程惡いでせう。

一、私の適任と思ふ樣な人は大抵候補に立たない、或は立ち得ないでせう。よし立つても、當選が六かしいでせう。

○ 與　謝　野　晶　子

一、今日からの努力次第で一躍百人ぐらゐは出し得ると考へます。一一般無産者の覺醒は、既に可なり行き渡つてゐますから、よい指導者を得て、新しい政黨を實現したいものです。

一、有名な人で無くてもよいと考へてゐますから、特に名を擧げる事は困難です。

○ 小　川　未　明

自覺したが無産智識階級と勞働組合の提携によつて、無産政黨は、確固とした勢力を形成します。互讓、謙遜の精神のみが結合を堅くするものです。同一階級意識に立てる農民組合、勞働組合、水平社の諸團體と步調が一致すれば、次期の總選擧に實勢力を實現し得るものと信じてゐます。しかしこの希望が現在の狀態から見て、僞早の感なきでもありません。出來上つた政黨の性質と分子とを見なければ、從つて推薦すべき人物も定らない譯です。

○ 高　畠　素　之

一、大したこともなからうと思ひますが、よく分りません。

二、山本實彦、吉田一、堺利彦、辻潤などの諸氏適任と存じます。

○ 平　林　初　之　輔

一、それはわかりません。

一、安部磯雄、高野岩三郎、大山郁夫、堺利彦、布施辰治、高橋龜吉、鈴木文治、其他。

○ 赤　松　克　麿

一、次期總選擧がいつになるかに依つて、回答の內容も餘程違つて來ます。若し次期總選擧が最も早く來るとするならば、無産黨代議士は僅か四五名位であつて、しかも完全なる無産政黨は組織の域に達しますまい。

一、安部磯雄、鈴木文治、堀江歸一、末弘嚴太郎、杉山元次郎、麻生久、

○ 中　雄　三

（一）次期總選擧を大正十七年と假定すると、それ以前に行はるゝものと豫想するとで、若干の相違はあり。しかし何れにしても議會內に有する議員數はせい〴〵七八人か、十人を出でざるべし。まだそれにて結構なり。院外に於て之を支持する無産階級の勢力は、優に他政黨の七八十人に匹敵すべきを以て。

（二）質問はやゝ時期尚早の感なきにあらず。但し候補者の何人なるにせよ、當選性の確實なきものを選んで之に集中することを必要と信ず。

○ 新　明　正　道

一、實勢力といふべきものを贏ち得ることは難かしいでせう。

一、辯論だけ巧みな人では困ります。適任者は、大山郁夫氏（私の直接知つてゐるところでに。）

○　澤田謙

一、無產政黨の基礎たる自覺無產者は、たとへその數において多くとも、全國に散在せるため、多くの代表者を議院に送ることは不可能でありませう。次期總選擧には、或は一人も送りえないかも知れません。この際無產政黨が、その實力を議會に示すべき唯一の途は、いはゆる『直接射擊』によつて　その政策を　現するほかないでせう。

一、無產政黨は、勞働組合を中心とすべきものと思ひます。この意味で、鈴木文治氏、西尾末廣氏、加藤勘十氏、なほ他から付け加へたいのは、安部磯雄氏。

○　新居格

一、敎人乃至十名位の代表者をえる位が精々ではなからうか。尤も、それ以上の大きな勢力をえるかえないかの問題はその時の社會情勢の如何によるものと思ひます。

一、安部磯雄、大山郁夫、鈴木文治、高橋龜吉、布施辰治氏等。

○　內ヶ崎作三郎

智識階級は既成政黨の實勢力を過小視する傾向あり。これは誤謬である。既成政黨は不完全でも組織的傳統的の團體にして、過去四十年以上を費したる勢力である。無產政黨は一擧にして此堅壘をつくことは出來ぬ。東京大阪、神戶、吳、八幡或は山梨縣なぞいふ特別の地方からは各一名內外づゝの當選者はありませう。第一回の選擧では交涉團體までこぎつけることが困難であると考ふる。

一、安部磯雄氏、鈴木文治氏、賀川豐彥氏、麻生久氏、大山郁夫氏、北澤新次郎氏その他。

○　山崎今朝彌

一、私の見込ではイクバクの實勢力も克ち得ないと思います。克ち得た實勢力はイカンながらヨクテ僅々ガク〳〵の議論の效能に止まると思ひます。

二、私共の少しも知らない所謂無名の勞働者、青年が理想の候補者です。ソレデは答にならぬといふなら、當選の可能性があつて敢て排斥すべきでない止むなくんば極力此人を推すといふ四五人を、安部磯雄、布施辰治、鈴木文治、大山郁夫、加藤勘十氏と答へます。

○　田川大吉郎

一、無產政黨の字に疑ひがありますけれど、お尋ねに想定して、とても一割以上に出で得なからうと觀測します。

二、右の次第ゆえ、その人々の指名にも困りますが、大山郁夫氏、安部磯雄氏、鈴木文治氏、堺利彥氏、山川均氏の健康が許さるゝなら、同氏とも、小生は除りに下の年壯氣鋭の士を擧げ得ないことを遺憾とします。小生知り得る範圍の人は、殆ど多くは老ひました。

○　江口渙

一、今のところ格別の大勢力となり得る見込もなさそうだ。然し案外見くびつたものでもないかも知れない。

一、現在に於いて比較的適任と思はれるの

は安部磯雄。大山郁夫。高畠素之。猪俣津南雄。麻生久。佐野學。鈴木文治。西尾末廣。賀川豐彦。栗須七郎。の諸君など。尚その他大勢あり。

○逸名氏

一、次回議會には未だ大なる勢力たる能はず十名内外の議員に過ぎずと思はる。

二、小生の推薦する人物は左の如くに候。安部磯雄、大山郁夫、鈴木文治。堺利彥

○馬場恒吾

多數の論者は無產政黨は急には實　政界に勢力を得ないやうに云ふが、僕はその豫想は裏切られるものゝ一つだと思ふ。無產政黨の代議士は少くとも大都市を中心とする一投票區から一人宛は出るだらう。全部で少くとも三十人、多くならば六十名にも及ぶと思はれる。

無產政黨の候補者としては鈴木文治、安部磯雄、大山郁夫、吉野作造、賀川豐彦氏など擧げたし。

○村松正俊

一、普選が實施されたからといつて、直ちに無產政黨が議會に於て有力な位置を占めると考へるのは早計である。民衆は最も保守的なものである。從つて次期總選擧に於て無產政黨は殆んどいふに足りない程の勢力しか占め得られないだらうと思ふ。大都會及び勞働組合の勢力の有る地から數名を選出し得るに過ぎないと思ふ。

一、鈴木文治、安倍磯雄、大山郁夫、吉野作造、平林初之輔の諸氏

○高島米峰

一、無產階級の政治的自覺の程度は今尚疑問多し從つて狡猾なる擬似無產政客に胡麻化さるゝもの少からざるべきを豫想するに難からずかくて眞の無產政黨の成立さへ心元なしとせざるべからざる狀態なるにいかでか議會に於ける實勢力なんどを想像することを　むや。

一、無產政黨　假に成立するものとして、の議員候補者として推薦する　足るべきもの曰はく安部磯雄、曰はく加藤咄堂、曰はく堺利彥　曰はく白柳秀湖、曰はく長谷川如是閑而して曰はく僕？

○高橋誠吾

一、團結して事に當れば貳拾五名位の實勢力を得る可能性はありませう。(小作農民黨を含みて)

一、鈴木文治、吉野作造、大山郁夫、松岡駒吉、高野岩三郎諸氏。

○室伏高信

當分のところ論壇の人士と勞働運動者等とを選出するよりほかはありますまい。

○

一、二十人內外

二、堺利彥、山川夫妻、荒畑寒村、加藤一夫、新居格、賀川豐彦等學校先生でなく無職で且つ政治の好きな方々。

○麻生久

純然たる無產階級の代表者は幾何も議會に送られないでしやうが、勞働組合農民組合の存在する土地に於ては、他の黨派に屬する候補者も、その態度は決定的のものであるから議會内に於て無產階級の代表者は少數なりと雖もその貴職一つでは相當の仕事をなす事は出來るでせう。

○土田杏村

一、十名以內か。十名あれば先づ、最初としては我慢出來る。

一、大山郁夫、鈴木文治、賀川豐彦、島中雄三諸氏。

○　北澤新次郎

(1) 大なる期待を爲し得ないと考へます。既成政黨との腐れ緣が、民衆の心裡から容易に離れませんし、又總べてが金の世の中で、しかも無產政黨は理くつは能くも金がないために左程期待は出來ないでしよう。殘念の事ですが。

(2) 安倍磯雄氏、高野岩三郎氏、鈴木文治氏、松岡駒吉氏、杉山元次郎氏、大山郁夫氏

○　神戸正雄

一、分りません。

二、鈴木文治、賀川豐彦、尾崎行雄、清瀨一郎諸氏などは適任だらうと思ひます。

○　小牧近江

一、勞働運動分裂その他の現狀に鑑み、私はいはゆる無產政黨の大同團結には假に贊成が出來ませぬ。一人でも二人でもいゝ、××××××子を議會に送ることを最も有意義だと思ひます。

二、その意味に於て、私は誰某と限定しなくても、選擧當時、獄中にあるもの、又は××の者など、時の社會運動思想運動の犧牲者を推薦するのも一の方法ぢやないかと思ふものです。

○　布施辰治

有產制限の納稅條件撤廢による無產階級の新權者が、一千萬（二對五）近くも殖えだのだから、次きの總選擧には當然無產政黨が多數を占めて、議會內に餘程の實力を克ち得べき筈であるが、實際は中々容易なことでなく、恐らくは少數の鬪士に依りて無產階級の意思を議會に發表し得るであらうが、議決をどうすると云ふ丈けの實勢力を有ち得まいと思ふ。

安部磯雄　大山郁夫　賀川豐彦　鈴木文治　馬場恒吾　以上

○　野村兼太郎

無產政黨が次期總選擧で[illegible]優勢な政黨になり得るとは思はれない。若し黨員の多くが穩當な方法で進んでゆけば將來有望と思ふ。要は黨員の努力にある。

○　非原達

一、目下の狀勢では大した期待は持ち得られません。要は農村に於ける小作人の政治的自覺の程度如何が凡てを決する態度であると考へてゐます。

二、階級意識に基く明確な理論と政策とを有し、且つこれを敢行する能力ある人でなければならぬと思ひますが、不幸其の人を見ません。時到れば無名にして有爲なる士が現はれるであらうし、且つ其の現はれる事を冀つてゐます。

○　松岡駒吉

一、今期の總選擧が何時行はれるかと云ふ事が豫想出來ないので從つてそれまでに無產政黨の組織が完成するかどうかと言ふ事は疑問であります。しかし兎に角無產階級を代表する議員が四人や五人は選出される事と思ひます

二、鈴木文治、松崎猪太郎、杉山元次郎、安部磯雄、堀江歸一、末弘嚴太郎、布施辰治氏等

○ 三宅驥一

一、次期總選擧に於て無産政黨の議會に出す議員數は十名以下と存候。

一、賀川豐彦、鈴木文治、安部磯雄、末弘嚴太郎、尾島二郎。

○ 三輪壽壯

一、恐らく十人以下だらうと思ひます。從て數の上では重きをなさないでせう。が然しその顔ぶれの如何によつては議會を搖きまはす事が出來るかも知れません。

一、鈴木文治、麻生久、布施辰治、安部磯雄大山郁夫。

○ 片山哲

一、次期の選擧では、無産政黨の勢力はまだ〳〵微弱であらうと思ふ。幾多の障碍が横はつてゐる故、實勢力を克ち得るまでに、尙多少の年月をかさねなければならぬであらう。

一、鈴木文治、杉山元治郎、麻生久、安部磯雄、賀川豐彦。

○ 加藤一夫

一、殆んど得るところなかるべし。廿名も代議士を出し得たら大したこと。

二、僕としては誰でもよし。誰が代議士になつたとて何もなし得るものではないと思ふから。しかし代議士にはまり役は、差當り鈴木文治、賀川豐彦、西尾末廣、等の如き人か。

○ 山川均

一、必ずしも多くを望みませぬ。

一、それまでに無産政黨の組織が成るとすれば、無産政黨が定めた候補者に投票します。但し私が推薦するとすれば、階級意識の確乎たる實際の工場勞働者と小作人とのうちに大多數を求めます。

○ 白柳秀湖

一、初めの總選擧には可なり面白い變化があるものと豫想して居ます。大してめづらしいものでもなく、又大してうまいものでもないのに、今日といふ今日までチン〳〵お預けをして置いたのですから國民が之を腹一ぱい食べて見ようとするのは當然でせう。さうして恐ろしい下痢作用も次いで起るでせう。

二、それこそ誰でもよい。代議士になつた方が割のよい人だけが代議士になるので、代議士になつて割の惡い人は普選になつても何んになつても打つては出まい。

○ 上田貞次郎

無産政黨といつても都會の勞働者黨と農村の小作人黨とは全然一體となることの出來ないものと思ふが普選實施後直ちに政治上の一勢力になり得るは農民黨であらう。

○ 那須皓

一、二三十人を超ゆることはむづかしいでせう。

二、赤松克麿氏、杉山元治郎氏、大山郁夫氏鈴木文治氏。

○ 千葉龜雄

一、今のように、あまりはつきりしない無産政黨の形勢と、反動思想が相應有力である現時の國勢と、國民の無産政黨に對する同情もしくは理解が、かなり不十分であることと、それ等から推して、次期總選擧までに、無産政黨が、相當な勢力になるにはまだ可なりの困難があるようです、が、成立

すべき土臺は古くから立派にあるのですから要するにどれほどの勢力となるかはこれからのヘビイのかけ方を見る外にありません。

二、賀川豐彥、大山郁夫、鈴木文治、安部磯雄、高畠素之、の諸氏しかし、無名の士に却つて有名以上の人があるやうな氣がします。

○　川井盛之

一、臨月になつても生れない無產政黨が、次の總選擧といつても、いつ行はれるか今の處はつきり定つて居らない機會に、どれ位の成長を示すか、それは遙に豫言すべく余りに困難なることである。既成政黨は普選の空氣から無產麒麟兒の飛び出すのを恐れて、保守主義から自由主義へと、表面だけはとにかく塗りかへやうとして居る。粒々この細工が仕上がれば、大部分の投票は、次期に於てはやはりそちらに攫はれて了ふのではなからうか。

二、安部磯雄、大山郁夫、鈴木文治。

○　青野季吉

一、極く少數でしやう。しかし外國の無產政黨の最初期ほど少數ではなからうと思ひます。

二、安部、堀江、鈴木、杉山の諸氏がすぐ頭にうかんで來ます。最初期には何と云つても、かう云ふ人たちに働いて貰ふ結果になるのではないでしやうか。どんな人に働いて貰ふにしても、大切なのはその人たちを働かせる無產政黨の方の組織です。それがうまく出來てみれば、人の方は大して問題ではなくなります。

○　山川菊榮

一、まだ大した勢力にはなり得まいと存じます。

一、無產階級の階級的利害を代表する農民と勞働者の中から、適當な人を出したいものです。

○　猪俣津南雄

左の通り御回答いたしたいと思ひます。

一、意想外の實勢力を克ち得べし

二、小生の知れる範圍では、堀江、堺、鈴木、大山、山川、賀川、阿部、等の諸氏に、無產政黨運動への輿論を押進められた人々であり、其際の敢然たる立候補は、黨の前途の爲に最も望ましかるべし。然乍ら、前記の士等と少くとも同數以上の候補適任者は當然に之を、勞働組合、農民組合、水平社等の實際的指導者諸士のうちに見いだし度し。

労働總同盟紛亂の眞相と批判

總同盟紛擾の眞相を闡明す

松岡駒吉

一

昨年から引き續いて居る總同盟の紛擾問題に就いて、種々なる流言蜚語が傳つて居るために、其の眞相が世間に正しく理解されない憾がある。私は此の機會に、世上誤り傳へられた諸々の臆說を正して、大方の識者の正當なる批判の資料としたいと思ふ。

第一、此の問題を以て單なる總同盟內部の右翼と左翼との爭ひの如く解して居る人がある。そして其の人は、組合が大きくなれば、必然的に右翼と左翼の別を生ずるのだから、左翼だといつて處分するのは官僚的な遣り方だと評するのである。此の說は、遺憾ながら問題の眞相を摑んで居ない。我々は現在の紛擾問題を以て、單なる右翼と左翼との爭ひと解することは出來ない。そんな簡單な問題であれば、何も躍氣になつて騷ぐ必要はない。問題はモット深刻である。かつて進め社の同人諸君が、討閥運動を起したことがあつた。我々は所謂日本共產黨なる秘密結社があるか又はさうした政黨的組織が在るかどうか知らぬが、とにかく我國の社會運動の分野に、日本共產黨と云はるゝ一個の閥的勢力の存在することは、誰しも認識せざるを得ざる事柄である。此の閥的勢力は各方面に手を延ばして居て、現に我が總同盟內にも之に屬し若くは之と通謀する一派が確かに存在して居る。

彼等一派は總同盟內部にあつて黨中黨を作り、常に外部の同系勢力と策應して、勢力の擴張に努め、機會ある每に有實なる運動者といへども、閥外の者であれば之を蹴落さうと企らんで居る。昨年四月關東同盟會の紛擾の端となつた關東鐵工組合大會に於て、彼等一派は鐵工組合主事土井直作君を「共產主義者にあらざる」の理由を以て排斥を試み、巧妙な宣傳と熟練た策略とによつて、遂に成功したのであつた。彼等一派の或者は「土井をやつつけたら、今度は松岡（關東同盟主事）を葬るのだ」と揚言した。此等はほんの二三の例であるが、我々は數多の實例に徵して、彼等一派は　我が總同盟を攻る閥的勢力の支配

下に置かうとする陰謀の實現に努めて居ると斷定せざるを得ないのである。

二

彼等一派が偏狹なる朋黨的態度を以て或る陰謀の實現に努力して居る外に、我々の常に苦々しく思ふことは、彼等の運動政策があまりに氣分的であり、觀念的であり、小兒病的であることとである。彼等は誇らしげに共產主義者と自稱して、他の者を侮蔑し、門外の者を「改良主義者」「黃色組合運動者」と嘲けつて居る。そのくせ彼等は勞働爭議を一つ碌々處理出來ない。勞働爭議となれば、革命の豫行演習だといつて、爭議の解決に害あつて益なき生噛りの共產主義演說、革命演說をやり、愚にもつかぬ革命裁判なるものをやつて、爭議を故意に惡化せしめたりして居る。勞働爭議は組合の實力や其他の條件に應じて、適當に解決することによつて、組合員の教育、訓練、地位の向上になり、そしてまた彼等の所謂「革命の豫行演習」としての實效を擧げることになるのであつて、たゞ徒らに騷ぎ立てゝ爭議を慘敗に終らしむることは、組合員の訓練どころか、却つて勞働大衆を組合より離れしめることになる。彼等は口に大衆化を叫びながら、行動は少しも大衆化しないで、獨りよがりの孤立的運動をやつて居る　彼等は「大衆化」といふ一個の觀念を弄んで居るのである。

更に我々の最も不快とする點は、彼等が門外の人を陷入れるのに、何等手段を選ばぬことである。例へば「關東同盟の幹部は警視廳と結托して居る」とか「松岡は北京へ行つて利權を漁らんとした」とか、「赤松は政治部の金を胡麻化した」とか「西尾は佐達一派を治安維持法に引つかける魂膽だ」とか、全く根も葉もない出鱈目を宣傳して、人を傷つけやうとして居る。無產階級としての道德も信義もあつたものではない。彼等の遣り口は、ブルヂョア政治家のそれと少しも變らない。我々は、唯物史觀を濫用して、人間同志の關係を冷たい功利的關係に還元してしまふ弊害を往々に見るものである。唯物史觀は、一個の社會理法として眞實性を有するのであつて、無產階級の道德的情操を殺してしまふものではあるまい。無產階級は階級的主張の貫徹に於ては勇敢でなければならぬが、一面に於て資本家階級以上の道德性があるのでなければ、資本主義の改造とか新社會の建設とか、口はゞつたいことが云へた義理ではない。此の點に就いて、最近我々が頗る不愉快に感じたのは東京府下大島勞働宿泊所の一件である。我が總同盟は從來、現實政策の一端として、勞働宿泊所や職業紹介所を經營して居るのであるが、大島の宿泊所には彼等一派の東部合同勞働組合員が數名之に投じた。所が彼等は久しきに亘つて規定の宿泊料や食費を一文も支拂はず、無錢宿泊を當然の權利であるかの如く考へ、徒らに革命歌を高唱して近隣に迷惑を掛け、主任が幾度か忠告するも之を聽き入れない。而して此の不穩當な行動を、東部合同勞働組合及關東地方評議會は支持したのである。かくて健實なる組合事業の遂行を困難に陷入れたのであつた。新しい文化を建設し

やうとする勞働階級の前衛は、最も進歩的でなければならぬと思ふが、共產主義者を以て自ら任ずる組合の闘士の中に、平氣で不德義を敢てする者のあることは、實に歎かはしいことである。

三

右に述べたやうに、此の問題を以てたゞ組合內部の右翼と左翼又は現實派と急進派との爭ひと見るのは當らない。若し彼等が單に組合內部だけの、そして眞面目なる急進派であるならば主張は相異しても、現實派との間に自ら人格的信賴が生じ、兩者の意見の有機的調節によつて、運動の進展を期することが出來ると思ふが、前述の如く彼等一派の立場、主張、行動は現在我國の勞働運動が必要とする勞働運動者の資格に値しないのみならず、却つて我國勞働運動の健實なる發展を害するものである。故に我々は彼等にして其の態度を改めないならば、已むを得ず、總同盟の健實なる發展の上から、之れに對して斷乎たる處分を以てするの外はないと信ずる者である。我々は今日まで幾度か彼等の反省を促すべく好意的勸告を試みて來た。併し彼等には一向反省の色が見えない。昨年關東同盟內部に紛擾が生ずるや其の多數派は日本共產黨系一派の四組合と中心人物六名とを總同盟より除名すべきことを、中央委員會に要求した。十一月下旬の中央委員會は「四組合並びに六人の者に對して關東同盟が考ふる根本精神に對しては、全然同感なるも、其の處分の點に關しては、之を除名せずして除名に次ぐの處分をなし、內に於て其の誤れるを矯正するを以て至當と思惟する」といふのであつた。十二月　九日の中央委員會は、關東同盟の紛擾に關して聲明書を發し、其の結論に於て「抑々今回の事件を惹起せる根本的原因は、最初關東同盟の要求理由に示せる如く、從來五組合中の一部には、著實なる組合運動者を目するに、改良主義者の侮蔑を以てし、徒らに實質の伴はざる急進的言辭を弄し、動もすれば所謂朋黨的精神とも云ふべき行動によつて、組合內部に暗鬪を起さしむる如き傾向があつたのであつて、かゝる傾向がやがて、今回關東同盟大會の內に退席問題として現はれ來つたのである。斯くの如きは、總同盟今日の運動精神と背反するものであつて、今後に於ても亦斷じて、排擊せねばならぬ事柄であり、中央委員會は若し今後に於て、斯くの如きことを繰り返す者ある場合に於ては、其の何者たるを問はず、斷乎たる處置を執る決心を有するものである。各人如何なる思想を抱くも、それは自由であるけれども、既に一個の團體を組織して、其の主義主張を掲ぐる以上、其の團體の精神を尊重し、其の統制に從ふは團體に屬する者の義務でなければならぬ。かくてこそ始めて其の團體の發展は期待さるべきである。」と述べたのであつた。

其後といへども彼等の態度は依然として改まらない。そして三月の大會に於て、彼等一派は外部勢力と策應して露骨なる別黨行動を發揮し、多數組合員の憤激を買ひ、今日の紛擾の渦卷を生ずるに至つたのである。

四

第二に此の問題を以て、總同盟の幹部派と非幹部派の爭ひの如く彼等一派は宣傳し、そして其れを信じて居る人がある。幹部派非幹部派の爭ひだとは、宣傳上手の彼等のやりさうなことである。彼等は幹部の多數が除名說に傾くや、恰も幹部が多數組合員の意志を無視して官僚的行動を取るものゝ如く吹聽し、官僚幹部の排斥といつたやうな俗受けのする戰術を用ひ。そして自己の立場を辯ろはんとするのである。總同盟の幹部が官僚的だとは以前サンヂカリスト一派の頻りに叫んだ所であつたが、實情に通ずる者は、總同盟の幹部程權限を有しない、組織上無力なものは少いことを知つて居る。中央集權主義の必要がやかましく叫ばれるけれども、なか〳〵實現を見ないのである。幹部に官僚的行爲が出來るほどの組織になつて居るならば、今日、總同盟の組織を集中的に改造しなければならぬといふやうな必要は毛頭ない筈である。幹部の態度が彼等に有利なる場合は、彼等は中央集權主義を叫び、不利なる場合は、官僚的幹部の排斥と來るのである。

彼等は幹部の廓淸運動をやるんださうであるが、何んだか廢娼運動めいて滑稽ではあるけれども、併し彼等はさうすることによつて幹部に不正行爲でもあつたやうな聯想を一般に與へやうとする。我々は現在の總同盟幹部が才能や手腕に於て缺ぐる所ありとするも、道德的に何等批難さるべきものはなく、淸廉潔白なることを堅く信じて疑はないのである。斯くの如く裏口から人を傷けやうとする遣り口は彼等の最も得意とする所であり、また多數組合員の感情を激發せしむる所である。繰り返していふ。今回の問題は斷じて幹部派と非幹部派の爭ひではない。多數組合員は幹部以上に激怒して居るのである。そして幹部を絕對信任し、幹部を激勵して居るのである。

第三に今回の紛爭を以て、共產主義者と改良主義者、第三インタナショナルと第二インタナショナルの爭ひだと見る人がある。これも彼等の宣傳によるのである。我々は此の問題の最初から、共產主義思想の可否、第何インタナショナルの可否等のことを全然問題として居ないのである。我々は唯だ運動の現實に現はれた彼等一派の政策や戰術や階級道德が、我國現下の勞働運動の健全なる發達上、絕對に拒否さるべきものであることを主張するのみである。若し彼等一派の滅茶な行動を以てして、それが原則のない共產主義者の態度であるとするならば、我々は共產主義なるものに對し、絕對に反對しなければならぬことになる。我々は理論的造詣は淺いけれども、ロシアの運動が斯うだから日本の運動も斯うしなければならぬとか、イギリスの運動が斯うだから、日本の運動も斯うしなければならないとか、といふやうな考へ方は誤つて居ると思ふ。日本には日本獨自の運動が無ければならぬ。併し、原理的に見れば、世界各國に共通なる資本主義崩壞の原則といふべきものが在ると信ずる。此の普遍的原理が、日本の無產階級運動の現實過程の上に、如何に具現するかといふ問題は、十分考慮すべきも

のがあると思ふ。勿論、我々は外國の社會思想や運動狀態を知る必要があり、また無產階級の國際的協力の必要も認めるけれども、我々は先づ第一に、日本の資本主義的環境を戰鬪舞臺とする日本の勞働運動者であることを强く意識するものである。

五

我國の勞働運動は現在如何なる狀態にあるか。財界不況による勞働不安は益々深刻となり、一方に治安維持法が布かれて無產階級彈壓の用意が成り、他方に普通選擧が施かれて懷柔的民衆政治の第一步が踏み出されんとして居る。しかして組織勞働者は全產業勞働者[illegible]百萬人の中、僅々二十萬人を出でない。其の二十萬の組織勞働者も、決して堅實なる陣容を整へて居るとはいへない。そして勞働者はまだ團結權さへも獲得して居ないのである。我々は此の多事多難なる前途に處するに、景氣のいゝ空威張りばかりしては居られない。我々は好い加減に身の程知らざる日惚れと翻譯的理論かぶれとから脫して、獨自の指導精神に立脚し、着實な根強い運動に移らなければならぬ。我々は勞働總同盟第十三年大會の劃期的宣言の精神に則り、紛々たる毀譽褒貶を度外視して、何處までも所信に向つて邁進せんとするものである。（四月九日）

總同盟の問題について

河野密

一

日本勞働總同盟の紛擾は少なからず各方面の視聽を集めてゐる。治安維持法と言ひ、普通選擧法の實施と言ひ、勞働組合運動の前途漸く多事ならんとする際のことゝて、その成り行き如何は頗る注目されてゐるやうだ。——事實、問題の解決如何に依つては、日本勞働運動の上に重要な轉機をもたらすに至るかも知れぬ。苟も勞働運動に多少の關心を有するものが、いたく重要視する所以もこゝにあらふ。問題は單に總同盟內部の問題のみに止らない。

然し今それ等の點に輕々しく觸れることは避けたい。問題の眞相そのものが判らないからだ。更に前途に對する確たる主張を掲げ得ないからだ。『現在日本の勞働組合運動を如何にすべきか？』と云ふ實證的の主張なくして實際運動を云爲するのは不親切なてふ非難を免れない。況んや批評などは思ひも及ばぬことである。

『少數派か、多數派か』——爭ひの當事者は好んでこの言葉を用ひてゐるらしい。多少遠方にあつて興味——と言つては語弊があるが、少くとも他人事のやうな氣持で眺めてゐる人々は、よくこの言葉を口にする。そして『どちらを正しいと思ふか？』などゝ無遠慮にきく。然しその中間にある自分などにはそ

の際默する外仕方がない。日本の現狀が何れの方向を可とするか、はつきりと見極めることが困難だからだ。敢て自分を以て他人を推す譯ではないが、問題の渦中にある人々にとつてすら、將來に對する確たる見通しをつけることは恐らく困難であらう。

二

然し問題を少しく一般的にとつて、かゝる事件を喚び起すに至つた根本的の原因、言ひ換へれば原因の原因如何となれば、多少思ひ當るふしがないでもない。

第一に勞働組合に安定がないと云ふとである。言葉は惡いが言ふ意味は、勞働組合の中心的勢力をなすべき大工場に組合が組織されずして、五十人、百人と云ふ小工場の勞働者を糾合して組合が出來てゐると云ふ事實である。

社會局の統計に依ると(大正十二年末現在)工場法適用の工場勞働者は、男に六十一萬六千人、鑛山勞働者は同じく男子二十一萬六千人、合計八十三萬二千人である。女子は組合に組織する可能性が先づ少いものとして、これ丈けの數は大體組合に組織し得る勞働者である。この他交通業その他に從事する勞働者を合して私の計算に依れば組合に組織し得べきもの約五十萬ある。そこで日本に於ける組織可能の勞働者の數は概算百二十萬乃至百三十萬と云ふことになる。

然るに日本勞働總同盟は僅かに二萬八千人の組合を抱擁するに過ぎない。大正十四年版勞働年鑑に依る。)組織し得べき勞働者總數に比して甚しく少ない。而も總計二萬八千人の組合員は、大小六十八の組合に分屬してゐる。一組合平均數は四百十人に過ぎぬ。これ私が勞働總同盟を組織する組合に安定を缺ぐと言ふ第一の理由である。

更に立ち入つて組合の産業的分　を見んか、東京縫工組合、南葛東勞働組合、東都染物勞働組合、灘製樽工組合、神戸海上勞働組合等の如く、嚴密な意味で近代的産業と言ひ得ない部門に從事してゐるものが多く含まれてゐる。勞働組合が近代の工業組織に隨伴して發達したものである以上、大工場、大工業の勞働者を組織するのでなければ、勞働組合としての力は甚だ弱いと言はなければならぬ。これ私の安定を缺ぐと云ふ第二の理由である。

以上の如き組合を殆んど無批判に糾合し、雜然たる組合の結合たる所に戰鬪的勞働組合としての總同盟の致命的な弱點がありはしまいか。私には總同盟這次の紛擾の如きも根本的原因を溯ればこゝらに潜んでゐるやうに思へてならぬ。

三

第二に注意すべきは、――かなり大膽な言ひ分だが――、以上の事實と關聯して、總同盟にまた人を中心として結合すると云ふ中世紀的な色彩の殘つてゐると思はるる點である。言ひ換へれば、總同盟が尙事務的統制の上に缺陷を有つてゐはしないかと云ふ點である。これは一般組合員間に於ける組合的訓練の不充分にも由るだらう。しかし鞏固な戰鬪的組合の實を擧げる爲めには、更にこの點の考慮が必要ではあるまいかと思はるゝ。

× × × ×

以上は敢て總同盟にのみ限つたことではない。日本の何れの戰鬪的組合も共通にする缺點である。しかしこの點を考へずしては總同盟の今度の問題も考へることが出來ないであらう。

組合が小工場を中心にする、從つて安定がない。組合が比較的小さいから各分子を尊重する、從て組合の統制を行ふのに困難となる。組合に中心的の基礎となるべきものがない。從つて少しの波紋が大きな動搖を生む。——こんな事實が相倚り相助けて總同盟の紛擾の種、原因の原因をなしてゐるやうに思へる。

從つて問題解決の道は、基礎の鞏固な、工場に於ける組合組織を促進し、堅固な土臺を作ることであらう。現在のまゝで進んでは常に動搖を繰り返すことにならう。私は總同盟の心ある人々にこの點に留意せんことを希ふて止まぬ。紙上の議論かも知れないが、統計面から見れば總同盟の基礎はしかく安定ではない。内外多事の際に、戰鬪的勞働組合の先驅たる總同盟の自重を切に望んで止まぬ。私は總同盟を最も愛するが故に、敢てかくいふのである。（四月六日）

我等の立場

山本懸藏

總同盟の内紛問題の眞相は極めて簡單である。即ち、協調主義に墮した現在の最高幹部と、階級意識に目覺めた一般組合員との爭ひである。また、總同盟を協調的組合にしやうとする勢力と、それに反對する力との爭ひと云ふこともでき〻。現在は諸種の流言蜚語のために、この眞相が傳へられてゐないが、おそらく時間の經過と共に諸君の目には明になつてくるであらう。我等はこの事件を、單に總同盟一組合の問題や幹部間の爭ひごとと觀ることに反對する。我等は事件の歴史的意義と社會的意義とを正しく理解されむことを諸君に希望する。

自分　改造社の求めに應じて左に一文を草した。書いて見れば、結局我等の言ひたいことを云つたに過ぎないものになつた。事情に全く通ぜぬ者が見ては多少わかり難い點があるかも知れぬが、もう一度書きなほす暇にならぬので、そのまゝ掲載してもらうことにした。

○

昨秋關東同盟會幹部は總同盟中央委員の決議と勸告とを蹂躙し、剩へ規約を無視して六名の個人除名の暴擧を敢てした。六名の所屬せる組合は何れもこれが不當とせるにも拘らず、更に理事會の多數を頼み議題討論をも用ひずして五組合をも除名するに至つた。その除名理由は縷々數千言を費して居るが、結局極左派は小兒病的共產主義を奉ずるから

との事であつた。列擧せし具體的事實に就いては毫末も左翼共產主義者としての行動は記されて居ないのみならず、その事實——例へば爭議の問題、大會紛擾の問題陋劣なる朋黨的野心等——は彼等の責任なるにも拘らず總てを吾等に轉嫁して居る。當時の幹部派は時潮に迎合する爲めにマルクス主義的用語を借用して正統共產主義者を以つて任じて居た。眞正科學的共產主義、若くは現實的共產主義的日本主義は彼等の專賣特許であつた。

三月廿七日總同盟中央委員會に提出されし六名の個人除名の理由は、六名が共產主義者であり日本共產黨に策應するからであると稱した。幹部派は僅かに半歲を經過せざるに早くも、眞正科學的共產主義の專賣の名譽と誇りを惜氣もなく投棄てた。そして彼等は尙總同盟の光輝ある傳統と根本精神を把握して居る、と叫んで彼等の半歲以前の眞正共產主義者の立場も、今又共產主義者排斥の猫の目の變ずるが如き立場も、尙且つ同じである！。

今や彼等は政府の彈壓政策の白刄に頭を垂れ、懷柔政策の前に咽喉を鳴らして眞正共產主義より數步退却して社會改良主義、勞資協調主義の陣營に驅け込んだ。そしてブルジョアと官憲と結托して同一口調を以つて組合運動の精銳、予に共產黨員の燒印を捺し、無自覺なる勞働者部隊との切離しを煽動し、以つて除名することに浮身を窶した居る。幹部派は彼等の抱く思想を至上至高のものとなし、其以外の一切を排し——但し思想を理解する人々には自分こそ共產主義者であつて左翼共產主義者を排斥するのだと說き、その反面に思想の理解できざる勞働者には共產主義者だから排斥するとの兩刀を用ふる良心ある？連中も一部ある——征服して思想的帝國を築造せんと努めて居る。斯くて彼等は現在の地位を惡用し、その權力慾を滿足さす爲に自己の墮落を隱蔽し、凡ゆる讒謗中傷を放ちて同志を傷け、一般勞働大衆を瞞着せしめつゝある。彼等のなすところは正に非科學論者であり、根本精神の變節漢であり、勞働運動背德の背信漢であり、總同盟のみならず日本の勞働運動の大勢を誤らしむるの徒である。況んや日本の勞働組合の基礎の十分發達せざる時に於いてをや。

勞働組合　經濟上の利害の一致に依つて集るものであつて、思想團體或は政黨の如く思想の一致や政治上意見の一致に依つて集る團體ではない。スパイ的反動主義者でない限りは協調論者であらうと革命論者であらうと之を抱擁しなければならない。從つて「各人如何なる思想を抱くもそれは自由である」「勞働階級を團結させ階級的敎育と訓練とを與へる社會主義の學校、それが勞働組合である。玆に組合運動の進化と發達がある。そして大會に於いて組合員より委任されたる代議員が、中央幹部に質問し議案を審議し誤りあらばそれを矯正することは、組合員の正當にして又必要なる權利であり義務である。

○

三月廿七日中央委員會に於いて正規の贊成を得る能はずして除名案否決さるゝや、剛愎なる幹部派は關東地方評議會の解散を評議

會成立後幹部派は評議會の發達を逡巡して自己勢力の擴張の爲めに、評議會解散除名の宣傳と陰謀に腐心して居た――提案した。中央委員會は關東同盟と地方評議會を同一機關に合同せしむる爲めの手段として單に四月十五日迄に解散と決定したのみで、合同に關する具體的方策は何等明示されて居なかつた。

元來、關東地方評議會は前節に述べし通り、昨秋關東同盟幹部の專斷に依る除名の結果、五組合と新加盟の一組合とが運動をより有利ならしめる爲に昨年十二月下旬創立されたのである。總同盟の會則にもなき地方評議會の名稱を附したるは關東同盟盟會との相互の感情の激成を避くる爲めであつた。同一地方に二つの聯合體の存立するは明かに變則的でもあるが幹部派の變則の行爲の結果生じたる二つの聯合體の存立は已むを得ざることであつた。されば一月十八日中央委員會に於いても總同盟の組織として正式に評議會を承認したのである。吾等はやがてまた合同し懷かしき友と共働する日の遠くないことを信じ『二つの變則的聯合體の消滅することを希望し』聲明書の配布や惡宣傳に對する抗議さへも差控へて隱忍自重の態度を持して來たのである。故に中央委員會の決議が眞實合同の爲めの解散ならば喜んで贊意を表したのであるが、原案提出者たる關東同盟會は三月廿五日既に理事會に於いて六名の個人除名、評議會の解散其他評議會の發達を阻止する爲めに暴力團を利用するの決議をなして居た。それ故吾等は合同に對する具體的方策の樹立を希望し再審議を中央委員會に求めたる所、同會は四月十二日九對二を以て前の同會の決議を繼續し解散の爲めに十五日迄に解散せよと決定したのである。斯の如く彼等の眞意は飽きる限り六組合の勢力の分散を圖りて撲滅を企劃せる陰謀に外ならなかつた。のみならず十二日の中央委員會に於いて何等決定して居ないにも拘らず、西尾主事は總同盟規約を蹂躙した獨斷の下に十六日評議會加盟組合に除名通告を發したのである。總同盟の組合員の過半數に垂んとする三十組合より、幹部の不信任を表明され、例へ評議會解散案等の如き重要問題其他を大會に諮る事を防害し、自己に有利な選擧區に依つて選擧される多數中央委員を占むるを好餌として、革新同盟より提出せし臨時大會開催の要求に一顧をも與へずして峻拒した。

以上の如く評議會がこの無慈なる中央委員會の決定に服し得ざるは當然の事である。又規約を無視して除名し、大會開催に依つて內部の責任の歸するを恐れるが如きは、明かに彼等の官僚化、墮落化の傾向を雄辯に物語る事實である。

○

總同盟十三年度大會は『如何に現實の必要の爲に政策上に變化が行はれようとも無產階級解放の根本精神に就ては毫も變りなきことを解明すると宣言した。然るに僅か一年にして幹部等は『理論の拘束を脫脚して現實の必要の輕重を考慮する』と公言し、資本家との鬪爭を忘れて、勞働者のみの負擔による共濟組合の傾向を熾んにし、ブルジョア政黨者流

と共に『勞動黨』の組織を相談し、資本家と政府と如何に協調妥協するかに日夜心を砕いて居る。

彼等の稱する科學的現實的運動とは、勞働階級が今日迄血涙を揮つて築きし勞働組合——例へば集中的産業別合同を寨ずると云ふ彼等が總同盟有數の關東鐵工組合を分裂せしめ一夜作りに東京鐵工組合を作りし如き——の破壞と分裂とであり、昨日までの僚友を共産黨、共産主義云々に名を藉りて驅逐することであり、更に現在の總同盟の戰鬪的軍旗を外して白旗を掲げたる御用組合にして、資本家及政府に總同盟全體を捧げることとである。

彼等の云ふ『卑劣なる朋黨的精神に依つて』『黨中黨を作り』等、其他の凡ゆる批難の言辭は吾等は總て投返す。吾等は所謂小兒病的運動、無責任なる退席問題、暴力問題、其他役員乘取の陰謀等の無數の例證を擧げ得るが、尙且つ同じ戰線に起つ彼等の道義心の甦ゆるであらうことを信じて默するまでである。けれども總同盟のみならず日本の勞働運動の現實及將來の爲に、總同盟をしてブルジョア走狗の汚辱と同滑とより救ふ爲に、我等の革新運動を益々猛烈に敢行するものである。無産階級解放運動の名にも恥ぢざる彼等が、科學的現實的に歩みつゝありと云ふその軌道が、今日如何に危險に曝されて居るかは豫て想像するに餘りあるものである。

終りに彼等が危機に採りし行動及解明に依つて彼等の正體を鮮明にして呉れた努力に對して聊かの謝意を表して置く。（五、三）

日本勞働總同盟と分裂の危機

山川　均

一

日本勞働總同盟は、いま分裂の危機に立つてゐる。

尤もこの危機は、すでに過ぎ去つたとも見ることが出來る。卽ち幹部派は四月十六日附の、會長代理の通告によいて、關東地方評議會所屬の組合を既に除名したのである。殊に幹部派がこれ等の分子と別れようとする決意は牢乎として動かすべからざるものであつて、如何なる代價を拂つてもこの分裂を決行しなければならぬ餘儀なき事情と立場にあるものと思はれる。そこで幹部派の立場から見れば、勢ひこの除名によつて、問題は片付いた譯である。

然るに革新運動の旗下に集まつてゐる關東地方評議會所屬組合とその他の組合——組合數に於ても組合員に於ても、總同盟の半ばに近い——は飽くまで分裂に反對し、十六日の除名通告を認めないで、臨時大會の召集を迫つてゐる。そこで革新派の見解によれば、總同盟はいま尙ほ分裂の危機に立つてゐるものである。

この形勢が如何に展開するかは、門外者の豫測を許さない。幹部派は除名組合の所屬を認めず、革新派は除名處分を認めない現狀のまゝで、次の大會を迎へるといふことも、考へ得られぬことではない。しかし之は恐らく幹部派の忍びがたしとするところであらうから、革新同盟加盟の組合全部に對しても順番に除名の斧鉞が加へられ、形勢は急轉直下を見るかも知れぬ。如何に解決しにくい結び目も、斷ち切ればほどけるに違ひない。幹部派が當初から唯一の解決の道としてこの問題に臨んでゐる方法は、結び目を解くことではなくて、徹頭徹尾、結び目を斷ち切ることにあるらしい。

いづれにしても、この問題は今尙ほ進展してゐる問題であつて、今日まだ門外者が批評を加へる適當な時期でない。そこで私はこの問題に直接に觸れることを避け、たゞ間接に、この問題の成行き如何によつて影響を受ける一二の點に言及するに止どめておく。

□

幸ひに四月十六日の除名の通告が取消され革新同盟の希望通りに總同盟の分裂が防止されるとせば、これに越した結構なことはない。けれども總同盟——のみならず日本の全組合運動——はこの經驗から敎へられるところがなければならぬ。幸ひに總同盟の分裂の危機は救はれたにしても、由來組織を以て誇りとした勞働總同盟が、實際に於ては何等の團體的訓練もなかつたことが、この事件によつて暴露せられたことは爭はれぬ。幹部派の除名や分裂政策の眞實の理由と眞實の動機が何處にあらうとも、幹部派がこれを決行する組合として捉え、これを遂行する大義名分としたものは、或は昨年の關東同盟大會に於ける退席問題や、本年の全國大會に於ける質問などであつた。若しこれほどの行動——乃至はこれほどの意見の相異——が直ちに分裂を惹き起すに足るものであるとしたならば、言葉を換へて云へば、日本勞働總同盟はその組織のうちに、これほどの意見の相異をも包容する力がないものであつたとするならば、全國の組合運動をその傘下に集めるなどゝは思ひも寄らぬことであつて、この大望を抱く前に、先づ團體的訓練のABCから習得しなければならぬ。そしてこれは勞働總同盟ばかりでなく、すべての勞働團體とすべての無産階級運動とが、均しくこの經驗によつて敎へられねばならぬ貴重な敎訓であらうと思ふ。

□

然しながら、少くとも幹部派の立場に立つて見れば、總同盟の分裂は最早や既成の事實である。若しこの見解の通りに、不幸にして總同盟の分裂が既成の事實となつたなら、その結果はどうだらう。

假りに現在の形勢のまゝで、乃至はそれと大差のない形勢の下に、分裂が既成の事實となつた場合には、幹部派の手に殘つた日本勞働總同盟は三十組合、組合員約九千五百を失ひ、三十四組合、組合員約一萬三千となり、數量の上からは、大體に於いて兩分せられることゝなる。(組合員の實數については、正確な數字を得ることは困難であるが諸種の材料

から算出した上記の數字は、大體に於いて大過のないものと考へる。

これを地方的に見ると、千葉縣野田は幹部派の獨占であるが、東京は革新派の四千と幹部派の二千二百と對立する。東京以西、横濱沼津、名古屋は悉く革新派の手に歸し、大阪までの間、幹部派は少しの足溜りがないが、大阪、尼崎、濱では幹部派は壓倒的の優勢を占め、革新派は僅に二組合千二百人である。之に反して京都、泉州、神戸の三聯合會はそつくり其まゝ革新派のものとなり、岡山、廣島もまた革新派に屬し、九州聯合會は中立の立場を取つて獨立するものと見做されてゐる。

これを産業的に見れば、金屬業に於ては兩者の組合數はほゞ同一であり、交通業は、組合數に於ては幹部派が多く、組合員は革新派が多い。合同組合及び雜工業、化學工業及び纖維工業、食料品（釀造工）はいづれも幹部派が過半數又は全部を占め、印刷業は悉く革新派に屬することになる。

組合運動の實勢力は、決して組合と組合員との數域にのみ比例するものではない。組合の集中狀態と地理的分布、團體的訓練と一般組合員の階級意識、産業の性質などが重大な影響をもつことは云ふまでもないが、單に數量の上からのみ觀ても、現在の形勢の下に分裂が行はれたならば、大體に於いて相伯仲した二つの勢力が對立するものと見ることが出來る。

□

その結果は、日本の組合運動の上に——特に組合運動の全國的結合の促進の上に——如何なる影響を與へるであらうか。

私は本誌の三月號に於て、勞働組合總聯合の問題に言及し、大正十年の總聯合計畫の當時に比し、今日は少くとも三つの點に於て『總聯合の成功すべき有力な條件が備はつてゐる』ことを說き、その三つの條件の最後の一つとして『第三には、當時と今日とは、組合運動の勢力の分布と均衡との上に、大なる變化を來たしたことを』舉げ『この第三の條件は、特に注意に値ひするものである』ことを指摘した。

然らば大正十年と十四年との間に於いて、組合運動の勢力の分布と均衡との上に起つた大なる變化は、果して何であらうか。云ふまでもなく最も著しい變化の一つは、勞働總同盟に集中されてゐる勢力と、勞働總同盟以外にある勢力との相對的の比例が、著しく變化したことである。そしてこの勢力均衡の上に起つた變化は、組合運動の全國的結合 實現する前程をも、勢ひ變化する である。

前に引用した私の記述は、總同盟の分裂などゝいふ問題は少くも豫想されない當時のものであつて、從つて右の如き私の見解のうちには、總同盟の分裂は少くも計算に入つて居らぬ。けれども總同盟は幸ひに分裂せず、そして絕對的には益々成長發達をつゞけるにしても、尙ほ且つその相對的の勢力は、四年前とは大に變化した。そして不幸にして總同盟が二つの勢力に分裂すると假定したならば、その結果として組合運動の勢力均衡の上に起

る變化は、過去四年間の傾向を、更に一層強めることに外ならぬ。

□

組合運動の全國的結合に到るの道は、少くとも二つある。第一の場合は、新たに生まれた組合が、次から次と一つの中心勢力たる組織に吸收同化せられて行くことである。けれども之が爲には、第一、中心勢力なるべく組織の相對的の勢力が、可なりに大きくなければならぬ。第二には、中心勢力たるべき組織の包容力と同化力とが、極めて大きくなければならぬ。この二つの條件を欠くことが證明せられた時は、この方法の失敗が證據立てられたことを意味してゐる。

第二の場合は、組合運動が先づ幾つかの中心に聚積され、この幾つかの勢力の均衡狀態のうちから、全國的の集中が實現せられることであつて、この場合には、特に有力な中心的勢力の欠けてゐることが、却つて集中作用を促進することゝなる。

然しながら總同盟を總同盟外の組合との、相對的勢力の上に起つた變化が、全國的組合のために有利な一條件であると假定しても、この條件は、總同盟分裂以前に於いて既に備はつてゐる。從つて、これが爲めに總同盟の分裂を歡迎すべき、何等の理由もないのである。

□

總同盟の分裂は――不幸にして事實となつたなら――、よしそれは全國的のためには何等の惡影響をも及ぼさぬにしても、その他種々の意味に於て、日本の勞働組合運動の大なる損失であり、大なる悲劇であることは云ふまでもない。分裂の責任が何づれにあるかは暫らくおき、この重大な責任は、一般的には日本の無產階級全體に對し、特別には組合運動に對して、何人かゞ負はなければならぬ。

それと同時に總同盟の分裂は――不幸にして事實となるにしても――決して組合運動の全國的結合のために、不利益な形勢を導くものではない。否な反對に、總同盟の分裂は、これに代はるべき內容實質伴ふた全國的總同盟」の組織を焦眉の急とするものである。日本の組合運動は、總同盟の分裂によつて失ふところを、全國的結合の實現によつて取返さねばならぬ。分裂より團結へ！全國的組織の完成は、今日以後、全組合運動の努力の中心でなければならぬ。(五月五日)

演歌流行史

添田啞蟬坊

一 はしがき

×

はやり唄なんか卑しいものだ、といふたらば、卑しくつても私には差支えない。

×

演歌——とは歌を演ずるの意である。(演劇などいふ場合と等しい。)この語源は、始めて讀賣の團體が出來て、その仲間から始めて發行された唄本の表題に、「自由演歌」を以てした事にある。

×

流行——といふ奴は不思議なものである。默然と何處よりか來り、勃然と人氣を満騁して遁いて、又默然と何處へか消えて行く。流行なるものゝ正體こそ神秘である。

×

俗謡のはやり出すのは
春が來て花の咲くやうなものである。
誰にもこれを止める力はない
いやな歌、きらひな歌もあらう
けれども、
自然に流行するのだ。
學校の教壇で、音樂の先生が
いくら叫んでも流行しない唄が多い
たまくあつても一小部分に限られて
決して一般的でない
狂咲きの花のやうなものだ
おかしいではないか
マア野暮をいふ間にお互ひに

考へて見よう

×

流行といふ一つの勢力を、歌謡といふ小さなものに局限して考へて見る。歌の優劣はその流行には何の關りもない。如何に優れた歌でも、流行らないものはどうしても流行らない。誰が何と言つたつて流行らない。如何に愚劣な歌、厭な歌で、流行らせたくないと思つても、流行るものはどん／＼流行る。歌謡の流行の前には、如何なる權力、如何なる高邁な教典も默殺される。然しそれは誰の力でもないのだ。この魔術師の一つの戯れを、捕捉することは出來ない。

然らばどういふ歌が多く流行するか？處がこれもわからない。流行歌には何等の形式も約束もない。自由である。換言すれば出鱈目である。どんな歌が飛び出すか、それは我儘な傍若無人の歌自身の外知らない。

ただ一つ、斯ういふ事が言へる。流行歌は、如何なる形式内容のものにしろ、何等かの點で、その時代の民衆の核心に觸れたものでなければならないといふ事である。單なる好みといふ以外に、斯うした潜んだ條件が其處にあるのであらう事は、流行歌流行の跡を顧ると肯けるのである。

――黒い、巷の電柱の蔭の唄ひ手は、節にもならない出鱈目の歌を、次から次へ、たゞ氣の儘に吐き出してゐる――。

×

歌は世に連れ、世は歌に連れ――流行歌は世相を映す。歌は時代の影だ。流行歌は一片の歴史だ。なされたる歴史に非ずして、ほんとうの人間の歴史だ。

流行歌は民衆の心の現はれであり、時代の豫言者である。

×

以上斷片を書きつけて、さてこれから明治から大正へ、流行歌流行の跡を辿つて羅列しやうといふのであるが、私の副へる駄文説明よりは、並べられたる歌それ／″＼が、何よりも雄辯に物語つて吳れるであらう。

二　新流行歌の樹立以前の流行歌

私が玆に主に述べやうとするのは新流行歌に就てゞである。新流行歌、即ち演歌（又は壯士節、書生節）の、讀賣の形式を採つたものである。單にはやり唄俗謡は昔からあつた。赤穂義士の討入を、瓦版で讀賣したのが新聞の濫觴であるといふ樣な、さうした讀賣形式も昔からあつた。「ツトセ」の曲節で事件のある度に文句を作つて賣り歩いた事も、演歌以前に既にあつた。然し今私はそれ等にまで及ぼす力を持たない。新らしい

生命を持つてゐる——といふ事が、私が新流行歌に興味を持つた所以である。新流行歌の演歌は、所謂俗謡とは全然交渉を持たない、別な畑の誕生であつた。

然し演歌の誕生以前に於て、既に形式も内容も共にやゝ新らしいものがあつた。故品川彌二郎氏の作なりといふ「都風流トンヤレ節」がそれである。

宮さん／＼お宮の前に
ヒラ／＼するのは何じやいな
トコトンヤレトンヤレナ
あれは朝敵征伐せよとの
錦の御旗を知らないか
トコトンヤレトンヤレナ

これは戊辰の役に、官軍の士氣を鼓舞する目的で作歌されたもので、一種の軍歌ともいふ可きものであつたが、干戈おさまつて天下泰平の明治の初年まで盛んに流行し、一般民間の流行歌となつた。またその外に

書生々々と輕蔑するな
明日は太政官のお役人

などゝいふのが當時の青年間にうたはれて居つた。今尚覺えて居る人もあらうと思ふが、一片の俗謡でよく時代の思潮を諷ふことが出來る。今日の書生も明日はひよいと太政官にもなれたのだ。この思潮に棹したものが彼の元老といふ者である。故桂公の如きも、生前立志談中にこの歌を引用して、「こんな時代であるから役人にならうと思へば容易であつたが、吾輩は軍人で身を立つべく決心が堅かつたから役人にはならなかつたのだ。」と述べたことがあつた位である。後には

書生々々と輕蔑するな
フランスのナポレオンも元は書生
書生々々と輕蔑するな
大臣參議はみな書生

などゝ様々にうたひ替へられて流行した。

また一般流行歌になつたトンヤレ節にはこんな文句があつた。

姉さん／＼お前の頭に
ぐる／＼巻いたは何じやいな
トコトンヤレトンヤレナ
いぎりす結びを知らないか
トコトンヤレトンヤレナ

歐洲文化の滔々と流れ込んだ事に就て如實に語つてゐる。

明治初年、演歌以前の流行歌には、何「ヘラヘラヘ」といふのもあつたが、明治十八九年より相續いて、「仙臺節」「サーイコドン〱」「ドンガラガン」が大流行した。

仙臺節

△奥州仙台陸奥の守、むつの御守の若殿は、男がようて金持で、それで女がほれるなら、仙台さんは高尾を殺しやせぬ

△十四の春から通はせおいて、今更いやとはどうよくな、烏が啼こうが夜があけよが、お寺の坊さん鐘つこが、枕屏風に日がさそが、そのわけ聞かなきやコレナンダイ歸りやせぬ

△十四年あとにかしたる金を、今更かへせぬとはどうよくな、からすがねではあるきいし、寺の坊さんにかりた金、きようがひまでも待つたゆゑ、マアそのわけきかねばコレナンダイかへりやせぬ

△じたいわたしは深川そだち、貝の柱にかきのやね、あだなあさりにそふよりも、マアやつぱりおまへのコレナンダイばかがよい

△淺草煉瓦を通つて見たら、おもちや屋寫眞に小間物屋、素敵に高いは五重塔、山門向ふは淺草寺、裏へ廻れば奥山の、うき身やつした白狐、みんな田圃へコレナンダイまかれる。

サイコドン〱

△羅生門よりナー　晦日がこわい
鬼が金札とりに來る
サーイコドン〱サーイコドン〱サーイコドンドンドン、サ、サーイコドンドンドンドーン
ドンガラガン

△橋の欄干に袖うちかけてドンガラガン
月を眺めてソレソレソレソレツと出しやドンガラガン

以上の二三には、經濟生活の一面が出てゐるが、そんな事も流行歌としては新らしい味である。「淺草煉瓦……」は十四の頃始めて東京に出て仲見世をうろつき、且つ始めてこれを聞いた私にとつて忘れ難いものである。單純な中に一種の深味を湛へたその頃の淺草がよく出てゐる。

十九年はかの大コレラであつた。サーイコドン〱サーイコドン〱と誘はれる樣に、棺桶は棺桶を追つて急だ。

三　新流行歌の起原

新流行歌即ち壯士節は、自由民權運動の産物である。當時政府は嚴しく言論の自由を拘束した。爲めに民權論者も演說や新

聞紙等では思ふ様な活動が出來ず、殆んど頭痛鉢卷の體であつた。

或時ふと板垣退助氏が「自由の思想は寧ろ社會の下層に皷吹すべきものであるから、むづかしい演說より、通俗な小唄や講談の方が却つて利目があるかも知れぬ。」と言つた事があつた。

それから間もなく痴遊伊藤仁太郎氏や奥宮某氏、外數名の新講談師と、四五名の「讀賣壯士」なるものが出來たのである。

ところが名は講談であり、讀賣であつても、實は政治問題を中心として隨分激烈な議論を吐いたものであるから、警察は盛んに干渉した。講談に度々中止解散の憂目に遇ひ、讀賣壯士は警吏と衝突して互ひに血を見る様な騷ぎすらあつた。後、此の連中が通俗自由演說といふ名義で、馬喰町の郡代樓といふので講演をやつた時、奥宮某氏の如きはその筋の忌憚に觸れて石川島に送られ、その他の人々もさま〴〵な迫害を蒙つて一時離散してしまつたが、「壯士節」は益々盛んにうたはれた。

其の時、「自由演歌」と題して讀賣壯士の團體から發行されたのが、左の「ダイナマイト節」であつた。

△民權論者の涙の雨で
みがき上げたる大和魂
コクリ、ミンプクゾウシンシテ
ミンリヨクキユウヨウセ
若しも成らなきやダイナマイトドン

△四千餘萬の同胞の爲めにや
赤い囚衣も苦にやならぬ
コクリ、ミンプクゾウシンシテ
ミンリヨクキユウヨウセ
若しも成らなきやダイナマイトドン

△悔むまいぞや、苦は樂の種
やがて自由の花が咲く
コクリ、ミンプクゾウシンシテ
ミンリヨキユウヨウセ
若しも成らなきやダイナマイトドン

△治外法權撤去の夢を
見るも嬉しいホルトガル
コクリ、ミンプクゾウシンシテ
ミンリヨクキユウヨウセ
若しも成らなきやダイナマイトドン

此の時から新流行歌壯士節を「演歌」と稱する樣になつた。

今日尚讀賣業者が如何なる流行歌をも演歌と稱し、その演歌を讀賣するものを演歌者と呼ぶのも、皆此のダイナマイト節の表

題「自由演歌」から出てゐるのだ。

此壯士等一團の参謀本部は「中央青年倶樂部」と言つて隨分永く續いた。作歌者には久田鬼石氏と殿江醉郷氏とがあつた。

「中央青年倶樂部」は京橋區新富町一ノ九に在つた。初め敬業社と稱し、後青年實業社と改め、更に又青年倶樂部と改めたが類似の團體が出來たので中央を冠する樣になつたのである。

此の倶樂部の主人は伊藤安市といふ人で、妻君は大兵肥滿、體量十七貫五百の女であつた。壯士等は皆此の妻君を「おばさん」と呼んで敬慕して居つた。他に向つては虎の如き壯士等も、此の「おばさん」の前にはまるで猫よりも柔順な子供であつた。

當時此の倶樂部へ出入した人の中には、故田中正造氏や、高橋秀臣氏等を始めとして氣骨のある政治家が大分あつた。

其頃は、歌の上にも現はれて居る如く、演歌の讀賣の外に、猛烈な選擧運動も行つたのである。選擧の時は必ず此の團體から二三十人は運動員が出た。其の運動が頗る有力なものであつたから、議員等も此團體の爲めに莫大な運動費を投じたものである。

關新之助氏の運動もした。森久保作藏氏の運動もした、板倉中氏の運動もした。故星亨氏の運動もした。多く自由黨の爲めに運動した。神奈川縣から靜岡、千葉、栃木あたりへも出かけて屡々國會議員、縣會議員の猛烈な選擧運動に参加した。無論運動費が出たから動いたのであるが、割合に眞面目な本氣な運動者も少なくなかつた。殺されたものもある。負傷したものもある。入獄したものもある。

此の選擧運動の時は、團體の全部が出ても未だ人が足りない事もあつた。そんな場合は他の各所に散在する壯士の團體から人員を召集したのである。又或時は他の團體から運動の口のかかつて來た場合もあつた。そんな風であつたから、選擧の時は歌の讀賣は殆んど中止の形であつた。讀賣は平時の仕事であつたが、選擧法改正以後、社會改良主義に傾き、遂に純讀賣團に化してしまつた。

この演歌の創始時代の新らしい流行歌は、川上音次郎氏の「オツペケペー節」や「改良節」「ヤツツケロ節」「愉快節」「欣舞節」など逐次生れて行つた。「オツペケペー節」は川上氏が大阪で、桂文之助と名乘つて落語家をして居つた頃、後鉢卷陣羽織といふいでたちで、高座でうたつたものだが、後に木版刷の小本にして、壯士が街路で讀賣を始めた。「ヤツツケロ節」「愉快節」等は青年倶樂部の創作である。

四　初期の新流行歌

オッペケペー節

△漢語使ふて開化ぶり、パン食ふ許りが改良じやない。皇國の權利を擴張し、國威を張るのが急務だよ、智識と智識の競べ合ひ、キヨロ〱しては居られない、究理と發明の先がけで、異國におとらずやつつけろ、神國めいぎだ日本ポー。

△亭主の職業は知らないが、お娘は當世の束髮で、言葉は開化の漢語にて、晦日の斷り洋犬抱いて、不似合だ、およしなさい、何にも知らずに知つた顏、むやみに西洋を鼻にかけ、日本酒なんぞは飲まれない、ビールにブランデーベルモット、腹にも馴れない洋食を、やたらに食ふのもまけおしみ、内證でそーツと反吐ついて、眞面目な顏してコーヒ呑む、おかしいねえ、オツペケペ、オツペケペツポーペツポツポー。

改良節

△野蠻の眠りのさめない人は、自由のラツパで起したい。開化の朝日は輝くぞ、さましておくれよ長の夢、ヤツテケモツテケ改良せー〱

△思ふ一念岩をもとうす、軒のしずくを見やしやんせ、國民一致の力なら、條約改正何のその、鷲でも獅子でも鯨でも、少しも恐るゝ事はない、ヤツテケモツテケ改良せー〱

△鳥も鳴きます夜は明けました、起きて下んせ此方の人、追々世の中進歩して、立憲政治の御代となり、國會既に開かれて、君の爲なり國の爲、民の爲とて評議する、商みや法ん法の御きそくも、世に出る期日はちかづいた、條約改正もまのあたり、ぼんやりして居ちやいけないよ、日本に生れた人ならば、勇氣を出さんせ起きなんせ、國の爲なりをのが爲、ヤツテケモツテケ改良せー〱

△鼻唄うたつてベランメー、權利もへちまもあるものか、已れツちやヱヘンと濟ますのは、舊幕時代じやいさ知らず、日に月進む文明の、此の世は中々渡れない、理窟と理窟のたゝかひで、腕力ばかりちやいけないよ、開化の空氣を吸ひこんで、野蠻の氣風を拂はんせ、自由の權利がありながら、自由の權利を知らないは、目玉があつても明盲目、何にも成らない節穴だ、心あつても無き如く、石の地藏にさも似たり、老人や仕方がないけれど、若いみそらの人達は、せつせと學校へ通はんせ、讀書そろばん覺えても、決して損にはなりやすまい、日本に生れた人ならば、勇氣をださんせ起きなんせ、國の爲なり己が爲ヤツテケモツテケ改良せ

〵

以上は川上音次郎氏の作歌である。其他青年倶樂部の創立者久田鬼石氏の作つた「推量節」といふのがある。

△絹布ぐるみのいでたちで、洋語交りでぺらぺらと、やらかす顔つき大層だ、素敵に學問出來さうだが、掛けた眼鏡は何の爲め、人に見られぬ靑色で、下つた目尻の豫防法、延ばしたお髯は何の役、畑の案山子じやないけれど、上邊ばかりのコケ威し、手紙もろく〳〵書き兼て、かくのはいつでも恥ばかり、推量してくれやせるわい。

又は「勘忍節」といふので、これに似寄りの歌もあつた。これ等が憲法發布前後の新流行歌であつた。

初期の議會以後、歌の調子が著しく變つて「ヤッツケロ節」「無茶苦茶節」など頗る武骨なものになつて來た。元來武骨一片の壯士が、編笠を被つてツンツルテンの筒袖着物に太い兵兒帶で、犬殺し棒の様な太いステツキを振り廻し、蠻聲を張あげるところは、まるで喧嘩でもして居る様であつた。當時の人はこれを「ヤッツケロ壯士」といつた

ヤッツケロ節

△見せてやりたい世界の人に、敷島男子の鐵腸を、コラサノサ、二千五百有餘年、固め鍜へし鐵石心、イツカナ動かぬ大丈夫の、心は千々に碎くとも、屍は野邊に晒すとも、君の御爲國の爲、捨つるは此の身の本分と、一歩も讓らず進み行き、鐵壁たりとも何のその、日本刀の切れ味で、片ッ端から、ヤッツケロー、

無茶苦茶節

△無茶苦茶だわからない、腐敗した堪らない、此頃社會の情況は、道德全く地を拂ひ、人情紙より薄くなり、怪聞日々に絕間なく、正邪善惡わからない、闇黑世界をたゞさんと、憂世悲憤の血淚で、造り出したる自由黨、南海唯一と名も高き、澁味をぬいたかきの實と、忠君愛國赤心の、大和膽とを配合し効驗著名の自由糖、各々競ひ味はれて、卑屈の眠りを醒しつゝ、政治の思想を引起し、自由の權利をおしひろめ、社會に害なす怪物や、惡魔をドシ〳〵ヤッツケて、國の光を輝かせ、早く味はへ自由黨、いやだなんぞとにがい顏、わからぬ事を言ふ奴は、ほんとに心がわからない。

△亂暴だわからない、干涉だ、たまらない、見よや二月の總選擧、熊本石川佐賀高知、其他何處の選擧區も、民吏二黨の競爭で、殺風滔々天を衝き、品川風の物凄く、無賴の惡徒群がりて、白晝兇器を振廻し、選擧場裡をふみにじり、」

人家を破り血を流し、狼藉極まる振舞を、知らぬ顔してすまし込み、或ひは煽動使嗾し、正義の志士を苦しめつ、罪なき良民なやまして、社會の秩序を紊亂し、殺伐野蠻の惡弊を、造り出して照代の、立憲政治の顔面を、汚してお前はどうするえ、言論自由の今日に、壓制されては堪らない、干渉されては堪らない、これが生首政治かい、ほんとにさうならわからない。

此の二三の短い歌で充分に過去の武骨な風俗も政海の潮流も覗ひ知る事が出來ると思ふ。

帝國議會の歌（愉快節）

文明の國に實りし自由の權利、堅く萌みし我國の、野蠻頭固も何時しかに、解けて和らぐ御代となり、明治六年の頃とかや、板垣後藤の兩參議、始めて蒔きし民選の議院政治の花の種、年月經るに從ひて、開化の風や文明の、恩に浴して生育し、人の自由や民の智慧、均しく天の性を受け、此世に生れし人類が、などか他人の壓抑に、抑壓せられてあるべきぞ、抑へば揚る噴水器、國會開設請願の、聲は四方に鳴り渡り、賢き邊りに聞えけん。欽定憲法發布され、開かせ賜ふ代議政、立憲制度の劈頭に、立ちし明治の臣民は、後世孫子に誇るべし。愉快じや、愉快じや、

維新革命の歌（愉快節）

東洋に屹然立つたる日本の國に、昔嘉永の頃なりき、相州浦賀へ亞米利加の、軍艦數艘入り來り、德川幕府を脅迫し、勝手氣儘に條約を、締結びたる其時に、尊王攘夷を唱へにし、梅田橋本賴三樹が、心の中を推すれば、大老掃部を恨みつゝ、悲憤の涙に暮れつらん、されば程なく萬延の、春三月の頃とかや、霏々と降り積む雪の中、大老登城を待ち受けて、櫻田門外に刺し殺し、凱歌を上げし其後は、勤王有志の輩も、蜂起なさゞる處なく、大和近江の間には、中山卿が將となり、天忠組を起しつゝ、常野二州の間には、武田、藤田が旗を舉げ、各々大義を唱へける、土崩瓦解の大亂も、將軍大政返上と、共に維新と改まり、豐な明治の大御代に、萬世動かぬ憲法も、布けて開けし代議政、皇國の前途ぞ愉快なる。愉快じや、愉快じや、愉快じや

彰義隊の歌（愉快節）

大丈夫の捨つる命はなど惜むべき、三百年の其の間、鼓腹擊攘德川の、恩義を受けし八萬の、騎士の腸腐りしか、曉暗き鳥羽伏見、續いて落つる淀の城、王師は既に東下して、華城に入りしと聞きし時、血氣に逸る若武者が、大義名分何のその、只一筋に主家の爲め、名も勇ましき彰義隊、宮を擁し

て東叡山、楯籠りたる三千騎、騎虎の勢一徹に、止まり難きぞ是非もなし、頃は慶應辰の年、降りみ降らずみ五月雨の、未だ東雲の明けやらぬ、闇に轟ろく吶喊の、響に落つる木葉武者、殘るは僅か三百騎、義を金鐵と盟ひつゝ、慓悍決死の勢に、一騎當千萬の、敵を引受け奮ひ撃つ、黑門口の修羅闘場、硝烟濛々天を捲き、發射る大砲小銃の、響に連れて斃るゝは、敵か味方か省みる。暇もあらず亂軍の、屍を飛越へ血を渡り、打つも打たるも碎けては、同じ流れと武士が、切り結びたる劍影の、間を飛交ふ彈丸は、降り來る雨か玉霰、湯島臺より打ち下す、霹靂飛んで寛永寺、名にあふ大厦の壯觀も、炎の裡に包まれて、防がん術もなかりける、勝に乘つたる官軍の、諸藩の兵士は勇み立ち、恰も潮の湧く如く、取圍みたる山王臺、心は矢竹にはやれども、數刻の奮戰突戰に、續く味方のあらざれば、滿身瘡痍を蒙りつ、流石に猛き武士も、今は最後と覺悟して、斃れて止みし彰義隊、櫻ケ關に今も猛、殘りし墳墓を思ひ出に、地下に嬉しく眠るらん、勇壯じや、勇壯じや。

五　私が演歌に投じた頃

明治二十二年、私は横須賀に居つたが、その頃、後の桃中軒雲右衛門の小繁と繁吉の兄弟が、大瀧町の谷川亭といふのによくかゝつた。そんなものを聴いては喜んでゐた私は、初めて聴いた讀賣壯士の「憂世節」は寧ろ驚異であつた。今でいふ感激といふ奴を催したのであつた。壯士節の奴めは私をずる／＼と引きづッて行つた。何處へ引きづッて行つたのか。私の人生觀なるものを根底から變へさせたのも壯士節であつた。更に角間もなく青年倶樂部の本部から、唄の小冊子を取り寄せて、流して歩く自分自身を、横須賀の街の小路々々に見出したのであつた。

當時原價四厘の唄本を、壯士達は一錢五厘で賣つてゐた。私はそれを二錢に賣つた。街頭に立つ危懼がやがて興味となつた。賣行は素敵によかつた。幾日かの後、私は「歌一」の中に、私自身の確實性を認めた。

さうして私が壯士の眞似をして横須賀近傍を放浪して居る時、未だ相見えざる青年倶樂部員の中に於て私は有名になつて居た。

「おい、横須賀に添田といふ男がゐるが、どんな男だらう。盛んにまた賣るではないか。今日も何百部注文して來たさうだ。」

こんな言葉で、本部で交されて居たといふ事は、後に聞いて知

つたのであるが——。

その翌年、先づ自身の希望でもあつたが、本部からもすゝめられて、上京して正式に俱樂部に入つた。盛んな歡迎を受けて、甘い感激にひたつたりした。

その時俱樂部には、作者の久田鬼石、毆江醉鄕兩氏を初めとして、約三十人の壯士が居つた。伊藤友次郎、宗某、富張某、赤江金十郎、田村晋次郎、潮田節次、加藤貢、吉村乔洋、江口某、井戸鐸英、眞鹽勘三郞、久保田六丸、橫田某、有村德、宮入淸正、鈴木市郎、貫井歌吉其他であつたが、宗某は後に鐵道院に入り、梅田驛長にまでなつた事があつたと聞き及んだ。潮田は月岡淸の名で、加藤、吉村、及び久保田の千代田千城など何れも地方廻りの新派劇の座長になつて居るとか。富張は橫濱で京濱新聞を興した。俱樂部に籍を置いた者で、所謂出世をして居るのは澤山あるが、當時は何れも名うての壯士であつた。

橫田といふ男は柔道家で、大阪から東海道を道場破りをしながら上つて來たといふ、雲つく大男であつた。後ドースル連の中に入つて、頑固な體に絹の着物などを着せてゐた事もあつた。其の頃ドースル仲間で喧嘩をして、三十人を相手に九段で決鬪をしたが、無事に歸つて來たといふので一層買り出したりしたが、演歌は頗る下手であつた。それともう一つ食溜めといふ藝を持つてゐた。儲けた時に一度に色々な食ひたいものを食へば、二三日はその儘平氣だつた。

橫田の奴今日で三日何も食はない様だがどうしたらうに

「昨夜遲くみんな寢てしまつてから台所へ下りて水を飮んでゐたぜ。」

其頃の俱樂部に於ける一挿話である。

鈴木市郎は熱心なクリスチヤンで、佐治實然、加納與氏のゐたユニテリアン協會員でもあつた。よく加納先生々々々々といふのを聞いた事があるが、後に熱烈な社會主義者になつた。(日本社會主義は此のユニテリアン協會に芽生えたのだ。)鈴木は其後どうした處からか香具師の中に入り、親分になつてゐた。然し逢つた時は香具師の生活を非常に嫌厭して居る樣な口吻であつた。彼が病氣になつた時、私に非常に逢ひたがつてゐると聞いて本所に彼を見舞つた。衰へた彼は喜んで、手ブラで行つた私を反つて色々ともてなして吳れて、懷舊談を交したが、やがて死んで行つた時、彼の壯士振りや主義者としての活動振り等を想起して私は淚を流した。

何だか話は大變軌道を外れてしまつた。變人奇行家の多かつた當時の一人々々の性行に就て語つて見たい誘惑を私は感ずる。それは私にとつては當然な感情の動きではあるが、然し此

處ではゆるされないらしい。

私は仲間入をしてから、愉快節の「壇の浦」を處女作として、西洋熱、元氣節、改良節、痛快節、砲界節、四季の歌等遂次作歌した。そして壯士に伍して首都の街頭に立つた。

前にも述べてある通り、歌の內容はことごとく政治上の諷刺である爲めに、官憲との衝突はもう絕ゆる事がなかつた。群集の中で、

「ヒフン、コーガイ……」

と冒頭をうたひ出すや直ちに、

「おいッ……」

とひツぱられるのが常であつた。

予戒令といふのが布かれた。禁足である。

「おい、ヨカを食つたよ。」

仲間の交す言葉には、略符を以て馴らされた程、このヨカなるものが我々の頭上に降りそゝいだ。又、三島通庸の保安條令に依る。

三里以外に退去させられて
巡査の護衛も乙なもの

これが當時の倶樂部內の流行歌であつた。

六　明治二十三、四、五年の歌

青年男兒よ(愉快節)

歲寒く松や柏の操は淸く、亂れし世には忠臣の、顯はる實例(ためし)東西の、歷史を繙き見るにつけ、靑年男兒が盡すべき、責ぞ中々重からん、されば國家の貧弱や、多難の時こそ我人が、奮ひ起つべき秋なるぞ、見ずや亞米利加聯邦が、羈絆を受くる英吉利に、反きて茲に獨立の、基礎を建てたる其時は、如何なる狀況(ありさま)なりしぞや、英の苛政は日に增して、慘酷無道を極めつゝ、悲慘の雲は四方に滿ち、狂風吹いて淒まじく、ワシントン等の名將が、一呼の下に雲をなす、義兵は忽ち簇りて、百折撓まず激戰し、遂に敵をば追退けて、獨立國の旗章をば、十三洲の朝風に、吹き靡かせて堂々と、貧弱多難の其中に、唱へし凱歌ぞ勇ましし、或は佛英の戰に、英兵百萬長驅して、佛の全土を蹂躪し、オルレアン孤城を取り圍み、佛の亡滅旦夕と、迫りし時に身を挺し、累卵危急の間より、佛蘭西國を救ひ出し、偉功を建てし其の人は、魁偉の男兒にあらずして、可憐き少女のジヤンダーク、斯る事蹟に鑑みて、寸時も休まず怠らず、志想を石より鐵よりも、固く鍛へて諸共に、國家の爲にと盡すべし。愉快じや、愉快じや

壇の浦

白々と須磨や明石に朝霧こめて、朧に見ゆる淡路島、白砂を掠めて青松の、間を縫ひ行く白帆は、島隠れ行く蛋小舟、壽永の昔平軍が、立籠りたる一の谷、天険頼みし要害も、鵯越の逆落し、蕾の花の若武者が、家名を末代に汚さじと、散りて香りし跡訪へば、鐵枴峰頭雲殷々、一葦隔てし屋島潟、闇にひらめく白旗は、鬼神を欺く源九郎、義經の馬前に嗣信が、身の犠牲ぞ勇ましく、一家の安危を竿頭に、賭てトせし軍扇も那須與市が一箭に、入る日の丸の西の方、今は寄邊も波の上。智あり勇ある知盛が、奇謀も主将の暗弱に、軍機を誤り一門が、波掻分て沈みたる、涙の痕を吊らはん、海路遥けき壇の浦、篷窓かゝげて眺むれば、双ぶ満珠に干珠島、帆柱山は雲がくれ、門司の磯邊にとう〳〵と押寄す波間に鬼啾々、昨日は都に春めきて、榮華に誇りし平族の、末路を鼓に踏みば、不義の富貴は浮雲か、草葉に於ける朝露の、頼み難きを感ずらん。愉快じや、愉快ぢや

世界漫遊の歌(愉快節)

扁舟に棹して飄然漫遊すれば、煙は迷ふ亜剌比亜海、雲は鎖す亜弗利加州、九萬の鵬程遥々と、難なく埃及に上陸し、冊見て一のピラミット、登りて彼方を見渡せば、サワラの砂漠は渺茫と、愁雲漠々風惨憺、羅馬の古蹟で感慨し、ジブラルタルの海峡も、いつしか過ぎて行先は、是ぞ世界に名も高き倫敦巴里の花と月、アムステルダム伯林や、セントピータースブルグの、數百の都を後にして、再び棹す大西洋、桑港や紐育、華盛頓へと來て見れば、流石に自由の風吹きて、最とも豐かに見ゆるぞや、普く諸邦を漫遊し、歸るは原の日本國、故國の山水一層に、秀でゝ見ゆるぞ愉快なれ、芙蓉の峯は空高く、琵琶の湖水は底深し、海内無双の絶勝を、衛れや守れ國の爲、護りて其名を海外に、輝すのは國人の、重き務と覺悟せよ。愉快ぢや、愉快ぢや

久田鬼石氏の此の突飛な世界漫遊など實に面白いではないか。これが日本で最初の世界一週歌だ。尚、護國、切瑳琢磨、吉野の懐古、東北漫遊の歌、白虎隊、等の愉快節があつた。

うやむや(欣舞節)

金殿玉樓に住居して、綾や錦を身に纏ひ、右と左は梅さくら、前に盃柱にもたれ、晏氏の馭者のそれならで、意氣揚々と二頭馬車、乗りし主人のシガレット、燻らす姿はよけれども、顔は五月の鯉なるぞ、翻譯書物を力草、辿る朗讀演説や語る治世經國の、策を自説とゴマかして、英雄然たる面憎さ、世界を今と見る時には、相絶間して笑ひ草、語りうたづく理論

秘術、強兵富國の策よりも、自分のポッポを暖めて、餓に寒さに泣き叫ぶ、社會の底のどん底の、聲を肴の榮耀榮華、かかる無慈悲の振舞は、ズッと昔のその昔、昔語りと聞きしのみ、今は開花のありがたさ、慈悲心(なさけごころ)もいと深き、紳士の萬歲唱へなん。欣舞々々々々、愉快々々。

日清談判（欣舞節）

日清談判破裂して、品川乘り出す吾妻艦、西郷死するも彼が爲め、大久保殺すも彼がため、遺恨重なるチャン〳〵坊主、日本男兒の村田銃、劍のキッ尖味へと、何なく支那人打倒し、萬里の長城乘取て、一里半行きや北京城よ。欣舞々々々々愉快々々

戒青年（欣舞節）

燒野の雉子夜の鶴、親の心は皆一つ、可愛の吾が子を手放すも、末の出世と兩親は、それと云はねど心に涙、寒さ堪えて風邪引くな、食を過して煩うな、錦を飾りて恙なく、歸り來ん日を待つぞとて、惠みも深き靑の葉に、勇む心も何となく、顏に時雨るゝ子の涙、惜む別れの束の間に、汽笛一聲西東、忽に消え行く子の姿、見送る親は斷腸の、思ひありしも夢の間に、いつしか過ぎゆく五年の、花は五度咲きたれど、花は五度散りたれど、送る學資は怠たらず、花の朝や雪の夜、炎威赫たる三伏の、夏の暑さにとりわけて、悲しき彼の有りと聞く、都住居の氣に掛り、彼の品買はん是れ欲しき、藥の代や色々と、便りの度に疑はず、言ふがまに〳〵送りつゝ、父は好める酒を止め、母は衣さへ購はず、朝な夕なに思ふ子の、今の有樣如何ならん、雪に螢に辛酸を、積みて一躍功名を、期せし心の白糸も、染まる都の華奢の色、蹴出す裳の緋縮緬、姿なまめく雪の肌、迷ふ心を惡友が、誘ふ花柳の溫柔郷里、春の夕の小酒宴、雪の朝の迎ひ酒、金の力と知らずして、粹の通のと熱を吹き、月も朧の柳橋、落花雪降る仲の町、實にや一刻千金と、浮かるゝ才子もありと聞く、斯る才子は夜更けて、萬籟聲なき閑寂に、靜かに思ひを回らして、親の辛苦を思ひなば、冷汗背を濕らすらん。欣舞々々々々愉快々々

社會觀（欣舞節）

住める大厦は建築の、妙技を盡し美を極め、纏へる衣は綾錦、乘りたる馬車は亞刺比亞の、逞ましげなる二頭立、車中の主は傲然と、馬尼拉の葉卷口にして、得ならぬ醉樂の、烟吹きつゝ行先は、紅葉館や花月樓、到る處は歌吹海、酒池肉林の歡樂は、いかなる月日に生れしと、人の羨む華長者、高官紳士豪商よ、榮華に醉へる汝が眼には、淺草町の冬の雨、花町照らす秋の月、如何に見ゆらん映ずらん、町に揭げし行燈

の、光りも暗き家の内、終日業に労れたる、足を伸ぶれば踵なる、人の肌に觸れやせん、大の體をくの字形、一夜幾らの家根代は、煎餅蒲團に柏餅、結ぶ夢こそ果なけれ、飢ゆれば潜る糊暖簾、椅子に代へたる醤油樽、丼飯に濁酒、鰯や鮃も鮮腹は、食へぬ不景氣如何にせん、日々の労働玉の汗、辛く其日を送れども、若しも雨降り風吹けば、食事の料に差支へ、甘藷さへも食ひ兼る、聞くも涙の種ぞかし、嗚呼生存の競爭は、日々に劇しくなりまさる、廿世紀の前途(ゆくすゑ)を、想ひ回せば外國の、共産黨や社會黨、砂鐵蓋し遠からず、靜かに社會問題を、思ひ來れば慄然と、腑に聚して肝膽寒し、欣舞々々々々愉快々々

日清談判は若宮萬次郎氏の作で、騒しかつた征韓論の反影と見られる。此の假想架空の歌が其儘、二三年後に實現されたなどは面白い。都青年には初期の東京遊學者に就て、親の心境がよくうたはれてゐる。社會觀、幸徳堺が未だ其名を知られざる時既に、斯うした歌があつた。これ等が「憂世節」(西洋熱に浮かされて、一も西洋二も西洋、無闇に西洋々々と、自家の飯をば打ち捨てゝ、隣の雑炊食ひたがる。馬鹿の多きぞなげかはし、舶來品とて同じ品、西洋人とて同じ人云々の樣な)や「ゲンコツ節」等と共に盛んにうたはれた。

ゲンコツ節

△うはべばかりぢや樣子が知れぬ
中の惚れしゲンコツ夏玉子
ドクシンロ、フツエーペー
シツケイキハマルゲンコツパイ

△尾花芒が招かうとしても
風になびかぬゲンコツ女郎花
ドクシンロ、フツエーペー
シツケイキハマルゲンコツパイ

大阪事件の「國事に關する罪犯し、入獄ありし大井氏(憲太郎)が、心底如何にと問ふたれば、新井章吾を先手とし、小林樟雄を、後手となし、都合人數が四十と五人……」の愉快節も流行した。

この時代に、青年倶樂部の歌の外に隨分面白いものがあつた。それは海外で日本婦人がうたつたもので「ウラジホ節」といふのである。が、それを浦鹽歸りの女壯士(賣春もしたと告白した)が倶樂部へ來てその節を傳授したのである。

ウラジホ節

日本の親さん起きてか寝てか
思ひ出してか忘れてか
逢野の樣子夜の露と[illegible]を思ふ心ただ、この親を思ふ子

の心も又決してそれに劣らぬ、子を思ひ親を思ふは即ち國を思ふの情である。このウラジホ節を以て徒らに悲痛な歌と稱し、哀音の調とは呼ばれない、決して女々しいたゞの望郷の唄ではない、その半面には男々しい愛國の情が含まれてゐる、この可憐なる婦女は寧ろ勇婦である。烈婦である、纖弱なる身を以て嚴寒未開の北滿洲乃至シベリア地方深く入込んで所謂夕に児客を迎へ旦に越人を送る憂き生活を堪へ忍んで居るのは何の目的であるかといへば、

　オロシヤ恐ろしマンザは見し
　意氣な日本人に金が無い

その金を得んがためである、假令その金に到る初めは或は欺かれたものもあらう、然れど既にその運命を一轉して利用せんとするその意氣は壯なりとすべきである。握り睾丸で拵錢樹を探し歩き、目的が外るれば落膽失望して他人樣のお助けを仰ぐやうな意氣地なしの野郎輩の遠く及ばぬ處である。

と言つたやうな說明付で一時盛んにうたはれたものである。

最高調に達した政治熱は漸く下火になつたが、明治二十四年頃から又一時政論時代になつて、寄ると觸ると政治上の議論を鬪はし、いや民權がどうの、やれ自由がかうの、立憲政治はそんなものではないのと、まるで氣狂ひの樣であつた。

この政論時代に於ける「政費節減」「民力休養」「條約改正」「來島恒喜」等、總てやかましかつた重要問題は何れも青年倶樂部の讀賣歌になつた。

七　日清戰爭前後

二十六年頃、西洋崇拜熱を嘲罵した國粹主義保存の歌があつたが、それは永續きしなかつた。間もなく福島中佐（後の大將）の單騎遠征の歌と、郡司大尉短艇遠征の歌とが大いに流行した。福島中佐遠征の歌、見よや見よ福島中佐の絕大偉業日本帝國軍人の、重き名譽を一身に、擔ふて立ちし安正が、人の踏みにし跡もなき、歐亞萬里の大陸を、探險せんと只一人、斯く駒に鞭をあげ、征路遙かに、云々――及び小吹ドン〳〵節で――

△流行英雄の鐵石心もドン〳〵、愛馬の別れにや血の淚、悲哀じやネーさうぢやないかドン〳〵。△アルタイ山頭に駒を仕立てゝドン〳〵、一日に見下す支那露西亞、愉快ぢやネーさうぢやないかドン〳〵

二十七年、青年倶樂部の他に鐵血倶樂部といふ小さな讀賣の團體が出來た。神田田代町一ノ九に青年行商社といふのがあつて、「人情倶樂部」といふ雜誌（一錢五厘）か二錢の其他の赤本を發行してゐた。これは後に日本館と改稱して赤本出版を續けて

たが主人公は田岡常三郎といひ、この人の長男が、五代目菊五郎の弟子になつた。死んだ菊次郎がそれである。此の行商社の寄宿舍に大勢の壯子が居たが、中に急進的な者も幾人か居て、作歌したものを田岡氏に出版させて賣つたのである。横江鐵石、中丸某其他がそれであらうが、その鐵血倶樂部は後に青年倶樂部に合した。

日清戰爭が起ると、戰爭の歌が盛んにうたはれた。曲の主なものは欣舞節と愉快節とであつた。欣舞節愉快節の流行は約二十年間續いた。たゞ歌への内容が時勢に連れて變化して行くのみであつた。近頃、どれもこれも同じ樣なウスツペラな小唄を、樣々なガチヤ〳〵した曲の數々でうたつてゐるのとは大變趣きが違ふ樣である。

原田重吉（欣舞節）

過ぐる平壤の戰爭に、元山朔寧兩枝隊、破竹の勢ひすさまじく、進み乘つ取る牡丹臺、登りて彼方を瞰下せば、要害堅固の玄武門、逸る勇士の突貫も、空しく敵の的となり、屍は積んで山をなし、退く心はあらねども、進みかねたる一刹那、味方の中より奮然と、躍り出でたる一勇士、雨より繁き彈丸の下を潜りて城壁を、猿猴の如くに攀ぢ登り、ひらりと飛び込むその人は、これぞ原田の重吉氏、續いて三村小隊長、死を決めたる奮鬪に、打ち惱まされし敵兵が、浮足立ちたるその隙に、城門さつと押開けて、我軍隊をさし入れき、平壤遂に陷りし、古今無双の働きは、實に平城の名に恥ぢぬ、武士の鑑と芳しき、譽れは子孫に傳はらん。欣舞々々々々々愉快々々

戰爭の欣舞節と愉快節の名を擧げると、「海上の花」一際海舟作の「志摩大尉」「櫻井輸送隊」「蠻族蜂起」一翰林　三傑人「丁汝昌」「松崎大尉」「威海衞」「李鴻章」等で、新たに生れた小唄では、天鍋節、漠々節、元氣節がある。

漠々節

馬關から海路遙かに眺望すれば、陰雨慘憺雲漠々、忠勇決死の大丈夫が、皇國の爲に屍を、曝す荒野に雲漠々、旌旗銃砲雲を蔽ひ、軍艦水雷浪を蹴り、敵國攻め取る夢醒めりや、前嶺後峰雲漠々。

ヒマラヤの峰に旭の旗靡けば、英露獨佛雲漠々、聯合勸告よけれども、遼東還附を思ひ出しや、慷慨悲憤に雲漠々。日本刀に村田銃、進擊突貫五大洲、一時に亡ぼす夢を見た、霹靂一聲夢醒めりや、月は朧に雲漠々。

大和魂の腐敗をつら〳〵觀察すれば、國の前途に雲漠々、無暗に西洋々々と、皇國の美風を打捨てゝ、迷ふ眼に雲漠々、[illegible]長夢を貪ぼつて、國家を[illegible]に、投げし[illegible]

夢醒めりや、悲憤慷慨雲漠々。

天籟節

△東亜の波瀾もうれしや濟みて
　パチュテンライヤン
建つる臺灣日の御旗
　メンメトエーストリンタン
テケシュットトチヨイトュケホイ
△波風あらうが、何こわからう
　パチュテンライヤン
行けや臺灣金の山
　メンメトエーストリンタン
テケシュットンチヨイトュケホイ
△丸髷こはして　束髪結ふて
　パチュテンライヤン
看護婦するのも國の爲め
　メンメトエーストリンタン
テケシュットンチヨイトュケホイ
△人を喰ふて　鬼棲む島と
　パチュ思ひしは
過ぎし昔の事なるぞ
日本の新領地
今ぢや臺灣ソンナコトナイ

元氣節

△東洋の大勢熟ら見れば
うかとかうしちやホンニマタ居られない
七寸の鞋踏みしめて
歐亞跋渉して絶大の
偉業を立てたらナントマタ愉快なる
是ぞマー壯快なチヨイト快男子
△婀娜な色香につい欺されて
取れば刺あるホンニマタ薔薇の花
惚れた振りして懐中の
お金を根こそぎ卷上げて
一昨日御出とナントマタ舌を出す
是ぞマー薄情なチヨイト鬼心

當時の民衆は非常に理窟張つてゐた。何から何まで理窟づめであつた。流行歌は娯樂なんだと意識しなかつた。いや、娯樂に對して解放された解釋を下すことが出來なかつた。花柳界に於ける都々逸の如きまで、理に適つてゐる事を要求された。例へば都々逸の文句に「何々のお寺……」といふのがあるとす

る。すると「そのお寺は何處に在つて何んのお寺だ？」と言つた調子であつた。さうした傾向は、最も民衆に迎合したところの、流行歌の作風に於て見らるゝ通りである。

日清戰爭の後の政治界は腐敗の極に達し、賄賂公行の狀態であつた。議員買收が盛んに行はれた。

とにかく當時は萬事現ナマ々々々

といふ「現ナマ節」が出來た位であつた。それに連れてその末派に屬して居つた青年倶樂部即ち壯士團體も亦軟化するに至つた。選擧場裡に血を流し或ひは演說會場に銃聲を聴いた昔に引きかへ、民黨吏黨の別なくたゞ金のために動いた。選擧運動に一つの團體から民吏二タ手に別れて出た。そして狂言の争ひをして後で大笑ひをしたことも度々あつたが間もなく青年倶樂部は此の眞面目を缺いた政治運動に厭きて、社會改良主義に傾いた。演說と歌と腕力で、「米商沼野茂の買占め攻擊」や、その頃各地方に起つた二錢講と稱する詐僞的高利貸征伐等を盛んに行るやうになつた。有名な「錢從事件」の歌もあつた。

二錢講退治の歌（愉快節）

世の中に何が敵ぞ生命と金よ、金が欲しさに大切の、天理人道打忘れ、飽く事知らぬ不義不道、憎みても亦余りあり、彼が貪盗殘賊の、當時の容姿は双子織、着一貫その上に、〆し兵兒帯見た人は、今も記憶えて居るならん、世にいふ三宰辯油にて、煮〆たやうなお襟こそは、實に尋常ならざりし、小人窮して爲すとは、古昔聖人の金言ぞ、現に何せんと吝嗇奴が、腸絞りし其果ては、廣島地方や静岡に、多くあつたる質業社、名前許りの大會社、善男善女が日々に、一粒幾何の汗を以て、儲けし金を欺きて、せしめ上げたるその金は、數萬を以て數ふべし、またそれのみか世の中は、眞面目に稼せぐも追附かず、不景氣勝なる今日に、絞り揚げたるお金にて金の指輪や金時計、俄かに紳士の裝ひで、今日は料理店明日は又、高島町の青樓に、札びら切つての大盡風、悠々娛樂に耽るとは、言語に斷へたる擧動ぞ、斯る極惡罪人を、社會の外に驅逐して、輿論の制裁加ふるは、青年吾人の任務ぞや、愉快じや、々々々々

又當時學生の風儀も甚だしく亂れて居た、彼等の學費は多く遊廓に、矢場に、娘義太夫に吸收された。

衣は肝に至り袖腕に至る。

の武骨派が、競ふて紺衣裳を着る樣になつた「ドースル連」一なるものは皆學生であつた。

△筆を手に取り小首をかたげて鼻すり流し、國へ無心の長手紙、親をだまして取つた金を、チョイトドースルの點致

△筆を手に取り染めし參らせ候かしく、又も無心の長手紙、情人につぎ込むその金を、チョイト持つて來る馬鹿書生。

(四季の歌)

△花に戯れ月にと浮かれ、勉强の心はホンニマタうはの空、送る學費は使ひ捨て、衣服も質屋の重禁錮、末にや憐れなナントマタ玄關番、是ぞマー厄介な、チョイトのら書生。

(元氣節)

こんな歌が花柳界の三味に合はされる程の流行を極めたものである。

墮落書生(欣舞節)

國の品位を高めつゝ、文明開化の新天地、作り出さん責任は、青年諸君の務めなる、その青年の内幕を、熟々見れば思ひきや、嘔吐催す不潔の至り、ブック手に持ち學校へ、通ふ眞面目の勉强も、一月二月と過ぎぬれば、いつか身に染む都の氣風 學資の來るのを待ちかねて、僞はる病氣の藥代、いとし我子のためにとて、寢る目も寢ずに母親が、情をこめて縫上げし、着物も質屋の藏の中、細目の恥も放蕩の、末は我身に回り來る、輪廻の道理も悟らずに、牛屋銘酒屋義太夫と、次第々々に墮落を重ね、通ふ廓の仲の町、極樂淨土の賑ひや、歌舞の菩薩の君達が、美妙の聲に氣もとろけ、今は忘れし親の慈悲、机に向ふも懶しと、辭書を枕に高鼾、辿る夢路は故郷へ、飾る錦のそれならで、またも徘徊ふ吉原洲崎、迷ひに迷ひし青年も、翻然心を改めて、國の元氣を振起する、堅き覺悟ぞ望ましゝ。欣舞々々々々、愉快々々

この時代には、此種の歌が讀賣歌の大部分であつたから、當時の「新聞」が「流行歌の傾向を見れば社會腐敗の程度を知る事が出來る」などゝ慨したことがある。

救世軍の自由廢業運動が起ると同時に「ストライキ節」が流行した。

ストライキ節

△自由廢業で廓は出たが
ソレカラナントショ
行き場無いので屑拾ひ
ウカレメノストライキ、サリトハツライネツテナコトオ
ツシヤイマシタカネ

△高利貸でも金さへあれば
コリヤマタナントショ
多額議員でデカイ面
アイドンノーヂストライキ、サリトハツライネツテナコ
トオツシヤイマシタカネ

△王井開化した今た値け
　コリヤマタナントショ
藝者ひがして膝枕
　シユーリイノシリソレで、サリトハツシイホツテナコト
　オツシヤイマシタカネ

八　倶樂部の滅亡と演歌の命脈

三十三年、北清事變の「太沽陷落」「天津占領」「決死の傳令」があつた。何れも欣舞節である。日清戰爭から日露戰爭の時代には、戰爭の歌のみ多くうたはれた。これも欣舞節と愉快節がその大部分で、その間十年に新らしく出たものは、前に述べた漢々節、天籟節、元氣節、ストライキ節、それから突貫武士、痛快節、四季の歌である。節といふのをわざ〳〵武士など〻書いたのにも、共の時分の氣風の一端が現はれてゐる。

突貫武士

日本男兒が國の爲め、立てよ與れよ正義の軍、世間遙かに眺むれば、虎伏すあたりに集まる豚尾漢、行かうか乘り出す軍艦、波のまに〳〵漕ぎ行けば、守山破れて大同江、命から〳〵髮を捨て、散々迷花にビックリ仰天、支ふ力もなき丸
[illegible]

痛快節

△伊達にや飾らぬ十二の師團、二十萬噸大い艦、腰の剛すの
　明意が出来た、行けば行けます鬼ケ島、
△五萬人が一割だけで、五千人とは名酒ない、甘い栄えは餅
　轉餅よ、實に辛いは乾菓、
△エライ決心東雲ならぬ、法官社會のストライキ、甘のない
　のは海風に海月、たぬき時間タイコモチ
△豚を追ふのは許さぬならぬ、酒も過すな徐々な、これに
　構はぬ獨逸と露西亞、豚を捕るとて騒ぎ居る
△藝妓學校ある世の中よ、俳優學校も出來る筈、娼妓學校が
　若し出來たなら、梟毛讀むのは高等科

四季の歌

△春は嬉しや二人揃ふて花見の酒
　庭の櫻におぼろ月、これを邪魔する雨と風、チョイト咲か
　してきた散らす
△夏は嬉しや、二人揃ふて兩國橋
　あがる花火の面白く、浮いたかもめの都鳥、チョイト眺め
　て夕納涼
△秋の夕に更を以ちとく私たちの下
　[illegible]、チョイトラ[illegible]

ふ月の影

△冬は嬉しや二人ころんで雪見の酒、
苦勞知らずの銀世界。話もつもれば雪も積む、チョイトと
けます炬燵中

△あきれそう浪口に忠義のこうしやくしても醉ふて美人の膝
枕、不潔な嬉楽に日を送る、チョイト不忠なひゝ老爺

△冬の朝に早く來いよの汽笛に呼ばれ
いやな工場に向島、通る堤の風寒く、チョイト恨めしかね
ケ淵

△春の梅見に紳士手に取る素的な美人
風が悋氣でもすそ吹く、東コートの奥様が、チョイトあは
てゝ左づま

△おいらは是まで正直一途に稼いで來たが貧乏し通し泣きど
ほし、それに隣の旦那様は、いつも遊んで、お金持

△秋の夕に製糸工場を拔け出て見れば
雨か涙か草の露、親が招くか芒原、月も曇りて雁の聲

△ねぼけ眼で朝の五時から辨當箱提げて、工場通ひのいやら
しさ、娘盛りを塵の中、晩にや死んだやうになつて寝る

△あれ見よあれ見よたらり／＼と生血が滴るよ、廻る器械の
歯車の、間にはさまる勞働者、死んでしまふまで縛られる

△こんな工場は早く地震でガラ／＼つぶれ[illegible]都合なんぞかね
焼けて、社長も意地惡の監督も、チョイトペストで死ねば
よい

△當世女に戀も情も何あるものか
添ふも切れるも金次第、男の翫弄物(おもちゃ)になることを、チョイ
ト覺悟の厚化粧

△はへば立てまた立てば歩めと教へた親が轉べ／＼と[illegible]
て、左團扇に長煙管、チョイト得意のエビス顏

△秋の夕に結びかけたる露營の夢
迷ふ故郷の山と川。「人人を殺さしむるの權威ありや、人々
を殺すべきの義務ありや」響く喇叭に目をさまし、見れば
淋しい月の影

政　界（欣舞節）

長袖なりと侮りし、貴族の氣勢凄まじく、停會また停會
と、十五議會の騷しさ、下院は二十七票の、多數に見事不信
任、決議の案も否決され、重荷下してやれ／＼と、足腰延ば
す春敵俠、醉ふて樂しきブランデー、紅燃ゆる友禪の、膝を
枕に華胥の夢、結ぶ間もなく外交の、舞台またしも賑にし
く、滿洲問題や、經濟策何の其と、野にや五月蠅き政
界よ、樂でないのは政治家よ、國の光を照らせず、國の利益

を失はず、流石侯爵大勳位、快刀亂麻を忽ちに、處する腕前拜見の、時は來れり見よや人、十二師團の陸軍や、堂々三十萬噸の、海に浮べる大艦は、民の膏ぞ民の血ぞ、增稅々々また增稅、國の爲なら是非もなし、されど熱誠迸り、叫ぶ國民同盟會の、聲を聞けかし人々よ、國は政府の國ならず、君の國なり民の國、國威を四方に敷島の、花咲く春に浮かされな、心して見よ國の光景、欣舞々々々々、愉快々々

新政黨（欣舞節）

國の爲より己が爲、私利に溺れる政黨を矯めて憲政有終の、美果を成さんと大呼して、立ちし滄浪侯爵の、風を望みて忽ちに、雲の如くに集まれる、濟々多士の一團は、是れぞ立憲政友會、下院に占むる過半數、天下敵なき優勢は、いとも盛んに見ゆれども、若しも內部を覗へば、千種萬類玉石同架、高標黨や實業家、硬派進步派帝國派、わけて病の膏肓に、入れる自由派其のものを、首腦となせる結合は、張儀が所謂一閧の、肉を得たらん其時に、群犬相嚙む恐れあり、殷鑑蓋し遠からず、當政黨の興廢を思へば吾人一片の、杞憂なくして已むべきや、されど老後の思出に、蹶起一番皤髮を染めて立ちたる老翁の、胸に成竹ありぬべし、僕よ稱へよ大手腕、欣舞々々々々、愉快々々

北清事變後に、一番民意に投じ、讀賣業者の好材料になつたのが「東海道汽車の旅」（百里の山河一睡い、夢その世行く汽車の旅、實にや泰西文明の惠みを受くる我人は送迎應接遑なき窓の景色を樂しまん……）であつた。これは横江鐵石氏の作で、大和田建樹氏の「鐵道唱歌」より三年前に公刊されてゐる。欣舞節であつたが、非常によく賣れた。それでまたこの歌はいつでも賣れる。だから演歌者は材料の無くなつた場合は何時でもこれを引ッ張り出してうたふ。曲は後に一高寮歌あゝ玉杯のに改めたが、新説譯を加へる等多少の改作をして今尚用てゐる。

それと同じく其頃の歌で今尚演歌者の飯櫃になつてゐるのにか見た糸」がある。矢張り鐵石氏の作で、娼妓の咏嘆歌であるが——、辛氣臭さに三階の、欄干近く立ち出でゝ、下なる町を見渡せば、夜明し店の灯の——娼妓にして此の一節を知らざるはいと言つても過言でない。この歌は彼女等にとつては國家にも等しいものだ。閉ぢられた牢舍の小さな窓に向つて秘かに口吟んでは、僅かに自慰の情をやつてゐる。幽かな光明を吹き消されまいと、必死にこの歌にしがみついてゐる。

さて青年倶樂部は、絶えず專つた演道の爲めに、一意に是を向けてゐたが、歸田も段々明哉して行つて、至に目的湖流の影と

なつた。、倶樂部の主人公であつた伊藤安市氏が、最後に川崎に移つて行つたが、其時は巡査二名に送り出されて行つた。

倶樂部滅後は、私の東海矯風團がわづかに演歌の命脈であつた。其頃中根岸に私は居つたが、倶樂部から從つて來た貫井歌吉が私の二階に下宿して居た。下宿といつても下宿料は殆んど入ることがなかつた。飯時に下から呼ぶと、いつも

「ドーレ食つてやらうか。」

と言つては階段を踏み鳴らした男だつたツけが……。

三十四、五年頃には、演歌者がまるツきり無くなつてしまつた。廣い日本に、私と私に從つた九州人でビツコの高橋須磨男と千葉縣人の若葉虎次郎とのみが、演歌の命脈を保つたが細い糸であつた。

三十五年三月、青森第五聯隊が八甲田山に全滅した「雪中行軍の歌」を出して歡迎をうけた。その小冊子を色刷にして、初めて書肆の店頭に晒した。それは同時に出來て同じく書店に並べられた落合直文氏が大和田建樹氏かの雪中行軍の歌よりも賣れたものであつた。（續く）

堺利彦傳

堺利彦

第三期　大阪時代(下)

(一)　西村天囚氏

私の大阪前期が天王寺の塔を中心としてゐたと同じ様に、その後期は朝日新聞を中心としてゐた。朝日新聞には西村天囚氏がゐた。朝日新聞を中心としてゐたと云ふのは、むしろ西村天囚氏を中心としてゐたのだつた。

西村天囚(時彦)氏は、私の學生時代、既に東京で名聲を擧げてゐた。「屑屋の籠」といふ、時事を諷刺し評論した奇抜な新著が、忽ちこの青年の文名を高からしめた。東海散史(柴四郎)の『佳人の奇遇』も、その一部分は天囚氏の手に成つたのだといふ噂であつた。その『佳人の奇遇』の中にある長篇の漢詩、「月は大空に横たはつて千里明らかに、風は金波を動かして遠く聲あり。夜寂々、望渺々。船頭何ぞ堪へん今夜の情。……」といふのは、當時の青年書生が殆んど皆な喜んで暗誦してゐたのだが、それも實は天囚氏の作だと云はれてゐた。私はその頃から天囚氏に惚れてゐた。

或時『國民之友』に天囚氏の寄稿が載つてゐた。それは「屑屋の籠」にも似ず、『佳人の奇遇』とも違つた物で、秋の夜は長いものとは眞丸な……」といふ俗謠を、感慨ぶかい筆致で評釋したものであつた。天囚氏は大學古典科の卒業で、漢文が専門だと聞いてゐた。然るにその一面には、こうした和文的な、而も俗謠的な、且は風流的な所がある事を知つて、私はますく天囚氏が好きになつてゐた。そして猶それと同時に、この文名を擧げた天囚氏が、實は盛んに飲み且つ遊んだ結果として、重野安繹先生から破門され、都を去つて放浪の旅に上つたといふ話を聞いて、私は更に又、密かにこの豪放濶達の風を欽慕したの

—UNIVERSITY-EXTENSION—

文科大學講座

會員募集

監修 （文學博士 桑木嚴翼
文學博士 小西重直

編輯 （文學士 長田新
文學士 銅直勇
文學士 小原國芳

教育を受ける權利は萬人に平等のものと信じます。而もそれは「自から求めるもの」に與へられると思ひます。私達は終日の勞働に從ひつゝ猶ほも讀書と思索の寸暇を見出し、哲學、宗教、道德、藝術、教育の根本問題に觸れて自己を深く豐富にしたいものです。其爲に先づ研究の立場、目的、本質及び方法を究明せねばなりません。本講座はこの目的のために、大學文科の哲學科の科目により、眞摯なる御人格と學識ある諸教授に夫々御執筆をお願ひして、以て不斷の研究勉學の御指導を仰ぐことゝなりました。實にこの擧は空前の研究會で、而もほんとに何人も求めて居たものでした。今や多數の會員諸氏の贊同を得ましたことを感謝すると共に、尚ほより多くの同志の加はられんことを祈ります。

會費

入會金	壹圓
（入會金は第一回會費と同時に拂込み最終會費に振替へる）	
一ケ月	壹圓
五ケ月	四圓七拾錢
十ケ月	九圓
二十月	拾八圓

科目と講師

科目		講師
哲學概論	文學博士	紀平正美
西洋哲學史	文學士	岡野留次郎
哲學論叢	文學士	河瀨憲次
宗教哲學	文學博士	赤松智城
印度哲學	文學士	手島文倉
支那哲學	文學士	浦川源吾
教育學研究	文學博士	小西重直
教育學概論	文學士	福島政雄
教育史	文學士	長田新
美學史	文學士	相良德三
西洋美術史		伊勢專一郎
倫理學	文學士	岡野留次郎
心理學	文學士	岩井勝二郎
社會學概論	文學士	銅直勇
科學概論	理學博士	石原純
文學概論	文學士	相良德三

入會御申込・六月十日限り

◎改造五月號廣告掲載漏れのため「改造」讀者に限り申込期日を六月十日とします。（但し改造六月號廣告による旨申込書に御名記を乞ふ。）

申込所 東京市牛込 山伏町一四 **イデア書院** 振替東京一五四二一 電話牛込三六五六

であつた。

然るに私の身が大阪の地に吹き寄せられて見ると、そこの大新聞『朝日』に名聲嘖々たる天囚氏があつた。そして私の先輩たる芝尾入眞氏や、兄の欠伸などは、既にその門に遊んでゐた。然し私が天囚先生に接近する事を得たのは、それから二三年後であつた。そして初めて直接その人に會つた時、私は更に又、深い感銘を受けた。

天囚氏は偉大なる體格と、颯爽たる風姿とを持つてゐた。私のやうな、餘り風采の揚らない、小いさな男は、その前に於いて威壓を感ぜずには居られなかつた。然し天囚氏は又、絶えず其の身邊に暖かい情味を放射してゐる人であつた。一面には『豪俠不羈』の人であり、一面には『忠厚惻怛』の人であつた。私はスツカリこの先輩を崇拜する氣持になつて、それから絶えず其の門に出入した。

天囚氏は私より五歳の年長で、私の兄とは同年であつた。兄は天囚氏に引立てられて朝日新聞に入社したのだが、同年だけに略ぼ對等の友人として交はつてゐた。私としては、五年の違ひくらいの事ではなく、大先輩に對する遥かな後進の關係であつたが、それでも私は天囚氏を『先生』と呼ぶほどの素直さを持つてゐなかつた。心では充分『先生』にしてゐたのだが、口ではどうもさう呼べなかつた。

天囚氏は初め暫らく清堀に住んでゐた。そして直ぐその側に兄が家を持つた。そして前に云つた通り私がそこに轉げこんだ。程なく天囚君は桃谷に移つた。兄も又すぐその側に移つた。そして私もすぐその側の長家にはいつた。そこらから見ても、兄は天囚氏の衛星であり、私は兄の衛星であつた。その頃、桃谷には、同じく『朝日』の小説家として有名な渡邊霞亭氏が住んでゐた。桃谷は正に文士町であつた。

（二）浪華文學會

東京では文學界が非常な賑ひを示し、『硯友社』『都の花』『早稻田文學』『柵草紙』『逍遥』對『鷗外』『紅露一葉』などいふ形勢であつたが、大阪では天囚氏を中心勢力として、明治二十五年に『浪華文學會』といふ團體が起つた。そして雜誌『なにはがた』『浪華文學』などが出た。それらと前後して、他に幾つかの小文學雜誌も出た。大阪の文學界も可なり賑かだつた。

浪華文學會には天囚氏の外、朝日新聞の小説家として渡邊霞亭、加藤紫芳、本吉欠伸等の諸氏があつた。紫芳氏は既に名を示しかけてゐたが、霞亭氏は正に賣り出しであつた。そして欠伸が漸く頭角を現はす所であつた。私はその頃、何かのついで

に、天囚氏を陶に、霞亭氏を桃に、欠伸を茄子に喩へた事がある。それから少しおくれて、須藤南翠氏が東京から朝日新聞に下つて來た。浪華文學會はこの小說大家を迎へて大いにその賑を增したわけだが、實を云へば、若い連中が寄つてたかつて此の老先生をいぢめた形であつた。南翠氏は櫻の宮に住んでゐて、客があれば必ず「鮒卯」の料理を取り寄せて御馳走すると云ふので、若い連中は全くそれを目的で押しかけたりした。甚だしきは晝と晩と二度續けて其の膳部にありつきながら、却つて南翠先生の見え坊を嘲笑した者すらあつた。それから又少しおくれて、美文の名手として東京に知られてゐた堀紫山氏が同じく「朝日」に降つて來た。勿論これも浪華文學會に加はつた。私は頗る紫山氏と善かつた。

小說家以外の朝日記者として、藤田天放、長野士間の二氏があつた。士間氏は超然たる先輩であり、天放氏は殆んど唯一の英學者であつた。私は天放氏の手から朝日社の藏書なるチッケンス、サカレーなどを借りて、少しづゝ讀んだ。

大阪はえぬきの小說老大家として宇田川文海氏があつた。若い連中はそんな人を小馬鹿にするのを自慢の樣にしてゐた。生意氣な私は或時文海先生を訪問して、餘り長く玄關で待たされたので、とう／＼次の室になつて一睡した事がある。岡野半牧氏も大阪はえぬきの古い小說家であつた。これは溫厚な人で、若い連中とは殆んど何等の交渉もなかつた。

大阪出の新らしい文士としては、武田仰天子氏があつた。同氏はたしか官吏出身であつたが、急に小說家として賣出し、早く東京に行つてしまつた。高安月郊氏も既に多少の名聲を馳せてゐたが、浪華文學會には幾許の關係もなかつた。朝日記者以外に於ける浪華文學會の花形は、木崎好尙、礒野秋渚の二氏であつた。二氏は共に大阪の小學教員であつたが、好尙氏は西鶴張の美文などが得意であり、秋渚氏は和文と漢詩とに長じてゐた。秋渚氏は又、書に於いて一家をなし、殊に假名文字が麗はしかつた。「なにはがた」の表題など大抵同氏の揮毫であつた。私はこの二先輩と常に善く交はつた。殊に好尙君とは、善く談じ、善く飲み、善く遊んだ。

或時、好尙、秋渚の二君と私と、三人が坂口德二郎君の家に招かれた。坂口君は河内蛇草の人で、好尙君の門人であつた。私は天王寺時代に教員同志として相知つてゐたが、文學趣味に於いても相通ずる所があつた。それで或日の夜、大阪から蛇草まで、四人が月を踏んで步みつゞけ、語りつゞけ、そして夜ふけに坂口君の家に着いて、雞を割いて貰つて徹夜の小宴を催した。秋渚君があゝ、一水田流々不知處。其の四句を誦した。そう

いふのが當時に於ける文士交遊の趣きであつた。

天囚氏の家に客となつてゐた人に、大谷是空君と云ふがあつた。これは帝大行の半途失敗者で、英文を讀む事に於いて浪華文學會中の一異彩であつた。私は是空君の持つてゐた本で、初めてゾラの小說（レデース、パラダイス）のかぢり讀みをした。或時天囚氏が、伊勢物語の一節の、漢譯と英譯とを作つて見ようと云ひだして、天囚氏が漢譯を作り、是空君と私とが英譯を作つた。その英譯がほんの眞似事に過ぎなかつた事は云ふまでもない。然し天囚氏は絕えずそんな事で後進の勉學を勵ましてゐた。或時は又、天囚氏の宅で心理學の輪講會を開いた事もある。

天囚氏の親友に山内愚仙といふ油畫師があつた。これは東京で天囚氏と共に飲み過ぎて、天囚氏と共に大阪くだりをした人で、その飄然たる趣きが如何にも『愚仙人』であつた。『東の佘佛、娘のかけとり』と題した畫は、當時我々の間に評判だつた。浮世繪師としては年峰、年恒、年信等の諸君があつた。

その外、浪華文學會に多少の（或は間接の）關係を持つてゐた人々。哲學者を以て任じてゐた久津見蕨村君。大阪のぼんちを代表した武富瓦全君、大和の人岡如來君（今有名な音樂家關屋敏子さんのお父さんで、當時[illegible]んだと云はれてゐる人）。對馬の產、畑島桃蹊。紫芳氏の弟、加藤眠柳君。上司小劍君。小劍君は最も年小で、只だ折々天囚氏の門に出入するといふに過ぎなかつた。然し私とは可なりに交りが深くなつて、或る夏の夜、二人が一緒に中島公園で夜を明した事などもあつた。小劍君が初めて私の家に來た時、私には極めて珍らしい奈良人形を持つて來てくれた事を覺えてゐる。

今一人、奧泰輔君といふがあつた。これは坪内逍遙さんの門弟子で、『早稻田文學』に鄭漢生といふ名を出したりしてゐた才人だが、何か女に關する事で逍遙先生から破門され、東京に居られなくなつて大阪に來てゐたのであつた。私とは丁度同年で、ずいぶんよく一緒に不平の酒を飲んだ。或時、日清戰爭に關する美談逸話を集めて編輯しろと天囚先生から命じられて、奧君と私とが私の家の二階で、一升德利を抱へながら二晩か三晩か徹夜した事がある。所が、その原稿が、本屋の違約に依つて一文にも成らなかつた時、サア又二人が飲んだ！飲んだ！。

その頃、巖谷漣山人が京都の日出新聞に聘されて來てゐたので、それが連鎖となつて、私等は尾崎紅葉君等の硯友社一派と多少の關係を持つた。堀紫山君が尾崎君と親しい間柄であつたのも、それに導く一つの因緣であつた。

私は勿論、浪華文學會の會員であつた。斯樣にして私は全く

の文學青年となり、例の『ざるこそれ』調の文章を得意にして、小說や隨筆を書いてゐた。英語はまだ本當には讀めなかつたけれども、アーヴィングの『肥えた旦那(スタウト・ジエントルマン)』を反譯したりした。その反譯からヒントを得た『隔塔物語』といふ短篇が、鷗外先生の『柵草紙』に採錄された時など、內心ずいぶん得意だつた。私の文章が東京で印刷されたのは、それが最初であつた。

(三) 浪人生活、文士生活

私が初めて新聞記者になつた時、それは矢張り天內氏の口入であつた。そしてそこの主筆格たる人に中西牛郎君があつた。中西君は熊本で德富蘇峰と並び稱せられた大秀才で、學問文章共に素晴らしいものだといふ評判だつた。然しこの秀才、實は非常に放縱無賴な、箸にも棒にも掛らぬほど、だらしのない秀才だつた。そして新聞社その者が又、ずいぶんダラシのない、エタイの知れない小新聞だつた。私が其の社と人物とに親しむ暇もなく、二三個月で退社を命ぜられた事は前に話した通りである。

小學教員から一躍して、折角新聞記者に立身したが、今度は忽ち無職の浪人に成りさがつた。然し私としては、その無職の浪人が寧ろ誇りで、文學者もしくば小說家と云つたやうな資格で、極つた勤め先もなくブラ〳〵して暮してゐるのが、少なくとも小學教員以上と考へられてゐた。それから一年か一年あまり、私はずいぶん苦しい原稿料生活をやつた。天內氏や兄の世話で鹿兒島の新聞や神戶の新聞に小說を書いた。それらは大抵、英文の小說の燒直しであつた。その頃まだ英文の小說が本當に讀めたわけではないが、どうせ自由自在に燒直すのだから、本當に讀めねばならぬ必要はない。大體の筋さへボンヤリ分れば、それを種にする事が出來る。そんな風で、私は無茶苦茶に英文小說を亂讀したが、お蔭でその間に、自然相當の讀書力が養はれた。

その頃心齋橋に駸々堂といふ有名な本屋があつた。ずいぶん安つぽい本屋ではあるが、商賣の規模は小さくなかつた。從つて我々は、何かと云ふとそこに出かけて、幾らかの金をねだる樣にして取るのだつた。然し『なにはがた』や『浪華文學』は、そんな品のわるい本屋にやらせてはいけないと云ふので、大日本圖書會社から出してゐた。それで私等は又、何かと云ふとそこの武田といふ番頭を口說き落して、幾らかの金にするのが常習であつた。

そんな間にも、私の飲む事、遊ぶ事は殆んど間斷なしであつ

な。従つて私の家の経済は無茶苦茶だつた。もう八木が無いぞよ』と、よく父が云つたりした。八木とは米の事だつた。その米を掛買にしてゐる時でも、それが月末に拂へないと、（實際、大抵の月は滿足に拂へなかつたのだが）、父は非常にやかましく私を責めた。父の考へでは、我々は米屋の仕送に依つて活きてゐるのであつた。然るに其の代金を拂はないのは、非常な不義理、不道德であつた。米といふものは、父に取つては、主君から頂戴するのでも、商人から買ひ取るのでも、同じように神聖な物に感じられてゐたのではないかと思はれた。それで私は、米屋から經濟的に責められるのと、父から道德的に責められるのと、内外兩面の敵に當る事になつてゐた。私は折々、その意味に於いて父と論爭し衝突してゐた。然し私は又、兎にかく武士の生涯を送つて來た謂ゆる小廉曲謹の老父をして、晩年にそうした貧苦を嘗めさせる事を非常に濟まない、非常に氣の毒だと感じてゐた。けれども私は又、それが爲に飲酒遊蕩の惡癖を改め得る者ではなかつた。私はその一家貧苦の間に在つて、猶ほ且つ先輩の尻につき、友人の先に立つて、絶えず遊びあるき、飲みまわつてゐた。

或時、母が私に向つてしみ〴〵と斯う云つた。お前も嘸ぞつらい事であらう。若い身空で年寄の親を負はせられてゐるのだから。それを思へば、わたしは氣の毒でたまらぬ。お前が毎日出て行く時、わたしはいつも其のうしろ姿を見送つてはそう思うてゐる。お前も萬さらの馬鹿とは見えぬ。人並に劣るほどの男とは思はれぬ。だから若し、親のわたし達が居らぬなら、何とでもして相當の立身をするであらうに、只わたし達がその妨げになつてゐる。それを思ふと、いつそ死んでやりたうなつて短刀を取り出して見た事も何度かある。けれども、年を取つては自害する氣力もない。それに矢張り、可愛いお前を跡に見棄てゝ死にたうは決してない。……母は遂に啜り泣をはじめた。これには私も心の底から驚かされた。母は子に自由を與へる爲に死なうとした！。然るに其の子は、それでも矢張り飲み且つ遊ぶ事を止め得なかつた。

（四）　吉弘茂義、高橋健三

そうする中、私等の桃谷時代が過ぎて、曾根崎北野時代が來た。天囚氏が曾根崎に移り、欠伸もすぐその側に移つた。俊亭氏、紫芳氏等も皆な其の邊に居た。そして私も北野の長家に住んだ。北野にはその頃、『鶴の茶屋』だの、『九階』だのといふ遊園地があつたりして、面白い郊外の土地だつた。

その『九階』の、枝垂柳の多い園の内に吉弘茂義（白眼）君

が住んでゐた。吉弘君は『文士』ではなかつたが、新聞だの雜誌だのの計畫屋で、兄だの私だのとは自然懇意になつてゐた。色の白い、奇麗な、痩せぎすな小男でありながら、吉弘君には何となく親分肌があつた。ちよか〱した才子の樣で、而も、大膽な、機敏な、親切な、熱心な所があつた。自分が親と妻子とを養ひかねて居りながら、困つた文士連を庇護するといふ態度を忘れなかつた。私とは近所でもあり、同年でもあり、直ぐに大の仲好しになつてしまつた。その頃わたしは、春先になつて羽織といふものを持つてゐなかつたが、吉弘君の只つた一枚の飛白の袷羽織が、少々肩行は合はないながら、屢々私の背にも着られてゐた。つまり吉弘君と私と、二人で一枚の羽織を使用してゐたのであた。吉弘君と私とは又、米の使用に於いても常に共通であつた。即ち、吉弘君が米の一升も買つて居れば、私が直ぐに行つて其の中から二三升も借りて來る。そうかと思ふと又、私の家に米が五升しかない時、吉弘君が來て其の中から一二升も持つて行くのであつた。(この吉弘君が今は大阪に有名な新聞社長であり、大紳士である。)

右は多分、明治廿七年(私の廿五歳)の春だつたと思ふが、その時、私は又計らずも新聞記者の地位を得た。今度も矢張り天囚氏の世話だつた。而も天囚氏は其の話をまとめてくれて、いよ〱明日、社長の籔兩光氏に會ひに行けと云つてくれたと同時に、紬の袷羽織を一枚、私の家に持たせてよこしてくれた。それは私がねだつたわけでも何でもないが、吉弘君との共同使用物以外、私が羽織といふものを持つてゐない事を天囚氏が知つてゐて、その前晩、奥さんを古着屋にやつて、わざ〱私の爲に買はせてくれたのであつた。

この新聞は『新浪華』と云つて、前に話した新聞の後を繼いで其の同じ家屋機械を使用したものではあつたが、經營者は全く別であつた。社長の籔兩光氏は熊本人で、佐々友房氏の子分であつた。つまり『新浪華』は國民協會の機關紙であつた。

その頃、朝日新聞には高橋健三氏が新たに主筆として赴任してゐた。高橋氏は元と官報局長の地位に在り、後に松方内閣の書記官長になつた人で、氣節と學識とを以て聞えてゐた。東京では日本新聞の陸實氏、大阪では朝日新聞の高橋氏、正に東西相呼應する、日本主義、國粹主義の鼓吹者であつた。朝日新聞は頓に活氣を呈して來た。川邊貞太郎君が日本新聞から朝日に轉じて來たのも目についた。又、高橋氏の門下に、後に有名になつた内藤湖南君が潜んでゐた事も、人の噂に登つてゐた。天囚氏は其氣質から云つても、薩州人たる因縁から云つても、正にこの系統に屬する人で、氏に取つては自然に得意の時代が來た

わけであつたらうと考へられる。そして『新浪華』も亦同じ保守的傾向の國粹主義系統に屬するものであつた。天囚氏が私をここに世話する事の出來たのも、その因緣からであつた。斯くて私はいつの間にか、この保守系統の一小分子に成されてゐた。

天囚氏は新文學興降の時代に際して、浪華文學者の中心勢力になつたりしたものゝ、實は所謂文學者ではなかつた。固より坪内流でもなく、鷗外式でもなく、露伴紅葉とも全く異質であつた。朝日新聞に書いた小說でも、『老女村岡』などゝいふ教化的の物語が其の本色であつた。さもなければ、表題は忘れたけれども、或る豪傑の一群が一艘の船を家として海外に發展を試みるといふ、冒險的英雄譚に其の感興を寄せるのであつた。福島中佐がシベリヤ橫斷の騎馬旅行をやつた時、天囚氏がその記事に於いて特殊の精彩を發揮したのなどは、正に其の處を得たものであつた。然るに今、天囚氏は、新たに高橋氏一派を朝日新聞に迎へ得て、そこで初めて政治的の態度を定め、その活動を開始する機會を得たわけであつた。そして私が又、自然に其の波動の中に卷き入れられたのであつた。

私は初めて高橋さんに會つた時、深く其の氣品に打たれた。痩せた、奇麗な、弱々しい、そして底に强味のある格好が、恰かも蝶の粉と云つた様な感じであつた。又、高橋さんが扇面に細字で般若心經を書いた其の書風が、如何にも勁拔で好きだつた。私は高橋さんから『社會科學叢書』の中の『タアヰニズム、エンド、ポリチクス』（進化論と政治）を反譯して見ろと云はれて非常に嬉しかつた。然しやつて見ると、迚も駄目だつた。不審の個所を質問に行くと、高橋さんは善く面倒を見て教へてくれた。反譯の原稿は半分ばかり出來るには出來たが、結局、物の役には立たなかつた。然し私は、それで初めて英語の論文物（小說以外の書物）に接觸したのであつた。

『條約勵行』といふ事が、歐化主義者に對する國粹主義者の其の頃のモツトーで、そのモツトーに依る示威的の大宴會が大阪で開かれた。『朝日』も『新浪華』も、皆それに聲援を與へた。私も袴をはいて出席した。天囚氏から指圖されて、私は席上で何かの挨拶をやつた。それは私として初めて の經驗だつた。堺はやれそうだと、天囚氏があとで評してゐた。そんな事で、私はいつか、國粹主義者の一雜兵になつてゐた。

（五）　新浪華

『新浪華』の社長鈸廣光氏は色の黒い、髭の濃い、國言葉の著るしい、生粹の熊本人だつた。『條約勵行』は鈸氏の口に於いて『ジヨウヤク・デイコウ』と發音されてゐた。主筆格としては、

熊本の『九州日々新聞』の主筆山田珠一君が『當分』手傳ひに來てゐた。山田君は豐後の生れであつたが、若くから佐々友房氏に育てられて、殆んど總ての點に於いて熊本人になつてゐた。小柄ではあつたが、かつちりした、堅實味の多い、質朴な人物だつた。（この人が後に、九州憲政會派の有力な人物になつた事は、特に記すまでもあるまい。）その外、社中に二三の熊本人があり、社外にも熊本出身の先輩（例へば辯護士芳賀貞賢氏など）が顧問格の地位に立つてゐた。どういふ關係か善くは知らなかつたが、『浪人』としての名のある廣瀨千磨氏なども折々は社に顏を見せてゐた。

編輯局は僅かに十人あまりで、幾らか記者らしいのは、少し後れて入社した月輪望天君と私とくらいのものだつた。外勤連の中には、後に何處かから代議士に出た加賀宇之吉君などがあつた。私の月給は矢張り十五圓だつた。そしてそれが（山田君を除いては）最高であつた。月輪君も私と同格だつた。所が、その月給の拂ひ渡しが時としては翌月の初になる事があり、甚だしきは二た月分一緒になる事もあつた。そこでおかしい事には、編輯局內に金貸業者が出現した。それは相場係の記者で、少々工面がいゝものだから、月給受取の委任狀に對して、一割か二割の天引で貸付をした。編輯局員の殆んど全部が大なり小なり皆この人の手に掛つてゐた。社の會計も實はそれを便利として寧ろ奬勵してゐた。

私は小說を書いたり、隨筆を書いたり、雜報を書いたり、たまには論文を書いたりした。私は記者として便利だと云ふばかりでなく、大內氏からの推薦として人間の素性が知れてゐるので、頗る鈸社長から愛された。鈸氏の家には新たに國元から奧さんと子供達とが引越して來た。奧さんは五尺三寸もあらうかといふ大女で、氣質も甚だ濶達であつた。若い時には馬にも乘り、游ぎもしたといふ、熊襲的婦人であつた。『そぎやん事おつしやつたちが『いさぎゆう』などゝいふ生粹の國言葉が面白かつた。子供達はお父さんお母さんの事を『デエさん、ダアさん』と呼んでゐた。私はこの一家の人達と極めて親しく交はつた。

私の月給が十五圓で、それが社中の最高だつたと云ふのは、今ではよほどおかしく聞えるだらうが、その頃では、十五圓あれば、どうやらこうやら小いさい一家の暮しは立つのだつた。私の北野の家は二圓十錢の家賃で、父母と下女と四人暮しであつた。米が一升幾らであつたか忘れたが、普通の酒が十八錢で、廿二錢も出せば飛切りだつた事を覺えてゐる。私は煙草も吸つてゐたが、いよ〳〵金のない時、『百目十錢の煙草も飲めば

飲まれるものなり』と日記に書いた事がある。普通は十五錢か二十錢もしたのだつたらう。だから、若し私が放縱の癖を改める事が出來たら、そんなに父母を苦しめないで濟んだ筈である。所が實際には、例の八木の缺乏を來す事が屢々であつた。

その頃、私が父に變な土耳古帽を一つ買つてやると、これは面白い形だと云つて、父は喜んでそれをかぶつてゐた。然し父は、年寄があまり見苦しいナリをしては步かれぬと云つて、滅多に親戚などにも行かなかつた。その頃、間宮四郎さんは陸軍の役を罷めて、灘の住吉に新宅を構へて隱居してゐたので、父に宿りがけで遊びに來いといふ、每度の案內があつた。そこには父の叔母もまだ生き殘つてゐたし、父も行きたいのは山々であつたが、例の『見苦しいナリ』を見せるのが厭さに とうとう一度も行かなかつた。父のスキヤの夏羽織の折目がすりきれて、それを父が糊で裏打をしてゐた事を思ひだす。母の前齒が久しく缺けてゐて、それを手細工で、桐の木の入齒をしてゐた事も思ひだされる。

（六） 日清戰爭、廣島臨時議會

明治廿七年の夏、朝鮮の變亂につづいて、遂に淸國に對する宣戰の公布となつた。特に國粹主義者でなくても、青年の血が湧かすには居られなかつた。私はその時、『新浪華』に無邪氣な小說を書いてゐたが、いよ〳〵戰爭が始まると、もうどうしても、そんなノンキらしい物を書いてゐる氣がしないので、その續き物を中止にして、その代りに戰爭美談を載せた事を覺えてゐる。

或日、私は梅田停車場のそばで、第四師團の兵が出征するのを見送つた。道の兩側の群集が歡呼すると、軍隊中の騎馬の將校が擧手の禮をする。私はその光景に痛く胸を打たれて、頻りに淚を垂らしてゐた。それほど私は愛國者であつた。

秋になつて廣島大本營に臨時議會が開かれた。私は『新浪華』記者としてそれの傍聽に出かけた。然し今考へて不思議なのは、その臨時議會に關する記憶が少しもない。淺野侯の園遊會に招かれた事や、吳の造船所を見た事などは覺えてゐるが、議場の光景などは少しも覺えてゐない。

私は國民協會所屬新聞記者として、東京から來てゐた朝野新聞の杉田藤太（天涯）君、中央新聞の水田榮雄君、それから前記の、九州日々新聞の山田珠一君などゝ共に、協會で準備した合宿所に宿つてゐた。その中で、私は殊に杉田君と親しくなつた。杉田君の朝野新聞は川村惇氏の經營であつたが、私の『新浪華』と同じ程度の貧弱さであつた。外の新聞記者が旅費や電

報料を豐富に持つてゐる間に立つて、見すぼらしい服裝をした、そして文章自慢の一青年が、忽ちにして意氣投合したのは誠に自然であつた。杉田君は廿四歳であり、私は廿五歳であつた。杉田君は古ぼけた合羽を着て居り、私は怪しげな羽織袴を着て居た。

他の新聞記者には、私は一人の知己も持たなかつた。然し日本新聞の古島一雄氏などが記者仲間で幅を利かせてゐるのを見たり、代議士である末廣重恭（鐵腸）氏が、僕も君等の仲間だよと云つて記者の會合に來たのを見たりした。議員では、國民協會の佐々友房、古莊嘉門などの諸氏に會つた。古莊さんは、以前に高等中學の校長として知つてゐたが、只だ岩の塊まりの樣な人間だと思つた。佐々さんには初めて會つたが、色の白い、丸顔の、少し額に皺のある、如何にも先輩らしい人物だつた。昔に聞えた策士といふ感じよりも、寧ろ溫厚の長者といふ風が見えた。少し頭痛がすると云つて、横になつて人に頭を揉ませながら、我々青年に對して諄々と說き、懇々と教へる所が、さすがに佐々先生だなと思つた。

（七）六年ぶりの東京

その年の暮、私は久しいあこがれの東京に向つて出發した。大阪生活の五六年間、大阪言葉には少しも親しむことが出來ないで、半熟の東京言葉を誇りとする形であつたが、それだけ絕えず東京に對するあこがれが强く、いつかは東京へ、東京へ、と只そこにこそ人生の希望はあるのだと考へてゐた。凡そ大阪へ來る他國人で早く大阪言葉を使ひなれる者（即ち早く大阪に同化する者）でなくては、成功は駄目だといふ話があるが、それは確かに當つた所がある。浪華文學會の連中で、渡邊霞亭君は程なく少しづゝ大阪言葉を使ひはじめてゐたが、果して久しく大阪の『大家』として繁昌した。勿論一がいにそんなことは云へないが、私は兎にかく大阪で榮えさうに思はれなかつた。

私ばかりでなく、兄も大阪で失敗した。兄はそれまで幾許も東京を知らず慶應義塾の生活も一年には滿たなかつた位で、大阪こそ彼にとつての、むしろ初めての世間だつた。そして其の大阪で早く西村天囚といふ知己を得て、程なく『朝日』といふ大有力な社會機關の一部となつたのだから、云はゞ意外の成功であつて、本吉欠伸の名は相當世間にも知られたのであつた。そして妻子を國から呼び寄せて、可なりな家に住んで可なりな生活をしたのであつた。所が、放縱の癖は文士の常（むしろ誇り）で、それが兄のはずいぶん徹底したもので、流連荒亡歸るを知らずと云つた譏きが、よほど永く續いた。その結果は負債

の推積となり、家庭の不和となり、岡元の養家との不折合となり、遂に細君のお浪さんが子供を連れて岡元に引揚げた。兄は『妻子を取られたる身の上』などゝいふ皮肉な言葉で自分の境遇を嘲つてゐたが、それからの放縦は一層甚だしくなつた。その次の結果は『朝日』の退社であつた。或時、兄は病氣に罹つて長堀の病院にはいつてゐたが、私が見舞に行つて見ると、新町あたりの安つぽい藝妓が來て、その病室に宿つてゐるといふ亂暴な始末であつた。要するに兄は大阪に居られなくなつた。そしてほう／＼の體で東京に流れて行つた。然し私としては、兄が兎にかく東京へ行くといふ事が羨ましかつた。それほど東京に對するあこがれが強かつた。兄が東京へ着いて直ぐよこした手紙には、東京の女の言葉を聞くのが第一の樂しみだと書いてあつた。

そんなわけで、私もどうかして東京へ行きたい行きたいと考へてゐる中、支那へ出征した軍隊に對する酒保の仕事をやりたいといふ人達が、天囚氏の處に來てその事を相談してゐた。そして天囚氏が私をその人達に紹介した。私の親戚の間宮氏（灘に隱居してゐた人）が陸軍の監督として就任してゐるので、そこに賴みこむ何かの便宜が得られるだらうと云ふのであつた。私としては、如何にも柄にない仕事であつたが、東京にさへ行かれる事なら何でも構はないと云ふので、大喜びで承諾した。

斯くて私は六年ぶりに再び東京の土を踏んだ。私は早速、酒保計畫の人達を連れて間宮氏を尋ねて見たが、それはもう時機が後れて全く駄目だつた。私はむしろそれを喜んだ。私は只だ東京に來られた事が嬉しかつた。私は兄のゐる有樂町の下宿にはいつて、文士兼新聞記者連の小さな一群に加はつた。先頃まで大阪に放浪してゐた一奇人の畑嶋桃蹊君が、今は『めざまし新聞』の記者になつて、そして此の下宿に陣取り、而もそこの働き手の年增の娘と何かの關係を持つてゐたので、そこが自然に我々の根城となり、倶樂部となつた。そこに遊びに來る人達の中には、『めざまし』の小林蹴月、『讀賣』の關如來などの諸君があつた。私は『新浪華』の記者として議會の傍聽に行くといふ事にして、當分滯在の計畫を立てた。『新浪華』が滯在費を出して吳れる程の力のない事は無論だが、留守宅に私の月給だけを運んで吳れると云ふので、私は何かこちらで稼ぎながら議會の傍聽記を書いて送る事にした。それには、せめて一着の袴が必要だと云ふので、牛込の佐々友房氏を尋ねて無心した。佐々氏は私を引見して金十圓を吳れた。私は早速、神樂坂で袴を買ひ、ついでに下宿の娘に贈るべき繻絆の袖か何かを買つて歸つて來たが、その晩に火事があつて其の下宿が丸焼けになつ

た。

何しろ一味の根城が落ちたわけで銘々離散するより外はなかつた。私は兄と共に、大晦日の夜、鎧岸島から船出して房州に落ちのび、明治二十八年一月一日、那古船形から少し奥にはいつた多々良といふ處の田舍宿に陣取つた。そしてそこから『めざまし』へ約束の原稿を書いて送る事にした。暫くすると、蹴月が來る、桃蹊が來る、そしていづれは飲んで騷ぐのであつた。甚だしきは、或日、桃蹊と兄と私とが、クル〳〵と頭を剃つて、三個の青坊主を揃へたといふ程の馬鹿な眞似までした。

たしかその時、岐阜名古屋の大地震があつて、それが房州にも可なり響いたのだが、丁度その時刻、私は酒に醉つぱらつて、ヒヨロ〳〵と歩いてゐたので、丸で地震を感じなかつた。そんな馬鹿な日を送つてゐる所に、『ハハキトク』といふ電報が大阪から來た。私はあわてて東京に歸り、間宮氏に驅けつけて旅費を借り、蹴月の縞入羽織を外套がわりにして、せめて母の死に目に會ふべく大阪に歸つた。

（八）母の死、大阪立退

母はまだ生きてゐた。篠田のおばさんが來て介抱してくれてゐた。お醫者さんは親戚の木下愛水さんが來てゐてくれた。『乳房にぶらさがつた奴等を一人も見せずに死なせるのはあんまりだと思つてゐたが、貴樣が戻つたのでモウ云ふことはない』と、父が喜んでくれた。母は半醒半眠の狀態であつたが、それでも私の顏を見て安心したらしかつた。

二三日おくれて兄も歸つて來た。それから兄と私と、毎晩交代で徹夜の看病をした。二人とも大變な孝行者になつた。母の病氣は永びいた。或日、木下さんが母の背中に注射をしてくれると、母は夢うつゝで變な事を云ひ出した。『永わづらひをしてお前達も嘸ぞ迷惑ではあらうが、それかと云うて、そんな事までしては、篠田のおばさんの手前もあらうに、……』私等は全く驚いた。早く死なせる爲に注射をするものと母は感じたらしい。それと云ふのも、貧乏の苦勞が骨までしみこんで居たからの事だつたらう。

然しその時、私等は經濟上案外らくだつた。兄が房州に居る時から『朝日』に小說を書く約束をしてゐたので、それを兄と私との合作で（たしかこれも西洋小說の翻案で）やりだしたから、差當り必要なだけの費用は容易に得られたのであつた。

二月二十四日、母は遂に死んだ。六十八であつた。『凍てる夜の明くるも待たぬ別れかな。』これが父の句であつた。その前年あたり、父はよく氣樂さうに、『又すこうし足をもんで呉れぬ

かしと母に頼んでゐた。すると母は、『わたしもモウ自分のからだだけを持てあつこうて居るのぢやから』と云ひながら、それでも別だん厭な顔もせずに揉んでゐた。老いた夫婦の間柄は思ひのほか濃やかだつた。

それから暫くして、兄は又東京に行つた。そして間もなく都新聞に入社した。所が私の方では『新浪華』が沒落した。何の事件であつたか忘れてしまつたが、鐵社長外一二名の社員が未決監に入れられた。新聞は出なくなつた。社は自然に解散した。然し私は獨り踏み止まつた形で、どこまでも鐵一家の世話をしてゐた。鐵の奥さんは賢夫人振を發揮して、毎朝水垢離を取つて夫の無罪歸宅を祈ると云ふ風であつた。佐々友房氏が京都に來たと聞いて、私は鐵夫人と二人で救助を求めに行つた。佐々氏は金が無いと云つて、時計の金ぐさりをはづして鐵夫人に與へた。私は深くその心意氣に感じた。後にその事を人に話すと、そこが佐々の老猾なところさといふ批評であつた。

鐵氏は豫審免訴か何かで首尾よく歸つて來たが、再擧の見込はなかつた。私は前川虎造氏の『坂城週報』を編輯したりしてゐた。それも大内氏の周旋であつた。そこに東京の兄から好い知らせがあつた。兄が都新聞にはいつたのは、昔し長崎で知合つてゐた田川大吉郎君が、都の主筆をしてゐたからであつた。然るにその田川君が今度、新たに新聞をやると云ふので、兄が私を推薦した。それには『坂城週報』が私の文章の見本として提出された。そして田川君が私を呼んで呉れる事になつた。

田川君は私とも以前東京で知合つてゐた。その頃、田川君は同郷の先輩岩崎小二郎氏の家に書生をしてゐた。或時、前に記した小林助市君が私を岩崎家に引張つて行つて田川君に會はせた。小林君としては、自分の友人たる一秀才を、他の同じく友人なる一秀才に引合せたわけであつた。私はその時、正に高等中學の入學試驗に及第したばかりの、聊か得意の時代であつた。田川君は私より一つくらいは年上でもあり、既に早稻田專門學校の學生であつた。然るに今、私は大阪に落魄し、田川君は東京で新たに新聞を主裁する地位に在り、そして自分の下に私を呼んで働かせようと云ふのであつた。私は知己の感を抱いて直ちに上京した。

とは云へ、私の上京はそんなに容易でなかつた。私はいろいろの手段を盡して北野の家を片づけ、多少の荷物を荷車に積んで、父とふたり人力車に乘つて梅田停車場に向はうとする時、家主があたふたと駈けつけて、滯つた家賃を其のまゝにして立ちのくとは怪しからんと云ふので、エライ權幕で蒲團を積んだ一車を差押へてしまつた。

支那旅行雜感

片山潛

このたび計らずも支那に來た。素通りに上海から揚子江を汽船で南京迄來り、浦口から天津を通過して北京に來た。所用あつての旅行であつたので用事以外はサツパリ注意を拂ふ暇もなく、僅々一ケ月の滯在で飄然として外蒙古を通過して現住居のモスコウに歸ると云ふが如き旅行である。其で支那は子供の時分から漢學を學んだので種々歴史的事物に關して印象を刻み込まれたのであるから何んだか床しいような感じがした。支那問題が矢釜敷なつたので僕はグドツ新聞の求めに應じて「支那に於ける經濟的發達」なる小冊子を書き終つて直ぐに昨年末日にモスコウを發して浦鹽を經て來たので書物の上で研究した事實を確かめるような事になつ たので 一層の愉快を感ずる譯である。

内外綿會社のストライキ騷ぎ、丁度僕が上海に上陸した時はそのストライキが始まつて居つた、が餘り世人は注意を拂はなかつた、然るに一朝暴動化すると急に大騷ぎとなつた、先づ居留地官憲は罷工者を壓迫せんとした、工場主は暴動を恐れて工場の門を閉ぢて任意に休業すると云ふ風であつた、罷工幹部の内情に通ずる者から見ると新聞紙に見へる「事實」は隨分いゝ加減のものであると云ふ感じを與へた。

支那の勞働運動は、益々發展の望みがある、第一今日學生は勞働問題及社會問題の先覺者である、彼等は學問の自由、思想の自由及活動の自由を待つて居る、米國や日本の學生などの如く罷工破りなどは決してなさない、少なくとも近年あつた有名の罷工に對してはない、彼等は實際の首領となつて罷工の盡力をするのが常である。

て、所謂租界の罷工は租界官憲の下に在るので一般支那民族

は歸せす爲である。今回の内外綿罷工の如きも英米の官憲は私かに喜んでる其資本家等は痛快を叫ぶと云ふ風であつたから、工場主はいらぬ苦勞をなしたであらう。

支那紡績工場の職工は日本と違ひ寄宿舍制度でないから同盟罷工の時に女工に向つて雇主なる工場が壓迫を加へて罷工を打破することは不可能である。彼等女工は寄宿舍住居でも出來る程の待遇を受ければ大いに雇主に忠實となり勞働能率もあがるであらうが、其生活狀態は豚同然である、外來資本家が支那勞働者を搾取する目的は最低賃銀が主眼である。

日本の紡績業は行き詰つて居る故に原料と勞働の安い支那に移住して其生命を繼續すると云ふのであるさうな、然るに支那に於ける日本の綿業は今後僅かに發展の餘地はある、原料と勞力が低廉で而かも綿産物の需要は無限であると云つてもよい、然れども一つの困難は此の安價なる勞働をよく使ひこなすか否かゞ問題である、壓制虐待以つて安き賃銀で搾取せんとするのであるが、日本に於ける如く官憲は必ずしも雇主工場の味方ではない、罷工の際などは罷工者間に排外的感情が加味することは今後益增加しても減退することはなからう、現瞬字の如き徹底的壓制を試みても勞働運動は蹂躙されず一層根底强よくたつて來た。

支那勞働運動は後れて居るが其知識階級出身の首領は何れも主義の人である、皆徹底して居る、支那の共産黨が國民黨の左翼派を形成するに至りたるは偶然ではない。彼等は民衆（勞働者と農民）の背景を以つて今日の左翼を維持するのである、上海今回の紡績罷業でも國民黨の首領が實地首領となつて活動したが如き其罷工幹部が共産黨員の多數であつたが如きは日本工場主の心膽を寒からしめたに違ひない、支那今日の共産主義者等は日本の所謂共産黨主義の首領とは大に赴きを異にする所があつて彼等勞働者及農民（廣東の）が堅固なる背景を成す、と云ふことであるが、更に今支那の勞働運動は既に叢に政事を加味して居る。上海の罷工に於ても最有力の後援者は國民議會促進會であつた、而かもこの後援會は男子の團體と女子の團體とがあつて共に盡力をしたことは注意すべき事である。殊に女工の運動に關して海外に勉强した雄辯家の女子が罷工の首領で彼女は非常の盡力、活動をしたのである。

支那の勞働運動は日本の其に比べて堅實な所がある　團結力の點に於ては僅かに支那勞働者の方が日本の勞働者よりも强い。裏切り者、スキヤブなどを出すことは少ない。而して同情罷工は年中行事であるとも云へる程盛んである、香港の海員罷工の如きは凡ゆる勞働者は同情ストライキに出でた、下女、下

男、子守までが加盟して成功せしめた。

支那の勞働運動に於ては根本的理解を發見する其要點は不當解傭職工の爲めに罷工を斷行して之が復職を要求すると云ふ一事である。現に今回上海の罷工も抑もの原因は二十名の職工を工場が不當解傭をしたに在つた。工場側はこれに重きを置かず、罷工の原因を知らないなど空ウソブイて居たようである、が支那の勞働運動は團體的行動に重きを置き解傭職工を保護し多大の犧牲を拂ふを辭せないのである。大阪市電の犧牲者今尙ほ苦境に沈吟して落漠たる有樣を見る、が如きは支那勞働者の忍びざる所である。

由來支那國民は經濟的、然り利益的觀念が强い、否な寧ろ之を國民性とも云ひ得る程、利益には、個人の利益には機敏である。實に鋭どい所がある、勞働運動は勞働者の經濟的地位の改善が主であるから之を見ることの鋭敏なる支那の勞働者は團體行動に出で、罷工を斷行して其目的を達する。彼等は利益を通じて終に階級意識を發見し此處に階級爭鬪を敢てするに至るのである、過去の大罷工はカイランに於て上海に香港に於て又長沙に於て皆成功せる以所である。支那勞働者は比較的團結心に富んで居る首領の命令によく服從する、又演說や散らしで煽動することの容易の人民である。

又支那の勞働者は一般人民は殊に然りであるが官尊民卑の感情が些少もない、殊に官憲を恐怖すると云ふ觀念は更に無い。之は長い間、外國人種なる滿洲朝廷に支配された結果かも知れない。官憲に對してボーイコットを斷行するが如き事は各階級の間に於て決して珍らしいことではない。從つて勞働運動殊に罷工に際しても巡査などが壓迫を試みても餘り氣になさない。此處には勞働運動上大なる興味がある。

支那の勞働運動は日本の如く官憲の壓迫(吳佩孚の惡辣政策を除いては)がないせいかも知らないが、比較的に發達して居る本年始めの調査(三菱)に依ると上海に百乃至百五十の勞働組合があつて其有力なる組合二十六個の組合員は二十八萬八千四百七十三名あるとの事である。千九百二十二年五月に廣東に全支那勞働會議が催された時の勞働團體員は三十萬人で百六十の代表員に依つて代表されて居つた、當時工人旬報は全國の賃銀勞働者數を五百萬人と計上して勞働團體加入者を二十八萬九千人と報じたが今や上海のみにて、而かも其百乃至百五十中の廿六組合員のみでも既二十八萬ある。他は推して知るべきだが蓋し非常なる進步と云はねばならない。

善後會議と國民黨及び國民會議促進會、善後會議は今日までの經過に依るとなかなか眞面目に議事の進行を計つて居る、其

代表議員も比較的に善良であつて今日の所、先づ有望であるとの一部識者の評言である。目下の急務は軍閥間の折合を付けて國家の統一平和を計り、以つて更に大に借款をせんとする以外段政府の生きる道はないのであらう。然るに今日まで段執政の善後會議に提出した議案は極めて大體に限り確乎たる政府の重要事項に對して方針もなければ計畫もない。今日の急務は軍隊の整理であらうが、段政府は之が處分に關して確乎たる方針を提案せぬと云ふ批難があり、又事實然うでもある。軍閥の處分を爲し得る政府にして始めて支那の内亂を平定する事も出來よう。軍隊の減少又は解散は支那の欲する所であらうがどの總督も口では賛成して心底之を欲する者はなからう。軍隊は軍閥首領の手足、權威である、兵士を解傭するには錢が要る。若し假りに政府が軍兵解傭の資金を與へたとするも軍閥は各其資金で屯田殖民をするとか、何とか云つて依然軍隊維持に努力するであらう。誠に厄介至極の問題である。現政府が出來た時に全國に向つて休戰を宣言したが今に南支那では戰爭が繼續されて居る段政府の勢力は微弱であると云はねばならない。

善後會議に向つて孫氏の國民黨は一致の歩調を保ち得ず、右翼派よりは出席して居る者もあると云ふ、中央派と左翼派は出席せぬ。之は孫氏の遺囑に依る者である。

國民黨其者が危機に瀕して居ることは孫氏の生命旦夕に迫るが爲めであるとも見らるゝが、黨内相違せる思想を代表せる黨員あるが爲めである。右翼派と左翼派との間には調和の出來ない思想の衝突がある。然るに中央派と左翼派とは黨務の實行上に於て相一致して來た。最近國民黨の活動分子は少數の左翼派である。左翼派の背景は勞働者と農民とである。南部に於ては堅固なる團體、組合を以つて國民黨々策を着々と實行して來て居る陳炯明の勢力を打破して國民黨の廣東政府の地盤を擴張し、且つ堅固になしつゝあるのは露西亞に模倣せる赤衛農(勞働者と農民)軍隊組織の結果である。國民黨は支那に於ける唯一の政黨である。始めより資本主義の奴隷になつたことはない革命黨である。上海には日刊、週刊雜誌及日刊新聞の機關を有して活動して居る。廣東に於ても宣傳機關は整頓して猛烈に活動して居る今や北京にも左翼派の支配する日刊が三月十五日から發行されて大に宣傳に努めて居る。然るに主力は無論中央派にある。中央派は決して左翼派の主義に全然賛成する者ではない。左翼派は共產主義、中央は日和見主義である。然れども中央は左翼派の共同を必要とする、而して孫氏は左翼派の人である。其國民黨政策は根本に於て左翼派の主張を尊重して今日の勢力を築き上げたのである、

國民議會の開催は孫氏の主張であつて、國民黨は之に依つて支那統一を計らんとするものである。而して現に開會中の國民會議促進大會は國民黨の宣傳の結果今日の如き全支那運動となつて今や全支那各省に國民會議促進會なる者組織されて居つて、段執政の善後會議に對抗する氣勢を上げる意味の大會であつて數日前に第一日の大會は開催されたのである。其百名足らずの代表者は各地の國民會議促進會より選出されて來た代表である。善後會議の代表者とは大に其趣きを異にして實際に於て民衆を代表する者である。其大會の開會は三月一日北京大學にて開催された。司會者顧猛養教授は開會の辭を述べたが國民會議促進會には下の如き三つの意義を有す曰く（一）軍閥に依賴せず又其恩惠を蒙らずして國民が其自由と權利との爲めに奮鬪する（二）人民が其國家問題を自ら解決する自力を確信し而かも軍閥と帝國主義とを轉覆する可能力を信ずる事（三）國民は國民會議の開催を速に要求すべし、これに依つてのみ國民はこの統一を形成して、政權の獲得に向つて一致奮鬪し得る故であると。次に庶務部長の王務彦氏は會務を報告して北京に於て國民會議開會の議が發表されて以來今日迄既に七十五團體は同會議に加盟出席する旨を表示したと、來賓の一人汪精衛氏は實に本大會のキーノートを響かしたかの感があつた云く本會の意味と職掌とは國民が軍閥と帝國主義者の掌中より其權力を奪取するにある。此點に向つて我々は特別の注意を拂ひ極力奮鬪せねばならぬと。本會は宣傳部の事業として通信部を特設して日々其事業、決議及大會の模樣を各地各會に向つて電送する組織整ひ大に全國に向つて宣傳し國民會議の促進に努力しつゝあるから近く大なる結果を齎らすであらう。

今日支那の難問題は無論軍閥の跋扈橫恣であるが、軍閥の跋扈は外國の支持がなかつたならば殆んど勢力を成さない。併し列強諸國も今迄に隨分手を燒いて居る、然るに今や支那國民は國民的に自覺して來た往年基督教徒の世界的大會が北京に開催された際、北京の大學々生は排基督教運動を開始して折角の基督教大會は冷灰に水をかけた如く全然失敗に終つた。基督教排斥運動は其後着々と發展し今や帝國主義排斥運動と結び着けて、基督教は帝國主義國の宗教で支那には適當せず、米國宣教師の經營する學生迄が之が運動に參加して氣勢をあげるに至りクリスチヤンの大將馮玉祥が具偶子を裏切るなどは米人の解し得ざる所でどの大將を扶けて自國の利益を計つてよいか分らないと米商の我利々々連も頻りにコボシて居るとの事である。支那政治家や軍閥首領の腐敗で金の爲めには何うともなると云ふことは今日に始まつたことではない。段執政の今日あるは偏に其人

は比較的に潔白の士であると云ふに基因するのであるが、其國家統一の一大難事を處理する器に非ざるとは定評であらう。

支那國民中先覺者の要求は治外法權撤廢、關稅權の回復である。前者は未だ容易でない、支那の富豪が內亂でも起ると其財産を或る外人の名義で外國居留地に移すことは決して奇異とするに足りない、上海などに於ては横濱居留地の如く日本人の商店が皆無ではない。支那人が專に商業の實權を握つて居る。今日では外國居留地は支那の資本家に必要である、利益である。之が徹廢は政治問題で大局の上からは無論支那の不利益である、恥辱である。

支那刻下焦眉の急務は關稅改正であるが、ワシントン會議の決定した如く今二分五厘增し結局一割（舊標價の）に引きあぐるにある。佛國が金法問題を擔ぎ出して關稅會議を妨害するのは以ての外のことで亂暴至極である。列強の關稅會議は自己の利益にならぬ事だから無理な注文を爲す佛國に贊成するので實に不都合である。佛國政府が今日通用してるフランをリーガルテンダーでないと云へば其は一應理由も立たうが何もリガールテンダー（法貨）として通用してる間は之で支拂を爲るのは當然過ぎる程當然である。英貨ポンドが米弗三弗七十五仙であつた時に、對英借金を返濟した者は返濟者の利得であつた、獨國金融の常道である、佛國のフランが今日デプレシエートして居るのは佛國の自業自得で之が損害を支那に負擔せしめんとするは蟲のいゝ話であるが、通用出來ぬ申分であつて之に對する國民黨の對度は正々堂々たるものである、支那は決して斯る知れ切つた道理を捨つべきではない。

僕は支那に來てツクヅク感じたことは、支那今日の急務は軍閥打破にある、關稅の改正、治外法權の撤廢にある。幣制の改革も亦必要であらうし然れども是等は何れも容易の業でない。しかし關稅の改正丈は早晩實行さるゝだらう。然れども之が結果は僅かに無擔保債を整理するに止まつて支那の經濟的自立の基礎は依然として定まらない。北京政府の確立は殆んど不可能である。果して然らば依然軍閥の跋扈は免かれない、群雄は割據し、內亂は時々起り支那現時の狀態をつゞけるに終るであらう。現下の借款を整理して更に大仕掛の大借款を爲して以つて支那を統一し救濟せんとすると云ふ事は今日多數の爲政者の欲する所で之以外に道なしと考へて居る。

如何にも普通に考へ、又平和的常道を進まんとすれば前記以外に方法はあるまい。しかし支那に於ける列強も支那を全然其勢力下に奴從せしめて何時迄も搾取せんとする考へである、彼等は支那人民の勃興を恐怖して居る。強大なる支那中央政府の

起ることを望まない、内亂は始終つゞいては困るが時々は武器彈藥を販賣する好箇の武器ダンピンの場所として列强の私かに歡迎する所である、斯る狀態が繼續する以上は支那は經濟的獨立を僞し得ない。

僕が支那の爲めに建策するならば、非常手段に出づるにあるのみ。非常手段を以つて支那の經濟的及政治的獨立を計るには革命に依るの外はない。此革命は支那の小資本家と勞働者と農民と結合して軍閥を打破して此處に自由政治を布くのである。五百萬の勞働者が團體を鞏固にして農民の先覺團體を結合して之を都市小ブールスヮ階級が加擔すれば軍閥を倒す敢て難事ではなからう。大正十一年京漢鐵道從業員の罷工は吳佩孚が他の帝國主義の力を借つて激烈なる壓迫を加へ其罷工首領は慘殺投獄至らざるなく罷工は慘敗に終つた。其罷工慘敗後總工會は上海に於いて總同盟罷工の議決をした、この時上海の商業團は之に贊成した。その贊成した原因は彼等は軍閥を憎惡すること甚しく、軍閥の弊害に苦しみぬいて居るからである、故に今日の國民黨が其根據地廣東に於て勞働者及農民の團體と結束して革命運動を進むる時は、全國五百萬の勞働者を中堅として農民を叫合し廣東に於ける如き赤衛兵團を組織して支那の中原に望む時は軍閥は容易に打破さるべし、鐵道從業員十萬人が結束して軍閥に當らば彼等はよく自己の目的を貫徹し得るであらう。

かくて革命黨なる國民黨若しくは今後起る新政黨が軍閥を倒し、新政府を建設した時第一の宣言は列强に向つて向ふ十年乃至二十年の外債モラトリアムを要求するに在り。關稅改正治外法權の撤廢等は枝葉の問題である支那が今日外債の元利償却を十年乃至二十年据へ置きにして關稅及鹽稅收入全部を新支那建設に使用することゝなしたならば新革命政府は堅實鞏固にして軍閥の再起を防ぎ同時に產業の發展を計り、萬般の改善を行ひ鐵道敷設、運輸事業發展を計り得。玆に支那は政治經濟の獨立を樹立してモラトリアムの年限の切れたる暁には、優に外債に對する責任を果し得るに至るべきであらう。

若し、この事が、斷行されたとすれば、列强は其貸した金利や元利が十年間取れないと云つても對支貿易は今日に二三倍し年々增加すべくかく革命中央政府に全支那を統一平定したとすれば、列强の資本家は安心して支那の鐵道や鑛山其他の事業に投資して利益を得ることが出來るであらう。今日の如き内亂や、紛擾續きの支那を搾取して居るよりも一層の利益であらう。列强が此處に着目せば十年や廿年のモラトリアムを承諾することは何でもない。今日の如き支那イヂメ政策は他日支那國民が勃興した暁は元利ともに失ふに至るべし。之を思へば、軍閥打破

stub pages 196-224

*Bread and Democracy in Germany

Alexander Gerschenkron

A publication of the Bureau of Business and Econon
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photogra

Erle Loran

Probably the most thorough analysis of space co appear in book form. Factual and provable deduc vague, critical pronouncements have been reached terested in painting should be able to apprehend t of the book by simply looking at the numerous illu scholar, student, and teacher of painting the exhaus challenge arguments and deductions. The scope of t beyond the mere interpretation of Cézanne as an in The conclusions reached may be applied to origina to the understanding of Modern and Renaissance p intended to serve as a textbook for courses in drawi aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photograp one of which is in four colors; 69 line drawings and d eight paintings are analyzed.

...ear East, and the War

...ormation, and conclusions on Mediterranean events. ...ivered under the auspices of the Committee on Inter-... ...ons on the Los Angeles campus of the University of

...IN THE NEAR EAST	James Henry Breasted, Jr.
...IN AFRICA	Frank J. Klingberg
...OIL IN THE NEAR EAST	Lester C. Uren
...STRUGGLE FOR AFRICA	Leonard B. Loeb
...GLE FOR AFRICA	H. Arthur Steiner
...UGGLE FOR AFRICA	Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

...in the International Relations Series

...AMONG THE NATIONS, paper only
...ND PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
...F THE AMERICAS, paper only
...F ASIA, paper, cloth
...TURE, paper, cloth
...ND PEACE, paper, cloth
...paper, cloth
...E WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
...PHERIC DEFENSE, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

...y of Drama

*Brea...

ALE...

A pub... versity...

Céza...

Analy...

ERL...

Proba... appea... vague... tereste... of the... schola... challe... beyon... The c... to the... intend... aesthe...

Sev... one of... eight...

*Bread and Democracy in Germany

Alexander Gerschenkron

A publication of the Bureau of Business and Econor
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photogra

Erle Loran

Probably the most thorough analysis of space cc
appear in book form. Factual and provable deduc
vague, critical pronouncements have been reached
terested in painting should be able to apprehend t
of the book by simply looking at the numerous illu
scholar, student, and teacher of painting the exhau
challenge arguments and deductions. The scope of
beyond the mere interpretation of Cézanne as an ir
The conclusions reached may be applied to origin
to the understanding of Modern and Renaissance p
intended to serve as a textbook for courses in drawi
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photograp
one of which is in four colors; 69 line drawings and
eight paintings are analyzed.

The Persistence of the Westward Movement
Essays

University of California Publications in History, Volume 19.

316 pages; c

the author's lifelong interest in maritime history from an early concern with the history of the Pacific Company. The appendix contains a full description operating on the Panama and Nicaragua Routes passengers carried, the treasure shipments, the names of the steamers and the names of the engine builders

...ear East, and the War

...rmation, and conclusions on Mediterranean events. ...vered under the auspices of the Committee on Inter... ...ons on the Los Angeles campus of the University of

...n the Near East	James Henry Breasted, Jr.
...in Africa	Frank J. Klingberg
Oil in the Near East	Lester C. Uren
...Struggle for Africa	Leonard B. Loeb
...gle for Africa	H. Arthur Steiner
...uggle for Africa	Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

...in the International Relations Series

- ...among the Nations, paper only
- ...and Peace in the Society of Nations, paper only
- ...f the Americas, paper only
- ...Asia, paper, cloth
- ...ture, paper, cloth
- ...and Peace, paper, cloth
- ...paper, cloth
- ...he War to the Americas, paper, cloth
- ...heric Defense, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

...y of Drama

*Brea...

Ale...

A pub... versity...

Céza...

Analy...

Erl...

Proba... appea... vague... tereste... of the... schola... challe... beyon... The c... to the... intend... aesthe... Sev... one o... eight...

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Econ
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photog

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space appear in book form. Factual and provable dedu vague, critical pronouncements have been reache terested in painting should be able to apprehend of the book by simply looking at the numerous il scholar, student, and teacher of painting the exha challenge arguments and deductions. The scope o beyond the mere interpretation of Cézanne as an The conclusions reached may be applied to origi to the understanding of Modern and Renaissance intended to serve as a textbook for courses in draw aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra one of which is in four colors; 69 line drawings and eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime history from an early concern with the history of the Pacific Company. The appendix contains a full description operating on the Panama and Nicaragua Routes passengers carried, the treasure shipments, the names of the steamers and the names of the engine builders

316 pages; cloth

University of California Publications in History, Volume 29.

The Persistence of the Westward Movement
Essays
John Carl Parish

...Near East, and the War

...rmation, and conclusions on Mediterranean events. ...ivered under the auspices of the Committee on Inter... ...ons on the Los Angeles campus of the University of

...in the Near East	James Henry Breasted, Jr.
...in Africa	Frank J. Klingberg
Oil in the Near East	Lester C. Uren
...Struggle for Africa	Leonard B. Loeb
...gle for Africa	H. Arthur Steiner
...Struggle for Africa	Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

...in the International Relations Series

...among the Nations, paper only
...and Peace in the Society of Nations, paper only
...the Americas, paper only
...Asia, paper, cloth
...ture, paper, cloth
...and Peace, paper, cloth
...paper, cloth
...the War to the Americas, paper, cloth
...pheric Defense, paper, cloth — Paper $1.00, cloth $1.50

...y of Drama

*Brea...
Ale...
A pub... versity...

Céza...
Analy...
Erl...

Proba... appea... vague, ... teresto... of the ... schola... challe... beyon... The c... to the ... intend... aesthe...
Seve... one of ... eight ...

*Bread and Democracy in Germany

Alexander Gerschenkron

A publication of the Bureau of Business and Econo
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photogr

Erle Loran

Probably the most thorough analysis of space c
appear in book form. Factual and provable dedu
vague, critical pronouncements have been reache
terested in painting should be able to apprehend
of the book by simply looking at the numerous ill
scholar, student, and teacher of painting the exha
challenge arguments and deductions. The scope of
beyond the mere interpretation of Cézanne as an i
The conclusions reached may be applied to origin
to the understanding of Modern and Renaissance
intended to serve as a textbook for courses in draw
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra
one of which is in four colors; 69 line drawings and
eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime his[tory]
from an early concern with the history of the Pa[cific]
Company. The appendix contains a full descri[ption]
operating on the Panama and Nicaragua Rou[te]
passengers carried, the treasure shipments, the
of the steamers and the names of the engine bu[ilders]

316 pages

University of California Publications in History, Volume

The Persistence of the Westward Move[ment]

Essays

JOHN CARL PARISH

...ar East, and the War

...ation, and conclusions on Mediterranean events. ...red under the auspices of the Committee on Inter- ... on the Los Angeles campus of the University of

...E NEAR EAST.................James Henry Breasted, Jr.
... AFRICA.....................Frank J. Klingberg
... IN THE NEAR EAST.............Lester C. Uren
...GLE FOR AFRICA...............Leonard B. Loeb
...LE FOR AFRICA..................H. Arthur Steiner
...GLE FOR AFRICA................Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

...n the International Relations Series

...ONG THE NATIONS, paper only
... PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
THE AMERICAS, paper only
ASIA, paper, cloth
...URE, paper, cloth
... PEACE, paper, cloth
...aper, cloth
... WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
...ERIC DEFENSE, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

... of Drama

*Bread...

ALEX...

A publi... versity o...

Cézan...

Analysi...

ERLE ...

Probabl... appear ... vague, ... terested... of the b... scholar,... challeng... beyond ... The co... to the u... intende... aesthet...

Sever... one of ... eight p...

*Bread and Democracy in Germany

Alexander Gerschenkron

A publication of the Bureau of Business and Econ
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photog

Erle Loran

Probably the most thorough analysis of space
appear in book form. Factual and provable ded
vague, critical pronouncements have been reach
terested in painting should be able to apprehend
of the book by simply looking at the numerous il
scholar, student, and teacher of painting the exha
challenge arguments and deductions. The scope o
beyond the mere interpretation of Cézanne as an
The conclusions reached may be applied to origi
to the understanding of Modern and Renaissance
intended to serve as a textbook for courses in dra
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogr
one of which is in four colors; 69 line drawings an
eight paintings are analyzed.

...ear East, and the War

...rmation, and conclusions on Mediterranean events. ...ered under the auspices of the Committee on Inter... ...ns on the Los Angeles campus of the University of

...IN THE NEAR EAST.................James Henry Breasted, Jr.
...RO IN AFRICA......................Frank J. Klingberg
...OIL IN THE NEAR EAST..............Lester C. Uren
...STRUGGLE FOR AFRICA..............Leonard B. Loeb
...GLE FOR AFRICA..................H. Arthur Steiner
...RUGGLE FOR AFRICA................Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

...in the International Relations Series

...AMONG THE NATIONS, paper only
...PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
...THE AMERICAS, paper only
...ASIA, paper, cloth
...TURE, paper, cloth
...ND PEACE, paper, cloth
...paper, cloth
...E WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
...HERIC DEFENSE, paper, cloth   Paper $1.00, cloth $1.50

...y of Drama

*Bread...

ALEX...

A publ...
versity...

Cézan...

Analys...

ERLE...

Probab...
appear...
vague,...
tereste...
of the...
scholar...
challen...
beyond...
The co...
to the...
intend...
aesthet...
Seve...
one of...
eight p...

the author's lifelong interest in maritime histor...
from an early concern with the history of the Pacific...
Company. The appendix contains a full descriptio...
operating on the Panama and Nicaragua Routes...
passengers carried, the treasure shipments, the na...
of the steamers and the names of the engine build...

316 pages...

University of California Publications in History, Volume 29...

The Persistence of the Westward Moveme...

Essays

JOHN CARL PARISH

...search,

...Grant

Stub pages 196-224

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Econc
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photog

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space c
appear in book form. Factual and provable dedu
vague, critical pronouncements have been reache
terested in painting should be able to apprehend
of the book by simply looking at the numerous ill
scholar, student, and teacher of painting the exha
challenge arguments and deductions. The scope of
beyond the mere interpretation of Cézanne as an i
The conclusions reached may be applied to origir
to the understanding of Modern and Renaissance
intended to serve as a textbook for courses in draw
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra
one of which is in four colors; 60 line drawings and
eight paintings are analyzed.

...ear East, and the War

...mation, and conclusions on Mediterranean events. ...ered under the auspices of the Committee on Inter... ...s on the Los Angeles campus of the University of

...N THE NEAR EAST . . . . James Henry Breasted, Jr.
...G IN AFRICA . . . . Frank J. Klingberg
...L IN THE NEAR EAST . . . . Lester C. Uren
...STRUGGLE FOR AFRICA . . . . Leonard B. Loeb
...GLE FOR AFRICA . . . . H. Arthur Steiner
...UGGLE FOR AFRICA . . . . Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

...n the International Relations Series

...MONG THE NATIONS, paper only
...D PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
... THE AMERICAS, paper only
...ASIA, paper, cloth
...TURE, paper, cloth
...D PEACE, paper, cloth
...aper, cloth
...E WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
...HERIC DEFENSE, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

...y of Drama

*Bread...

ALE...

A pub...
versity...

Céza...

Analy...

ERL...

Proba...
appear...
vague,...
tereste...
of the...
schola...
challe...
beyon...
The c...
to the...
intend...
aesthe...
Seve...
one of...
eight...

The Persistence of the Westward Movem...

Essays

JOHN CARL PARISH

University of California Publications in History, Volume ...

316 pages ...

the author's lifelong interest in maritime history ... from an early concern with the history of the Pacific ... Company. The appendix contains a full description ... operating on the Panama and Nicaragua Routes ... passengers carried, the treasure shipments, the names ... of the steamers and the names of the engine builders ...

...search,

...Grant

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Econo
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photogr

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space c
appear in book form. Factual and provable dedu
vague, critical pronouncements have been reache
terested in painting should be able to apprehend
of the book by simply looking at the numerous ill
scholar, student, and teacher of painting the exha
challenge arguments and deductions. The scope of
beyond the mere interpretation of Cézanne as an i
The conclusions reached may be applied to origin
to the understanding of Modern and Renaissance
intended to serve as a textbook for courses in draw
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra
one of which is in four colors; 69 line drawings and
eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime histor[y]
from an early concern with the history of the Pacif[ic]
Company. The appendix contains a full descrip[tion]
operating on the Panama and Nicaragua Rout[es]
passengers carried, the treasure shipments, the n[ames]
of the steamers and the names of the engine buil[ders]

316 pages; c[loth]

University of California Publications in History, Volume 29

The Persistence of the Westward Movem[ent]

Essays

John Carl Parish

...esearch,

...Grant

...ear East, and the War

...rmation, and conclusions on Mediterranean events. ...ered under the auspices of the Committee on Inter... ...ns on the Los Angeles campus of the University of

...N THE NEAR EAST	James Henry Breasted, Jr.
...ERS IN AFRICA	Frank J. Klingberg
OIL IN THE NEAR EAST	Lester C. Uren
...STRUGGLE FOR AFRICA	Leonard B. Loeb
...GLE FOR AFRICA	H. Arthur Steiner
...RUGGLE FOR AFRICA	Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

...in the International Relations Series

- ...AMONG THE NATIONS, paper only
- ...ND PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
- ...F THE AMERICAS, paper only
- ...F ASIA, paper, cloth
- ...TURE, paper, cloth
- ...AND PEACE, paper, cloth
- ...paper, cloth
- ...HE WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
- ...PHERIC DEFENSE, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

...y of Drama

*Bread...

ALEX...

A publ... versity...

Cézan...

Analys...

ERLE...

Probab... appear... vague, ... terested... of the I... scholar... challen... beyond... The co... to the ... intende... aesthet...

Seve... one of ... eight p...

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Econ[omic Research, Uni-]
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photog[raphs]

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space [...] appear in book form. Factual and provable ded[uctions ...] vague, critical pronouncements have been reach[ed ...] terested in painting should be able to apprehend [...] of the book by simply looking at the numerous il[lustrations ...] scholar, student, and teacher of painting the exha[ustive ...] challenge arguments and deductions. The scope o[f ...] beyond the mere interpretation of Cézanne as an i[...] The conclusions reached may be applied to origi[nal ...] to the understanding of Modern and Renaissance [...] intended to serve as a textbook for courses in draw[ing ...] aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra[phs ...] one of which is in four colors; 69 line drawings and [...] eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime history
from an early concern with the history of the Pac
Company. The appendix contains a full descrip
operating on the Panama and Nicaragua Rout
passengers carried, the treasure shipments, the
of the steamers and the names of the engine bui

316 pages

University of California Publications in History, Volume 29

The Persistence of the Westward Movem

Essays

John Carl Parish

esearch,

Grant

ar East, and the War

mation, and conclusions on Mediterranean events.
ered under the auspices of the Committee on Inter-
s on the Los Angeles campus of the University of

THE NEAR EAST.................James Henry Breasted, Jr.
IN AFRICA.....................Frank J. Klingberg
IN THE NEAR EAST..............Lester C. Uren
RUGGLE FOR AFRICA.............Leonard B. Loeb
LE FOR AFRICA.................H. Arthur Steiner
GGLE FOR AFRICA...............Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

n the International Relations Series

MONG THE NATIONS, paper only
PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
THE AMERICAS, paper only
ASIA, paper, cloth
URE, paper, cloth
D PEACE, paper, cloth
aper, cloth
WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
ERIC DEFENSE, paper, cloth Paper $1.00, cloth $1.50

of Drama

*Bread

ALEX

A publi
versity o

Cézan

Analysi

ERLE

Probab
appear
vague,
tereste
of the b
scholar,
challen
beyond
The co
to the
intende
aestheti
Sever
one of
eight p

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Econo
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photogr

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space c
appear in book form. Factual and provable dedu
vague, critical pronouncements have been reache
terested in painting should be able to apprehend
of the book by simply looking at the numerous ill
scholar, student, and teacher of painting the exhau
challenge arguments and deductions. The scope of
beyond the mere interpretation of Cézanne as an i
The conclusions reached may be applied to origin
to the understanding of Modern and Renaissance
intended to serve as a textbook for courses in draw
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra
one of which is in four colors; 69 line drawings and
eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime history
from an early concern with the history of the Paci
Company. The appendix contains a full descrip
operating on the Panama and Nicaragua Route
passengers carried, the treasure shipments, the na
of the steamers and the names of the engine build

316 pages

University of California Publications in History, Volume

The Persistence of the Westward Moveme

Essays

JOHN CARL PARISH

ear East, and the War

rmation, and conclusions on Mediterranean events.
vered under the auspices of the Committee on Inter-
ns on the Los Angeles campus of the University of

IN THE NEAR EAST	James Henry Breasted, Jr.
IN AFRICA	Frank J. Klingberg
OIL IN THE NEAR EAST	Lester C. Uren
STRUGGLE FOR AFRICA	Leonard B. Loeb
GLE FOR AFRICA	H. Arthur Steiner
RUGGLE FOR AFRICA	Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

in the International Relations Series

AMONG THE NATIONS, paper only
ND PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
F THE AMERICAS, paper only
F ASIA, paper, cloth
LTURE, paper, cloth
AND PEACE, paper, cloth
paper, cloth
HE WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
PHERIC DEFENSE, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

y of Drama

*Bread

ALEX

A publ
versity

Cézan

Analys

ERLE

Probab
appear
vague,
tereste
of the
scholar
challen
beyond
The co
to the
intende
aesthet
Seve
one of
eight p

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Econo
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photogr

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space c
appear in book form. Factual and provable dedu
vague, critical pronouncements have been reache
terested in painting should be able to apprehend
of the book by simply looking at the numerous ill
scholar, student, and teacher of painting the exhau
challenge arguments and deductions. The scope of
beyond the mere interpretation of Cézanne as an i
The conclusions reached may be applied to origin
to the understanding of Modern and Renaissance p
intended to serve as a textbook for courses in draw
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra
one of which is in four colors; 69 line drawings and
eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime history; from an early concern with the history of the Pacific Company. The appendix contains a full description operating on the Panama and Nicaragua Routes passengers carried, the treasure shipments, the na of the steamers and the names of the engine buil

316 pages; c

University of California Publications in History, Volume 29

The Persistence of the Westward Movem

Essays

John Carl Parish

ear East, and the War

mation, and conclusions on Mediterranean events. ered under the auspices of the Committee on Inter- ns on the Los Angeles campus of the University of

n the Near East	James Henry Breasted, Jr.
in Africa	Frank J. Klingberg
Oil in the Near East	Lester C. Uren
Struggle for Africa	Leonard B. Loeb
gle for Africa	H. Arthur Steiner
ruggle for Africa	Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

in the International Relations Series

among the Nations, paper only
nd Peace in the Society of Nations, paper only
the Americas, paper only
f Asia, paper, cloth
ulture, paper, cloth
nd Peace, paper, cloth
paper, cloth
he War to the Americas, paper, cloth
pheric Defense, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

y of Drama

*Bread
Ale
A pub
versity

Cézan

Analys

Erl

Proba
appear
vague,
tereste
of the
schola
challe
beyon
The c
to the
intend
aesthe
Seve
one of

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Ecor
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photo

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space
appear in book form. Factual and provable ded
vague, critical pronouncements have been reach
terested in painting should be able to apprehen
of the book by simply looking at the numerous i
scholar, student, and teacher of painting the exh
challenge arguments and deductions. The scope
beyond the mere interpretation of Cézanne as an
The conclusions reached may be applied to orig
to the understanding of Modern and Renaissance
intended to serve as a textbook for courses in dra
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogr
one of which is in four colors; 69 line drawings an
eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime hist
from an early concern with the history of the Pa
Company. The appendix contains a full descri
operating on the Panama and Nicaragua Rou
passengers carried, the treasure shipments, the ra
of the steamers and the names of the engine bui

316 page

University of California Publications in History, Volume

The Persistence of the Westward Move

Essays

John Carl Parish

search,

Grant

ar East, and the War

nation, and conclusions on Mediterranean events.
red under the auspices of the Committee on Inter-
on the Los Angeles campus of the University of

THE NEAR EAST................James Henry Breasted, Jr.
IN AFRICA....................Frank J. Klingberg
IN THE NEAR EAST.............Lester C. Uren
TRUGGLE FOR AFRICA...........Leonard B. Loeb
LE FOR AFRICA................H. Arthur Steiner
UGGLE FOR AFRICA.............Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

n the International Relations Series

AMONG THE NATIONS, paper only
PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
THE AMERICAS, paper only
ASIA, paper, cloth
URE, paper, cloth
PEACE, paper, cloth
per, cloth
WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
HERIC DEFENSE, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

of Drama

*Brea

ALE

A pub
versity

Céza

Analy

ERL

Proba
appea
vague,
tereste
of the
schola
challe
beyon
The c
to the
intend
aesthe
Seve
one of

*Bread and Democracy in Germany

ALEXANDER GERSCHENKRON

A publication of the Bureau of Business and Econc
versity of California.

Cézanne's Composition

Analysis of His Form, with Diagrams and Photog

ERLE LORAN

Probably the most thorough analysis of space c
appear in book form. Factual and provable dedu
vague, critical pronouncements have been reache
terested in painting should be able to apprehend
of the book by simply looking at the numerous illu
scholar, student, and teacher of painting the exhau
challenge arguments and deductions. The scope of
beyond the mere interpretation of Cézanne as an i
The conclusions reached may be applied to origin
to the understanding of Modern and Renaissance p
intended to serve as a textbook for courses in drawi
aesthetics.

Seventy-nine halftone reproductions of photogra
one of which is in four colors; 60 line drawings and
eight paintings are analyzed.

the author's lifelong interest in maritime history
from an early concern with the history of the Pacific
Company. The appendix contains a full description
operating on the Panama and Nicaragua Routes;
passengers carried, the treasure shipments, the names
of the steamers and the names of the engine builders
316 pages; cloth

University of California Publications in History, Volume 15

The Persistence of the Westward Movement

Essays

John Carl Parish

search,

Grant

'ear East, and the War

rmation, and conclusions on Mediterranean events.
vered under the auspices of the Committee on Inter-
ons on the Los Angeles campus of the University of

IN THE NEAR EAST	James Henry Breasted, Jr.
IN AFRICA	Frank J. Klingberg
OIL IN THE NEAR EAST	Lester C. Uren
STRUGGLE FOR AFRICA	Leonard B. Loeb
GLE FOR AFRICA	H. Arthur Steiner
TRUGGLE FOR AFRICA	Malbone W. Graham

212 pages; paper $1.00; cloth $1.50

in the International Relations Series

AMONG THE NATIONS, paper only
AND PEACE IN THE SOCIETY OF NATIONS, paper only
THE AMERICAS, paper only
ASIA, paper, cloth
TURE, paper, cloth
AND PEACE, paper, cloth
paper, cloth
HE WAR TO THE AMERICAS, paper, cloth
PHERIC DEFENSE, paper, cloth

Paper $1.00, cloth $1.50

y of Drama

*Bread

ALEX

A publ
versity

Cézar

Analys

ERLE

Probal
appear
vague,
tereste
of the
scholar
challen
beyond
The co
to the
intend
aesthe
Seve
one of
eight

北京日記抄

芥川龍之介

一　雍和宮

今日も亦中野江漢君につれられ、午頃より雍和宮一見に出かける。喇嘛寺などに興味も何もなけれど、否、寧ろ喇嘛寺などは大嫌ひなれど、北京名物の一つと言へば、紀行を書かされる必要上、義理にも一見せざる可らず。我ながら御苦労千萬なり。

薄汚い人力車に乗り、やつと門前に辿りついて見れば、成程大伽藍には違ひなし。尤も大伽藍などと言へば、大きいお堂が一つあるやうなれど、この喇嘛寺は中々そんなものにあらず。永祐殿、綏成殿、天王殿、法輪殿などと言ふ幾つものお堂の寄り合ひ世帯なり。それも日本のお寺とは違ひ、屋根は黄色く、壁は赤く、階段は大理石を用ひたる上、石の獅子だの、青銅の惜字塔だの（支那人は文字を尊ぶ故、文字を書きたる紙を拾へば、この塔の中へ入れるよし、浅野君の説明なり。つまり多少藝術的なる青銅製の紙屑籠と思へば好し。）乾隆帝の「御碑」だのも立つてゐれば、兎に角荘厳なるに近かるべし。

第六所東配殿に木彫りの和合佛四體あり。堂守りに銀仵を一枚やると、緞幔をとつて見せてくれる。佛は皆藍面赤

髮、背中に何本も手を生やし、無數の人頭を頸飾りにしたる醜惡無双の怪物なり。和合佛第一號は人間の皮をかけたる馬に跨り、炎口に小人を啣ふるもの、第二號は象頭人身の女を足の下に踏まへたるもの、第三號は立つて女を淫するもの。第四號は――最も敬服したるは第四號なり。第四號は牛の背上に立ち、その又牛は僭越にも仰臥せる女を淫しつつあり。されど是等の和合佛は少しもエロテイツクな感じを與へず。只何か殘酷なる好奇心の滿足を與ふるのみ。和合佛第四號の鄰には半ば口を開きたるやはり木彫りの大熊あり。この熊も因緣を聞いて見れば、定めし何かの象徵ならん。熊は前に武人二人（壁面にして黑毛をつけたる槍を持てり。）後に二匹の小熊を伴ふ。

それから雍和殿なりしと覺ゆ、ワンタン屋のチヤルメラに似たる音せしかば、ちよつと中を覗きて見しに、喇嘛僧二人、怪しげなる喇叭を吹奏しゐたり。喇嘛僧と言ふもの、或は黃、或は赤、或は紫などの毛のつきたる三角帽を冠けるは多少の畫趣あるに違ひなけれど、どうも皆惡黨に思はれてならず。幾分にても好意を感じたるはこの二人の喇叭吹きだけなり。

それから又中野君と石疊みの上を歩みゐたるに、萬福殿の手前の樓の上より堂守り一人顏を出し、上つて來いと手招ぎをしたり。狹い梯子を上つて見れば、此處にも亦幕に蔽はれたる佛あれど、堂守り容易に幕をとつてくれず。二十錢出せなどと手を出すのみ。やつと十錢に妥協し、幕をとつて拜し奉れば、藍面、白面、黃面、赤面、馬面等を生やしたる怪物なり。おまけに又何本も腕を生やしたる上、（腕は斧や弓の外にも、人間の首や腕をふりかざしゐたり。）右の脚は鳥の脚にして左の脚は獸の脚なれば、頗る狂人の畫に類したりと言ふべし。されど豫期したる和合佛にはあらず。（尤もこの怪物は脚下に二人の人間を踏まへゐたり。）中野君即ち目を瞋らせて、「貴様は嘘をついたな」と言へば、堂守り大いに狼狽し、頻りに「これがある、これがある」と言ふ。「これ」とは肉色の男根なり。隆々たる一具、予を作ることを傷

さず、空しく堂守りをして煙草錢を儲けしむ。悲しいかな、喇嘛佛の男振や。

喇嘛寺の前に喇嘛畫師の店七軒あり。畫師の總數三十餘人。皆西藏より來れるよし。恒盟號と言ふ店に入り、喇嘛佛の畫數枚を購ふ。この畫、一年に一萬二三千元賣れると言へば、喇嘛畫師の收入も莫迦にならず。

二　辜鴻銘先生

辜鴻銘先生を訪ふ。ボイに案内されて通りしは素壁に石刷の掛けものをぶら下げ、床にアンペラを敷ける廳堂なり。ちよつと南京蟲はゐさうなれど、蕭散愛すべき廳堂と言ふべし。

待つこと一分ならざるに眼光炯々たる老人あり。闥を排して入り來り、英語にて「よく來た、まあ坐れ」と言ふ。勿論辜鴻銘先生なり。胡麻鹽の辮髮、白のタアクワアル、顏は鼻の寸法短かければ、何處か大いなる蝙蝠に似たり。先生の僕と談ずるや、テエブルの上に數枚の藁半紙を置き、手は鉛筆を動かしてさつさと漢字を書きながら、口はのべつ幕なしに英語をしやべる。僕の如く耳の怪しきものにはまことに便利なる會話法なり。

先生、南は福建に生まれ、西は蘇格蘭のエディンバラに學び、東は日本の婦人を娶り、北は北京に住するを以て東西南北の人と號す。英語は勿論、獨逸語も佛蘭西語も出來るよし。されどヤング・チヤイニイイスと異り、西洋の文明を買ひ冠らず。基督教、共和政體、機械萬能などを罵る次手に、僕の支那服を着たるを見て、「洋服を着ないのは感心だ。只惜むらくは辮髮がない」と言ふ。先生と談ずること三十分、忽ち八九歳の少女あり。羞かしさうに廳堂へ入り來る。蓋し先生のお孃さんなり。（夫人は既に鬼籍に入る。）先生、お孃さんの肩に手をかけ、支那語にて何とか囁けば、お孃さんは小さい口を開き、「いろはにほへとちりぬるをわか……」云々と言ふ。夫人の生前教へたるなるべし。先生は滿足

さうに微笑してゐれど、僕は聊かセンテイメンタルになり、お孃さんの顏を眺むるのみ。

お孃さんの去りたる後、先生、又僕の爲に段を論じ、畏を論じ、併せて又トルストイを論ず。(トルストイは先生へ手紙をよこしたよし。)論じ來り、論じ去つて、先生の意氣大いに昂るや、眼は愈炬の如く、顏は愈蝙蝠に似たり。僕の上海を去らんとするに當り、ジョオンズ、僕の手を握つて曰「紫禁城は見ざるも可なり。辜鴻銘を見るを忘るゝこと勿れ」と。ジョオンズの言、僕を欺かざるなり。僕亦先生の論ずる所に感じ、何ぞ先生の時事に慨して時事に關せんとせざるかを問ふ。先生、何か早口に答ふれど、生憎僕に聞きとること能はず。「もう一度どうか」を繰り返せば、先生、さも忌々しさうに藁半紙の上に大書して曰「老、老、老、老、老、……」と。

一時間の後、先生の邸を辭し、歩して東單牌樓のホテルに向へば、微風、並み木の合歡花を吹き、斜陽、僕の支那服を照らす。しかもなほ蝙蝠に似たる先生の顏、僕の眼前を去らざるが如し。僕は大通りへ出づるに當り、先生の門を回看して、――先生、幸ひに咎むること勿れ、先生の老を歎ずるよりも先に、未だ年少有爲なる僕自身の幸福を讃美したり。

三　十刹海

中野江漢君の僕を案内してくれたるものは北海の如き、萬壽山の如き、或は又天壇の如き、誰も見物するもののみにあらず。文天祥祠も、楊椒山の故宅も、白雲觀も、永樂大鐘も、(この大鐘は半ば土中に埋まり、事實上の共同便所に用ひられつゝあり。)悉中野君の案内を待つて一見するを得しものなり。されど最も面白かりしは今日中野君と行つて見たる十刹海の遊園なるべし。

尤も遊園とは言ふものの、庭の出來てゐる次第にはあらず。只大きい蓮池のまはりに葭簀張りの掛け茶屋のあるだけなり。掛け茶屋の外には針鼠だの大蝙蝠だのの看板を出した見世物小屋も一軒ありしやうに記憶す。僕等はかう言ふ掛け茶屋にはいり、中野君は玫瑰露の杯を嘗め、僕は支那茶を啜りつつ、二時間ばかり坐つてゐたり。何がそんなに面白かりしと言へば、別に何事もあつた訣にはあらず、只人を見るのが面白かりしだけなり。

蓮花は未だ開かざれど、岸をめぐれる槐柳のかげや前後の掛け茶屋にゐる人を見れば、水煙管を啣へたる老爺あり、双丫髻に結へる少女あり、兵卒と話してゐる道士あり、杏賣りを値切つてゐる婆さんあり、人丹（仁丹にあらず）賣りあり、巡査あり、背廣を着た年少の紳士あり、滿州旗人の細君あり、――と數へ上げれば際限なけれど、兎に角支那の浮世畫の中にゐる心ちありと思ふべし。殊に旗人の細君は黑い布か紙にて造りたる髷とも冠ともつかぬものを頂き、頬にまるまると紅をさしたるさま、古風なること言ふべからず。その又お時宜をするや、膝をかがめて腰をかがめず、右手をまつ直に地へ下げるは奇體にも優雅の趣ありと言ふべし。成程これでは觀菊の御宴に日本の宮女を見たるロテイイも不思議の魅力を感ぜしならん。僕は實際旗人の細君にちよつと滿州流のお時宜をし、「今日は」と言ひたき誘惑を受けたり。但しこの誘惑に從はざりしは少くとも中野君の幸福なりしならん。

僕等のはひりし掛け茶屋を見るも、まん中に一本の丸太を渡し、男女は斷じて同席することを許さず。女の子をつれたる親父などは女の子だけを向う側に置き、自分はこちら側に坐りながら、丸太越しに菓子などを食はせてゐたり。この分にては僕も敬服の餘り、旗人の細君にお時宜をしたとすれば、忽ち風俗壞亂罪に問はれ、警察か何かへ送られしならん。まことに支那人の形式主義も徹底したものと稱すべし。僕、この事を中野君に話せば、中野君、一息に玫瑰露を飲み干し、扨徐ろに語つて曰、「そりや驚くべきものですよ。環城鐵道と言ふのがあるでせう。ええ、城壁のまはりを

通つてゐる汽車です。あの鐵道を拵へる時などには線路の一部が城内を通る、それでは環城にならんと言つて、わざわざ其處だけは城壁の中へもう一つ城壁を築いたですからね。兎に角大した形式主義ですよ。」

四　蝴蝶夢

波多野君や松本君と共に辻聽花先生に誘はれ、昆曲の芝居を一見す。京調の芝居は上海に來、度たび覗いても見しものなれど、昆曲はまだ始めてなり。例の如く人力車の御厄介になり、狹い町を幾つも通り拔けし後、やつと同樂茶園と言ふ劇場に至る。紅に金文字のびらを貼れる、古き煉瓦造りの玄關をはひれば、——但し「玄關をはひれば」と言ふも、切符などを買ひし次第にあらず。元來支那の芝居なるものは唯ぶらりと玄關をはひり、戲を聽くこと數分の後、金を集めに來る支那の出かたに定額の入場料を拂つてやるを常とす。これは波多野君の說明によれば、つまるかつまらぬかわからぬ芝居に前以て金など出せるものかと言ふ支那的論理によれるものの由。まことに我等看客には都合好き制度と言はざるべからず。扨煉瓦造りの玄關をはひれば、土間に並べたる腰掛けに雜然と看客の坐れることはこの劇場も他と同様なり。否、昨日梅蘭芳や楊小樓を見たる東安市場の吉祥茶園は勿論、一昨日餘叔岩や尚小雲を見たる前門外の三慶園よりも一層ぢぢむさき位ならん。この人ごみの後ろを通り、二階棧敷に上らんとすれば、醉顏酡たる老人あり。龍川の辮に辮髮を卷き、芭蕉扇を手にして徘徊するを見る。波多野君、僕に耳語して曰、「あの老爺が樊半山ですよ」と。僕は忽ち敬意を生じ、梯子段の中途に佇みたるまま、この老詩人を見守ること多時。恐らくは當年の醉李白も——などと考へし所を見れば、文學青年的感情は少くとも未だ國際的には幾分か僕にも殘りをるなるべし。

二階棧敷には僕等よりも先に辮髮を蓄へ、詰め襟の洋服を着たる辻聽花先生あり。先生は劇通中の劇通たるは支那の

役者にも先生を拜して父と做するもの多きを見て知るべし。揚州の鹽務官高州太吉氏は外國人にして揚州に官たるもの、前にマルコ・ポオロあり、後に高州太吉ありと大いに氣焔を吐きゐたれど、外國人にして北京に劇通たるものは前にも後にも聽花散人一人に止めを刺さざるべからず。僕は先生を左にし、波多野君を右にして坐りたれば、（波多野君も「支那劇五百番」の著者なり。）「綴白裘」の兩帙を手にせざるも、今日だけは兎に角半可通の資格位は具へたりと言ふべし。（後記。辻聽花先生に漢文「中國劇」の著述あり。順天時報社の出版に係る。僕は北京を去らんとするに當り、先生になほ邦文「支那芝居」の著述あるを仄聞したれば、先生に請うて原稿を預り、朝鮮を經て東京に歸れる後、二三の書肆に出版を勸めたれど、書肆皆愚にして僕の言を容れず。然るに天公その愚を懲らし、この書今は支那風物研究會の出版する所となる。次手を以て廣告すること然り。）

即ち葉卷に火を點じて俯瞰すれば、舞臺の正面に紅の緞帳を垂れ、前に欄干をめぐらせることもやはり他の劇場と異る所なし。此處に猿に扮したる役者あり。何か歌をうたひながら、くるくる棒を振りまはすを見る。番附に「火焔山」とあるを見れば、勿論この猿は唯の猿にあらず。僕の幼時より尊敬せる齊天大聖孫悟空ならん。悟空の側には又衣裳を着けず、粉黛を裝はざる大男あり。三尺餘りの大團扇を揮つて、絕えず悟空に風を送るを見る。羅刹女とはさすがに思はれざれど、或は牛魔王か何かと思ひ、そつと波多野君に尋ねて見れば、これは唯煽風機代りに役者を煽いでやる後見なるよし。牛魔王は既に戰ひ負けて、舞臺裏へ逃げこみし後なりしならん。悟空も亦數分の後には一打十萬八千路、——と言つても實際は大股に悠々と東門道へ退却したり。憾むらくは樊半山に感服したる餘り、火焔山下の大殺を見損なひしことを。

「火焔山」の次は「蝴蝶夢」なり。道服を著たる先生の舞臺をぶらぶら散歩するは「蝴蝶夢」の主人公莊子ならん。そ

れから目ばかり大いなる美人の莊子と喋々喃々するはこの哲學者の細君なるべし。其處までは一目瞭然なれど、時々舞臺へ現るる二人の童子に至つては何の象徴なるかを明らかにせず。「あれは莊子の子供ですか？」と又ぞろ波多野君を惱ますれば、波多野君、聊か啞然として「あれはつまり、その、蝶々ですよ」と言ふ。しかし如何に贔負眼に見るも、蝶々などと言ふしろものにあらず。或は六月の天なれば、火取蟲に名代を賴みしならん。唯この芝居の筋だけは僕も先刻承知なりし爲、登場人物を知りし上はまんざら盲人の垣覗きにもあらず。否、今までに僕の見たる六十有餘の支那芝居中、一番面白かりしは事實なり。抑も「蝴蝶夢」の筋と言はば、莊子もあらゆる賢人の如く、女のまごころを疑ふ爲、道術によりて死を裝ひ、細君の貞操を試みんと欲す。細君、莊子の死を歎き、喪服を着たり何かすれど、楚の公子の來り弔するや、………

「好！」

この大聲を發せるものは辻聽花先生なり。僕は勿論「好！」の聲に慣れざる次第でも何でもなけれど、未だ嘗て特色あること、先生の「好！」の如くなるものと聞かず。まづ匹を古今に求むれば、長坂橋頭蛇矛を橫たへたる張飛の一喝に近かるべし。僕、呆れて先生を見れば、先生、向うを指さして曰、「あすこは不准怪聲叫好と言ふ札が下つてゐるでせう。怪聲はいかん。わたしのやうに「好！」と言ふのは好いのです」と。大いなるアナトオル、フランスよ。君の印象批評論は眞理なり。怪聲と怪聲たらざるとは客觀的標準を以て律すべからず。僕等の認めて怪聲と做すものは、――しかしその議論は他日に讓り、もう一度「蝴蝶夢」に立ち戻れば、楚の公子の來り弔するや、細君、忽ち公子に惚れて莊子のことを忘るるに至る。忘るるに至るのみならず、公子の急に病を發し、人間の髑髏の髓を嘗めるより外に死を免るる策なしと知るや、斧を揮つて棺を破り、莊子の髑髏をとらんとするに至る。然るに公子と見しものは元來蝴蝶に外な

らされば、忽ち飛んで天外に去り、細君は再婚する所ならず。却つて悪辣なる莊子の爲にさんざん油をとらるるに終る。まことに天下の女の爲には氣の毒千萬なる諷刺劇と言ふべし。――と言へば劇評位書けさうなれど、實は僕には昆曲の昆曲たる所以さへ判然せず。唯どこか京調劇よりも派手ならざる如く感ぜしのみ。波多野君は僕の爲に「梆子は秦腔と言ふやつでね」などと親切に説明してくれれど、畢竟馬の耳に念佛なりしは我ながら哀れなりと言はざるべからず。なほ次手に僕の見たる「蝴蝶夢」の役割を略記すれば、莊子の細君――韓世昌、莊子――陶顯亭、楚の公子――馬夙彩、老蝴蝶――陳榮會等なるべし。

「蝴蝶夢」を見終りたる後、辻聽花先生にお禮を言ひ、再び波多野君や松本君と人力車上の客となれば、新月北京の天に懸り、ごみごみしたる往來に背廣の紳士と腕を組みたる新時代の女子の通るを見る。ああ言ふ連中も必要さへあれば、忽ち――斧は揮はざるにもせよ、斧よりも鋭利なる一笑を用ひ、御亭主の腦味噌をとらんとするなるべし。「蝴蝶夢」を作れる士人を想ひ、古人の厭世的貞操觀を想ふ、同樂園の二階棧敷に何時間かを費したるも必しも無駄ではなかつたやうなり。

五　名勝

萬壽山。自動車を飛ばせて萬壽山に至る途中の風光は愛すべし。されど萬壽山の宮殿泉石は西太后の悪趣味を見るに足るのみ。柳の垂れたる池の邊に醜悪なる大理石の畫舫あり。これも亦大評判なるよし。石の船にも感歎すべしとせば、鐵の船なる軍艦には卒倒せざるべからざるに似たり。

玉泉山。山上に廢塔あり。塔下に踞して北京の郊外を俯瞰す。好景、萬壽山に勝ること數等。尤もこの山の泉より造

れるサイダアは好茶よりも更に好なるかも知れず。

白雲觀。洪大尉の石碣を開いて一百八の魔君を走らせしも恐らくはかう言ふ所ならん。靈官殿、玉皇殿、四御殿など、皆槐や合歡の中に金碧燦爛としてゐたり。次手に葡萄架後の台所を覗けば、これも世間並みの台所にあらず「雲廚寶鼎」の額の左右に金字の聯をぶら下げて曰、「勺水共飲蓬萊客　粒米同餐羽士家」と。但し道士も時勢には勝たれず、せつせと石炭を運びゐたり。

天寧寺。この寺の塔は隋の文帝の建立のよし。尤も今あるのは乾隆二十年の重修なり。塔は綠瓦を畳むこと十三層、屋椽は白く、塔壁は赤し、――と言へば綺麗らしけれど、實は荒廢見るに堪へず。寺は既に全然滅び、只紫燕の亂飛するを見るのみ。

松筠庵。楊椒山の故宅なり。故宅と言へば風流なれど、今は郵便局の横町にある上、入り口に君子自重の小便壺あるは沒風流も亦甚し。瓦を敷き、岩を積みたる庭の前に諫草亭あり。庭に擬寶珠の鉢植ゑ多し、椒山の「鐵肩擔道義、辣手著文章」の碑をランプの台に使ひゐるも滑稽なり。後生、まことに恐るべし。椒山、この語の意を知れりや否や。

謝文節公祠。これも外右四區警察署第一半日學校の門内にあり。尤もどちらが家主かは知らず。薇香堂なるものの中に疊山の木像あり。木像の前に紙錫、硝子張の燈籠など。他は只滿堂の塵埃のみ。

窰臺。三門閣下に晝寢する支那人多し。滿目の芦荻。中野君の說明によれば、北京の苦力は炎暑の候だけ皆他省へ出稼ぎに行き、苦力の細君はその間にこの芦荻の中にて賣淫するよし。時價十五錢内外と言ふ。

陶然亭。古刹慈悲淨林の額なども仰ぎ見たれど、そんなものはどうでもよし。陶然亭は天井を竹にて組み、窓を綠紗にて張りたる上、蔀めきたる卍字の障子を上げたる趣、簡素にして愛すべし。名物の精進料理を食ひをれば、鳥聲頻に

天上より來る。ボイにあれは何だと聞けば、――實はちよつと聞いて貰へば、郭公の聲と答へたよし。

文天祥祠。京師府立第十八國民高等小學校の鄰にあり。堂内に木像並びに宋丞相信國公文公之神位なるものを安置す。此處も亦塵埃の漠々たるを見るのみ。堂前に大いなる楡(?)の木あり。杜少陵ならば老楡行か何か作る所ならん。僕は勿論發句一つ出來ず。英雄の死も一度は可なり。二度目の死は氣の毒過ぎて、到底詩興などは起らぬものと知るべし。

永安寺。この寺の善因殿は消防隊の展望臺に用ひられつつあり。葉卷を啣へて殿上に立てば、紫禁城の黄瓦、天寧寺の塔、アメリカの無線電信柱等、皆歴々と指呼すべし。

北海。柳。燕。蓮池。それ等に面せる黄瓦丹壁の大清皇帝用小住宅。

天壇。地壇。先農壇。皆大いなる大理石の壇に雜草の萋々と茂れるのみ。天壇の外の廣場に出づるに、忽ち一發の銃聲あり。何ぞと問へば、死刑なりと言ふ。

紫禁城。こは夢魘のみ。夜天よりも厖大なる夢魘のみ。

身のまはりのこと

島崎藤村

郵便局へ二町。煙草屋へ二町。湯屋へ三町。行きつけの床屋へも五六丁はある。どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならない。慣れて見ればそれも不便とは思はずに、芝の櫻川町からこの飯倉片町に移り住んでから最早足掛八年にもなつた。

○

「現代小説全集」の第九卷として自分の集も出ることになつた。その印税で、郷里の神坂村の方に賣物に出た一軒の農家を長男楠雄のために買取ることにした。彼も三年の耕作の見習ひを終りかけて、どうやら若い農夫として立つて行けそうに見える。さういふ自分は未だに飯倉の借家住居で、四拾年の書窓でも事はたりると思ひながら自分の子のために永住の家を建てようとすることは、我ながら矛盾した行爲だ。けれども、これから新規に百姓生活に入つて行かうとする子には、小さいながらも寢る場所と、物を食ふ爐邊と、土を耕す農具の類からして求めてあてがはなければならない。今のところ、それより外に自分の執るべき方法もない。

○

上海の寶山路といふところの商務印書館に務めて支那人相手に石版印刷などに從事して居る津金さんが、久しぶりで訪ねて來た。夫婦して上海生れの女の兒を連れた上に、妹のお末さんまでが二人の子供を連れて一緒に見えた時は、狹い私の書齋には座りきれないほどの賑かさだ。津金さん兄妹は小諸の馬場裏時代の昔馴染だ。私のことを『小父さん』と呼んで居る人達だ。この津金さんが上海の方へ出掛けて行つてから最早七年程にもなる。今度久しぶりで歸國して、三越あたりで買物して見て日本の諸物價の高いのに驚かされたといふ。上海での暮しいゝ話の一つに、トマトのことが出た。東京の野菜を賣る店で四つか五つ四五十錢もするのに比べると、上海で五十錢も出せば赤い好い色のトマトが籠に山盛り來るといふ話も出た。上海といへば、曾て私は佛蘭西への旅の往き還りに寄つて見た港であるが、あの時分とは波止場のさまからして改まり、汽船も海岸へ横づけになり、町々の建築物も殆んど面目を一新して、以前に私が支那風の好い庭園と思つて時を送つて來たことのある『愚園』なども今は全く別の場處に變つたといふ話を津金さんから聞かされた。十年前にあの港を見た目で今日の上海を見たらば驚くほどであらうとの話も出た。上海の方の話を聞くにつけても、今更のやうにさう思ふ。十年前も昨日のやうな氣がしてゐる間に、世界はそんなに變りつゝある。

○

若いうちは自分だけのことをすれば、それでよかつた。人もそれで許して居た。それほど自分の一日は單純であつた。今日になつて見ると、多くの時を割いて他のためにも働かねばならない。あれもこれもと思ふばかりで屆かない。この節、私は未知の友から何通とない手紙を受取る。すこしそれを溜めて置くと返事も書き切れないやうになる。ある日も一日さういふ返事を書いて暮した。そこへ客が見えて、その日の夕方に前から約束して置いたことを忘れた。函館

から上京した義兄は二番目の子息さんの結婚の披露に、東京にある親戚知己を招きたいと言つて、夕刻には私もその席に列なる約束をして置いた。羽織まで出して置いた。それをすつかり忘れてしまつて、その夜の眠りに就く時分になつて、枕の上で思ひ出した。翌朝お詫びの手紙を出さうと思つて居ると、早速義兄の訪問を受けて、ゆふべの祝ひの品々を新しい風呂敷包のまゝそこへ取出された。私は自分を笑ふにも笑はれなかつた。

○

ある日。一日緒言を書いて暮した。指がインキだらけになるのも忘れて、机にむかつて筆を執つて居た。そこへ見ず知らずの若者が蒼ざめた顔付をして訪れて來た。その人は私の家の入口へ來て立つまでに二日も食はなかつたといふ。細い筆の力で子供等を養つて居る私なぞに、さう餘裕のありやうもない。しかし私は若者の顔を見て居ると何か與へたいといふ氣になつて、それには僅かな金で與へるよりも古本で與へようと思ひついた。さあ持つて行きたまへ、と私は數冊の古本を新聞紙に包んでやつた。あの若者もそれを賣つて一日の命をつなぎ得たらうに、それぎり音も沙汰もなかつた。さういふ風に困つて來る人がこの節は何程あるか知れない。震災後は働きたいにも仕事がないと言つて救ひを求めるやうな窮困者が多くなつた。

○

終日籠居。心もさみしく慰めようのない日に、森元町の湯屋まで一風呂はひりに行つて來た。その歸りがけに、子供等の冬うけのためにと思つて、蒸し芋を買つた。森元町には好い芋屋があつて、芋の季節ももうお仕舞ではあるが、し

かしよく保存されたものならばお仕舞の頃の藷の味が實は一番甘いといふ話を聞かされた。そこの爺さんは私の見て居る前で蒸し藷を秤にかけて、目方で賣つて吳れる時にその話をした。さう言へば、冬を越した果物のなくなりかける頃に萎びた林檎には特別の味があると思ひ〳〵したが、芋屋の爺さんの話で想ひ當つた。

○

飯倉へ行くと鹽煎餅ぐらゐで追拂はれてしまふなど、聞くのもつらい。めづらしい果物などの手に入つた時には客がなくて、客のある時にはまた生憎何もてなすやうなものゝないことが多い。私の家ではわざ〳〵町から買つて來たもので客をもてなすやうなことをしない。その時に家にあるものを出す。そんな風だから客にでも振舞ひたいと思ふものは多く家のものゝ口に入つてしまつて、たまに訪ねて來て吳れた人には番茶ばかりを勸めるやうなことが起つて來る。

○

紅白の鶴の卵とも言ひたいやうな正月らしい菓子の殘つて居た時分だから、あれはまだ早い春のはじめのことだ。透谷の未亡人が見えたから、私は舊い友達の娘さんのことを思ひ出して、その菓子の殘つたのを紙に包み、ほんのすこしばかりだが、それでも屆けて貰ひたかつた。透谷の亡くなる時分には『ふうちやん、ふうちやん』と言つたあの娘さんが、今ではもう三人子持と聞く。未亡人は青山の方へ歸つて行つて、あの娘さんと一緒になつた時に、『御覽、飯倉ではまだお前のことを子供のやうに思つて居る。』と言つて見せたとか。後になつてまた未亡人が私のところへ見えた時に、その話が出た。

ある日、芝の増上寺へ行つて、あの新築した寺院の内に時を送つて見た。私は曾て巴里のノオトル・ダムの寺院の内に腰掛けた時のことなどを思出して、それと同じやうな心で、男女の參詣人の出たり入つたりして居る増上寺の本堂の片隅に座つて見た。そこには見上げるやうな高い天井があつた。念佛の聲の聞えて來る廣い伽藍があつた『淨土』といふものをあらはしたやうな曼陀羅の圖の掛つた壁もあつた。しかし、私の思ふやうな靜かさは最早あの古い歴史のある寺院の内には殘つて居ないやうな氣がした。

○

ある日も、ある茶室へ行つて時を送つて見た。そこはまた寺院の内などゝ違つて、僅かに膝を容れるに足りるばかりのやうな狹いところだ。白い鳥の子の紙で縁張りをした壁なども、『簡素』そのものと言ひたいほど飾りのないところだ。私はそこへも行つて座つて見たが、自分の想像したやうな靜かさは、あゝいふ茶室の中にも最早殘つて居ないやうに思ふ。

○

四十ばかりの女の客が私の前に居て、その人は若いものに嫌はれないやうなことを今から考へて置かねばならないと言ひ出したことがある。その人はまた、ずつと年をとつてからの日のために、雨が降つたから茶でも飲みにお出下さいと

言へるやうな、さういふ老後の友達を三四人つくつて置きたい、男でも女でもいゝからさういふ友達を三四人ほしい、それにはお婆さんに成つてしまつてからでは遅い、今からそれを心掛けて置きたい、と言ひ出したことがある。ある人がこの話を聞いて『女は確かに男よりも先のことを考へますよ、』と私に言つて見せた。

○

飯倉の榎坂から一丁目の方へ降りようといふ町の角のところに、私の家ではよく茶を買ひに行く深山といふ老舗がある。そこでは茶ばかりでなく、紙をもあきなふ。飯倉の深山といへば古くから知られた店だそうだが、それほどの老舗とも私の家のものは知らなかつた。ただただ好い茶を賣る店のやうにのみ思つて居た。茶好きな私は、時には散歩のついでにその店へ寄つて、自分でも茶の袋などを提げて歸つて來ることもある。ところが、ある日私はその店頭に腰掛けて居て、子飼の時分から勤めあげたといふ好い年配の番頭さんからその家がどのくらゐ古いかといふことを聞かされた。安政の大地震に耐へ、今度の大地震にも耐へたやうな、その黒光りのする古風な土藏造りの建物は百六十年からに成るといふ。江戸時代からの面影を傳へて居るそれほどしつかりした商家の建物も、震災後の今日にはたんとは見られまい。私はその時になつて自分の家の近くには何か斯うおそろしく堅牢なものを見出したやうな心地がした。番頭さんの口吻では、その店に飾つてある棚の茶壺が安政の大地震には落ちなかつたと聞いて居るのに今度の大地震ではそれが悉くころげ落ちた。して見ると今度の方が地震は强かつた。そんな話も聞かされた。そこにはいかにも老舗の深さといふやうなものがあつて、注意して見れば見るほど好ましい店だと思ふ。そこで賣る茶の味が私の口に適するのもうれしい。

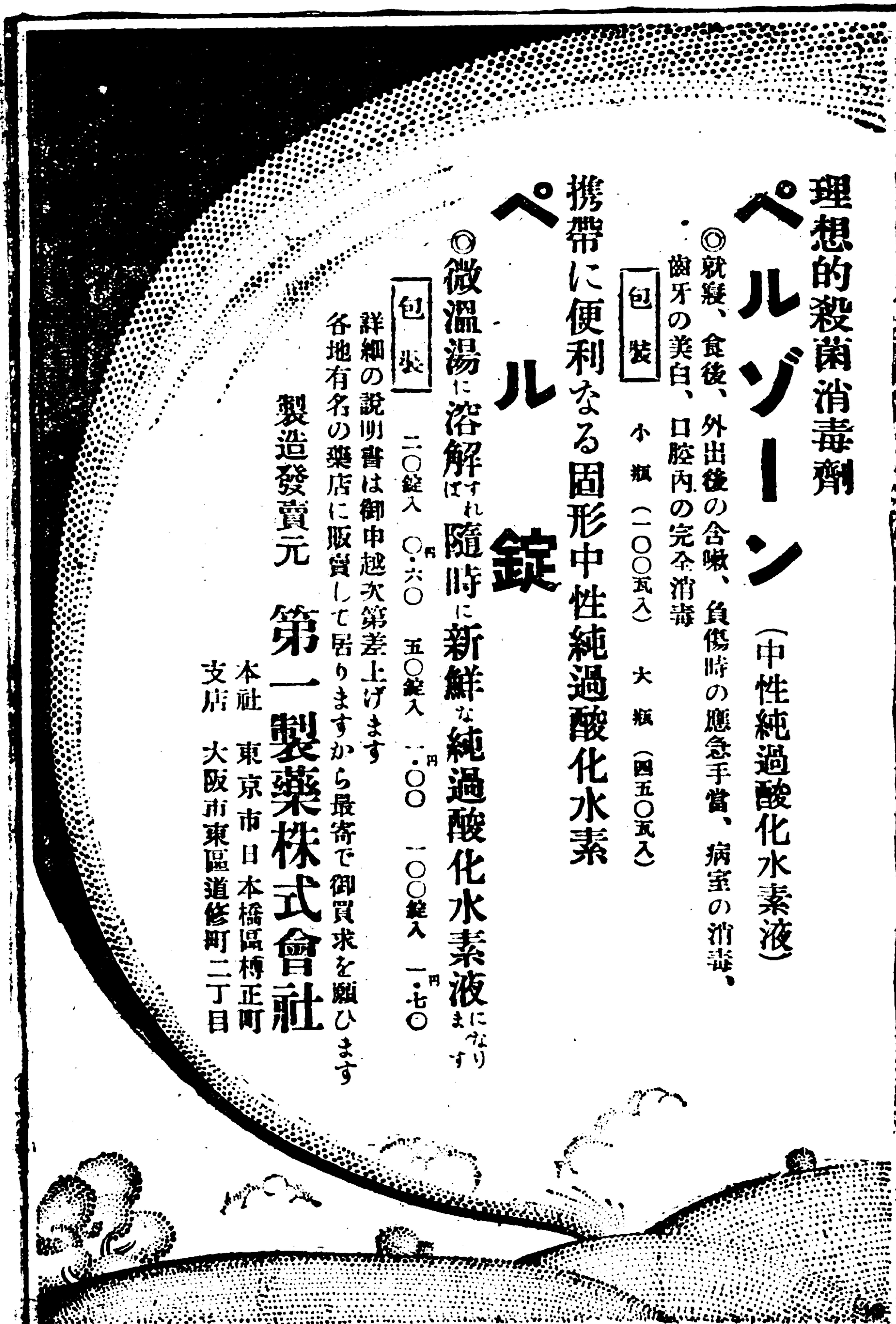
○

最近に、私の家はで滿洲から歸つて來た珍客を迎へた。露領に近い滿洲里といふところに副領事として在勤して居た親戚が、滿洲の果を出發したのは四月の五日頃であつたといふが、後事は居殘る人達に托し、領事館内の部屋も片付け、飼ひ馴れた三頭の馬まで賣拂つた上に、歸途の哈爾賓にも二三日を送つて舊知に別れを告げて來たといふほどのゆつくりした旅で、漸く四月の十七日に東京へ着いた。一家を擧げての久しぶりでの歸國だ。この親戚がはる〴〵滿洲あたりから歸つて來て、幾年か見ない自分の國を見た時に、一番最初に眼についたものは何かと言へば、そこいらの町々で行き逢ふ年若な娘達の背丈のにはかに高くなつたことであつたといふ。さう言はれて見ると、ずつと以前から私達の知つて居る婦人はいづれも背の低い人が多かつた。おそらく、遠い旅からでも歸つて來た人でなければ、そんなところへは氣がつくまい。面白い觀察だと思つた。

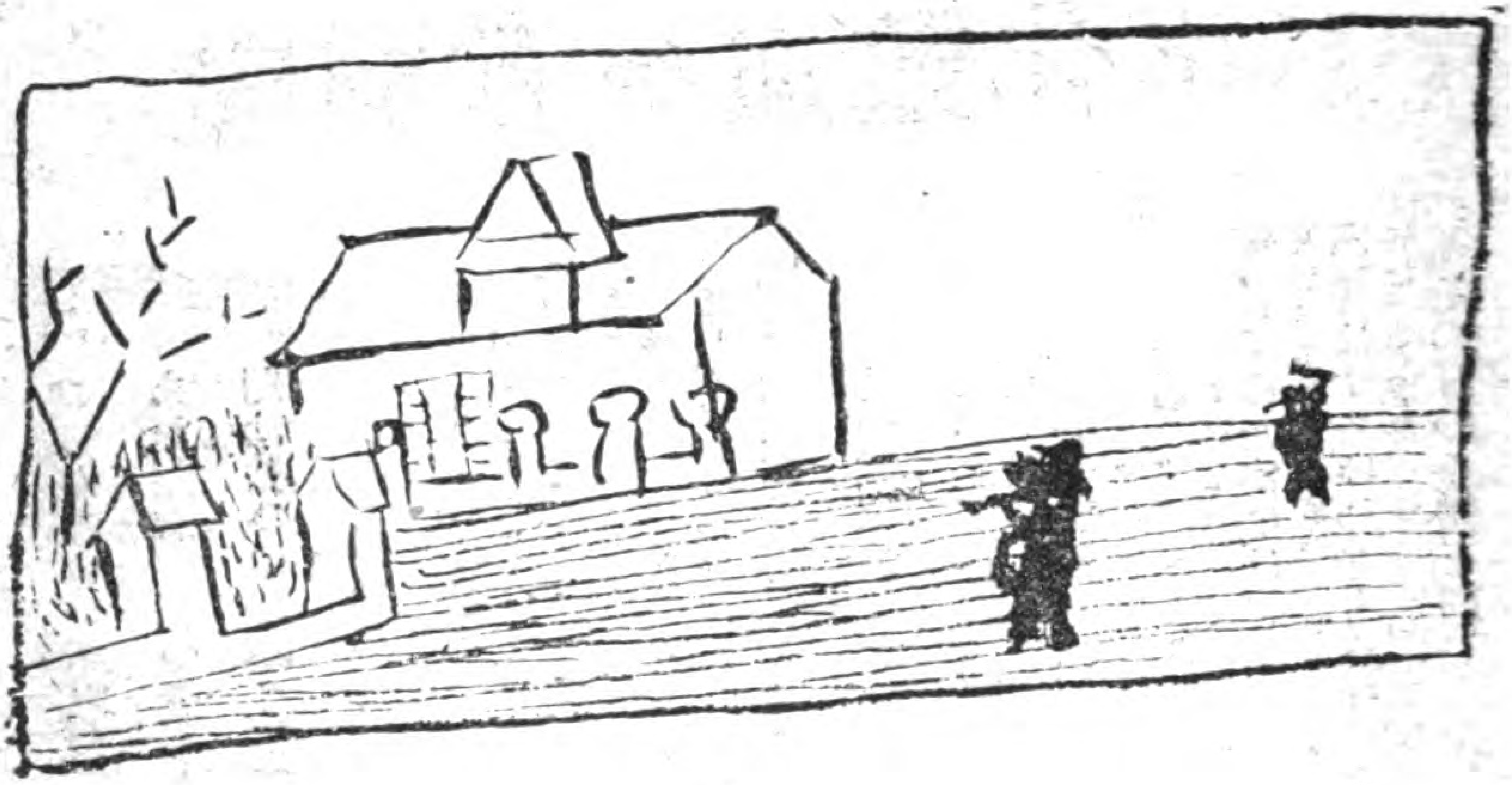
○

部屋の壁にかけて朝夕に眺める額の文字が名人の筆にのみ限るだらうか。無邪氣な子供に書かせた文字もまたおもしろくはないだらうか。子供の書いた字を習つたと言傳へられる名高い昔の坊さんすらもある。ずつと以前に、私は三宅克己君のところで、君の愛藏する古い掛物を見せて貰つたことがある。それには「明月」の二字だけを紙一ぱいに大きく隸書であらはして、筆者の署名のかはりに石印だけが押してあつた。古めかしく物錆びた朱色の褪せた印には詩仙堂とした文字が僅かに讀まれた。丈山の遺作と見えて、珍しい掛物だつた。あれは古の人の魂そのまゝとも言ひたいやう

なものだつた。うまいまづいといふやうなところを通り越して、私の胸に迫つて來る何ものかの力のあるのを覺えた。つくづくその筆の跡を見て居ると、月のひかりがそこへ射して來て居るかと疑はせるやうなものだつた。『深夜照南軒。明月照吾膝。』とは全くあの感じだ。ある古い掛物ほど私の記憶に殘つて居る文字もすくない。それを私は思ひ出して、あの『明月』は企て及ぶところではないが、せめて子供にでも書かせて見たらと思ひついた。丁度そこへある客が訪ねて來た。その人は學校時代以外に字なぞを習つたこともなさそうな人だ。早速私はその客をつかまへて、極く不用意にあの二字を書いて貰つた。それからの私の部屋には無名な人の筆の跡を額にして掛けて見て居る。巧みもなく氣取もない筆の跡は、これでも字を書いたと言へるだらうかと顏を紅めて居るやうなところがあつて、その謙虚な拙さが私の心を飽きさせない……



理想的殺菌消毒劑
ペルゾーン（中性純過酸化水素液）
◎就寢、食後、外出後の含嗽、負傷時の應急手當、病室の消毒、
齒牙の美白、口腔內の完全消毒
包裝 小瓶（一〇〇瓦入） 大瓶（四五〇瓦入）
携帶に便利なる固形中性純過酸化水素
ペル錠
◎微溫湯に溶解すれば隨時に新鮮な純過酸化水素液になります
包裝 二〇錠入 〇・六〇円 五〇錠入 一・〇〇円 一〇〇錠入 一・七〇円
詳細の説明書は御申越次第差上げます
各地有名の藥店に販賣して居りますから最寄で御買求を願ひます
製造發賣元 第一製藥株式會社
本社 東京市日本橋區榑正町
支店 大阪市東區道修町二丁目



「この三つのもの」

佐藤春夫

題言

「まことの戀と友情と智恵の石と
この三つのものを世間では寶だと言そやす。
私はずゐぶんと捜すことはしたのだ。
が、つひぞ一つもお目にはかからぬ」
――氣の毒なハインリツヒ・ハイネが
かう言つたのを私は或る時聞いた。
これは一大事だ。ほんとうに私も、
私ももう一度よく捜してみなければならない――
そこら中のごみ溜めまで堀り返して。

人々よ、惡臭を發し塵のかかるのを我慢して下さい。
ごらんなさい。私自身こそ頭から泥まみれだ。
また諸君、私の搜しものがをかしいなら
別世界の住人よ、この場から立去つて下さい。
私はここを堀つて見世物小屋は建てない！

一章

東海道K驛で赤木が下りたのは二時ごろだつた。北村の家の在るO町までは、そこからまだ三十分ほど電車で行かなければならない。その電車が二十分毎ぐらゐにはあるやうに聞いてゐたのに、それがまたなか〳〵出さうにはなかつた。待合室に立つたまま、赤木は時間表を搜してみたが、それらしいものも見つからなかつた。あたりには二三人の客がゐたが、見知らない人に口を利くのを好まない彼は、わざ〳〵それを切符賣口まで行つて尋ねた。一時間ほども間があることがわかつた。

朝から低迷してゐた空には、ごく細い雨がふり出して、並んだ松の幹の間からは灰ばみた海が、水平線の方だけ鈍く見えて、その音はするけれども浪打際は見えなかつた。暫くぶりで會ふ北村やその細君の顔が、赤木の目に浮んだけれども、それもその日の全體と同じく生氣のないものであつた。——赤木はそれほどに疲勞し困憊してゐた。いつもの赤木なら、これ位の霖雨などは氣にせずに、こんな退屈な時を砂濱へでも下りて行つたであらう。しかし赤木はただ彼の

腰掛の上へぐつたりと腰を下したまま、何の興味ないのに凝と海の方を見てゐた。それにも飽きて赤木がふりかへつた時、ふと向側の柱にかけた廣告用の細長い鏡つながかにある自分を見出した。

赤木は立つて鏡の方へ歩いて行つた――そのなかに動く自分を見つめながら。

「何といふ見すぼらしい旅人だらう」

彼は心の中でさう呟いた。痩せこけて、色はどす黑かつた。なでゝみると顎鬚が延びてざら〳〵した。赤木はうすら寒さを感じた。ただ感じただけではない。事實、寒かつた。十月ももう半ばだのに赤木は、クレバネットの外套の下は夏の服裝で、それがよれ〳〵になつてゐた。ただハンティングだけが眞新だつた。

やつと電車が出たが北村の家の方へは乘換へなければならなかつた。赤木は電車を捨てゝ車を傭つた。一時間ほどのうちに雨はだん〳〵ひどくなつて來てゐた。市中は今日は、祭なのだなと赤木は思つた。辻には長く連ねた萬國旗の綱が天蓋のやうな線で四方から垂れてゐたし、家々の軒には靑い枝につけた提灯が飾つてあつたが、降りまさる雨にそれぞれの紅が溶けて、流れて、裝飾からは色のついた雫が滴つてゐた。車は曲つて、樹の多い靜かな、郊へ出た。留つた人力車幌のなかから北村自身の手で書かれた表札を認めるなり、急に元氣が出て車から飛び出した。

赤木は見かけによらない景氣のいい聲で、

「御免！」

と呼びながら、性急にももう屈んで靴の紐を解かうとしてゐた。

玄關へ出たのは見知らない少女だつた。彼女にとつては客の樣子が不審だつたし、赤木はまたちよつと不滿だつた――北村の家へ來て普通の客のやうに取次を乞はなければならないのは、赤木にとつて思ひがけない妙な感じだつた。

「居ますか」と言つて、赤木は北村のことを何と言つていいかちよつと考へて「主人は？」とつけ加へた。

「は。只今、お留守でございますが……」

「ちや、奥さんは。お雪ちやんは」さつきこの聲が洩れてゐたと思つて、赤木はあとの一句を加へた。

「は……。あの、どなたさまで？」

「僕、赤木……」

彼がまだ言ひ終らないうちに、突然、襖間が手荒らに明け放された。お雪の華やかな姿がとび出した。

「なあんだ、清吉さんか」と言ふなり「やあ來た！　來た！」と、お雪はまるで少年のやうにわざと頓狂な聲を張り上げながらそそつかしく奥へ歸りながら「姉さん、何してゐるの。一刻も早く御出迎！　好きな人！　珍らしい人！……」

丁寧に取次に出てゐた小女は、半ば呆氣にとられ半ばは間の悪いのを感じながら、ぼんやりとやつぱり手をついたまゝお雪と赤木とを見くらべた。赤木はさつさと靴をぬいでゐた。お雪はまた出て來てゐた。

「馬鹿ね、みつや。何をぼんやりしてゐるの。うちの兄さんじやないか」

「まあ、騒々しいね！　お雪は。ユリ子が起きるぢやないか。──どなた。禎吉さんだらう？」子供でも寢かしつけてゐるのか、一番奥の間からお八重の聲がした。お八重は清吉のことを、その弟の禎吉と間違へてゐる。

お雪は叫んだ──

「違ひまあす。赤木清吉君！」

「うそ！」

お八重は半信半疑で襖間をあけた──

「あら！」

顔を見合せた瞬間に微笑が波動した。

「そうれ御覧！　どうです」

親愛の笑はお雪にも共通のものであつた。三人は一かたまりになつて階段を上つた。

「わたしはまた、お雪があんまり大騒ぎするから、禎吉さんだとばかり思つて、——聲は聞えてゐたのですけれどね。同じ聲ですわねえ」

「禎吉さんでなくつたつて、清吉さんにだつてたまには大騒ぎもするさ——それぐらゐの義理は知つてゐるつもりだよ、これでも」

「義理を知つての大騒ぎか」

三人は口々にそんなことを喋つた。笑つた。赤木は全く自分の家に對するやうな氣持であつた。離船した船乘が故郷の岬を見たやうな心だつた。

彼は車夫に金を拂ふことさへ忘れてゐた。さつきの若い女中が來て、車は待たせて置くのかと言つた時に、赤木がやつとそれに氣がつくと、お八重は女中に蟇口の在處を教へて金を拂はせた。

北村はY市へ行つたので、近ごろ始めた活動寫眞製作の仕事のためだが、北村がそれに熱中しきつてゐるらしい事は、お八重の言葉のなかにさへシネリオだのロケイションだのと、その仕事のテックニックが使はれたのでもわかる。九ケ月ほど會はないうちに北村の生活が可なり變化してゐるらしいことを赤木は想像した。さうしていつか北村から受取つた景氣のいい手紙と、それに對する赤木自身の返事とを思ひ出した——そのなかには北村の生活に對する多少の反

「居ますか」と言つて、赤木は北村のことを何と言つていいかちよつと考へて「主人は？」とつけ加へた。

「は。只今、お留守でございますが……」

「ぢや、奥さんは。お雪ちやんは」さつきその聲が洩れてゐたと思つて、赤木はあとの一句を加へた。

「は……。あの、どなたさまで？」

「僕、赤木……」

彼がまだ言ひ終らないうちに、突然、襖間が手荒らに明け放された。お雪の華やかな姿がとび出した。

「なあんだ、清吉さんか」と言ふなり「やあ來た！　來た！」と、お雪はまるで少年のやうにわざと頓狂な聲を張り上げながらそそつかしく奥へ歸りながら「姉さん、何してゐるの。一刻も早く御出迎！　好きな人！　珍らしい人！……」

丁寧に取次に出てゐた小女は、半ば呆氣にとられ半ばは間の悪いのを感じながら、ぼんやりとやつぱり手をついたままお雪と赤木とを見くらべた。赤木はさつさと靴をぬいでゐた。お雪はまた出て來てゐた。

「馬鹿ね、みつや。何をぼんやりしてゐるの。うちの兄さんじやないか」

「まあ、騒々しいね！　お雪は。ユリ子が起きるぢやないか。――」となた。「靖吉さんだらう？」子供でも寝かしつけてゐるのか、一番奥の間からお八重の聲がした。お八重は清吉のことを、その弟の靖吉と間違へてゐる。

お雪は叫んだ――

「違ひまあす。赤木清吉君！」

「うそー」

お八重は半信半疑で襖間をあけた――

「あら！」

顏を見合せた瞬間に微笑が波動した。

「そうれ御覽！　どうです」

親愛の笑はお雪にも共通のものであつた。三人は一かたまりになつて階段を上つた。

「わたしはまた、お雪があんまり大騷ぎするから、禎吉さんだとばかり思つて、――聲は聞えてゐたのですけれどね。同じ聲ですわねえ」

「禎吉さんでなくつたつて、清吉さんにだつてたまには大騷ぎもするさ――それぐらゐの義理は知つてゐるつもりだよ、これでも」

「義理を知つての大騷ぎか」

三人は口々にそんなことを喋つた。笑つた。赤木は全く自分の家に對するやうな氣持であつた。離郷した舟乘が故郷の岬を見たやうな心だつた。

彼は車夫に金を拂ふことさへ忘れてゐた。さつきの若い女中が來て、車は待たせて置くのかと言つた時に、赤木がやつとそれに氣がつくと、お八重は女中に蟇口の在處を教へて金を拂はせた。

北村はＹ市へ行つたので、近ごろ始めた活動寫眞製作の仕事のためだが、北村がそれに熱中しきつてゐるらしい事は、お八重の言葉のなかにさへシネリオだのロケイションだのと、その仕事のテックニックが使はれたのでもわかる。九ケ月ほど會はないうちに北村の生活が可なり變化してゐるらしいことを赤木は想像した。さうしていつか北村から受取つた景氣のいい手紙と、それに對する赤木自身の返事とを思ひ出した――そのなかには北村の生活に對する多少の反

感が漂ふてゐた筈だつた………

お八重は赤木とお雪とをそこに殘して下へ降りて行つた。お八重はその夫の第一の友が、思ひがけなく訪問したのを心から喜んでゐた。彼女は自分ではこの客に着せる物を出しながら、女中には今日は休むつもりでゐた風呂へ水を汲み込ませることを急がせた。

赤木は、この家へ來たその時から、恢復しかかつた病人の食慾のやうな劇しい談話慾を感じだした。彼の口は輕くなつて、お雪を相手に、彼が辿つて來た遠い旅の道筋を、——二日ほど前に臺灣から來て、大阪の宿から、故郷へもまだ歸らずに、先づ東京を志して、第一にここへ立寄つた事を告げた——

「……何しろ、お雪ちやんの顏が見たかつたからなあ」

「へ！ お門違ひへ足ですね。知つてますよ——だ。いつの間にかそんなことをいふ義理を覺えたんだよ——淸吉さんまで」

「本當の話をしようか。——金がないからさ。大阪の宿へ歸つては故郷への路費が無い。東京までの汽車賃もどうやら怪しい。ここまでの三等切符がやつとだつたね——それも、宿料のかたに荷物をすつかり大阪へ預けて置いてさ。ここを目ざした第一の原因は、つまり金のいらない宿屋で、しかもそこで旅費を徴發するんだ。——早く北村を捉へて金を借りなけや………東京へ行つて用事があるんだ……」

「美代子さんに逢ひにね」

「うん」赤木の返事は妙に生眞目で重々しかつた。

「ほんとうに早く行つてごらんになるといいわ」お雪は赤木の顏を見ながら、これも案外眞面目だつた。

話題がその妻の美代子の事まで來て赤木も、またお雪も口をつぐんでしまつた。お八重が着物を持つて二階へ上つて來た。

「一たい」赤木は新らしい題目をやつと見つけて言ひ出した「ここの電車は、何分毎にあるんです――僕は一時間も待つたよ」

「あら！ 清吉さん電車で來たの。しようがないよ、田舍者ばかり揃つて」

「何故？」

「今日から、ちやんと汽車が來ますよ、立派にＯまで。――今日は開通祝ひよ。姉さんなんか、うれしがつてユリ子と一緒に停車場見物に行つたんですとさ――田舍者のお揃だね。ほんとうに」

「わたし本當に見に行つたんですよ」お八重はごく素直に子供らしく言つて「電車をそんなにお待ちになつて。おや、一きつと汽車がくるので時間が變つたのね」お八重は言ひながら、仕立直してあつたらしいどてらのしつけ糸をほどいてゐた。それを洗濯した浴衣に重ねながら誰に言ふともなく言つた「このどてらもほんとうに運がいいわ。永いことかかつて昨日出來上つたばかりで外の人なら惜しいのに、赤木さんに着てもらふのは仕合だわ。まるでその積りでこしらへたやうだ。もつとも丈はきつとつんつるてんですよ。北村の長さだから――」

「姉さん。いいかと思つてあんまり歡迎し過ぎると兄さんに云つつけるよ」

「云つつけてごらん。それでやくやうな兄さんなら見込みがあるがね」

お八重の言葉は、赤木にはしみじみと聞かれた。

さつきお八重が命じておいた電報用紙を小女が持つて來て、赤木はお八重のいふがままに、その本文だけ書いてそれ

をお八重に渡すと洋服を脱ぎ捨ててどてらと着かへ出した。お八重はその電報を無言で口を動してよんでゐたが、笑ひ出した――

「これをみれや直ぐ歸りますよ。ね、お雪。ヒサシブリニテカヘリマツ――まるで都々逸だよ」

「ふ、ふふ。姉さんの批評にしちや大出來だつたね」

「をかしい？。」と赤木がいふと、

「いいえ。結構」とお八重は答へた。

みんなの無意味な會話を樂しみながら赤木はすつかり、旅の着物を脱ぎすてた。お八重は、電報の所書をお雪に頼んで、自分は赤木の脫ぎ去るものを順々に疊んで行つた。電報をもつて下りようとする小女を呼びとめて、赤木の汗染みたシヤツやくしや〳〵のハンケチなどを渡してから、その外のものは床脇にあつた押入へきちんとかたした。それから急に、座敷の端近へちやんと座りなほすと、この上もなく鄭重にお辭儀をして久濶を述べ出した。

お雪は無邪氣に吹き出してしまつた「いやだよ、姉さんは。そんな挨拶なんぞもう時効にかかつてゐるわよ。淸吉さんが困つてゐるぢやないの。」

「でもお前、私は忘れてゐたのですもの」

お八重の子供らしさ、その美しさを赤木は久しぶりにまのあたりに見た。その顏をつくづく赤木は見た。去年の暮に、お八重はごく輕微ではあつたが肺病の最初の徵候らしいものを現はしたといふので、北村一家はこの海邊の町へ移つて來たのだが、今日見れば病人らしいやうな氣色はどこにもない。

「奥さん。あなたはずいぶん肥りましたね」

「えゝ、もうみつともない程。それに御飯ならいくらでもたべますわ——お雪に云はれないうちに言つて置くけれど」

「本當！　清吉さん、それやね、そばで見てゐても愛想がつきるのよ。清吉たる者一ぺん、あれを見ておくと大に參考になるね——百年の戀をさますべく有効であります」

「ええ、うるさいな、どうも。不良少年お雪君を十分間沈默させて見たいよ。ね、十分間休憩し給へ。蓄音機だつてレコードを變へる間はだまつてゐるよ」

「私はまた、赤木清吉君の顏色をせめては禎吉君ぐらゐにしてみたいと思ひます」

「よくもまあ、お雪はへらず口の種がつきないものだね。あゝさうさう。さう言へば禎吉さんがいつだつたかお見えになりましたよ」

「ここへ？」

「え。九月にお國からお歸りの時ですわ。お雪が留守だつたのでほんのちよつとお上りになつたきりですけれど、あなたの御噂をしましたわ。私、禎吉さんには初めてだけれどほんとうにおとなしい方ですわね」

「こら／＼。姉さん。係りが違ふよ。姉さんのほめる人は清吉さんぢやないか」

「へえ？」と清吉はお雪には取合はずに言つた「禎吉が來ましたか」。言ひながら、清吉は立つて無意味に部屋を歩き出した。襖間の方を指してお八重の顏を見ながら「書齋ですか」

「え」お八重は立つて襖間をあけてみせた。そこには見覺えのある北村の大きなデスクがあつた。

「で、下は幾間あるんです？」

「玄關とも四間、いや五間ですわ——女中部屋を加へて。茶の間が六疊で、その次にもう一つ六疊ですわ。わたしが出て來た部屋ね。あそこ。狹いけれど不自由はしませんわ。それに冬になるとよく日が當りますよ」

「それはいいな」

「大野さんがいいお家を建てましたわ。御存知？」

「話は聞いてますよ」

「ここの窓を開けると……」言ひながら床の間の隣にある擦ガラスの小窓を開けた「あら、見えないわ。いつもだと山の上に小さく見えるんだけど。赤い屋根なのですよ。」

雨が降り籠めて遠見は利かなかつたし、もうそんな時刻なのか、そろそろ黄昏が近づいて、窓の外にはただ近いあたりの家々と、その庭の樹々とが見えるだけだつた。

「そら」お八重は指さしてみせて「山がぼやんり見えますね。あの邊ですわ。——お天氣だとはつきり見えるのにねえ。一度行つてみませうよ。わたしもまだ一ぺんも行かないのです」

そはかのひとか
うたげのなかに
ひとりありしは

朗らかなソプラノで突然唄ひ出して、今まで不思議に默つてゐたお雪は、男のやうに活潑な動作で、足音も高く階段を下りて行つた。

「靜かないい町だ」

窓から眺めてゐた赤木は、さう言ひながら二枚あるガラス障子の一枚を閉めると、別の一枚をお八重がしめながら言つた。

「わたしこの町を本當に好きですよ」

下ではお雪の聲を中心に、女中たちも雜つて盛な哄笑が起つてゐた。

「ね、赤木さん。お雪にも困つてしまひますね。どうかして少しは落着かないものですかね。ひどくなるばかりですわ」

「駄目ですよ」赤木は思はず力強く言つたが氣がついて、氣輕るに加へた「何しろ北村があんな手にをへない賑やかさを奬勵するのだからなあ」

「……」お八重は思ひ出したやうに手をたたいて女中を呼んだ。出て來たのはさつきの小女ではなくもつと大きな女中だつた。お八重は手もとにあつた火鉢のなかを、火箸でかき廻して「好や、少しお火を拵へておくれ。――夕方になつたら少し寒さうですわね」赤木にもさう言ひながら再びお好に「お湯はもう少しだらうね」

「は、まだもう少しださうでございます。只今、雪子さんが見て下さいました」

「それぢや、湧いたら直ぐ教へてね。――お前たち何だつてあんなに大笑ひをしてゐたの」

女中はただ笑顏になつて、それには答へやうともせずに「はい」とだけ言つて下りて行つた。

赤木はお八重とふたりきりになると、いつもの事だが、話題が非常に窮屈になるのを感じた。お八重の性格そのものは、眞面目ではあるが快活な一面もあるのだから、何もそんな氣むづかしさを相手に要求するわけではなかつたのに、それは寧ろ赤木から出た意識的な態度であつた――

赤木はお八重を今まで心の奥ふかくまであまりに注目しすぎてゐた。この二三年の間、赤木は一刻とてもお八重に就て考へない時刻はなかつた。いや、何もわざわざお八重を考へたのではない。赤木自身を考へることが自づと直ぐにお八重を考へることになつてゐた。その深い仔細に就ては赤木はまだ何人にも打開けたことはない。その年月の間に、赤木はそれを誰かに明したいと切望する瞬間があつた。いかに自尊心に鞭つても、また理智を呼び醒しても彼自身だけではどうしても背負ひきれないのを痛感した。しかもそれを打明けるべき相手はなかつたのである。父と母と弟と唯一の親友と。思へば不思議にも、――ああ、何と不思議にも、彼の心のまはりの人々は、どの人もこの人も、彼の悩みを知るのに不適當な者ばかりであつた。いや、適當の度が超えたのだ。彼等も亦、その同じ流血を知つてゐる、過去に於て又、現在に於て。彼等は清吉にふりかかつたその同じ形の悲惨事に就て、それぞれに各々の断面をその心臓の底に、痕跡として持つてゐる。清吉はその事をいつかうすうす知つてゐた。――それだからもし清吉が何物かを語るとすれば、彼に耳を傾ける前に先づ彼等自身の思ひが強かに、彼等を打つだらう。彼等は清吉を慰め得るどころではない、その苦と恥とを己のうちから呼び起すだらう。救はうにも彼等はみんな當事者なのだ。さうして或者は、清吉を打砕いた責任を彼等の婁こに見出すに相違ない。全く同じ形で行はれた誤失の人生が、三重に、しかも彼の肉體と精神とに於て最も親密なる者たちの間を挿んで、グロテスクな唐草模様（アラベスク）になつて連がり重つて、蔓るといふことに就て、赤木清吉は寧ろ宿命を感じた。また攝理を思つた。また己の尾を咬みながらとぐろを卷いてゐる蛇になつて、この異様な洞のなかに封じ込められに訴へるべき者もないことを歎き叫んだ時に、ふとお八重こそその唯一の人であることが、確實に發見された。しかし

お八重は彼女自身に就ては何も知らないのだ。それが反つて、幸福であるかも知れない。いや、知ると知らないとにかかはらず不幸は全く同じものである。清吉は思つた――自分のこの苦しみはお八重が共有する値打がある。お八重の苦しみを自分が知つてやる。その時清吉は空想のなかで、日ごとにお八重に打明けた。彼の空想のなかでは、彼女は彼の手をとつて、彼の爲めに、しかも彼女自身の爲めに聲を惜まずに泣いた。空想だけが清吉を慰めた。清吉はその頃ひどい神經衰弱に罹つてしまつてゐて、どうかすると今に、お八重が暗のなかではつきり見えて來るのぢやないかとさへ思つた。それほどの空想が清吉をして、何時の間にか、現實のお八重にむかつて戀に似たやうなものを感じさせた。その心持を、赤木は彼女の夫の北村に話した。しかもその因つて來る理由に就ては一言も洩さなかつた。それだけに北村は赤木の氣持をそれほど深くもとらなかつた。けれども赤木は北村さへ本氣にとるなら、北村がそんなに邪險さうにしてゐるお八重とその子のユリ子とを貰ひたいやうな心だつた。赤木はしかし、お八重にそんなことを冗談にもそぶりにも言つたことはなかつた。お峯にさへもともと言はない。それだのにお峯は、今日妙に清吉とお八重とを揶揄するやうな口調をもらす。それともいつものその場かぎりの儲け言を清吉がさう思つて聞くのかも知れないが、もしかすると北村がお峯に何か言つたのかも知れない……。それにしても今日、かうしてお八重を見ることが、久しぶりとは言へこれ程までに樂しからうとは、來てみるまでは判らなかつた………

「美代子さんは御變りもございませんか」

お八重が、默つてゐる赤木に話しかけた。

「さ。無事でせうよ」

「ま。いやな方。御自分の奥さんぢやありませんか。――どうしてまた皆さんがさうなんでせうね。あなたもまるで北

村そつくりですわね」

「…………」

赤木は默つて笑つた――笑に似るやうに心掛けた表情で頰を引きつらせたのだ。赤木が「北村そつくり」だかお八重にそつくりだか。お八重は美代子が赤木にとつて決していい話題ではないことを知らないのだ。何もかもお八重は知らないのだ。赤木が何のために田舎へ歸つたか、それから更に遠く用もない殖民地の島へ旅行を企てたりしたか、その理由をお八重は全く知らないのだ。いや、お八重だけではない何人も知らないのだ。ただ氣まぐれな好奇癖だと思つてもゐよう……

と、手ごろな話題が赤木に浮んだ――

「あの。大野君は時々來ますか」

「それがね、このごろではちつともお見えにならないのですよ。――辰子さんの事があつた時から、北村に何だか惱つてゐらつしやるのですつて」

「辰子さんの事？」

「え、大野さんの奥さんね」

「え、それが一たいどうしたんです」

「あら、まだ御存知なかつたの。大野さんたちの御夫婦は別れたのですよ。――新聞へも出ましたわ、東京のにも大阪のにも。この町のなどは二つともまう一ぱい」

「へえ。さうか。僕はちつとも知らなかつた――新聞なんてものは見ないことにしてゐるものだし……。一たいそれ何時

です」

「まだこの間のことですよ。あのお家の新築祝ひと一緒にもち上つてしまつたのです。お氣の毒でしたわ」

「誰が？──どつちが」

「おふたりとも。……辰子さんに何だかあつたらしいのですわ。辰子さんは後悔していらしつたわ。大野さんのお家から出て、辰子さんはしばらくうちに居らしつたの。ひどいヒステリイで私をつかまへて一日中お泣きなるのでせう。──私ほんとうに困りましたわ。あそこの、さつきの窓のところへ腰をかけては、お家がよく見えると言つて泣くの。別れの紀念館だなんて仰言つて──前からずゐ分喜んでゐらしつたのですよ、お家のことは……」

「姉さん、姉さん。姉さ───ん！」

下から不意に、けたたましいとも言ひたい程の大聲で、お雪がお八重を呼びたてた。

「何？お雪。そんな聲で言はなくともわかるよ。──お風呂？」

「違ふわよ。──ちよつと下りて來て頂戴」

「何だらう。自分で來ればいいのに」お八重はひとり言を云ひながら、「赤木さん、ちよつとごめん下さいね」

お雪は自慢の聲を張り上げて、また唄ひ離してゐる──生々とした彈みに溢れて。

森（もり）よ、木靈（こだま）よ、魑魅（すだま）よ、星よ、

赤木は大野のことを思ひつづけた。彼が自分の生活に沒頭し盡してゐる間に、他にはさまざまな生活がそれぞれに展し、或は轉廻してゐることを今更に知つた。さうしてさほど親しいといふのではないが、古い知人の大野両人にもはひた、なつた。

下へ降りて行つたお八重は、直ぐに引返して二階へ來た。さうして立つたまゝで言つた。

「お雪が今からYへ行くといふのですよ。もしあなたも、東京へおいそぎならお雪と一緒に、いらしつてはどうです。序にYへ御寄りになれば北村はゐますわ」

「え……」赤木はちよつと返答し兼ねてから「お雪ちやんが誘つてくれたのですか」

「いいえ。私が考へたのですわ。美代子さんが御待兼ねだとお察してね。お急ぎなけや、電報も行つてゐるし、北村も今晩のうちには歸りますわ」

「えゝ」赤木は云つた「實は、あんまり東京へは急がないわけがあるんです。」その言ひ方があまり眞面目すぎたと氣がついてつけ加へた「尤も、あなたが追ひ出すなら出て行きませうか」

「あら。いやな方。そんなつもりで言ひやしませんわよ。私はたゞ美代子さんの身になつてみたんです。そんな事をいふなら、こゝにいつまでも御出なさいよ」お八重も笑つてさう言つた。

　暮るるはやき、山の寺、
　鐘はゆるく、誰かつく

唄ひながらやつて來たと思つたら、お雪は部屋へ入りさまに「清吉さん、清吉さん。何してゐるの。行くなら、さつさとなさい！　汽車に間に合はない事よ」

「お雪。赤木さんはこゝで待つよ」お八重は赤木の代りに答へた「東京へは急がないとさ」

「行かないの、それがいいわ。姉さんと待つてゐらつしやい。東京へ急がないなんて、美代子さんをたきつけるから——目と鼻の間まで來てゐながら」

「Yへ行つたら」清吉は、暮れかゝる障子のうす明を背景にして相對して立つたお八重とお雪とのシュレットを凝視しながら、笑ひもせずに言ふのであつた「北村に直ぐ歸るやうに言つて下さい」

「ほんとうに、お雪」とお八重も「兄さんにさう言つてね。お前が着いてから來ても八時には歸れるだらうからねえ」

「え、いいわ。會つたら言つてよ。でも會はないかも知れないわよ。よくつて」

「なぜ。お前どこへ行くの」

「Yへさ。きまつてゐるわ」

「それなら兄さんに會ふぢやないか」

「姉さんてばほんとうに拔けてるよ。あんな兄さんだもの、どこをどう迂路ついてゐるか判るものかね。東京へでも行つてるわよ。Yにゐる程なら電報を見て直ぐ來るわよ。――外ならぬ赤木清吉君の殺し文句ぢやないか。ねえ、清吉さん。何も行つて私が言はなくたつてさ」

「あゝ、それもさうだね」お八重はお人好しらしくさう返事をすると、思ひ出して「お雪。お風呂はどうして」

「知らないわよ。私。お風呂、お風呂つて。そんな番などしないわよ。あ、さうふ。さつき私が顔洗つた時?もう少しだつたわ。もういゝでせう、きつと。清吉さん。東京へ行つたらどこへ行くの。わたしも行つてよ。美代子さんのお家?禎吉さんとこ?ゝのわたしのところへもお寄りなさい。ね。ちや姉さん、行つてくるわよ」

お雪はまるでフオクス・トロツト曲のやうに喋り立てると、別に誰の返事を聞くでもなく潑溂たる身振の序に高價なインデイヤン・ヘイの香をあたりに漂はせながら、もうさつさと下りて行つてしまつた。それにつゞいてお八重も下りた。行きがけにお八重は、仄白い腕を差し延べて電燈のスヰツチをひねつたが、光はまだ來てゐなかつた。

ひとり殘された赤木は、今のさつきまで凝視してゐた有様がまたアフタア・イメーヂになつて彼の頭に殘つてゐるのを見つゞけた――

お八重とお雪と。

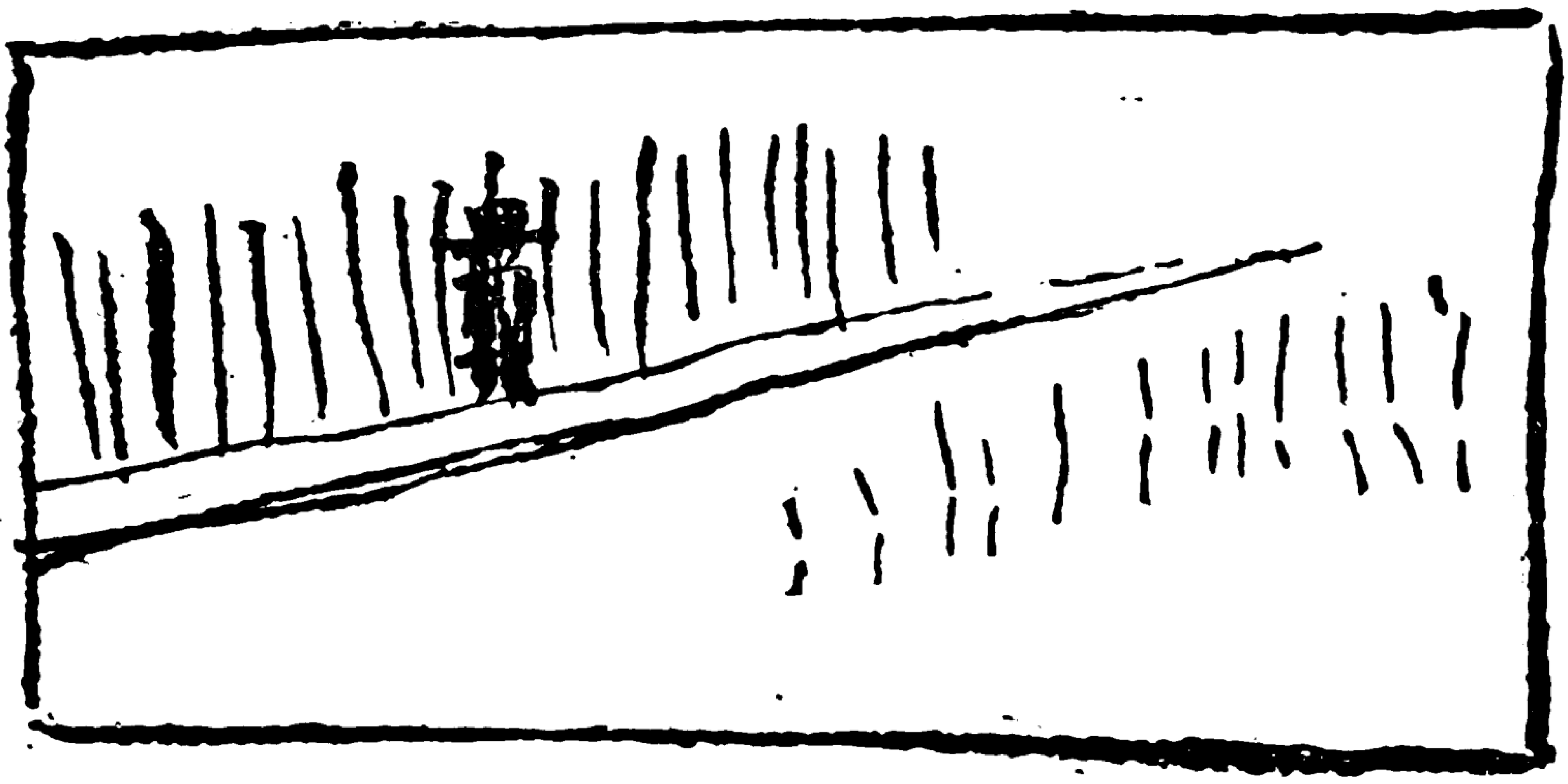
……顏といひ、姿といひ、好みといひ、何から何まで、どこ一つとして反對でないものはない。赤木はふとふたりがよくする表情を思ひ浮べた。お八重はふだんはあたりまへだけれども驚くとか喜びとかの刹那に、その兩方の瞳がそれぞれ目頭に集つて、見開いた目が瞬間的に斜視になる。幼い感じである――今日、始めて赤木を見つけた時にもさうであつた。これに比べると、お雪が何か不服を表す時にそのくつきりと濃い眉毛を思ひ切りしめた顏は、お八重の發作的に無邪氣な美に對して有邪氣ともいふべき一種非常に印象深い感じをのこす。この二つの顏が、どうやらこのふたりの全部のシンボルのやうに赤木には思へる。これほど極端な對照を、平氣で、同じ父と母との間からつくり出して見せる自然なのだ。――赤木はまたしても、自然だの攝理だの宿命だのといふ、彼の胸中にある大小さまざまな迂路をぐるぐると歩き廻つてから、ふと再びもとのお八重とお雪とのところへ歸つて來た。頰と脣とにあくどいほど紅をさしたお雪の顏が浮び、これから北村を思ひ出した。一たい、北村は活動寫眞製作に熱中してゐるといふよりも、お雪を女優として仕事させるフイルムに熱中してゐるといふ方が適切ではなからうかと赤木は思つた。いつか赤木が北村から受取つた手紙には、言外にその意があふれてゐた――といふのは、お雪がその女優になつた事は、他から聞いてゐたのに、北村の手紙にはそれがなかつたのが、いかにもわざとらしかつた。赤木はその手紙を見た時に、北村と最後に會つた時の何でもない對話の一節を思ひ出して、輕い不快を感じた。その時――去年の暮だつたが北村は言つた「一たい、君、AとBとの問題は、（この暗號が北村と赤木との間でよく使はれたが）もう僕にはそれほど問題にすることもないと思つて來た

東洋傚來の女性觀を以てすれば何でもないのさ。こだわるのがいけないのだ——も少し僕に收入でもあれば、何かと今よりはもつといい狀態に導けるのだがな。例へば、まあ、お雪に家を一軒持たせるとかね……」赤木はその時、北村がそんなことを言ひ出すやうならばもう眞劍な問題はないと感じたものだが。今の北村はお八重をこの土地に置きお雪をYに置いて、去年の暮に言つたとほりのやうな氣持で一種の解決を得たと思つてゐるかも知れない。少くとも刻々には安心してゐられるのかも知れない——北村はお八重のお人好しを礎にして怖ろしいところへ奇妙な圓滿を築いたものだ。

赤木は北村は今夜は歸らないものと思つてゐた。——お雪が出て行つた時に、敏感な赤木はすぐにそれを看て取つた。さうしてお八重が、二階へ赤木の夜具に並べて北村のをも用意してゐるのを見て、その無駄なことを信ずると同時に、お八重を氣の毒に思つた。目の前に見てゐる時には慣れてしまつて何とも思はないお雪に對して、憤りを持つた。お雪は今日見れば以前よりももつと増長してゐるやうに感ぜられる。この事に就て、一度北村と是非とも語り合はなければならない。——いや、わざ〳〵ではなくとも自分の方の問題に就て北村に相談することは、やがて自然と北村の反省を要求することにもなるだらう……。

雨だれと波の音とを時々に意識して、赤木は疲れながらたやすくは眠らなかつた。

客の爲めに、また自分の爲めに北村を待つお八重は十二時まで火鉢のそばに起きてゐた。十一時半ごろにK驛をとほる汽車があつて、北村はどうかするとお雪と一緒に自働車で、夜更けに歸ることがあつたからだ。お八重は二度ほど自働車の響きを聞きはしたが、みんなそれは表通りを通るものらしく、いづれは氣まぐれな客が程近い温泉場Hへでも行くのかも知れない。（つゞく）



戯曲

悲しみのオキクルミ

秋田雨雀

「アイヌ族の滅亡」と共にこの一篇をすべての滅亡せる民族に献ずる。必ずしもアイヌ族の傳說に依るものではない。

オキクルミ（アイヌ人間神）
オキクルミ妹
歌傳者
日高アイヌ
日高メノコ
十勝酋長

オキクルミ。私は彼等に大きな太陽を與へた……だが彼等は太陽に背を向けてゐる……彼等は三千年の間大きな凍野の下に壓しつぶされてゐた……彈起きることを

知らなかつた……美しい星が輝き、馨しい四季の花の咲き亂れてゐる他の世界のあることを彼等は知らなかつた……白い乳が垂れ滴つてゐるのに彼等は唇を開くことをしなかつた……明い光が玉のやうに眼瞼の上に落ちて來るのに彼等は眼瞼を開かうともしなかつた……翼の白い渡鳥が彼等の上を樂しげに鳴いて行くのに彼等は眼を醒さうともしなかつた……彼等は暗黒を胸に抱いて厚い氷の下に埋れてゐた……その間に「時」は一瞬のやうに過ぎて行つた……だが、ある日彼等は眼を醒した……彼等は動き出した……彼等は驚いた……彼等は起つた……彼等は自分を見た……彼等は他人を見た、私はその時に言つた……アイヌの子よ、兄弟の手を握れ……爭ふな……離れるな……偽るな……殺すな……産め、創れ……お前達のゐるところにはいつでも大きな太陽が輝いてゐるであらう、と……アイヌの子よ……アイヌカムイの最初の嬰兒達よ……人類の先驅者であり、アイヌカムイの正統の子であるアイヌの子よ……天と地との間で最初の人間の言葉を話せ……最初の生殖を營め……最初の彫刻をしろ……最初の刺繍をしろ……だが、アイヌの子よ……爭ふな……離れるな……殺すな……産め、創れ……お前達のゐるところにはいつでも大きな太陽が輝いてゐるであらう、と……それだに、今彼等は自分の仲間を殺してゐる……仲間を殺すことは自分を殺すことだといふことを知らない……

歌傳者(いつでも爐縁の上手の端に立つてゐる。老いたる盲目の男。)

アコロユピ

ヅラノカイキ

イケスイプンマ

サモロモシリ

モシリパケタ
オカアニケ
シシリムカ
アコロタユン
アエシカルンタス
ヅイペシヨモキ
レイペシヨモキ
ホツケアンマ
チシヤンコロパテタ
アナニケ

わが兄
と共もに
腹立ちして
隣國の
國の　東の端に
われら在り。
シシリムカなる

わが ふるさとの
戀しさ に
幾日も食を取らず
幾日も食を取らず
打臥して
泣きつゝ のみ
われ在り。

歌傳者の歌ひ終へた時、オキクルミ兄弟は歌傳者と同じ謡を合唱す。

（作者——謡はアイヌの墮落を嘆いてアイヌ族を捨てゝ行くオキクルミを歌へる「カムイ、ユカラ」から。譯歌は金田一京助氏に據る。）

オキクルミ妹。白樺の幹に美しい絹……トド松の板に唐草の言葉を彫りつけたアイヌの子供達は今悪魔のやうに荒狂つてゐる……和樂と寛大と無邪氣の中から生れたアイヌの子供は自分で自分の足をへし折り 自分で自分の手をへし折つてゐる……おきゝなさい……泣き叫ぶメノコ達の悲しい聲…… 山の下に小犬のやうに 牡鹿のやうに慄えながらかたまつてる子供達……あの人達は何の爲めに自分の仲間を殺すのでせう？

日沒。
アイヌの悶惱。

メノコの細い泣聲。
オキクルミ兄弟の抱き合
つてゐる黒い影繪。
狐、鹿、兎等の走る
音。
小鳥達の道を失ひ、樹立に
身を打つて落ちて來る音。

歌係者。(荒々しく)。

エンペタプコプ
エンペウプン
チホプニレ
ヤオマプカムイ
イワテククンネ
アルタプクルカ
エホプニ

(大あら波、

大水しぶき、
起ちあがり、
岸打つ大浪は、
丈山の如く、
たかまり
おこり。

歌傳者（オキクルミ兄弟）合唱

クンネヘネ
トカプヘネ
アツイソクルカ
モシリソクルカ
チパツパツ
エンニカイフム
チカゥロトト
モシリカウㇱペ
カイルスイペ

スットモロケ
チコエケノケ
カイニウケシペ
シンリッタタ
アコホピタレ
(夜 も
晝 も
海づらの 上に
島根の 上に
吹き 立ち、
樹々の折るゝ音
轟々と鳴渡り、
地上に生ふる立木の
折れやすきものは
根本より
打摧け、
折れにくきものは

根こそぎに
吹きとばさる。

オキクルミ。だが、捨て難いアイヌの子等……私達の行つてしまつた後、お前達は何を指標に生きて行くだらう……私達はアイヌの胸の中に燃えた最初の火だ……その火が行つてしまつたら、お前達は火のないのを當然だと思ふでもらう……智識や感情や意志を持たなかつた昔のやうに……お前達は再び永い暗黒の氷の下に埋れてしまふであらう……

オキクルミ妹。可愛い〳〵アイヌのメノコ達……私達の方を見て呉れ……働く心と、美しいものを愛する感情と、悪神との戰ひに負けない勇氣とを小さなまんまるい胸に育てゝ來たアイヌのメノコ達……今私達は行く……

オキクルミ。あゝ、捨て難いアイヌの子等……私は今お前達を憎んでゐる……それだのになぜ、私はお前達の國が斯うも捨て被いのか！……

オキクルミ妹。おゝアイヌモシリのすべての美しい景色よ、私の瞳孔の中から失せて呉れ……アイヌメノコのあの美しい聲よ、私の鼓膜から逃げ行つて呉れ……私の胸の垢のやうに何もかも私の身體から振落されて呉れ……私はさつぱりとした氣持でお前達の國を捨てゝ行きたい……

オキクルミ。さやうならアイヌの子等！

オキクルミ妹。さやうなら、アイヌのメノコ達！

オキクルミ
オキクルミ妹 } さやうなら、アイヌモシリ！

オキクルミ兄弟は手を上げ、

悲しげに頭を垂れて去る。

歌傳者のみ舞台の上手に

殘る。

アイヌの鬨聲

樹の枝の折れる音。

足音。

月光。

犬の吠える聲。

メノコの叫聲。

歌傳者（急調に強烈に、）

シネ　イキンネ

カニ　シンク

アエウコチポ
アンノムヅコンナ
ヅリミムセ
コタヌ　マケ
モシル　マケ
エカンナユカラ
(一つらに
金の　神鶴
に相乘じて、
われらがゆく音
鳴りどよみ、
村々　打壞れ、
島根も　打壞れ
むとするが如し。)

歌傳者の歌舞につれて、
アイヌの合唱と足

踏みの音。

日高アイヌの群が山の上に姿を現はす。

一團の中に十勝アイヌの捕虜。

無言。

犬のやうに。

松明。

日高アイヌ。松明を出せ……

日高アイヌ。獲物の顔を照らせ……

日高アイヌ。復讐……復讐……復讐のほか何もないんだ……

日高アイヌ。正義は勝つんだ……

日高アイヌ。然うだ正義は勝つんだ……アイヌカムイは俺れ達を見捨てゝはゐないぞ……

日高アイヌ。松明を照らせ……もつと／＼明くしろ……晝のやうに明くしろ……メノコ達も俺達の獲物を見ろ……

……日高アイヌは何んなに強いか……

日高アイヌに酋長を眞中に押しやる。

十勝アイヌの酋長無言。

メノコ達は慄えながら酋長を覗く。

日高アイヌっ　みんな見ろ………一昨日の朝から三百人の日高アイヌと五十人の日高メノコを殺したのはこの男だ………俺達はアイヌカムイのために、アイヌモシリのために戦争を避けやうとしたのだ………俺達の長老は平和のために何れだけの苦心をしたか知れない………これはみんなもよく知つてるだらう………日高アイヌは決して戦争を好むのではない………日高アイヌはアイヌモシリの平和と幸福のために生れたのだ………オキクルミも照覧あれ………日高アイヌはたゞ正義のために邪悪なる者と戦つたのだ………こいつだ、アイヌモシリの平和を攪乱したのは………こいつが俺達の長老や俺達の兄妹を殺したのだ………昨日の夕方、この男は何をしたかみんな知つてゐるか?………メノコ達、昨日の夕方この男は、俺達の心臓でもあり俺達の瞳でもあつたあの射手を惨殺しにしたのだ………然も、メノコ達この男は十勝メノコ達の面前で俺達のあの勇敢な射手を惨殺したのだ………

メノコ達は叫聲を立てる。

この男の眼を見ろ………この眼の中に俺達の長老や俺達の兄弟達の最後の姿が寫つたのだ………例へ祖國の爲めに死ぬ勇士でも決して死を怖れないものではない………俺達の長老や兄弟達は何んなに俺達のことを憶ひ出したであらう………親のあるものはその親を………子供のあるものはその子供を………妻のあるものはその妻を………

日高アイヌは叫聲を立てる。

メノコ達は泣く。

日高アイヌ。理窟はもう要らない…………そいつをやつつけちまへ…………

日高アイヌ。然うだ。……早くやつつけちまへ………

日高アイヌ、そいつを嬲殺しにしろ………

日高アイヌ。出來るだけ殘酷に…… 出來るだけゆつくりと……

日高アイヌ。然うだ……その男の頭の毛を一本づゝ拔きとつてやれ……

日高アイヌ。足の爪先きから頭の天邊まで生皮を剝いてやれ……

日高アイヌ。陽物を切斷しろ……

日高アイヌ。兩眼を刳り取れ……

日高アイヌの一人は酋長の顔を足蹴にする。他のアイヌ達も同じ動作を繰返へす

十勝酋長。（苦痛の中から、）兄弟達！……俺れはお前達を怖んではゐない…… もしお前達が俺れを憎いと思ふなら俺れを早く殺して呉れ…… 昨日俺れがお前達の兄弟を殺した時、あの男はやつぱり俺れが今言つた言葉と同じ意味のことを

言つた……兄弟達、俺れはもう弱つてゐる……お前達に殺される前に俺れは死んでしまふかも知れない……同じアイヌモシリの中に生れ、同じアイヌの傳統の中に生きてゐたといふ好しみだ、少しでもお前達の心の中に殘つてゐるならば……俺れの言ふことを聽いて呉れ……

日高アイヌ。聽く必要はない……この老耄に騙されるな……

日高アイヌ。好しみとは何んだ？……お前にそれを言ふ勇氣があるのか？……

日高アイヌ。聽いてやれ……日高アイヌはいつでも人間だ……

日高アイヌ。然らば、この老耄が何んなことをほざくか聽いてやれ……

酋長（嬉しげに）若い兄弟達……よく許して呉れた……お前達は何も知らないのだ……昨日俺れはお前達の兄弟を殺す前に、俺れ達が何んな話をしたかお前達には解つてゐないのだ……

聽いて呉れ……

お前達の兄弟は言つた。

「俺は今お前に對する憎しみを持つてゐない……俺はお前を可愛相だとさへ思つてゐる……お前は何も知らないただ……お前はやがて俺と同じ運命に從ふだらう……」

俺れはあの男の顏をよく記憶えてゐる……

その時俺れは言つた。

「俺達は完全に勝つてゐるのだ……俺達は最後の、そして永遠の平和をアイヌ民族の上に持つて來たのだ……」

兄弟達聽いて呉れ……お前達の兄弟はその時何と言つたか……

「ニシパ……最後の、永遠の平和と言つたね……ニシパ、お前は日高アイヌが十勝アイヌが五十年間日高アイヌを征服してゐたのを知らないのか……」

お前達の兄弟は言葉を續けて言つた。

「それならばお前の言ふ最後の永遠の平和とは何處にあるのだ？……俺は今お前を憎んではゐない……たゞお前を哀んでゐる……」

兄弟達聽いて呉れ……

「俺は今お前を憎んではゐない……たゞお前を哀んでゐる……」

とお前達の兄弟が俺れに言つた。……俺れは同じ言葉を複數にしてお前達に返へすだけだ……俺れの言葉の意味が解つたら受取つて呉れ……俺れがお前達の兄弟の胸を刺した時、あの男は、

「もつと深く……もつと深く……もつと深く……」

と叫んで死んで行つた……俺れはその意味が今ほんとうに解つた……やがてお前達にも解る時が來やう……

日高アイヌ。(言葉を遮ぎり、早口に。)みんなこの老爺の言葉を聽いたか？……この男は俺達にもその言葉の意味が解る時が來ると言つた……この男は十勝アイヌの復讐の日を豫想してゐる……俺れ達は勝つたのだ……俺達こそ完全に勝つたのだ……永遠に、最後に勝つたのだ……日高アイヌはこの使命のために生れたのだ……

日高アイヌ。然うだ、その老爺に騙されるな……祖國のために死んだ兄妹達のことを懐へ……

日高アイヌ。迫害されたる者の怒りは天まで屆かせるがいゝ……全精神を復讐の石で磨け……

日高アイヌ。メノコ達、お前達の親兄弟、夫の仇敵を刺せ……この刀劍で……この刀劍で……

メノコ達は激動を初める。

メノコ達、何を逡巡ふのだ……太股を出してアイヌに抱かれるばかりがメノコの能ぢやないぞ……さあ、そのお前達の持つてゐるマキリでもいゝ……この老爺の赤鼻を削いでやれ……

メノコ達は後退りする。

日高アイヌ。メノコ達もアイヌモシリのために働けるといふ最初の證據だ……

日高アイヌ。メノコも亦た戰爭に參加し得るといふ生きた證據だ……

日高アイヌ。女性の權利のために……

日高アイヌ。女性の地位のために……

日高アイヌ。女性の利益のために……

メノコ達益々後退りする。

アイヌ達は激動を初める。

一人のアイヌは突然進み出て十勝酋長の眼を刺す。

アイヌ達は勇躍する。

メノコ達は一齊に叫ぶ。

アイヌ達は酋長の上に殺到す。

日高アイヌ。刺せ……突け……刳れ……切れ……ずたずたに切れ……

アイヌ達は酋長の死骸の周圍を輪舞する。

歌傳者
アイヌ達 } 合唱

アウコツイマ
シアリキキ
シリキアイネ
サクパイワンパ
マタパイワンパ
イマカケタ
アラマンカムイ
チタタ　ケヱ

イワン　ポクナシリ
テイネ　モシリ
アコオテレケ
アン　ライ　カムイ
イノツオロケ
チホプニレ
アエラムシンネ
(われら久しく
努めた、かふ。
たゝかひ〳〵て
夏　六　年
冬　六　年
さて後に
大惡神が
切斷せられし屍、
六重の冥府
陰濕の國へ

われ蹴たふし、
歩く　死にたる神の
死屍
立ちゆきて
わが心始めて安し。

メノコ、(突然呼ぶ。)オキクルミ！……………

　メノコ達はアイヌ達から離れその女の方へ行く。

メノコ、オキクルミ！………
メノコ。オキクルミ！………
メノコ。オキクルミ！………
メノコ。オキクルミ！……

　メノコ達は兩手を擧げて泣きながら輪舞する。

歌條者
日高アイヌ ―― 合唱

アン　ライ　カムイ
イノヅオロケ
チホプニレ
アエラムシンネ
…………………
…………………
メノコ。オキクルミ！
メノコ。オキクルミ！
メノコ。オキクルミ！●
メノコ。オキクルミ！

二つの輪舞は全く關係なしに
續く
松明は消える●
遠く獸の聲。

—森—

——La 11an de majo, 1925——



蘇芳の花

中條百合子

一

空が晴れ渡つて居た。風が、艶の出て來た椿の葉をゆるがして吹いた。地面は昨夜の雨でしめり、落葉がこびりついて居た。

手入れをされたことのない山吹のもしや〳〵した叢、野生の山椒、小枝の折れ等が雜然と重りあつて居る下から、これも野生の杜若が勢よくさつと丈の揃つた芽を出して居た。その四邊は日かげなのに、芽生えのところだけ、特別日光がさすかと思ふ程明るく青々美しく見えた。――暖い。――伸子は日向で眼を細くし乍ら、その明暗を眺めた。野放しな棘つぽい枝、亂暴に房々萌え立つた福壽草の若葉などの間から、不思議な烈しい感覺が彼女の全身に迫つて來た。伸子は、喉につゝかけて來るやうなときめきを感じ、思はず力一杯のびをした。袖口からぬけ出した腕が白く光つて震へた。彼女は、拳固を握つたまゝ、その腕を續けざまにぐるり〳〵と振り廻した。

風が又渡つた。——細い眞竹の藪がさや〳〵と鳴つた。仲子は默てフレイムの處に行つた。離れの緣側に向つて、大きな簾の保が熱心に何かやつて居る。近より乍ら、仲子は、

「何をして居るの」

と聲をかけた。

「——來たの」

保は、掻上げのあどけない生毛の渦卷を見せ、覗き込んで居る箱から目もはなさず應へた。

「何なの」

仲子は首を延して、弟の肩越しに緣側に置いてあるものを見た。一尺に三尺位の苗箱であつた。細かい細かい黑土を見事にならした處に、彼女には何だか見分けのつかない弱々しい四分程の芽生えが、ひよろり、ひよろりと生えて居る。

「何の芽生え？……………ひどく貧相らしいわね、それでいゝの」

保は

「ちつとも好かあないさ」

と、さも當惑さうな表情で仲子を見た。

「とてもシクラメンの實生なんか、專門家だつてさう易々ちやあないのさ。だから僕なんか下手なのにあたりまへなんだけれど……………悲觀しちやうなあ」

仲子は、笑ひ出した。

「どうして其那に悲觀するの、これでも生えたぢやないの兎に角。——段々大きくなるでせう？」

「——解らないさ、其あ腐り易いんだもの。芽を出すに都合よく暖めると、すぐ泥に黴が生えちやふし。困つたことに、ほら斯ういふの、ね、變に勢がないでせう」

保は、箱の隅の凋れかけた一本の芽を指さした。

「何故斯うなるか原因が判らないの。泥や何か本に書いてある通りに仕たんだけれど」

保は十五才であつた。少さい時から園藝の眞似が好きであつた。彼は冬ぢゆう、この箱を椽側に持ち込んで火鉢を入れたり、硝子の蓋をしたりして、大事に發芽を樂しんで居たのであつた。思ひがけず相手が出來たので、保は盛にシクラメンの培養のむづかしさを説明し始めた。此は生えても數年後でなければ花を持たない事、濕度と温度の調節が蘭栽培に劣らず困難なこと。暇さへあると、抱へて歩いて居る園藝の本から、よくも覺え込んだ知識を、雄辯に、而も處々で子供らしくごちやごちやになり乍ら話すのだ。

「ね、だから温室なしぢやあ出來ないの、あたりまへさ。——こないだ僕の知らないうち、犬が足を突込んで隨分根こぎにしたりしたんだもの」

仲子は愛情をもつて、短い受け答へをした。けれども、正直に云ふと、仲子は保の云ふ事を半分も聽いて居なかつた。彼女の心持は朝から妙に均衡を失つて居た。注意が散漫になつて、苦しいので部屋を出て來たのであつた。庭でも歩いたら落付くかと思つたが、駄目さうであつた。三月下旬の庭は、蕀きや芽生えや何處からか來て臭覺を探る樹液のほのかな香に滿ち充ちて居る。生動する雰圍氣の裡で、仲子は却つて自分の重い、激しい、同時に懶い心持が募るのを感じた。四邊で、草から樹から夜も休まず發育させてゆく盲目的な力が自分まで卷き込みさうに思はれるのだ。

仲子は、離れの横をぐるりと風呂場の裏に廻つた、狭い道に一杯石炭殻が敷いてある。下駄の下でザクリ、ザクリと大きな音がした。其音をきゝつけて、硝子の彼方から母の聲がした。

「だれ？　其處に行くのは」

「私」

「おやさう」

ガラリと勢よく窓が開き、母の横から、つや子が甘えた聲で

「お姉ちやまあ」

と云ひ乍ら首を出した。多計代は、外から縞の羽織の一部だけ見える處で顔か髪かをいぢり乍ら訊いた。

「保さんがさつきから見えないやうだが、裏かい？」

「フレイムの處で頻りに悲觀して居るわ、シクラメンが腐るつて――」

つや子が

「ね、お母ちやま、いゝでせう？　大丈夫僕もういゝのよ、ねえ、お母ちやま！」

と云ふのが聞えた。つや子は、上に兄ばかりなので、自分のことを僕、僕と云ふのだ。母は、五月蠅さうに答へた。

「駄目ですよ、又細谷さんを呼ぶようになりますよ」

「――何なの、何を駄々こねてるの」

「外へ出たいつて云ふのさ。まだ起きて二日にしきやならないのに外へ出ると又すぐごほん、ごほんになつて仕舞ふのに――仕様のない喘息さん」

仲子は、又ぶら〳〵歩いて女中部屋の傍に出た。今までまるで心付かなかつた一本の枇杷が、六尺ばかりに延びて内庭境の垣根の外に生えて居るのを見つけた。竹垣の下に前の様が一杯生えて居る。その中から、雨樋をよけ、すつと斜に育つて居るのだ。いつか捨てた種から生え出したのに違ひない。珍しく思ひ、仲子は近よつて念入りにその枇杷を見た。まだ若い幹の光つた肌色、強い古葉の上の方に、淡色天鵞絨で揃へたやうな若芽がかたまつて萌え出て居る様子。凝つと眺めて居るうちに、仲子は妙な心持になつて來た。二つの眼は確に枇杷を視て居る。殆ど執念深い程視點を動かさず凝視して居るのに、肝心の心は、ぼうと霞んで何も纏つた印象を捕へない。はつと氣がつくと自分が何處に佇んで居るか、其さへ咄嗟には解り兼るやうな放心がいつの間にか擴つて居るのだ。仲子は、不安に腹立たしく成つて來た。彼女は、荒つぽく枇杷の前から動いた。後が、女中部屋の格子窓になつて居た。障子が半分開け放され、女中がさし向ひで縫物をして居るのが見えた。明るい、途絶えたばかりの話聲がまだ何處かに漂つて居さうな裡で、彼女達は二人とも同じ布地を縫つて居た。焦茶地に黒で細かい絣のある銘仙男物の着物と羽織。仲子は、其を見ると制して居ろ感情が一時にその縫物に向つて迸るやうな動搖を感じた。着物は佃のであつた。彼が歸つたら着るやうに、縫つて居るのだ。――仲子の心持は、一層手に負へないものに成つた。彼女は、兩手を年寄のやうに背後に組み合はせ、むづかしい顔つきで客間の庭へ曲つた。

四月三四日に佃が歸ると決つてから、仲子の感情は、少し病的になつた。去年十二月に彼女自身が歸つて來てから三月まで、仲子は勿論佃の歸る時を待つて居た。會ひたく、戀しく、手紙など幾枚書いても、滿足に心持は書き盡せない焦燥を感じる時が多かつた。けれども、如何那に騷いだところで、彼の仕事に一段落つかなければ、歸りたくても歸れない事情なのだといふ諦めが、一種の支へとなつて居た。彼女は比較的平靜に、自分を保つて居られたのであつた。と

ところが、三月十九日に、佃の船が、十幾年振りかで故國に戻る彼を載せて太平洋を此方に向つて進み出してから、仲子はすつかり落付を失つた。毎日毎日が云ひようなく退屈なまどろこしいものに成つた。彼女は、自分の待ち遠しさを紛らさうとして、一日に幾度も庭を歩き廻つた。長いソナタの練習を始めた。けれども、其等が皆遣方ない只氣まぎらしい方便だと思ふと、何の興味もなくなり、却つて壓しつけられた待ち遠しさが盛り返すのであつた。若し仲子に小遣ひが澤山あり、其厄介な毎日を外に出ては佃の爲に何か買物でも出來たら、如何那に助つたどらう。生憎、仲子は其時貧乏であつた。彼の爲に、一組の着物、上靴、下着等しか調へられなかつた。上靴は、質こそ悪くはない英國製ではあつたが、其だけの買物では、どんなに丸善の店頭で暇を潰しても、一時間と費しようない。

「私、いろ〳〵買ひたいものがあるのよ、お金を頂戴な」

と、兩親に云ふ事は出來なかつた。思ふ存分賑やかな待ち設けも出來ない境遇は、仲子の感情に鋭い痛みのやうな熱を加へた。彼は體と幾何かの書籍とノウトだけで、兎に角佐々の家へ歸つて來るのであつた。

四月三日が近づくにつれ、仲子は、ひどく急いで何處かに行かうとする時、屢々襲はれる錯覺めいた氣持になつた。急いで、急いで、やつと目ざす家の門が見え始めると、如何ういふ工合か、一段足が鈍つて、前に進ます、却つて一歩で半歩も後にするやうに感じる、それとよく似た苦しさが憑いた。

二

二日は日曜日であつた。仲子は十時過に目を醒した。瞼に朝の光線を感じるや否や、彼女の半醒の意識の上を、愈々今日一日、と云ふ考へが、はつきり、のろく通り過た。彼女は、ちつとも早く起き出さうとはしなかつた。何ケか云

へば全然起きたくなかつた。彼女は、家の者に顔を見られるのがいやであつた。この待ち遠しさが、顔に現れて居ない筈はない。出來るなら、此儘明日になつて欲しい位なのであつた。

卅分許り經つてから、仲子は部屋を出た。陽氣な保の聲と子供の玩具自働車のコト／＼云ふあどけない車輪の音が、庭でした。

「駄目よ、駄目よ君、ハンドルが其ぢやあ逆よ」

「僕――木戸の方へ曲るのよお兄ちやま」

「それだからさ、此方ぢやないの、ほら」

「ああ、なあんだ」

コト／＼ コト／＼。段々遠くの音をきゝ乍ら仲子は身仕度をした。彼女は、食事部屋に行つた。卓子の上には仲子の分だけ食器が出て居た。多計代は、菓子折の水引を解いて居た。

「――隨分御悠くりだつたね、皆先にすんでしまひましたよ」

「どうぞ。おそいんだから……父樣は？お客樣？」

「お客樣にも何にも、今朝はお氣の毒さ、起き拔けから續けさまだもの、……矢張り家に被居るとね、お體がなんのたそくにも成らないさ」

多計代は、急に思ひ出したやうにつけ足した。

「さうさう、起きたら直ぐ見せようと思つて居て……電報が來たよさつき」

「電報？ どつから？」

仲子は、まるで心當りのない氣がした。

「船からちらしいよ」

「——何だらう……何處？」

「今其處に在つたんだのに……」

仲子は、胸騒ぎを感じ乍ら、其邊を探した。決して其那ことのあらう筈はないのに、何か不吉な事でも起つたのではあるまいかと云ふ危惧が閃いた。

「何からでせう？ 名があつた？」

「勿論さうだらう。着く時間を知らせて來たに違ひないよ」

電報は、時事漫畫の下から出て來た。發信人のツクダと云ふ文字を見て、仲子は幾分安心した。彼女は封を開いた。二カゴゴニウコウとある。仲子は、電文を信じられず、頻りに瞬をした。

「二日——今日は二日だわね」

「さうさ」

「變だわ……二日午後入港とあるんだけれど……」

時計を見、仲子は一どに急しい、困つた心持になつた。午後といふだけでは、漠然として居、一時か六時か判明しない。午後でも早い午後なら、直ぐこれから出かけなければ間に合ふまい。

「私、郵船に訊いて見るわ。念の爲。——明日に違ひなかつたのに」

仲子は、郵船會社に電話をかけた。そして、コレア丸は、いつ入港するかを尋ねた。若い、ぞんざいな事務員の聲が

答へた。

「今日入港します」

「何時頃？　夕方ですか」

「いゝや早いですよ、もう港外に居るでせう。早くお迎なら行かないと駄目ですよ」

仲子は、妙な顔で電話口から戻つて來た。

「――矢張り今日なんですつて……」

「何だらうその顔は」

多計代は、立つて居る仲子を見上げて笑つた。

「ぼんやり仕て居ちやあいけまい、行くなら行くで父樣に申上るなりなんなりおしな、」

仲子は、客間に行つた。彼女は橫濱へ、父にも一緒に來て貰ふ事に決めて居たのであつた。部屋に入り、着物を着換へたり、帶をしめたりし乍ら、仲子は、どうも本氣にされない、不意打ちの氣がした。例へ、如何に不意打ちであるにもせよ、彼程待つて居た彼が、一分でも早く着くなら、飛び立つ程も嬉しい筈なのに――。彼が到頭歸つて來る――その彼さへ、見ないうちは此心にある彼と何か異ひさうな氣がするのだ。仲子は、遨しい頭に昔の或曉方の光景を思ひ出した。其朝、父が英國から歸朝するといふので、九つの仲子は夜眠らなかつた。吊ランプの下に鏡台を出し、髮を結ふ母の足から團扇で蚊を追ひ乍ら、彼女の樣子が平常と違つてこわいのに恐怖を感じた覺えがある。――仲子は今になつて、當時の母の感情が理解される氣がした。

櫻木町行の電車はすいて居た。仲子と父との他に、外國商會に勤めて居るらしい中年の氣取つた男と、卅二三の夫人、

あと目立たない三人の男が居る許りであつた。ふつくりした紺色の坐席の片側に暖い日光を受け乍ら、電車は單調にカタ、カタ、と搖れて行く。じめ〳〵した田圃の眞中に建つて居る工場、赤い巨大なタンクと海の遠い水平線の色。東京と横濱の間を繫ぐ雜然とした風景に晴やかな太陽が輝いて居る。溝川に春らしい青溪が見えた。佐々は、衣嚢から小さいノウトを出して見始めた。暫くして伸子は何故ともなく小さい聲で訊いた。

「何時？」

「――さあまだ二時位なものだらう」

彼は、時計を二人の間に出した。

「ほう、十分過て居る……案外東京驛までにかかつたね」

電車は大森の先を走つて居た。佐々は、人さし指を頁の間に挾み、栞がはりにしたノウトで、輕く外套にくるまれた膝を叩き乍ら窓外を眺めて居たが、伸子の方に體を捩ち向け、半分ふざけのやうな情愛の深い笑顔で呼いた。

「――餘り亢奮しちやあいけませんよ、人が居るから……」

彼は體を自然な位置に戻し乍ら稍高い聲で續けた。

「佃君にも同情すべきさ、お前に上氣せられては參るからね」

「いや、父樣つたら」

彼等は櫻木町から俥に乘つた。亂暴な埠頭の俥夫が、胸をのめらせ、支那の苦力のやうに叫び乍ら驅け出した。

コレア丸は丁度岸壁に横づけに成つたばかりの處であつた。ガングボードをとりつける爲、コレア丸の水夫と大聲で合圖を喚び交し乍ら、數人の男が石疊の上で車輪付階段を押して居た。低いところに暫く出迎へ人と甲板上の船客との

間には、感動の籠つた、求め合ひの混雑が起つた。仲子は、父の腕を執り、ずん〳〵人波を分けて歩いた。上甲板の欄干に沿ふてぴつしり並んだ夥しい顔の叢の中から、佃を見つけようとし乍ら。

然し、顔の數は餘り澤山だ。そして、遠い。重り合ひ、押し合ひ、帽子や外套の色にまぎれて、とても一つ一つは満足に見えない。其處此處で、迎へに出た相手の人々を見つけたと見え、嬉しさうに叫んで帽子を振る男や、辭儀をして居る婦人がある。仲子は悲しくなり

「お見えになつて？　お見えになつて？」

と、度々父に訊いた。

「どうも何しろこの人だからね。——此那ごた〳〵の中ぢやあ向ふからも見難くからう、少しすいた處へ出て見ようぢやあないか、佃君の方で見つければ合圖するだらう」

彼等は、前へ前へと押し出した人なだれをよけて、税關の倉庫近く立つた。視て居ると、上甲板の奥から短い段を降りて船首の中甲板に出て來た一人の男がある。黒い外套に山高帽の男だ。仲子は覺えず右手をあげ、頭の上で熱心に振り動し乍ら、早口で父に告げた。

「わかつてよ父様！　あすこ、あの黒いの」

向ふでも父娘を見つけた。彼は帽子をとつて、其を大きくゆるやかに打ち振つた。其に應へ、更に強く、更に熱心に手を振り乍ら、仲子は胸を緊めつけられるやうな切迫した心持で涙ぐんだ。

三

自働車が、石垣について坂の角を曲つた。家までもう五分であつた。父と佃との間に挾まれて揺れ乍ら、伸子は家が近づくに連れ漠然とした懸念を感じた。初對面の佃と母とは、互に如何那印象を與へ合ふであらうか。伸子は、つまらない事だが佃の顔色が冴えないのも少し心配であつた。彼が話下手で、自分から暢やかに話題を提供する質でないのも心配であつた。母は、自分達父子が横濱に行つてから、留守中一人で、恐らく種々佃といふ男について、聲や體つきまで想像を廻して居たに違ひない。潑溂とした。話すきな、丈夫さが爪先まで輝き出して居るやうな青年を好む彼女に、佃は如何う映るだらう。佃も神經質だ。先から打ちとけて來ない人には、とても自分から隔意なく振舞へない。――どうか工合よくこの會見がゆきますやうに！　自働車が玄關に止つた時、伸子は聲を出して祈りたい程強くこの願ひを感じた。

玄關には、改まつて書生や女中がちやんと並んで出迎へた。佐々は、帽子を女中に渡し乍ら幾らかぎごちない空氣を拂ふやうに氣輕く云つた。

「さあ、君も靴をぬがされますよ――隨分久しぶりでせう？　此那ことは。日本ではまだ／＼どこまでも靴とは行かないから、當分厄介ですよ」

佃は、にこりともせず答へた。

「かまひません、わかつて居りますから」伸子は、先に式台へ上り乍ら、この聲や調子を聞き困つたと思つた。彼女は彼の心に向つて合圖のスヰツチでも押すやうに力を入れ「堅くならずに。樂に！　自然にして居て！」と念じた。洛間では、多計代が入口に近い椅子の前に立つて彼等を迎へた。伸子は眞先に行つて

「ただ今」

と挨拶した。そして、續いて來た佃を母に紹介した。佐々が傍から其を扶けた。

「妻です。——佃君、佃君には先も話した通りいろ〳〵お世話になりましたよ」

「さうだそうでございますね」

多計代は、重々しい威嚴ある樣子で云つた。

「今度は思ひがけない御縁でおめにかゝることになりました御無事で何よりでした」

佃は、多計代の改まつた應待ぶりを適當に受け切れず、ちぐはぐに、言葉足らずに窮屈さうに答へた。

「お父様には大變お世話になりましたどうぞよろしく。」

「まあ其處にでもかけ給へ。……さぞ草臥れたでせう。何しろ旅行は氣が疲れるからね……其に佃君は」

佐々は、妻に云ひかけた。

「大部船に弱いさうで、半分以上寢て來られたのださうだ」

「まあまあそれは」

當人から何か言葉を期待するやうに彼女は佃の方を見た。佃は、椅子の兩腕に肱をかけ、その手を胸の前方で組み、——

多計代を見て頷くやうにし乍ら

「もう大丈夫でございます」

と云つた。伸子は、父の椅子の背にもたれるやうにして立ち、三人を眺めて居た。彼女は此時、はつきり母の不滿を感じた。彼女が、佃に對して、如何いふ風に出てよいものか迷つてゐたのは、入つて來た時、彼女が立つて居た樣子で判つて居た。佃を尊敬し或間隔を置いてものを云ふべきか、伸子のつれ合ひとし、碎けて樂に取扱つてよい人間か、彼女

は二度の短い應待で試みたらしく思はれた。それが　れとも定められないうちに、彼女は心持の上で、舌で云へば味のやうに、何かそぐはないものを佃から感じた。——さもなければ、彼女は何處にあゝ氣ぜはしく、時々、奇麗な白足袋の鞘に入つた左足の爪先を動す必要があらう。伸子は、原因のよくわかる其癖を見ないようにして父に云つた。

「父様お召かへになつてはいかが？　本當に御苦勞様でございました。——今日はね。」

伸子は佃に説明した。

「私が大寝坊をした處へ電報が來たのよ。だから慌てたと云つたらないの。父様だつて不意の召集よ、ね」

「あゝ。——然し日曜で結構だつた。——他の日は無茶に忙しくてね。君なんぞも當分餘程氣をつけないと神經衰弱にかゝりますよ。外國は一般が規則だつて居るが、此方はシステムも、プリンシプルもあつたものぢやあない。盲滅法ごた〳〵です。——まあ家にかへつた積りで暫くはのんびりすることですよ」

「有難うございます。いろ〳〵御面倒になつて………」

風呂場に佃を案内して伸子が戻ると、多計代は、客間の入口に立つたまゝ不安な少し亢奮した顔付で良人と佃に何か話して居た。佐々は入れ違ひに書齋に去つた。多計代は伸子に警告するやうに云つた。

「佃さんといふ人はいつも彼那顔色かへ？——たゞの色ぢやないよあれは」

伸子は、餘り自分の豫想が當つたので思はず無邪氣に笑ひ出した。

「船に醉ひつゞけて居たからよ、可哀想に——勿論『林檎のやうな顔』は、いつだつてして居はしないけれども」

「——永く外國に居た人といふのはあんなものなのだらうかね………變だね何だか——挨拶もなみに出來ないやうでさ」

伸子は、輕く紛した。

「勝手が違ふからぢやあないこと――馴れない故もあるわねきつと」

伸子は前から、相當な年頃の弟や、小さい妹に佃をどんな工合に引合はせたものかと、困難に思つて居た。佃が手や顔を洗つて來、果物や紅茶が卓子に出た時、彼女は

「みんな被來い。お茶よー」

と呼んだ。三人一どに來た。伸子は

「和一郎さん、保さん、つや子ちやん」

と順ぐり佃に紹介した。彼女は、佃については何も云はなかつた。彼等は、人を見るのこそ始めてだが、佃といふ名をも幾度もきいて居、どういふ關係かも飲込んで居るのを伸子は知つてゐた。佃は、友禪の被布を着、もや／＼したおかつぱで含羞んで居るつや子に優しく笑つて兩手を差出した。

「いらつしやい」

「さあ行つてだつこしていたゞきなさい」

つや子は、皆に笑ひ乍ら見られるので、益々極りわるく佃の方に行かうとはせず

「お姉ちやま」

と伸子にからみついた。幼いつや子が佃の膝に行くか行かないか、冗談のやうな眞劍なやうな注意で皆が見守つて居るのを伸子は感じた。彼女は、つや子が佃になついで欲しかつた。

「どうしたの？　つや子ちやん、だつこして御覧なさい。――そら／＼お姉ちやまごと動き出したぞ……」

伸子は、小猿のやうにつや子を膝の上にからみつけたまゝ、もく／＼佃の方にいざり出した。つや子は　急にぎつし

り両手で仲子の頸つたまにしがみついた。そして、息もせず體ちゆうを強ばらせ力一杯小さな足を疊に踏張つて抵抗した。肩に顔を伏せて居るので見えはしないが、いづれ眞赫に汗ばんで、わつと泣き出す一歩手前に相異ない。可哀さうになり、仲子は動くのをやめた。

「——ちやおやめ! 今日はおあづけ、ね」

「この子は妙な子でしてね、つい去年あたりまで豆腐は可怖がる、眞綿はこわがる、親父の私まで嫌がられたので閉口しましたよ」

すると、つや子が、皆にくるりと背を向け、仲子に抱かれたまゝ仔細らしく

「キヤンムシも」

と小聲でつけ足した。大笑ひになつた。キヤンムシは、神主のつや子語である。

十時頃女中が

「お床はどう致したらよろしうございませう」と訊きに來た。

「さあ……」

多計代は仲子を見た。

「お前の部屋でいゝんだらう」

「いゝわ」

「ちやあ、いつものやうに——」

「あの、おかけものや何かはどれに致しますのでせうか」

多計代は、彼女の場所から動かず、當然それは仲子のすべき事だといふ風に答へた。

「さあ——何かあるだらう……仲ちやん、お前行つて見てやらないぢやあ判りませんよ」

仲子は、默つて女中の先に立ち納戸に行つた。戸棚をあけさせた。

「それ……その絣のと八丈の」

女中が、夜具を運び去ると、仲子は洗面所に行つた。電燈をつけ、手のひらで髪を撫で上げ乍ら、彼女は寂しいやうな、滅入つたやうな心持を感じた。これが、彼那に待ちわびたる彼を迎へた心持であらうか。周りに人が多すぎ、氣疲れがし、仲子は有頂天な悦びより寧ろ憂鬱を感じた。彼女は電氣を消した。そして洗面所を出た。其時、大きな音を立てゝ、彼方の部屋の扉が開いた。佃が、半分體を廊下に出し、うつむいて上靴を穿いて居るのが仲子の處から見えた。

「いゝえ、一人でわかります——さつきも參りましたから……え？　大丈夫です……」

薄暗い廊下の端れに立ち、彼の樣子を見、問答をきゝ、仲子は俄に活々眼を耀やかせた。佃は、まるで仲子が其處に居るのを透視でもしたかのやうに眞直に歩き出した。仲子は、一瞬間前の滅入つてしよぼくながつて居た自分を忘れた彼女は面白く、嬉しくて堪らない惡戲小僧のやうに、暗闇で一人笑ひを殺し乍ら、そつと廊下の隅の本棚の側に身を潜めてはりついた。

四

一週間ばかり後、仲子は佃と彼の故郷の田舍に行つた。十日餘滯在した。仲子にとつては樂しさと遠慮との混り合つ

た旅行であつた。佃の老年の父や兄夫婦や弟などに對面した。皆が、肉親ではあるが久しく別れて居、全然未知な生活をして來た佃に對して心遣ひするのがわかつた。桑の花盛りで、仲子が是まで何處でも見た事のない立派な金色の花が、高く波々、遠い白山山脈に照り栄へた。村落は古く狹い道路を挾んで黒板塀の家が並んで居た。淨土眞宗が非常に盛んで、村の寺は倶樂部又は集會所となつてゐた。家々には素晴らしい佛壇が飾つてあつた。其の有無が家の格を支配するといふ事であつた。佃の家の佛壇は、幅一間以上あり觀音開きの扉の内側や何か皆黄金色に耀いて居た。老人が

「この邊ぢやあみな此那ものを大切にしてゐますのぢや」

と云つて仲子に内部を見せて見れた。親鸞上人の一代記が赤や水色の彩りの浮彫で、欄間などに刻りつけてあつた。爐の粗朶火に當つて居ると、就寢前老人は必ず佛壇の前に行つた。燈明をあげ、肩衣をつけ、歎異鈔に類したものを唱した。そして口の裡で

「南無、南無、南無」

と弱々しく稱名しながら戻つて來る。焚き火で煙つた天井の大桁からは、親伏が吊下つてゐた。赤く陰氣な電燈——。默つて焔をふく焚き火を眺めて居る者達の多く重り合つた影法師が板敷きを這ひ、坐敷の板戸の上で揺れ乍ら延びたり縮んだりする。——昔から政爭の最も烈しい村であつた。彼女達が歸つた時、東京ではもう櫻も木蓮も散り、庭の楓が、青々若葉を擴げ始めて居た。

旅行から歸つてぢきのことであつた。

仲子は或日片手で着物の褄を抓み上げながら如露で部屋のすぐ前に水撒きをして居た。天氣つゞきなので地面が乾き勝ちであつた。特に彼女の部屋の近くは、建て増しの時荒されたので、雨に打れることのない庇の下など、土は黄粉の

やうであつた。いくらでも水を吸つた。勢よく、さつさと如露を動かすと、散る水滴が太陽を受けてキラキラ微かな虹色に燦いた。土に落るときは、軟かい清らかな粒の揃つた音がし、濡れた土の香がすがすがしく起る。仲子はいゝ心持で、段々あとじさり乍ら一心に撒いて居た。そ處へ六疊の障子が開いて、佃の顔を出した。彼は暫く默つて仲子のすることを見て居たが、軈て云つた。

「――それはぢきすむの」

仲子は、顔を擡げ答へた。

「ぢきよ。――何故？――用があればいつやめたつていゝのよ、どうせ遊びだから」

「――お茶が欲しいんだが」

「ぢやあ一寸待つて。すぐ行くわ」

「此處で飲みたいんだがな」

仲子は、如露の手を止めて、敷居際に立つて居る佃を見上げた。

「――彼方へ行きませうぢやないの、ね、特別に此方へ持つて來ないでもいゝでせう？」

「…………」

佃は、沈默で不服を表した。

「お晝に出たつきりだから行つて少し喋つて來ませうよ。母さんもきつとお茶を上りたい頃よ。一人よりはいゝわ一緒の方が」

「行つたつていゝけれども――永くなるのでね」

「いやな方！　何とか彼とかいつでも駄々をこねて」
仲子は、微かな不快を冗談にして叱つた。
「することもないのに、いそがしいと云ふ口實は通らないことよ！」
實際、佃にまだ決つた職業がなかつた。旅行後、仲子は二間續きの六疊の方に二つ机を置いた。彼は、窮屈に膝を曲げて坐り、其上で履歴書を書いたり、彼方からのノウトを整理したりして居るのであつた。元來、仲子二人の勉強部屋として作られた其等の部屋は、縁側つゞきでも、離れのやうな工合になつて居た。藏前の廣縁と二階の裏階子とで、他の部屋々々とは遮斷されて居た。其故、袋のやうなたつた一つの出入口を閉め切ると、前に庭を見晴す丈で、一日中でも人に會はずに暮せた。仲子が佃と二人きりの雰圍氣を作るには大層都合よい構造なのであつた。然し、佃と暮すようになつて程なく、仲子は其特典を却つてよしわるしに感じるやうになつた。何故なら、佃は只さへ引籠りやであつた。仲子が種々用を足して小間使ひをすると、彼は仕方ない時しか部屋を出ない。例へば三度の食事とか、厠へ行く時とか、電話とか。そして一日の多くを近頃は殊更一人で居る母と雜談しようともしない。――彼の出合に立つ前、斯う云ふ事があつた。矢張り、彼が部屋で茶を飲みたいと云つた時であつた。仲子は何心なく
「ぢやあ持つて來て上げるわ」
と云つて、食事部屋に行つた。母が女中と夕飯の仕度の打ち合はせをして居た。彼女は仲子を見ると
「何だい」
と尋ねた。
「お茶」

「――お湯があるかい」

多計代は、わざ〳〵手を延して鐵瓶に觸つた。

「い丶鹽梅に沸いたね」

仲子が茶碗を出す間に、彼女は自分で急須を調へた。

「美味しい羊羹があるよ、あれでも切らうかねえ」ゆつたり茶を注ぐ彼女の態度には、仲子と一緒に茶を飲まうと樂しむ樣子がありありと見えた。其が解つて居るのに、私は、欲しくないのです、彼方へ持つて行くのですと如何うして云へよう！　仲子は三つ茶碗を並べると、改めて部屋へ佃を迎へに行つた。

「いらつしやいよ、折角母さんもその積りなのだから」

頻りに進めたが、佃は到頭來なかつた。仲子は、已を得ず戻つて母に嘘をついた。

「今一寸手がはなせないんですつて。これだけいたゞいて行くわ……私はすぐ來るから待つて丶頂戴ね」

母は、ごく輕く、氣のい丶皮肉さで云つた。

「これに〳〵。――宿屋暮しのやうだね」

小さな盆に湯呑をのせ、母に後を向けて居た仲子は、何か鋭く自分達二人を愧しく感じ、顔が日照るやうであつた。

一組の男女が、妙にいぢけて大きな家の隅つこにかたまり、一間から出ず、氣がね仕ながら茶など運んで行く。其那朗らかでない觀念を自分等に當て嵌めることは、仲子の生れつき堪へ難いことであつた。部屋まで數間の廊下、仲子の感情は複雜に動いた。

――さういふ口惜しさもあり、仲子は今度は少し理屈ぽくなつて居た。彼女は、茶器を元のやうに臺所へ戻して來た。そしてバケツ

を執り上げ、佃に云つた。

「私足がよごれたからお風呂場へ廻つて行くことよ、先に行つてゐらしつて頂戴ね」

伸子は、裏から風呂場に行つた。彼女は、タタキで足を洗ひ乍ら、時々耳を澄して自分達の部屋の襖が開くかどうかを注意した。ことりとも仕ない。伸子は、襖前まで來、聲をかけた。

「どうなすつて?」

「此處に居ますよ」

といふ返事が内からした。伸子は、襖を自分からあけた。

「——さあ、もういゝのよ」

佃は、まだ敷居際に佇んだまゝ、顏だけ伸子の方に向けた。彼の顏に陰欝な横皺が出て居た。迷惑げな、解つて居て呉れる筈ぢやあないか、といふ訴へが讀めた。伸子は近づいて、彼の前に立ち、低い眞面目な調子で云つた。

「ね、一つ家に居て御飯の時しか顏を出さないといふやうなのはよくなくてよ。一緒に住む以上打ちとけなければ、ね。だから來て頂戴——O村の家で此那ことないでせう? 同じよ」

彼は、伸子に對する義務だと云ふ心持を示して答へた。

「行きます。では」

五

極微妙な、神經的な不調和が、段々家ぢゆうに漲り始めたのを、伸子は矢張り自分の神經で感じた。夕飯の時、彼女

は元のやうに料理の手傳ひをした。その間、仙は部屋に居るか、つや子と遊ぶかして居る。食事が卓子に並ぶと、仲子は

「みんな被來い！」

と庭に向つて呼んだ。彼女の聲は遠くまで響いた。裏に出て居た保も、和一郎も、つや子は勿論

「御飯　御飯」

と叫んでどたどた馳けて來る。仲子も、手を洗つて食卓に就いた。父や母も箸をとるばかりに成つて居るのに、仙一人が揃はない。つや子は、母の顔を見て

「お母ちやま、もう食べてもいゝ？」

と訊いた。如何うしたのだらう。仲子は皆の心持に遠慮を感じずに居られなかつた。其處へ、正面の戸をあけ、仙が一同に向つて輕く頭を下げ乍ら入つて來る。——時間で云へばほんの三分か四分の待ち合はせであつた。が、其の場の氣分に何か際立つたものが生じた。彼だけ變に別ものとして目立つやうな。其瞬間、あゝ仙が來た、といふ事を、ぼんやりではあるが輕やかでない意識で皆が新に感じることを、仲子は感じるのであつた。仲子は、

「——どうなすつて？　おそかつたわね」

と云つた。彼から、お待ち遠でした、と一言云はせ度いと思つて。

「みんなお待ちかねよ」

仙は、體をかためるやうにして坐布團の上に坐り、卓子の上を狹く見、不明瞭に云つた。

「さう…………一寸」

そして、父母の方だけ向いて挨拶した。

「失禮いたしました」

「いや。——どうですね、山崎さんの都合をきゝ合せましたか、今日倶樂部で偶然會つたから又改めて話して置きましたよ」

次第に食事は賑になつた。仕舞ひ頃には、伸子を除いた誰もが、始めの一寸した心持の引懸りは忘れて仕舞つた。然し、それは一度きりですまなかつた。次の日、一日置いて又次の日、如何いふ都合か同じことが起つた。かき消える、淡い感じが、度重るにつれ明瞭になり、一種惱しい豫感のやうになつて來た。食事時になると、多計代は制した苛立たしさで云つた。

「佃さんには早めにお云ひよ、お客様のやうに皆を待たせないで」

「さうしませう」

「——一體外國の大學なんかはひどく氣さくな、青年らしい氣風だつて云ふぢやないか。あの人だつて、此處へ來てお前の手傳ぐらゐしてもよささうなものだね、二人の時でも斯うかい？」

伸子は、エプロンの紐を解き乍ら、酸いやうな笑ひで口元を歪めた。

「——さうでもないわ」

「ぢやいゝけれど…………」

多計代は、默つて卓子の花瓶の工合をなほした。古くなりかけた矢車草の葉をもぎ、少し上體を反らせるやうにして枝ぶりを見た。伸子は、花いぢりは手先だけのことで、母の胸に云ひたいことが詰つて居るのを直覺した。傍に坐り、

仲子は氣づまりな時を感じた。然し多計代は其きり何も云はなかつた。

數日で四月が終らうといふ日、仲子は從姉達と或友人の宅に招待された。曇つて、奥深いところに艶のある銀灰色の空の前に、ねつとり濃い青葉の樹が美しい日であつた。仲子が仕度をしに洗面所に行くと、佃は、廣縁の隅につくりつけた本棚の片づけを遣り始めた。その本棚は家族共同のもので、本と云つても碌なのは一冊もなかつた。古雜誌の仕舞ひどころであつた。幾年間かの婦人雜誌類が無秩序につめこまれ、片方の硝子戸が開かないやうになつて居ることを、前日、多計代が何かの次手にふと話した。彼が其始末をしようと云ひ出した時、仲子は、好意を悅ぶより、何處となくしみつたれた情けない氣がした。

「貴方にしてお貰ひする積りで云つたのぢやあないのよ。放つて置いていゝぢやあないの。其那ことは本當に必要なら誰かにさせればいゝんですもの」

「暇だから仕たつていゝでせう? 少しでも皆の爲になれば結構だもの」

「──氣晴しになさるのならいゝけれど……」

仲子は、片手に握つた梳きかけの髮の中から佃を見た。彼はぴつたりと本棚に向つて胡坐を組み、もう戸をあけて塵だらけの古雜誌を引出しては傍に積んで分類しだした。彼の後つきには、仲子の眼を直ぐ離させない何かゞあつた。仲子は危く

「不機嫌なの?」

と訊きかけた。が、やめた。若し彼が不機嫌だとしたら、自分は友塚に行くのを中止にするだらうか? いゝえ。鏡の前に戻り乍ら、仲子は、何時の間にかさういふ風に働くやうになつた自分の感情に憫笑した。──これも矢張り一種

のしみッたれさでなくて何であらう？ ―― 窓外の八つ手の繁みで鏡の面は片明りであつた。顏を近づけて白粉をつける仲子の頭の裡を考へが靜に重く進行した。――あゝいふ先潜りの感じ方は、自分だけの僻みであらうか？……さうではない、あの人にも責任がある。では如何したらよいものだらう、この先の事もあるが――。そして、仲子は、斯ういふ、一見けちな、簡單さうな心持の煩ひで、自分だけでない、結婚して居る多くの女が氣を重くされて居るらしいと感じた。

仕度が出來ると、仲子は自分で自分の氣を引立てゝ居る氣輕さで佃に

「行つて參ります」

と挨拶した。彼女は、帶や着物の絹をきしませ乍ら、胡坐をかいて居る佃の上にこゞみかゝつて頰を觸れた。

「今夜は父樣もお留守だしするから、悠くり母さんとお話でもして居て頂戴」

夜、細雨が降り始めた。九時頃になると、家のことを思ひ落付けなく成つた仲子は、俥を命じて貰つた。穩やかな晩春のしと〳〵雨で、俥の中は濕つぽく、生暖いきれと幌の匂とで不愉快であつた。其に、登りの坂が多く大層手間どる。歸つて見ると、玄關にはまだ靴が見えなかつた。仲子は訊いた。

「父樣は？」

「まだお歸り遊しません」

奥へ步き乍ら、仲子はどうか母と佃とが睦しく話し込んで居る光景に出會ひたいものだと思つた。戶をあける拍子に、愉快さうな二人の顏が自分に振向き

「おやお歸り！――今お前の惡るくちを云つて居たところだよ」

と云はれでもしたら、如何那に樂しいことであらう！　本當に、如何那に樂しいことであらう！　暗い廊下で、伸子はひとりでに微笑しかけた。が、忽ちそのほく〳〵した想像はかぢかんだ。人間も自分が生れ育つた家の容貌に對しては、獸が巢の安全、或は近づいた危險を本能的に嗅ぎ分けると同じやうな直覺を持つて居る。伸子は一部屋々々の餘り鎮りかへつた調子、何處からか流れ出る冷やかさに用心を感じた。明るい、興奮が彼女の顏から去つた。——伸子は淑やかに扉をあけた。

「たゞいま」

佃は居ない。弟達も居ない。森とした夜氣の裡に唯一人だ。伸子は落膽を感じ、我知らず搜し求めるやうに室内を見廻した。

「雨になつて困つたらう？」

多計代は、雜誌を伏せた。時計を見た。

「いゝえ俥を云つていたゞいて來たから……父樣はまだだつたね」

「——今夜はきつと遲からうよ、例によつて燒物の御連中だから……」

彼女は、沈着な觀察的な視線で、コートの前を解いたなり座つて居る伸子を見た。

「着物でも着換へておいで」

伸子は素直に立つた。多計代は、いつもさういふ眼で見る性ではなかつた。

伸子は、急ぎ足で自分の部屋の襖をあけた。佃は机の前に居た。彼は、近頃やりかけのイラン語の翻譯に關する原稿を直して居た。

「たゞいま」

「――お歸り」

彼は、紙面から首も廻らさず答へた。――これも自然ではない。――仲子は、母と佃との間に何か共通の不快があることを察した。家に歸つた樂しみは跡片もなく成つた。仲子は、左右から岩礫な、無愛想な、自分の力では押すも引くも出來ない崖に挾み込まれたやうな困惑を感じた。

仲子は、母の處へ行つて見た。多計代は、彼女の來るのを待ち兼ねて居たらしく、飾りけない、制し切れない率直さで云つた。

「お前、知つて居るかも知れないが、佃さんといふ人は餘程如何うかして居るよ」

仲子は、先達ちゆうから母の心に溜つて居たものが、愈々今夜溢れ出したのを感じた。

「そお?――何かあつたの」

多計代は、仲子を凝つと眺めた。

「彼方で聞いて來たどらう?」

「聞かなくてよ、私が訊かなければ默つて居る人ですもの」

「……斯うなのさ……」

話しかけ乍ら、乍多計代はさも厭さうに、白い顏を顰めた。

「――此那ことを繰返して話したりするのは大人氣ない本當に不愉快なことだがね……まあ始めから云はなければ解らないことだから。――お前が出かけて間もなく、あの人も獨りで淋しいだらうと思つて、お茶に呼んだのさ、丁度保

やつや子は居ないし、いゝ折だからと思つてね、私はいろ〳〵二人きりで話す積だつたんだよ。お前も知つて居る通り、私はまだあの人と云ふものがしつくり腹に入つて居ないし、此迄しんみり話す機會もなかつたし――私の心持ではまあ隔意なくお前といふものに對しての意見も交換したかつたのさ、口の先でお母さんと呼ばれる許りで妙に他人行儀な氣持を兩方で持つて居ては堪らないからね」

「さうですとも、よくさう思つて下すつたわ」

「私は馬鹿正直だから、きつと仲さんも左樣感じて、眞率な心持になつて呉れるだらうと期待したのだが――」

多計代の顏には新たな腹立ちが甦つた。彼女はぽつと赧くなり、決定的に言ひ切つた。

「――駄目だよ！あの人は」

「どうして？」

「どうしてつてお前、あの人はまるで冷淡だよ、ちよつとも感激のない人だ。如何那者でも此方が眞心も打ちわつて話せば、本氣になる筈だのに、あの人つたら何と云ふのか――後ぢつさりをする許りなんだもの。自分は、お前の爲には如何那にでも盡す積りだ、自分は犧牲になる覺悟をして居ると云ふ一點張りなんだもの。――何も私はいきなりあの人を如何しやうと云ふのぢやありはしない。お前も立ちあの人も工合よく暮させたい、其にはと思つて話し合はふとするのに、問題にならないぢやないか」

母の氣象も知り仲の性質も知つて居る伸子は、これ等の不滿にかへす言葉を見出せなかつた。母が、此程自分は眞心から話して居るのに！と齒痒ゆがる心持は充分同情された。其かと云つて、伸子には、一概に仲が惡いとばかり思へなかつた。仲には、惡い、氣の毒な癖があつて、むきな話が出ると、變にかち〳〵になつた。彼は決して平氣なのでは

ない。其どころか！　彼は此世で自分程苦しむ者は尠いと自分で思ふ程むしやくしやする。其を自分で調整出來ないやうな、徒に激昂するやうな、弱いところがあると、仲子は考へて居るのであつた。彼女は、その觀察を正直に母に說明した。

「私はあの人のこれ迄の境遇がわるかつたのだと思ふの。其那のは皆。――他人の蟲ばかりでせう？　批評する者は多いが、親身なものは、本當に爲を思つて呉れる者は一人だつてあるか、さういふ慘めな氣持を持ちつゞけたんでせう。――段々なほるわきつと。きつとなほつてよ、だから、さう斷定して仕舞はないで頂戴な」

「――……其だけならまだしもだがね――あれは――もう夕飯時分だつたらうね、あの人の處へ電話がかかつて來たのさ、大分長く喋つて戾つて來たから、私もよせばよかつたのについ何心なく何處からですつて訊いたのさ。淺草の親戚です、といふのだらう？　ちつとも其家のことを聞かなかつたし大層下町だと思つたもんだから、おや〳〵妙な處に被居るんですね、と云つてしまつたんだよ。すると、あの人はひどくむつとして默つて居たが、やがてすつかり發の樣子を變へて『お母さんは、私が何か變なことでもして居るとお思ひになるのですか』と云ふぢやあないか、私にはさつぱり譯が分らなかつたよ。たゞ事でない顏つきだからよく〳〵考へて見たらお前、何かひどく邪推をして…………」

仲子は、眉根の邊を引撐られるやうな厭惡を話全體から感じた。頰杖をついたまゝ、彼女はのろく顏をそむけた。

「…………私は、其那考へかたをするのは貴方の耻ですよ、と云つたがね…………」

仲子の口は封印をされたやうになつた。其は、部屋に戾り、佃の顏を見ても解けなかつた。揶られて痺れたやうな陰氣な信じられなさで、仲子は幾度も佃を瞶いた。彼は、机の右にも左にも、一杯參考書を擴げて居た。書籍の塹壕にと

りかこまれ、彼のきつと結んだ唇、强情さうな盆の窪は彼女に云ふやうに見えた。「私は何を聞いて來たか知つて居ます。貴女は私を理解して呉れるだらう？　が、思ひたいやうに思ひなさい。私は辯解はしない」默つて居て自然さつぱりする仲子の心持では無かつた。然し、彼女は母から聞いたことを再び逐一口に出して佃につめよることは迚も出來なかつた。云ふ自分も、云はれる佃も愧しく厭はしくて。戸外では、低氣壓の凄い風が吹き出した。ドーッと一吹き吹きつける前にバラバラ雨が雨戸を打つた。仲子は、部屋に居るのも辛く、藏前の廊下に出た。彼女は、腕組みをし、體を右左にゆすり乍ら行つたり來たりした。天井の高い處から十燭の電燈が照して居た。正面には土藏の網戸が見えた。拭き込まれた廊下は足袋の裏に、滑らかに堅く感じられた。此那に滑つこかつたかと驚かれる夜の廊下であつた。仲子は、寂しく悲しいので、益々體を搖り動して歩いた。

六

風呂場は湯氣で濛々であつた。仲子は、着物をきたまゝ、大盥の中に立つて居るつや子の體を洗つてやつて居た。溶けた石鹸の香ひや水蒸氣の熱い濕つぽさが衣服に透つていやな氣持がした。つや子は、大きなスポンヂに湯をふくませ、其を兩手でもつて自分のおなかの上に搾りかけ乍ら、燥いで笑つた。

「お姉ちやま、見てよ、見てよ、おぽちよ（臍）にお湯がしみるわよ、ほらほら」

多計代は、浴槽に浸つて居た。肩から上が見えた。彼女は、ふさけ過るつや子に時々

「さう騷いちやお駄目ですよ」

と云ひ乍ら、仲子にぽつ〳〵話した。佃の批評であつた。仲子の留守中不快ないきさつがあつてから、彼女は佃に對す

る遠慮や、或は最後の敬意を失つたように見えた。彼女が仙に向つて話す時には、一つの定つた特別な調子が出來た。

彼女は、鬢櫛で揺れた後れ毛をかきあげ乍ら呟いた。

「其にまあ人間といふものは誰しも萬全ない者はないからね、互に許し合ふとしても……私はあの人を見て益々疑問に思ふやうに成つたよ――卅――幾つかい？　兎に角その年まで純潔で居たなんて――何だか」

仲子は、

「そつちを向いて、そつちを向いて」

とつや子に背なかを向けさせた。そして、苦しげに云つた。

「さう云ふ話は、今はやめませうよ」

程なく多計代は上り湯を汲み出して顔を洗つた。洗ひ乍ら、手拭の合間から彼女は亂れた聲で云つた。

「――考へて見ると、お前も全く女らしい人だね、好いとなると盲同然だもの――二人居る處を見ても、痛々しい位お前の方が餘計愛して居るのが解るよ……よければ其こそ何よりだが――感化され易い人だからね、お前は全體――」

暫くして、彼女は又獨言のやうに呟いた。

「いつまで私共がついても居られず――若し一緒に悪くなるなら成るで、お前が其だけのものだつたのだと諦めろばかりさ」

――仲子は、考へに沈み乍らのそのそタオルで汗滲みた額を擦つた。

仙は大學に行つた。就職口を相談する爲に友人を訪問した。夕方近く疲れて歸つて來た。彼は、一體に健啖な家族の誰もまだ箸を置かないうちに夕飯を終つた。父でも居れば暫く雑談の仲間に入るが、誰も其の重さ、困難さを理

解することは出來ない仕事に追はれて居るといふやうな風な頭つきで、一同に

「私は失禮します。少し仕なければならない事がありますから」

と斷つて部屋に戻る。——彼のさういふ聲や樣子には不思議に物々しいところがあつた。一寸の間、皆は、自分達に爲る事が無かつたり、面白がつて樂しんだりして居るのを何だか咎められたやうな氣まづさを感じて、默り込むのであつた。仲子は、跋のわるさが自分の口許に現はれるのを感じた。彼女は個の机の上に載つて居る仕事を知つて居た。あの位の事をするのに、此那氣持を皆に起させなければならないのだらうか？　仲子は、部屋に戻つて個が如何那にして居るか早く行つて見度い心持がした。同時に、皆に與へた氣づまりを、元の陽氣に還さないうちは此場を去れない心持、二つに引張られ沈黙になり乍ら、彼女は口では他愛もない戯談を云つて皆を失笑させた。

「ね一寸、斯ういふ話を知つて居る？　或巡査がね、一人のこそ〳〵泥棒をつかまへました。交番に引張つて來て、散々擲つた末、巡査は泥棒に訊いたんですつて

『此那ことをして普段悪いと思はないか、馬鹿奴！　良心はどうした！』

『何ですい？——旦那？』

『わからんか！　馬鹿、良心はどうしたと云ふんだ』

泥棒は悲しさうに答へました。

『わつしの兩親は十年昔地震で潰れて死にました』」

ハツハツハツ、皆と笑ひ乍ら、仲子は眼に癇癪涙をにぢませた。彼女は、自分の氣の弱さ、小つぽけな自分とひとへの甘やかしが、辛棒出來ずじり〳〵して來るのであつた。

伸子は、落付いて仕事が仕たいと思ふやうに成つた。毎日の生活はひどく錯雑して居、何處か始りで終りだか反射的な感動の連続で許り過て行くのが不安になつた。さうだ書いて見よう――伸子は或期待を以て考へた。――自分と彼とが會つた始りから眞直に書いて見よう、そしたら總てがもつとはつきり自分にも理解されるだらう。

伸子は或朝佃に云つた。

「――私そろ〳〵本氣で何かやりたいと思ふわ」

「結構でせう、おやりなさい」

「それでね……私机を元の部屋に持つて行き度いと思ふの、いゝでせう」

「持つて行きたければ行つても好いが……一緒にやれない? え?」

伸子は、永い間指の背で唇をこすり乍ら考へて居た。

「――此部屋はお互の出入りがやかましいし……私獨りになりたいの」

佃は、暫く沈默し庭を眺めた。彼は遂に云つた。

「ぢやあさうなさい。――私も手傳つてあげよう……然し仕事の爲だけでせう? 本當に……」

「勿論よ」

五月で、庭には簇り出た若葉の輝きに混つて、躑躅、紫芳等濃い色彩の花が咲いて居た。様々な形狀の葉で區切られ、狹く鋭角に感じられる空間を、眞黑な美しい蝶が飛んで居た。伸子は、襷がけで元の部屋を掃除した。庭づたひに、楓の下枝をくゞつて机を運び込んだ。疊の古びた、何處からか積年の塵の匂ひが漂つて來る、古寺のやうな小部屋に坐つ

で見ると、仲子は、俄に、多くの時が氣もつかないうちに先此處に留まつて居た頃の自分と今の自分との間に翔び去つた事を感じた。二年、三年、何と云ふ迅さで過たことだらう！　ほんの一息！　外面的に見れば、其だけの時間を滿すだけの事柄は間違ひなくあつた。永い旅行もしたし、結婚もした。さう――結婚もした。けれども、本質的にどんな變化があつたらう？　仲子は、考へて見て、寧ろ自分の變らなさに驚きを感じた。例へば――彼女は、南畫風な一本松の根元に、奇麗に靑んで居る苔を眺め乍ら思つた。――幸福といふものについて見ても。自分はあの頃憧れて居た幸福の破片でも今確り握つて居るだらうか。決してさうは云へない。矢張り、あの時分と同じやうに其は未來といふ雲に乘つて、デューラーの描いた榮光の寶冠のやうに遠く生彩ある魅力に滿ちて彼方に懸つて居るに過ない。全く、結婚後の一年を、人々が最も樂しい薔薇色の時代と云ふのが、仲子には奇妙に思へた。仲子に、其は其那色繻子張りの糖菓箱（キャンディボックス）のやうなものではなかつた。何か異樣に馴れ難い、懷疑的にさせられるものが、新しい生活の裡にある。――仲子は、久しぶりで螺旋をまかれた時計のチクタクのやうに、頭が動き出したのを感じた。彼女は、机の上に展げた原稿紙が、そのさつぱりした白さと、網目のやうに細かい四角な點線とで、懇に自分の魂に呼びかけるのを感じた。

「さあ、こゝにあなたの心を打ちあけなさい。正直に遠慮なく、どんな疑問でも感謝でも。――私は何でもきいて上げます」

仲子はペンを執りあげた。彼女は書き出した。が、數行進むうちに、文字を書く自分とはまるで別なもう一人の自分の存在が心に感じられて來た。その自分は恐しく注意深い、凝つとした眼つきで書かうとする自分を見守つた。そして、ひそ〳〵呟いた。

まだ駄目。それではいけない、隙間がある仲子は、自分の内へ内へと心の重み全體で沈潜しようとした。種々な感情、

印象は彼女の記憶の深みで砕き合つて居た。其等は空氣に觸れたがつて性急に蠢いて居る。一投げぴたりとその深みの底まで屆く鉤さへ投げ込まれゝば！　順序は自らついて來るだらう、一つの鉤には一度に一つしかものが釣れないやうに。

伸子は、強い根氣で、幾度も遣りなほした。然し、情けない事に其は文字の問題では無い。心持の問題であつた。其證據は伸子は部屋を移して獨りに成つた氣だつたのに、そして、本氣で仕事に集注して居る筈なのに家の彼方の端の花壇の前で保と話して居る佃の聲ばかりは、細大洩さず耳についた。精神は引緊つたまゝ、庭下駄を穿き、兵庫帶の後に兩手を挾んで佇んで居るだらう生き身の彼と、彼女の頭の中に活きて居る普遍化され、名を更へられ、唯一つの人物として扱はれるべき小説中の彼に似た人間との間にふら〳〵往復した。實際の世界と心の世界との境がぼやけた。彼女の書き度いことは餘り近くに在りすぎたのであつた。伸子には　其を自分からつき離し、組み立てなほし、廣い世の中に起つた一つの出來事として見なほす丈の力が無かつた。

七

蒸暑い日であつた。空氣が膨れ弛み、だるく日光の下で澱んで居た。伸子は、古部屋でちつとも進まない仕事に向つて居た。彼女は氣難しく陰氣であつた。仕事にも、生活にも確信を失つた心持であつた。さういふ心持は其日が初めてでは無かつた。段々自分の書きたい世界を突つめて行くうちに、伸子は豫期しなかつた一つのものに出逢つた。自分に、今、何より書きたいものであり乍ら其が工合よく出來ないのは、勿論他の澤山の原因があるにしろ、第一は、實際以上の美しい心境、崇高な感情などを事實の何處にか見出して、強いても其を表面に浮かさし度い傾向があるからで

は無からうかと云ふ反省が、いつからともなく浮み出したのであつた。

一日一日と、其考は伸子の心を占領した。そして、明るさを奪つた。たゞ、若いもの丶上でつい見榮を張るだけなら、伸子は絶えず自分を叱りつけ、監視して行けばよかつたらう。彼女がしんから悲しく、望を失つて感じたのは、同じ見榮や己惚れが實際の生活——自分の戀愛や結婚——にも大いに働いて、自分を醜陋化したのでは無かつたかと云ふ疑ひであつた。伸子は、歎いて考へた。

「——其ならば、あのやうに願ひ、あのやうに熱望したよい生活、廣々として信念に滿ちた生活に二人で進まふとした計畫も、皆まやかしものであつたのだらうか？」

いや、いや、いや。伸子にはどうしても左様とは思はれなかつた。彼女の眼前には、佃に會つてからの種々な情景が、さつきの事のやうな鮮かさで甦つて來た。夜、病院で、體ぢゆう耳に成つたやうな心持で彼の跫音を待つて居た自分。まだ冬の殘つて居る寒いグラント將軍の墓の周りを幾遍も〳〵歩き乍ら、希望と勇氣と嬉し泣きとで咽び乍ら、結婚生活を相談した自分、あの感動し誠意に滿ちて見えた彼——其等は悉くまやかしだつたと如何うして思へよう！　そして、又、あれから一年、自分や佃や親達や、皆が經驗した種々な苦しさ、涙などが、眞實は何の價値もない馬鹿げ切つたものだのに、伸子獨り一大事の氣になつたばかりだと、如何うして思へよう！　恐ろしいことだ。

伸子は、机の前から立ち上つた。彼女は不安に心弱くなり、佃のところに驅けつけて、自分達は大丈夫だ、と保證でも仕て貰ひたかつた。今、種々な狀態がわるい。從つて不安だ。けれども、今によくなるだらう、きつとよくなるよ、と。伸子は、庭下駄を穿いた。悲しいぼんやり勢のない風で、庭を横切つた。自分達の部屋の前に來、濡れ緣に腰をかけた。佃は、伸子の方を振向いた。彼は、伸子の沈んだ顏つきを訝るやうに訊ねた。

「どう？——出來ますか？」

「…………」

仲子は、默つたまゝ首を振つた。彼は、じつと仲子の様子を見て居たが、自分も濡れ縁まで出て來た。そして、仲子の様に腰かけ、彼女の手を執り、慰めるやうに云つた。

「あせらずにおやりなさい。貴女はまだ〳〵若いんだし、我々の生活はこれから先長いのだからね、一年や二年、假令何にも出來ないとしたつて、心配することはない。」

彼に何とか云はれたくつて來たのに、仲子はこの言葉をきくと、慰さめられかねた。不安が却つて募つた。彼女は、むつつりして呟いた。

「――書ける書けないだけぢやあないのよ、私が此那顔をして居るのは。――いろ〳〵考へるの――いろ〳〵」

佃は、吐息をついた。彼は、益々仲子を励るやうに云つた。

「暫く辛棒なさい、ね、今にすつかりよくなります、ね。我々は互に此那に愛し合つて居るんだもの……私を信じて下さい、ええ?」

佃は仲子に顔をさしよせた。仲子は覺えず涙を出した。何といふ變な、意地わるい自分の心持だらう、佃は、彼女が、彼方の部屋で斯うでも云はれたらと、願ひ望んだ通りの言葉を云つて與れたのではないか。其だのに、彼女には、其等の文句が可怖い程空虚に聞えた。彼女は云つて居る――たゞ云つて居る……。彼の言葉に頼れず、本當に? と云ふ、鈍い永く尾を引張つた疑問が心に浮ぶ。……仲子は、緣側から立ち上つた。そして、佃に云つた。

「――私今日は少しどうかして居るらしいわ。散歩して下さらない?」

彼等は神田へ古本をひやかしに出かけた。天候も、仲子の心のやうに變調を來して居るやうであつた。市街の上一面蒸蒸する靄が薄く立ち罩めて居た。灰色の極めて單調な空の眞中に、眞赤な、眞丸な太陽が、子供の色紙でも圓く切り抜いて貼りつけたやうに現はれて居た。往來を歩く人々の輪郭はどれもこれも色彩なく黒つぽく見える。長閑な無風な街路の上で、仲子は自分を神經質に、疲勞して感じた。



松琴亭

志賀直哉

畫家の矢島柳堂は冬の終りから春へかけ座骨神經痛でひどい苦みをした。日限のある大作にかゝり、特別寒かつた其冬、病氣の痛み出しを無理に押した。それが第一に祟つた。それともう一つは五年越し住んでゐる彼の住ゐが或る田舍の沼べりにあり、地面も空氣も一帶に濕氣が多い、それがよくなかつた。

兎に角、烈しく痛みだすと、自身は勿論、はたからもどうにも手のつけやうがなかつた。彼は恰も牛のやうに唸つた。そしてかう云ふ時、彼は一寸した事にも苛立ち、よく癇癪を起こし、そこらにある物を妹のお種に投げつけたりした。

お種は氣立ての優しい物分りのいゝ女だつた。それが近頃急に耳が遠くなり、兄の言葉を時々聞違へるので、機嫌のいゝ時にはそれでもよかつたが、一たん癇が昂つてくると、柳堂はよく「馬鹿」とか「聾」とか怒鳴り散らした。然しお種はその事は別に氣にかけなかつた。兄の氣短かも我儘も今に始まつた事ではなかつたからだ。それよりも餘りに痛みが烈しく來ると看護をするにも手のつけやうがなく、そ

の當惑からお種は涙を流す事があつた。

或る時、

「今度はお前にも隨分苦勞をかけたな。えゝ？　もう少しよくなつたら溫泉へでも出かけようかね。何所がいゝか。お前も其所でゆつくりと保養をするのだ」左う柳堂はお種にいつた。

「お兄さんと一緒ぢやあ、何處へ行つたつて私の保養にはなりませんよ」

「ふむ。」

「それは本統ですよ」

「御挨拶だが、俺も左う思ふよ」

春も末に近づくと柳堂の病氣は幾らかづゝよくなつた。杖をついて家の中を少し位は步けるやうになつた。唯、雨とか曇り日などには病氣は覿面にそれを感じた。

戶外の景色は日一日と變つて行く。沼の眞菰は氣持よくすく／＼とその淺綠の葉をのばして行つた。汀の葭にはもう行々子が來て啼き始めた。

或る朝、弟子の今西といふ青年が庭を掃いてゐると、寢床に腹這ひになつてゐた柳堂が

「オイ、今西。」から呼んで側の小さいみだれ函から白紙の詩箋を取つて默つて低い背掛卓の上へそれを置いた。

「…………」今西は尻端折りの裾を下ろしながら、直ぐに傍に

牀臨ニ廊風一竹几斜。臥看新燕出ニ人家一。
閑居心上渾無事。對レ雨唯愁損ニ杏花一
「俺がかうして寢てゐる姿を南畫風に描かないか。左ういふ讃をしてやるから」
今西は詩箋を眺めたまゝ默つてゐた。
「お種に見せたら、俺が唸つてゐる所の方がいゝといふのだ。さもなければ、痛癪を起してゐる所を描いて貰ふ方が氣が利いてゐると云ふのだ」
「その方なら僕も描きませう」
「笑談云ふな」
二人は笑つた。
「これは先生の御作ですか」
「俺にはそんな漢詩なんて洒落たものは出來ないよ。高青邱の詩だ」
「…………閑居心上渾テ無事。雨ニ對シテ唯憂フ神經ノ痛ムコトヲ」
「はゝゝゝゝ」

五月に入ると急に陽氣がよくなつた。未だ彼は起居に本統でなかつたが、痛みが少し遠退くと却々家に凝つとしてゐられなかつた。風に當ると後がよくないといふお種の言葉も肯かず、長閑な日には籐の寢椅子を庭先の藤棚の下に出さし、半日、沼の景色を眺め暮らした。

殼を被つた白藤の莟は三番叟の鈴のやうな形で一杯についてゐた。その殼が散り始めた。柳堂の額にも胸にも足にもこぼれ落ちた。身動きも太儀な氣持で彼は眼をつぶつてゐた。そして全身それに埋まつて行くといふ空想に彼は恍惚としてゐた。

屆いた郵便を持つて出て來た今西は彼が熟睡してゐるのだと思つた。そして腰の手拭をとつて靜かにその殼を拂ひ始めた。

「オイ〳〵餘計な事をするな。今、涅槃の夢を見てる所だ」柳堂は眼をつぶつたまゝ物憂さうに云つた。

天氣さえよければ柳堂は毎日その藤棚の下で半日を暮らした。殼が散ると直ぐそれは花だ。がさつ者の熊蜂が終日騒ぎ廻はつた。熊蜂はよく花を蹴落したり、自身地面まで轉げ落ちたりした。

柳堂は或る時不圖、藤蔓が常に左から右へ同じ方面にばかり卷いてゐる事を發見した。彼は直ぐ今西を呼んで近所の別莊の藤を見さしにやつた。

暫くして歸つて來た今西は、莖は成程、柳堂のいふやうに同じ方向に卷いてゐるが、左から右へではなく、右から左へ卷いてゐたと報告した。

「一寸待つて呉れよ」柳堂は寢ながら額の上で指を輪に廻はしながら「右から、左へ……………右から、左へ…………それでいゝぢやないか。同じ事だ」と云つた。

「それぢやあ、左から右へでせう」

「そんな事はない。いゝか？　右から左…………」

「そりやお、木の裏つ側を卷いてる時です」

「うん、さうか。前つ側は左から右となる――――全體お前は何方を見て來たんだ。表を見て來たのか、裏を見て來たのか」

「勿論表を見ました」

「おかしいね。もつと他の藤を見て來て呉れ」

今西はそれから二三軒藤のある家を見て廻はつたが、何れも右から左へ卷いてゐた。

柳堂は不興顔をして云つた。

「そんなら此藤が片輪なんだ。――藤の旋毛曲りも珍らしくて面白い」

翌朝柳堂は眼を覺すなり、今西を呼んだ。

「氣の毒だが、不動の瀧前にある藤を見て來て呉れ。いゝか。よく見て來て呉れよ」

今西は笑ひながら出て行つた。

不動の寺までは小一里の道だつた。

二時間程して歸つて來た今西は、如何にも滿足らしい顔をして云つた。

「全く先生のお考へ通りでした。他に二株白藤を見て來ましたが、皆左から右へ卷いてゐました」

「左うだらう」柳堂も至極滿足した。そして早速お種を呼びつけ、自分の大發見を得意になつて話して居た。

一ト月程經つた。

「お前は矢つ張り溫泉へ行くのはいやかね」

「お兄さんが若し御不自由なら行つてもかまひませんけど」

「俺はもう不自由はないよ。けれどもお前の爲めにさ。お前のからだの爲めに出掛けちやどうだい」

「私、別にからだがどうもありませんもの」

「…………躰の爲めにどうだい」柳堂は意地の惡い笑ひを浮べた。

「溫泉なんかへいつても逆上せたら尙惡くなる」

「成程。逆上を下げる湯だと俺の病氣に惡し、俺の病氣にいゝ湯だとお前の躰に惡し、仕方がない、俺一人で出かけよう。…………一人の方が金がかゝらなくて結構だ」

七月中旬、蒸暑い夜だつた。田舍から出て來た柳堂は日暮里で新潟行の夜行列車に乘込んだ。夜ぢろうつら〳〵して翌朝未明彼は輕井澤で降りた。高原らしい、冷々した空氣が沼畔（ほとり）のじめ〳〵した水蒸氣の多い土地から來ると何よりも快かつた。

新輕井澤——舊輕井澤、赤い屋根を彼方、此方に見ながら輕便列車はゴルフ、リンクに添ふては段々に登つて行つた。桔梗、女郎花、鬼百合、松蟲草などが咲き亂れてゐた。上野信濃の國境のあたりは殊にそれが美しかつた。地藏川、吾妻（あづま）の高原は又別の意味で柳堂の眼を喜ばした。その昔、彼は澁の兒玉果亭を訪ねた歸途、山越しに此邊へ出て來た事がある。應桑、それから狼の出るといふ六里ヶ原をぬけ淺間の下から沓掛へ出た。人つ子一人通らなかつた六里ヶ原のあ

の水楢の林が今は別莊地として幾つかの土地會社が土地分讓をやつてゐる。その變化に彼は驚ろかされた。

溫泉の宿では床も緣もない屋根裏のやうな部屋に通された。却つて靜かでいゝだらうと彼は思つた。

發病以來、彼は全く禁酒をして來たが、扨てから落ちついて見ると、夜食の膳にまるでその氣のないのは何か物足りなかつた。そして少しばかり飲むだが彼は直ぐいゝ氣持になり、四つ折りにした座蒲團を枕に疲れたからだを横たへた。

宿帳を持つて番頭が入つて來た。

「そちらでつけて下さい」柳堂は寢たまゝ、物臭さうに云つた。「千葉縣東葛飾郡――」

「東葛飾郡」

「〇〇町字新田」

「〇〇町字新田」

「矢島柳堂」

「矢島……？」番頭は筆を止め、顏をあげた。

「左うだ。矢島丑之介。干支の丑だ。スケはカイ」

「……………へい」

「年は四十八才」

「…………へい」

「それから？」

「お職業は？」

「お職業と………」彼は一寸考へた。

「矢張り、農で…………？」

「農？、百姓ですか？　さうです」

番頭はそれを書き込むと御辭儀をし、矢立を腰にさして出て行つた。

柳堂はこれまでも、東京の畫家仲間から、「村長さん」とよく云はれてゐた。（未完）

編輯だより

◇綠の窓から混沌の政界を窺く。政革中の野合――後藤床次の密會――憲政會の岡燒――犬養の貞節―― さながら落花狼藉の態である。その何處にも五月の朝の清新さなく、五月の花の熾烈さがない。

◇野合、密會、岡燒、貞節は八號活字ものだ。多く問題とすべからず、宜しく栃木山引退に鑑みて老いて恥多い老碌どもは早々引退が肝要なり。加藤の引闔それも結構、犬養の掛冠それは當然過ぎる當然。

◇人事上の策多きはその黨に氣品を失はしめ大成せしめず、政友會は爭氣餘りあれど、此點の策士のみ多いから後々は船を山頂に乘りつけるならん、政本もこの嫌ひがある、政策經綸を以つて起たざれば何等の意義ある働きも出來まい、若しそれ憲政に至りては非破なる死骸の累々として横はるの感がある。

◇今の世に欠缺せるは氣骨、土性骨、野趣だ、後藤新平は安價自任でない。自任は左見右見は[illegible]た[illegible]た、向路騎を[illegible]いた[illegible]には[illegible]驗を得べくきだ。[illegible]現れて[illegible]、[illegible]立

國策は――生一本――これのみ。

◇無產政黨が次の總選舉に幾何の勢力に克ち得るか本社の質問に應じその答へが振つている、澤田謙君は一人も出し得まいと云ひ、與謝野女史は百人出せると力味返る。此の兩者の中間には違ひはなかろうが。無產階級たるもの澤田君の言に對し大に發奮する所あるべきだ。

◇無產政黨の發展の前提として治安維持法の撤廢は緊急事。どう云ふ努力で撤廢が出來る？

◇青年日本を表徵すべき月刊雜誌「社會科學」は生る。我國の各大學始め一粒選りの俊鋭が毎月執筆することであれば大方の期待に叛かないものとの自信は本社にもある。

◇佐藤春夫氏は本誌本號より長篇小說を起草して貰ふことになつた、五百枚以上のものだ。また近く志賀直哉氏も「暗夜行路」の續篇をかいて戴くことになつている。創作壇は七月號より一段と精彩を放つことだらう。

◇茂吉の「朝の螢」直哉の「雨蛙」の二書は都の青年間に爭ひ讀まる。天才的の前者と、平凡にして一字も忽にせざる後者とは世に認められたのは遲かつた、[illegible]眞摯な態度と質[illegible]な努力とは[illegible]に[illegible]に打[illegible]。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	増大號共郵稅不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	増大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲増大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵劵にて定價通り御拂込ありたし但し郵劵代用は一割増の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾四年五月廿日印刷納本
大正拾四年六月一日發行
（價八十錢）
編輯兼發行人 東京市芝區愛宕下町一ノ一 平田貫一郎
印刷人 東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷所 秀英舍
發行所 東京芝區愛宕下一ノ一 改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

東京帝大助教授 平野義太郎著

法律における階級闘爭

菊判上製 定價貳圓五拾錢 送料廿六錢

第七版

法律の成立及び進化を社會學的對象として考察し、階級闘爭が法律の世界でいかやうに現れるかを看た上唯物史觀と價値の法律哲學との交渉を明かにし、その見地から所有權本位の法律組織を批判しつゝ、その合理化を説いて勞働法上基本權の基礎的研究をなす。

目次

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二一番 改造社

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS, ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY, TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO.

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正十四年五月一日發行
第七卷 第六號 定價金八拾錢



株式會社秀英舍印刷